THE CENTRAL REVIEW

中央公論

新年號

第廿六年第一号

第貳百六拾貳號

オートストラップ

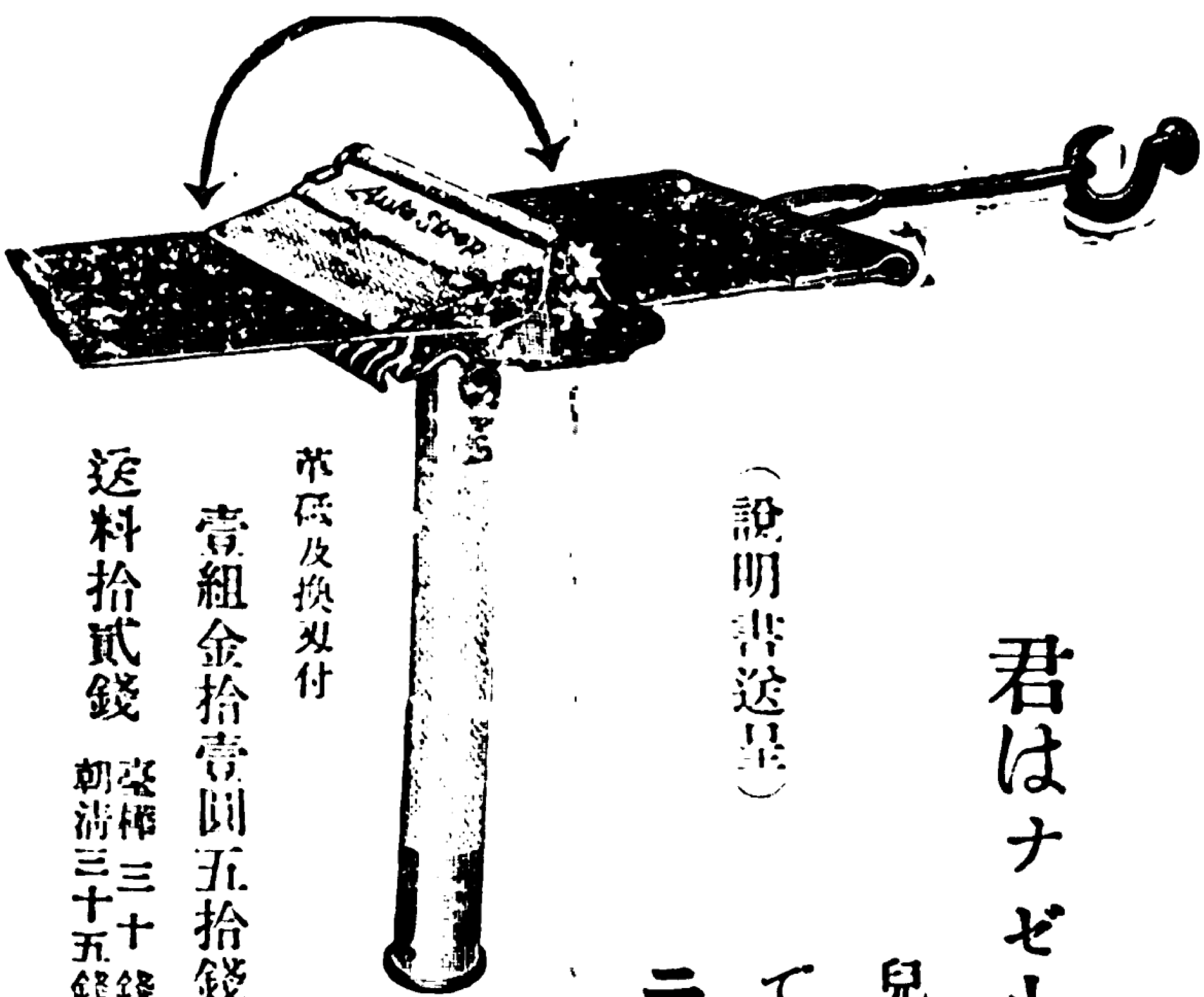
自働研安全剃刀

君はナゼ小汚なく鬚を生やしてる？

兒供てさへ安心して造作もなく使へて便利て愉快て時間的にも經費上にも經濟なオートストラップ安全剃刀あるを君は知らざるや

一度てもオートストラップを試みたる諸君は寢るにも起るにもツイ二三日の旅行にもオートストラップを離す事が出來ぬ　オートストラップは便利と安全と清潔と愉快とを與へる文明の利器也

（說明書送呈）



本砥皮換刃付

壹組金拾壹圓五拾錢

送料拾貳錢　臺樺三十錢　朝淸三十五錢

東京日本橋通

丸善株式會社

天下の藏書を統一すべき

本文庫は有ゆる點に有ゆる注意を用ゐたる我國未曾有の理想的叢書、我出版界の誇、讀書界の革命なり、百聞は一見に如かず、若し各書店に就き現物を精査せば諸君は其藏書を一新するの必要を感ぜん。

有朋堂文庫

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、最も有用なる書籍也。 ジヨンソン

發行所 東京市神田區錦町一丁目 有朋堂書店 電話本局一一三六 振替口座東京七一一八

八大特色

○最新式の懷中形
○新式ポイント活字
○獨特精細の索引
○簡明適切の附註
○美麗堅牢の製本
○嚴密正確の校訂
○印刷用紙の卓越
○低廉無比の賣價

既刊近刊書目

書名	冊數	状況
太平記	全二冊	上卷既成
東西遊記 附北窻瑣談	全一冊	既成
平家物語	全一冊	今回出來
益軒十訓	全二冊	上卷製本中
太平記	下卷	印刷中
近松淨瑠璃集	全三冊	上卷印刷中

一和洋の名著を網羅す
一毎月一回發行
一豫約にあらず、一冊賣
一竪五寸八分横三寸五分

一頁數七百ページ内外
一上等クロース製天金綴
一定價毎冊金八拾五錢
一郵稅各冊金八錢

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

絢爛無儔之新光彩

文藝倶楽部

一月一日發行　新年號　正價廿五錢　本號に限り郵税金三錢

大懸賞金壹千圓!!!

趣向は極めて斬新なる『判じ絵』しかも誰にもすぐわかる賞金は二百名を限り金五圓宛……
（課題、規定等本誌に詳記せり）

小説 **親心**（清方畫）　正宗白鳥

小説 **姉妹**（古洞畫）　神山とき子

外史傳 **太郎定綱**（春汀畫）　山田美妙

脚本 **修善寺物語**（義徳畫）　岡本綺堂

喜劇 **鼻**（吾山畫）　高須梅溪

講談 **曾我物語**（春帆畫）　寶井馬琴

新年附錄 **日本十二名妓**

▼新春第一の觀物　興趣如湧！

▼美絶！麗絶！天下無双の逸品！

其他本文中の●活社會、●演藝界、●長廣舌、●忙中閑の各欄愈々精粹を極む、

東京　本町　**博文館**

（附付の二）

信用なき店舗及卑猥なる賣品廣告の掲載を謝絶す

新年號の盛觀

文章世界

一月元旦初刷　第壹號　正價廿錢　郵税二錢

◎現代小説の描寫法　岩野泡鳴
◎任那は希臘マケドニヤなり　木村鷹太郎
◎山中に生活せる人民　柳田國男
◎幕末時代史論　山路愛山
◎倫敦の雜誌社巡り　長谷川天溪

文學者月旦（提）
新聞記者月旦（面）
雜誌記者月旦（子）

（小説）

三十年度　田山花袋
丸葉　德田秋聲
村々の人々　正宗白鳥
病後　中村星湖
題未定　島崎藤村
御本題未定　小山内薰

◎祚　ジュールゴンクール　エドモン
◎狼　ボリス、ザイツエフ
◎畸人傳　福本日南

評論

◎巴里の畫室より治　橋本邦
◎文壇の人物と其郷國　黑頭巾
◎世界各國の第一印象　茅原華山

抱月、臨川、秋江、有明、小劍、光太郎

東京　本町　博文館

（前付の三）

信用ある店舗の卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

刮目すべき週刊の出現

日曜畫報

週刊 一月元日初刷 **第壹號** 四六四倍判本文廿四頁寫眞刷込み數增刷 **正價拾錢** 郵稅一錢

◎新年大附錄 **日本全國新百美人集**（鮮麗なる寫眞版）

▽樂天居放言（巖谷小波氏本號執筆）

▽歐米各國新年の奇習

▽寒月照梅花（淸艷無比の寫眞）

▽新案相撲繪番附

▽元旦七福神詣

▽滑稽藝人百姿

■**亥年生れの名流一百人**（寫眞二色刷並に月旦）

■**外相小村壽太郎論**（各方面の名士數十人の月旦）

■**懸賞『人物漫畫傳』**（奇々怪々の懸賞）

■**四十四年政治夢想大觀**（奇警にして皮肉なる時事評論）

■**漫畫一年間の印象**（五色刷一頁大滑稽趣味横溢せり）

■**春狂言豫評**（面白き劇壇評）

■**政友會と國民黨**（政黨及政客を活描せる奇拔なる寫生）

■**亥年名妓傳**（寫眞は濃艷記事は輕妙）

▽懸賞問題　▽奇聞珍譚

▽時事俳句　▽日曜遊覽案內

▽新案繪さかし　▽名士の面影

▽狂句、情歌　▽其他の材料山の如

寫眞及び繪畫約三百五十個

◎**十行評論**

浮田博士、水哉、花袋、筑水、思案、紫草、化骨、西湖、渚山、印堂、梧桐、笠峰、小舟、木城、鬱哲、春浪、潮風、饗大郎、紫紅、江村ノ諸氏交代に起草す

東京本町 **博文館**

信用ある店舖及卑猥なる賣品廣告の掲載を謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

辛亥劈頭巨觀壯觀

太陽

一月元旦發行 **新年號** 正價卅錢 郵税本號に限四錢

新年大附錄

◉うらおもて 饗庭篁村
◉二代景清 塚原澁柿
◉題未定 田山花袋
◉題未定 高濱虛子

▼近世の歌謠 佐々醒雪
▼婦人と思想 與謝野晶子
▼劇壇雜感 土肥春曙
▼來り者 吉江孤雁
▼傳說の研究 柳田國男

◉現代の哲學 桑木文學博士
◉殖民地に於ける立法問題 石坂音四郎
◉德川家康 三上文學博士
◉系統發生と國家 石川理學博士
◉地學者の眼に映じたる米國移民問題 横山理學博士
◉我國に於ける社會主義の將來 戸田法學博士
◉美術界漫言 無名氏談
◉倫敦印象記 長谷川天溪
◉臺灣の生蕃 內田臺灣民政長官

最近の歐米觀察

（仲小路遞信次官◉小川代議士◉大浦農相◉尾崎市長◉大塚長崎縣知事…………諸氏談）

◉其他

浮田博士 金子筑水 淺田江村 諸氏の批評

東京本町 博文館

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

恭賀新年

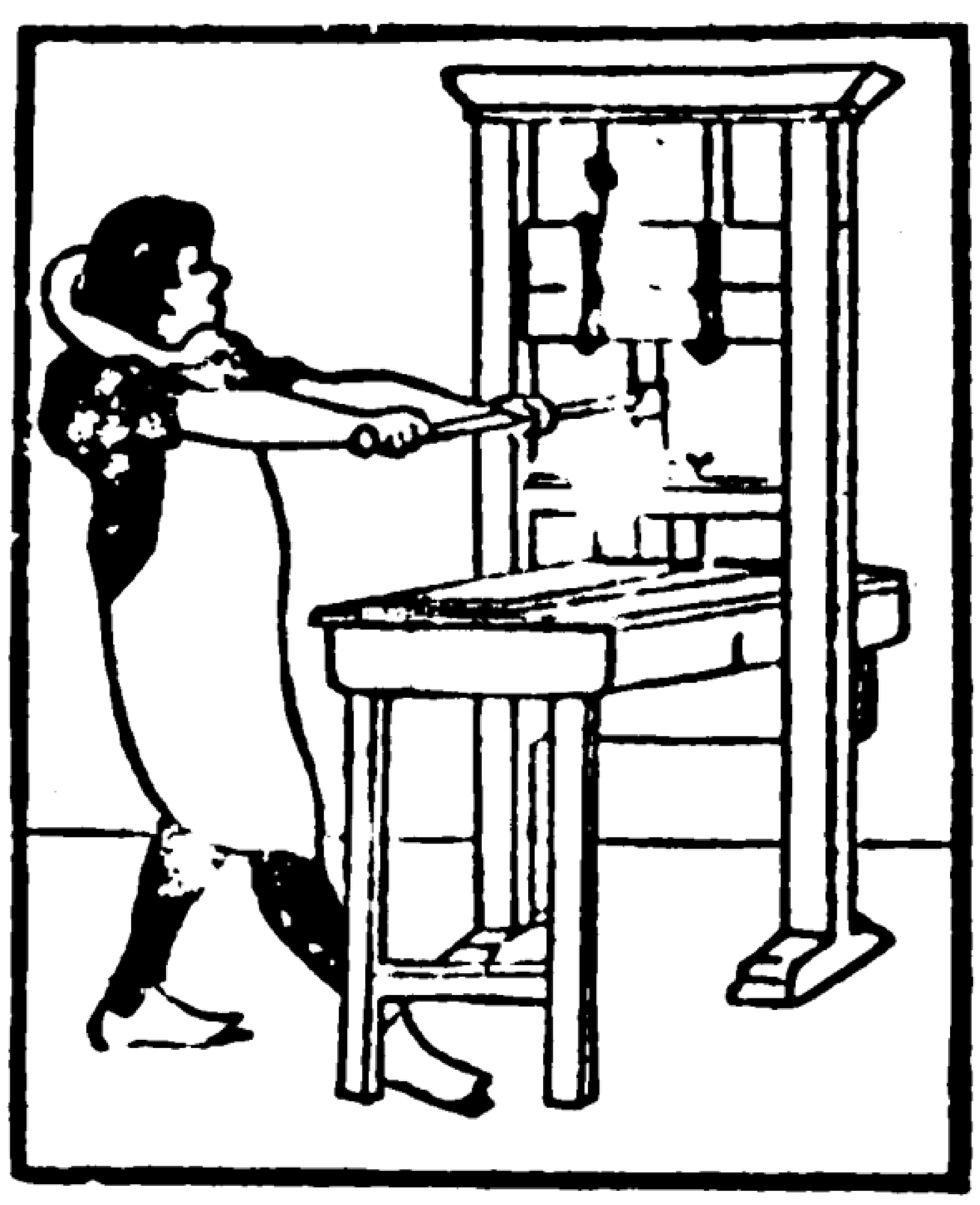
活版　石版

木版　電氣版

細網版　彫刻

印刷　製本

活字　鑄造



株式會社

秀英舍

活動有爲の青年は本書を渇望す

新渡戸稻造、巖谷小波兩先生序

中學世界記者 大岳小峽君編

新刊 最新

現代名士 學修法

本書は廿有餘士の博士、學士、軍人等の勉强法にして青年諸君の爲めに特に心血を注がれたる精神的修養書

四六判洋裝優美紙數二百五十餘頁

特價四拾錢

定價金五拾錢

郵税四錢

高評再版

前警務長現辯護士 植松金章君校閲

日本中央大學法學士若崎徂堂君

中央大學法學士植田盤惠君 合著

最新 巡査看守受驗答案

本書を熟讀研究せば如何なる受驗者も必ず合格すべし

四六判三百餘頁

定價四拾五錢

郵税四錢

郵劵代用一割增

高評五版

花の山芳霧著

吾輩ハ小猫デアル

本書は小猫が人間に成り濟し生意氣の氣焰を吐き戯つらの子供を罵りお得意のお座なりをしやべくり興味ある面白き新春の讀物

本綴洋裝美本色刷木版さし繪五枚

四六版百八十頁

定價三拾八錢

郵税六錢

發行所 東京市京橋區南紺屋町 振替東京貳〇五五四番 一星社

學界に破天荒の大歡迎を受けつゝある新著

東京帝國大學
早稲田大學 講師文學士 藤井健次郎先生著

主觀道德學要旨

忽ち再版

製よ 洋裝菊判上製背皮美本一册紙數六百餘 正價金壹圓九拾錢 郵送料金十二錢

一、從來の倫理書の無味乾燥なるに比して=活ける文明問題を提へ來りて犀燈の批評眼を以て縱横に論述せり
二、從來の倫理書の理論繁瑣にして而も實踐に疎なるに比して=健全なる道德意識の事實を基礎としてその修養工夫を説くこと詳かなり
三、從來の倫理書の西洋思想に偏するの嫌あるに比して=能く東西思想の一致及その差別を明かにせり
右の特色あるにより專門家は勿論專門以外の人といへども苟くも修養に志ある人は必ず一讀すべき新著也。

米國ハーバート大學教授
哲學博士 ゼームス先生原著
文學士 北澤定吉
文學士 吉田圭
西山悊治 共譯

最近思潮 實際主義

（原名プラグマチズム）

洋裝菊判上製天金美本全一册紙數四百餘頁
正價金壹圓五十錢
送料金十錢

◎現代思想界の支配者!!! ◎本書は最近歐米の思想界を流るゝ滔々たる一大思潮也 ◎教育にまれ宗教にまれ文學にまれ實業にまれ此思想の支配を受けざるなし。

發行所 東京市神田區猿樂町貳番 振替口座壹貳壹壹番 弘道館

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

時事問題の解決書

大隈伯社會觀

再版賣切 三版

大隈伯は天下の傑物なり、少くとも現代吾國に於ける傑出せる偉人なり、伯が巨大なる眼孔にうつりし社會は果して奈何、現代社會を研究する者、若くは伯自身を研究せんとする者の必ず一讀すべき書なり。

菊判凡五百頁上製
正價壹圓卅錢
送料十二錢

新刊好評

本書は著者が多年の經驗と苦心とに基き文章學を大成し、簡より繁に、初等より高等に、第一講より第十講迄すべて講義體に解說せり、文章の如何なるものかを知らんと欲する者、若くは文章の上達を欲する者には缺くべからざる良書なり

明治大學講師文學士内海弘藏先生新著

文章十講

四六判上製天金付
頗美本凡六百頁
正價金壹圓
特價八十錢
送料十二錢

東京本鄉森川町
振替一九四六七番
文成社
電話下谷三三一〇番
電話下谷三〇一一番

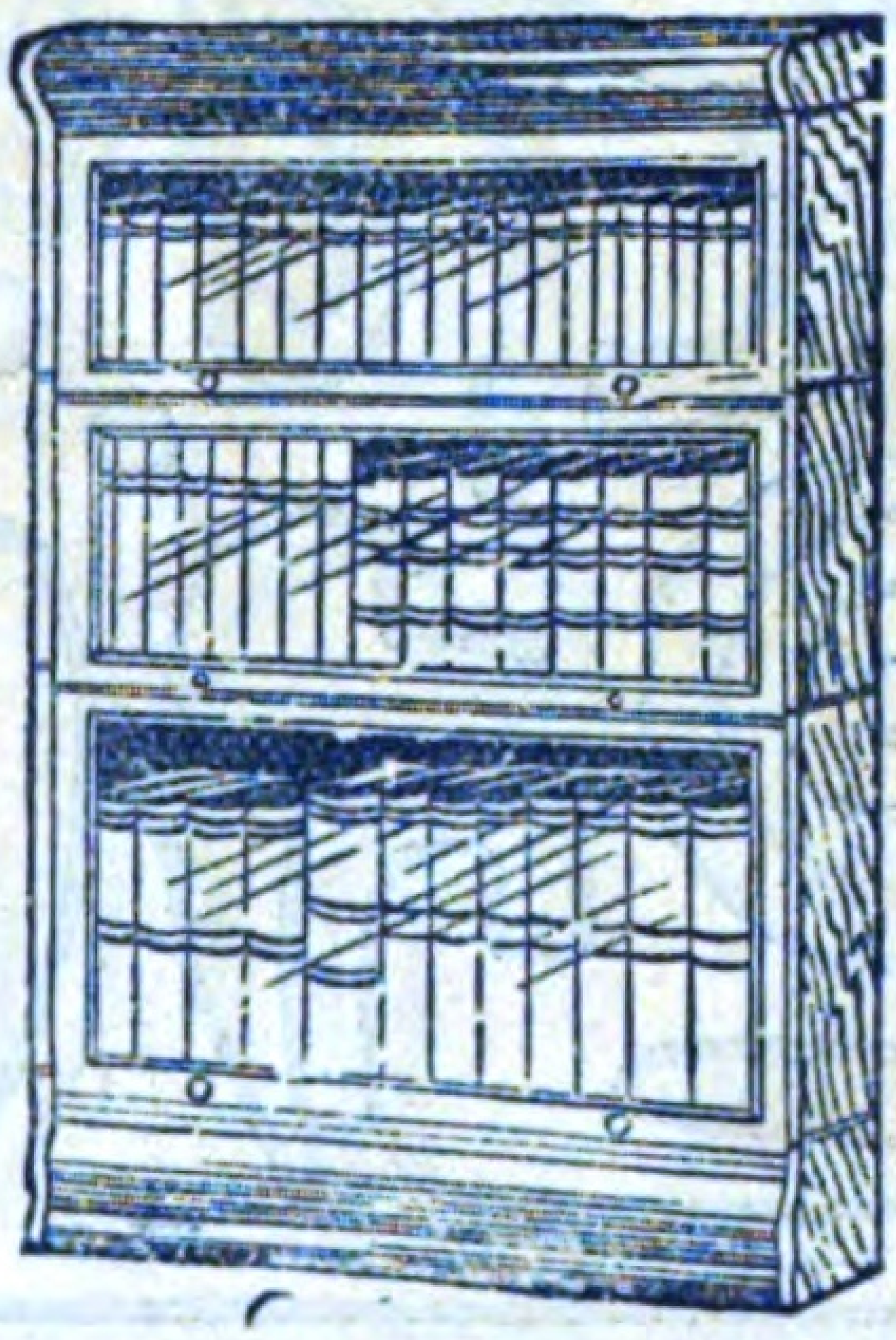
信用な[illegible]猥[illegible]るゝ賣品の廣告[illegible]絶す

中央公論第廿六年第一號目次

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

最新式 最新形 本箱!!!

組合セ本箱（セクショナル、ブックケース）



總高サ	三尺九寸五分
奥行	九寸四分
間口	三尺
櫻製	金參拾圓
欅製	金貳拾八圓
檜樫製	金貳拾六圓也
段函壹個代 櫻製	八圓也
欅製	七圓五十錢
檜樫製	七圓也
荷造費壹組	壹圓五拾錢
荷造費段函壹箇	五十錢
地方運賃御自辨	

▲歐米諸國に大流行のセクショナル、ブックケースよりも數等進歩したるものにして其特徴を擧ぐれば

▲材料に櫻、欅、檜等を精選し堅牢此上なし

▲形狀優雅に色彩美麗なり

▲在來の本函と異り硝子戸は上部へ隱沒する仕掛なれば書冊及帳簿の出入に便なり

▲壹組の組合せ本箱は積み重ねたる三箇の段函とトップ(屋根)ベース(脚底)の組合せより成る

▲藏書の增加に從ひ段函の數を增加し之を上部に積み重ね四段五段の本箱と爲す事を得

◎説明書無代進呈

東京市銀座大通新橋際 **新橋堂書店** 發賣

(電話新橋三六七七 振替貯金東京二〇〇番)

村井弦齋著

◎家庭改良の最良指針!!!

增補註釈 食道樂

春夏秋冬 合本 定價金貳圓 郵税拾八錢

◎本書には米料理百種、パン料理五十種、病人料理百五十種、日用食品分析表、食器食品價格表、料理心得の歌百種等の附錄あり

增補註釈 食道樂 續篇

春夏秋冬分本價各壹冊八拾錢郵税各冊拾貳錢

◎春の巻には野菜料理百種、夏の巻には果物料理百種、秋の巻には魚料理百種、冬の巻には肉料理百種の附錄あり

增補訂正 台所重宝記

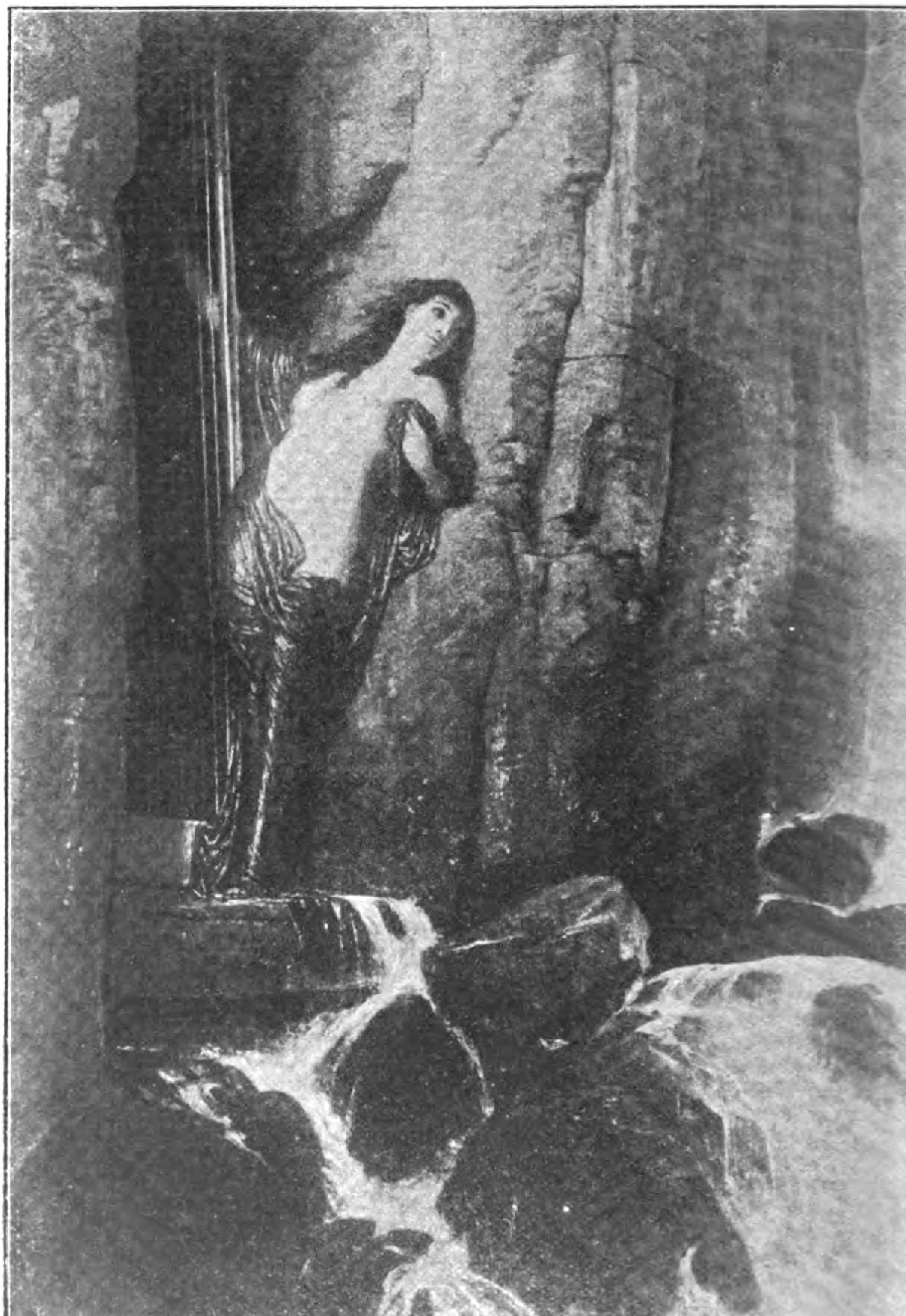
全壹冊 和裝 定價金壹圓 郵税拾貳錢

著者の自序に曰く此書の記事は盡く我が家庭の實驗する所にして余は飽く迄も世人に親切ならん事を期すと

△發行所 東京市麹町區有樂町 (振替東京七三八番) 報知社出版部

△發賣所 東京市銀座大通新橋際 (振替東京二〇〇番) 新橋堂書店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



明治四十四年の文壇に上るに方て

乾坤一轉して、我が中央公論は茲に二十有六年の新春を迎ふ、個人として廿六歳は正さに有爲の壯者たり、雜誌の生命は不朽にして、老と稱すべきものあらずと雖も、我が文壇より看れば、廿六春秋を重ぬるもの未だ五指を屈するに足らざるに於て、我が中央公論は聊か今日までの歴史を自重して、深く江湖の同情を感謝すると共に、又將來の發展に就て、大なる責任あることを自覺し、更らに發奮砥礪せざらんとするも得ざる也。

吾人の微衷は、近く數年來の本欄に於て、毎春之を世上に告白したりき、幸ひに之に由て益々江湖の信用を得、今日の運に會せるは、是れまた吾人が皇天と多くの同情者とに感謝措かざる所とす、一誠萬情に酬ゆるは吾人の志也、願くは更らに神佛の冥助によりて、益々此の志を伸べて、以て將來に貢獻するあらんことを

興國の氣運鬱々乎として抑ゆべからざるものは、我が日本の今日とす、上に不世出の聖天子あり、下に忠良無比の國民あり、南洋の暖潮押する恆春の岸頭より、鮭群簇至する樺太、江水凍る鴨綠、千古の雪を戴く長白山に至るまで、總て吾人と倶に與に同一治化を享く、我が中央公論微なりと雖も、使命を斯の國と同ふす、吾人筆を操るもの如何ぞ興起せざるを得んや

積陰の底に陽光あり、梅花寒風を冒して芳を傳へ、天地自から新た也

明治四十四年元旦

反省社同人謹誌

中央公論



第二十六年
第一號
第二百六十二號

我が外交の難局を視よ

（一）

日英間の關稅問題は、桂內閣の一大失策として將さに政海を洶湧せしめんとす

惟ふに是れ我が外政上の大問題也、徒らに短見者流の輕佻論に聽きて解決すべきにあらず、必らずや外交の大局より通觀し、我が將來の利害より打算して以て得失を判定せざる可らず、若し然らざれば竟に我が方針を謬まり、我が國の地位をして容易に救ひがたき窮境に陷らしむるの虞あれば也、故に吾人は今不敏を顧みず、少しく詳らかに之を辯析して、以て博く世上の敎を請はんと欲す

（二）

日露戰役以後、我が世界に對する地位は一變したり、曾て眇々たる東海の一小島帝國と目せられしもの、其の武力を以てしては歐洲の强大國にも下らず、巨然として霸を東洋に稱し、列國と東亞に斡旋して最も優越なる發言權を有するに至れるも、然かも先進の强大國より之を視れば、心よりして容易に對等の禮意を表し難き情なきに非ず、其の武力の强大は素より認めて輕しく會釋しがたきを知るも、尙ほ全く一片侮慢の心を去るを快しとせずして、却つて往々嫉惡の傾向あるを奈何ともする能はず、例へば彼の投機市場に成功したりし鈴久なるものを視るに齊し、鈴久なるものゝ資能材力は深く知る所あらざるも、世を擧げて成金と稱し、一種の冷笑と嫉惡とを以て之を迎へ、殊に格式を重んずる舊家縉紳に至ては、幾んど之と齒するを恥としたりき、岩崎、安田、藤田を始め、明治の富豪は多く成金にして、新人の新材最も悅ぶに足るも、其の所謂成功の暴急なる、竟に世上の嫉視を免かるゝ能はざるのみ、我が日本も曾て露國と戰はんとし、又既に戰ふに方つては、世界の俠氣ある同情を得ると深く且つ大なりしと雖も、既に勝つて而して勇威の益々加はるや、逆まに成金として嫉惡せらるゝこと猶ほ彼の鈴久の如し、人情の已むを得ずして然るが如く、國際の感情も亦自から然らざるを得ざるのみ

殊に日本が巧妙にして且つ最も智慧ある態度を以て露國と握手するや、平生露國を悅ばざる猶太人の一類は、益々日本を疎んずるに至れり、米人シップ氏等が日露戰役の當時盛んに日本を援けながら、今や露骨に日露協約を非難し、米人及び淸人を煽して大に日本を窘めんとするは其の一證とす、彼等猶太人は國土を有せずと雖も、恰かも世界の金權を左右するに足るべき富力を擁せり、其の富力を迎へて以

て歡を結ばんとするものが益々日本を憎惡する素より其の所のみ、何ぞ況んや幾んど猶太人の富力に左右せらるゝ某々國の如きをや

吾人日本國民は素より深く之を憚かるものに非ず、正を踏んで怖れず、義の在る所は千萬人と雖も我れ之かん、故に吾人は日露戰役の後、國民の責任の最も重大なるを思ふて、數々其の發奮砥礪を促したりき、然れども徒らに列國の惡感情を招くは智とす可らず、之を以て吾人は又屢々我が政府を警めて驕泰を抑へ、如何なる場合に於ても美德たる謙讓を守り、常に正理を秉りて苟くも其の範疇を超えず、或は己れの强を恃みて萬一にも他を凌轢するが如き事莫きを切望したりき、我が武力既に他をして畏憚せしむるに足る、玆に一歩二歩を讓るも、誰か敢て侮蔑せんや、强くして而して彌よ禮容溫讓ならば、列國また竟に釋然として我れを敬ひ親まざらんと欲するも得べからざるに非ずや

（三）

然るに我が政府者の態度玆に出てず、彼の尨大なるも實は脆弱なる淸國に對して、不當の壓迫を加へしこと一再に止まらず

彼の辰丸事件なるものは、淸人より之を視れば、全く日本の船主が國禁を犯して武器を密輸入したりしもの也、然るに日本の外交家は、其の强を恃みて示すに武威を以てし、强ひて淸國をして屈從し折服せしめたりき、當時南淸人は以爲らく、我が武力遺憾ながら未だ日本に及ぶ能はず、屈折また已むを得ざるのみ、然れども我れ亦一種の武器を有す、用ひて以て日本に思ひ知らしめんと、相率ゐて猛然日貨

排斥を行ふ、爾來南淸の排日熱熾烈にして、今尙ほ全く滅するに至らず、始め南淸人等は、日本の滿洲經營を看る殆んど風馬牛の如くなりき、漢人種の情素より深く滿人の休戚を憂とせざりしのみ、然るに辰丸事件の後、また安奉線問題に就て、日本自由行動を執ると稱し、淸廷の異議を顧みずして之を强行するや、南淸人の憤怒更に高潮に達して、益々排日の感情を高め、今や牢として拔くべからざるものあらんとす

試みに地位を替えて、自から淸人となりて考慮せよ、南滿洲に於ける露國の特權を繼承して、鐵道沿線の經營を始め、鐵道及び炭礦等の營業着々として功績を擧ぐるを視ば、日本の爲す所寧ろ露國に過ぐるも及ばざる所莫きにあらずや、露國の侵略を恐怖せしもの何ぞ日本に對して獨り然らざるの理あらんや、然かも況んや曾て露國の措置を非難して、竟に戰端を開ける日本なるをや、日本は又曾て朝鮮の獨立を聲明して、之を淸國の手より脫せしめんとして、現に日淸戰爭をも開始したりき、此の前後日本が條約又は他の方法を以て、朝鮮の獨立を世界に聲言せしこと二三四五回に止まらず、然るに日露協約成るの後幾くならざるに、飜然として之を併吞す、依て揣るに、日本屢々南滿洲に於て機會均等主義を守ると宣言し、且つ淸國の領土保全を聲明せるも、既に露國と協約せる以上、如何なる機を覗ひて此の宣言を蹂躙するもまた知るべからず、其の侵略の禍心を包藏する、少くも露國に讓ることなし、恐れて而して警めざる可らずと思惟する者あり、假令多少理に昧く勢ひに疎なるの點はあるも、其の思念する所全く頑冥にして徒らに猜忌にのみ驅らるゝ者と做すべからず

清人等に斯る猜忌嫉惡の心あると無理ならずとせば、我が外交當局は努めて虛心坦懷を以て之に接し、二歩も三歩も之を讓りて以て彼れの誤解を釋くの誠意なかる可らず、始めは斯くして誠意を推したるも、忍耐持久して以て竟に彼れの心を飜へすことをせず、性急に態度を變じて動もすれば强硬に主張を支持し、益々交情を疎隔す、果して智といふべきや否や

今や清國との關係最も冷淡にして、各種の交涉殆んど一として進むもの莫く、頗ぶる窮境にあり、殊に滿洲に於ける排日熱猛烈にして、彼の官憲の憎惡恰かも敵人の如きあり、而して資政院の如き、公然として日露の侵略を豫防するの言論を弄するに至る、是れ識者の深く憂慮する所にあらずや

（四）

日米開戰論を以て、單に其の海軍擴張に利用するホブソン一流の主張のみと視るべからず、又た黃色新聞を以て激し易き米人の感情を衝動するハースト一輩の策略とのみ爲すべからず、素より造船業者の意匠もあらん、米國人口中にて多數を占むる獨逸人の野心もあらん、凶惡なる勞働者の煽動もあらん、猶太人を中心とする資本家の嫉惡もあらん、此等に媚びて多數の投票を得んとする政事家の誇張もあらん、然かも重要なる主因の帝國主義を以て太平洋の霸を爭はんとするに在り、而して其の近因の日露戰役の結果たるや蔽ふべからざるに似たり

カリフォルニアの銀鑛の大に開かるゝまでは、而して南太平洋鐵道がシラネバタの山脈を超えて中央鐵道と聯絡するまでは、米人等未だ多く太平洋を念頭に措かざりき、然れども太平洋沿岸諸州の氣候和

點、土地豐穰にして天產多く、頓に殷賑を加へし後に至ては、先づ布哇を併合して一步太平洋中に乘出し、更らに西班牙と戰ふて無造作に近く玖瑪を占領し、遠く非律賓群島を領有するに至つては、殆んど太平洋を我が物と爲せる感なきを得ず、況んや內に製造工業大に興るあり、目を擧げて清國を看れば、四億の人口を有する斯の大版圖は、恰かも我がために開かれし天授の一大市場の如きあるをや、茲に於てか布哇非律賓を踏臺として威を全太平洋に振ひ、清國の富源を占有するを以て、一大經綸と做す所のもの卽ち是れ米國に於ける帝國主義者にあらずや、建國以降戰へば必らず勝ち、勝てば必らず大なる獲物を占めて、意氣盛滿、眼中殆んど世界を空ふせんとする米國人が、其の得意の尊大なる雄志を以て、滔々相率ゐて此の帝國主義に隨喜する、素より怪むに足らざるのみ

然るに何事ぞ、眇々たる一個の小島帝國が、僥倖にして强大なる露國を破りしとて、早くも太平洋を我物顏に振舞ふさへ奇怪なるに、事實朝鮮を占領し、滿洲に跨りて清國を壓し、或は清廷を籠絡して四百餘州の富源を掩有せんとす、今にして一蹴其の鼻梁を挫くにあらされは、我が雄圖に障礙なきにあらずとは、是れ米國の帝國主義者の多く懷抱する志なる莫らんや

前國務卿ヘイ氏が屢々日本政府をして、滿洲に於ける機會均等主義と、清國の領土保全主義とを誠實に主持することを宣言し誓約せしめたるは、之を以て日本を抑へ、兼て我が威を示すべき地步を占むるの計畫なりしや言を俟たずとす、現國務卿ノックス氏が突如として、滿洲鐵道中立の提議を試みしも、また其の數步を進めしものゝみ、今や其の資本家のシンヂケートをして、英獨佛の資本家と齊しく、諸

種の鐵道借款に參加せしめ、又清國の借款を引受けしめ、動もすれは清國の內政にまでも其の手を伸ばさんとする傾向ある、また此の計圖を實行せんとするものに外ならず

惟ふに日本が曾て露國の滿洲經略を非難したりしは、其の封豕長蛇の勢ひ動もすれは朝鮮に及びて、我が一方の防備を危くするに止まらず、常に近く我れを壓迫する形勢ありて、我が自衞の道に直接影響を感ずると極めて切實なりしが故のみ、今や我が南滿洲に於ける利權の經營は、資を糜すること十有餘億、百萬の大兵を擧げて生靈を損すること拾萬なりし結果のみ、米國が清國を以て其の一大市場と爲さんとする計畫は、素より其の自由なるべきも、未だ曾て何等の代償を支拂へることあらず、殊に我が南滿洲經營のため、米國の直接に受くる影響なるもの寸毫もあること無し、否假令幾分か之ありとするも露國に對する日本とは到底同日に視るべからざるや、何人も之を承認せざる能はず、然るに日本を責むるに、動もすれは曾て露國に對せし日本と同一調を以てせんとす、寧ろ橫紙破りと稱せらるゝも、幾んど辯解の辭ある可らざる也

然れども理義は理義のみ、米國が清國に親密なる丈け其れ丈け、日本と然らざるは事實なるを奈何ともす可らず、吾人は素より米國を以て清國の煽動者なりと明言するを敢てする者に非ず、然れども米人は清國の輿論の排日に傾むくこと益々甚だしく、滿洲に於ける清國官憲が日本を敵視するを看て、假令手を拍て之を快とせざるも、斷じて憂戾する者にあらざるや言を俟たずとす

近くは大統領タフト卿が議會に下せし教書を視よ、其の布哇パール灣を以て太平洋に於ける海軍根據

地と爲し、非律賓のコーレヂドアを難攻不落の要塞たらしめんといひ、太西洋に於ける若干の海軍根據地を廢止するに拘らず、主として太平洋方面にのみ力を用ひ、或は海軍有事の際、豫備艦たるべき商船なきの不便を論じて其の建造を促がし、巴奈馬運河の防備を嚴にして艦隊の通過を安全ならしむるに鋭意するの旨を明かにしたるが如き、孰れか是れ其の帝國主義を大に太平洋に振ひ、前途の障害を一蹴して猛進するの意圖に出でざるものぞ

（五）

獨逸人は個人として頗ぶる日本人に親切也、唯だ英國人を憎むの餘り、日英同盟を非議して口を絕たずと雖も、私人として私情甚だ濃かなりき、但し國交に至ては然る能はず、而して日露戰役の後は、私情また薄くして漸く冷かならんとす

露佛の交を裂くの機略よりして、獨帝が日清戰役に三國干涉の主唱者たりし以來、獨帝の方針は常に排日にあり、日露戰役の當時親から黃禍の圖を描きて公けにせられしは其の著るしき一證とす

英國の先帝エドワアドは、親から中心となりて露佛を連ね、土耳古と親み、日本と同盟して、幾んど獨逸をして手を下すの餘地なからしめたりき、然れども獨帝の活動目覺しくして、而して其の功果の顯著なる、實に駭目すべきものあり、殊に英帝崩御の後に於て然るが如し、露國が日本に復讐せんとして東方にのみ鋭意し、力を西に用ふるを得ざるを看取するや、先づ墺國をしてボスニア、ヘルツゴヴヱナの兩洲を合併して、露國の巴爾幹同盟の雄圖を顚覆せしめ、露國が眉を揚げて墺國を睥睨するや、獨帝

は斷乎として墺國を助け、兵を露國々境に出さゞるを得ずと迄揚言して以て露國を抑へ、次て土耳古を助けてルーメニアと協商せしめ、また英國が希臘と皇室の親あり、之を助けざるを得ざるの誼あるに乘じ、土耳古を煽して强硬に希臘に當らしめて、以て英國を窘迫し、更に佛英の兩國相計りて土耳古の外債を拒絕したるを視て、奇貨措くべしと爲し、伯林の銀行家をして勉强して土耳古公債を引受けしめ、由て以て土耳古に於ける英佛の勢力を抑へ、英露佛の三大强をして幾んど手を出す能はざらしめしが如き、外交の妙言ふべからざるものあり

夫れ土耳古の親を失へる英國は、埃及の統治、メソポタミヤの發展に大障害を受けざらんとするも得ざるべし、佛國は土耳古に投じたる十有餘億の資本を守るがためには、竟に獨逸の鼻息を窺はざるを得ざらんとす、而して英佛の能く爲すなきを目擊せる露國、殊に其の守舊派に至つては、勢ひ獨逸に傾倒せざらんと欲するも得べからず、彼の親英主義のイスヴォルスキー伯外相の樞位を去つて巴里の大使となり、守舊派と親善なるソサソフ氏其の後任を襲ひ、次て露獨兩帝の會見となりしを視ても、露國の意の動搖せるや知るべきにあらずや、勿論露國の重厚なる、容易に英佛を疎んじて獨逸に近くべからずと雖も、英露佛のアンタントが鼎の輕重を問はれしとは、蔽はんと欲するも蔽ふべからざるに非ずや、機一び至る、再び三び到らは、獨帝豈之を逸せんや、斯くて歐洲の外交に痛快なる功果を擧げし獨逸は、勢ひに乘じて東洋にもまた辣腕を揮はんとす、先づ米國を助けて之を友とし、相携へて淸國の歡心を收め、南は揚子江流域に於ける英國の勢力範圍を侵犯し、北は滿洲方面に於て日本を抑へ、由て以て英日

露佛の間を分割せば、啻に佛國を屈服せしむるに止まらず、又和蘭併合の素志を大成し得るに止まらず、獨逸當面の敵にして、又恐らくは最終の勁敵たる英國を苦め、東洋にも亦大に志を得るに足らんとす、長鞭馬腹に及ばずといふこと勿れ、其の單に日英日露の間を割かんとするに止まらず、又米淸をして日本とも相嫉惡せしむることは、少くも獨帝の不滿足を感ずる所にあらざるや明らけし

更らに記せよ、日露協約が露國をして再び西顧の餘裕を得せしめたるが爲めに、少からず獨墺兩國の怒りを買へることを、此の兩國が少くも此の協約の破棄を悦ぶや論理上自明の斷定にあらずや、日本は單に露國との協約のみに由ても、また斯る嫉惡を受くることを忘る可らざる也

（六）

日本の現在の地位は、必らずしも唯だ成金として嫉惡せらるゝに止まらず、別に他の競爭を招くべき理數の明らかなるあり、此の時に方つて謙抑自から處せず、先づ一氣に朝鮮を併合して重ねて列國の感情を衝動したるに止まらず、更らに關稅問題を提げて直接列國と折衝せんとす、若し形勢の歸趣を明察して斷乎として斷ずるの强き信念に出づるものならしめは則ち已む、然らずんば未だ外交の妙を盡せりとは做す可らざる也

稱して稅權の回復といふ、過度に名義上の權利を重んずる我が國民に取つては、洵に痛快なる感情を湧起すべし、然れども其の實體如何と看よ、根本的に利害得失如何と視よ、夫れ關稅を高く課すると否とは、國民の受くる利弊果して如何とするぞ、國民生活上の痛切なる得失果して如何とするぞ、吾人は

我が大政事家の之に對する識見に疑ひなき能はざる也

近くは香港上海を擧るまでもなし、我が租借地たる旅順大連と、之と連接せる南滿洲一帶とに視よ、更らに近時合併したりし新領土の朝鮮にも看よ、其の關税の或る物は絶無にして、而して或る物は甚だ低率なるがために、飮食物及び日用品の價太だ廉にして、日本内地とは到底同日に語るべからざるに非ずや、其の住民は爲めに著るしく生計の安易なるを悦ぶにあらずや

關税の高率なるがために、細民の頻りに生活難を愁訴するは米國也、米國は其の富豪の營める各種の事業を保護して、他國の輸入品を禁遏せんがため、驚くべき高率の關税を課する結果、富豪等が外國品の競爭なきに乘じて、好みてトラストを組織し、恣に肉類其の他衣服製造諸品の價を法外に引上げ、以て暴利を壟斷するがため、細民等常に生活の苦痛を訴へて止まず、我が日本未だ米國の如く甚だしきに至らずと雖も、外國米を始め、一切の罐詰食品に關税を課するがため、食物の高價なる、幾んど英米諸國を凌がんとし、曾て生活の安慰なるがために、世界の樂土となして日本に住へる外國人も、今や食物の高價にして生計の難きに辟易し、漸く退去して他に移るの狀勢にあらずや、然るに税權回復の名を悦びて新たに國定税率なるものを作り、益々食物の騰貴を促進す、果して何の心ぞや

賢明なる我が政事家は謂へらく、此の國定税率の目的は、一方に國庫の收入を增加すると共に、一方には又我が産業を保護するに在りと、然れども記せよ、關税々率の引上げに由て、第一に來るものは物價の騰貴也、物價の騰貴に由て第一に苦むものは職工其の他の勞働者也、勞働者苦痛の結果は勢ひ工業

に影響せざらんとするも能はざるに非ずや、蓋し勞働者の苦痛は、第一に勞力の減少となり、第二に勞力の高價となりて、工業また其の損失を分たざるを得ざれば也、且つ物價騰貴に由て苦むもの勞働者のみならず、政府も亦其の事業同じくして而して費す所の多きに窮せざる能はず、而して輸出貿易の障害をも來して竟に國民全般に不良なる結果を及ぼすや明らかなりとす

且つ關稅の引上げに由て保護せらるゝ製造業は孰れにありや、僅かに砂糖を除けば幾んど一も算すべきものなきにあらずや、我が重要產物たる生絲も、羽二重も、製茶も、雜貨品も、一として關稅の恩澤を受くることとなし、我が最も重要なる棉絲紡績業の如きも、何等の保護を受くること無くして、現に極めて盛に發達したるにあらずや、關稅を以て內地の產業を保護すといふは、假令全然虛言にあらざるも、效果極めて稀薄にして言ふに足らざるのみ、國庫の收入といふも、國定稅率のために增加する所僅かに數百萬圓に止まるにあらずや、單に數百萬圓の增收を得るが爲め、列國と面を赤めて爭論し、甚だしきは則ち同盟國とすら干格を生ず、果して智慮ありといふべき乎

眞に國の經濟を思ひ、國民生活の切實なる問題を考ふるものは、假令純然たる自由貿易主義を執らずとも、關稅率を引上ぐるの根本的に謬想なるを知るに難からざるべし、何ぞ況んや是がため益々我が國際上の地位を險惡ならしむるをや

單に稅權上より之をいはゞ、片務稅率素より非なりと雖も、協定を主とせずして、專ら國定稅率とするは甚だ智あらずとす、何ぞ況んや其の國定稅率なるものも、初めより外國との關係を考慮せずして、

幾んど出放題に取極てたるが如きをや

（七）

吾人の耳にする所をして過なからしめば、我が外交當局は始めより列國殊に英國との關税を考慮して、或る税率の引上げに同意せざりしが如し、然るに財政當局及び農工商當局が頻りに國庫收入主義と、產業保護主義とを主張したりしが爲めに、竟に彼の如き國定税率を立案するに至れるものの如し

議會に於ても、また或は列國、殊に英國との關係に思ひ及ばざりしもの絶無にあらず、然れども當局が無條約國と爲ることなきを保せずといひ、英國の如き自由貿易主義の國とは素より協定すべき根據を有せずといへる漠然たる答辯に滿足して、漫然として之を協賛したりし也、當局の不用意素より辯を俟たずと雖も、議會の疎虞不親切もまた甚だしと稱せざる可らず

倫敦タイムスは、曾て東京通信員の所報として、日本現行の關税は、從來の慣行に由りて、法定税率よりも遙かに安きが故に之を標準とすべからず、其の法定税率と今回の國定税率とを比較するに、未だ甚だしき徑庭を看ずといふの記事を掲げしことあり、然るに駐英大使加藤氏及び日本政府の後に公示したりし計數によれば、タイムスの所報に著るしき相違あり、英國の各商業會議所及び製造業等の調査によるも、日本の新關税率は頗ぶる英國製品、殊に諸織物に大打擊を加ふるを以て、彼の商工業者の不平淺からず、竟に外務大臣サア、グレー氏に迫りて其の交渉方針を叩き、日本政府果して日英同盟の眞價を知悉せずやとまで激語するに至れり

而して我が內地に於ても、英國人の苦情を理ありとし、此の新關稅法のために日英同盟に罅隙を生ずるを非とし、到底稅率を更定するの外なきも、然かも此の不面目を敢てするに至らしめたる責任は、嚴に之を問はざるべからずと主張するもの多く、延きて之を政治問題と爲し、單に外交當局のみの責任に歸せず、內閣全般の責任として議會必らず之を彈劾せざる可らずといふの議論出て、一時は內閣を搖撼せんとする勢ひも見えたりき

內閣が英國輿論の沸騰を聞くや、大藏當局は所謂稅率を更正するの外なく、之を議會に提案して議會若し承諾せざらん乎、解散を斷行して以て國民の意向に訴ふべしと主張し、而して外交當局は却つて別に協定の途を求むるか、然らずんば國定稅率を固執して一步をも下らず、英國政府をして竟に屈服せしむるの外あらずと主張し、桂、小村兩相の間久しく意見の折合を看ざりしが如し、外交當局の主張は、蓋し事を議會の問題たらしむるまでもなく、或る種の協定によりて互に讓步するか、若くは一時英國との通商條約を消滅せしむるも、新稅率を固執して忍耐せば、英國必らず屈服すべく、之がため日英同盟の如き政治上の最高目的より成れるものに影響する所なしといふにあるが如し

內閣全體の意向は、恐らくは未だ確定するに至らざるべき乎、唯だ英國議會解散せられ、其の政府は總選擧に忙殺せられて、殆んど他事を顧みるの遑なきがために、其の交涉暫らく中止の姿態にあり、我が內閣また稍々事の決定を稽緩し得るのみ、然かも其の重大なる問題たるや素より多言を俟たずとす

思ふに外交の事は、小村伯主として之を決し、多く他の容喙を看ざるが如し、桂侯以下閣臣の伯を信

頼するの深き、自から然るのみ、唯だ關税の如き、財政と産業とに關係多きがために、乃ち桂、大浦兩相の主張ありしならん、小村伯の眼より看れば、桂侯稍々列國の大勢を解して外交状態にも通ずるのみ、平田大浦の兩男は、桂侯の帷幄に缺くべからざる參謀なるも、素より外交の事に達せず、新智識を具に掛くる後藤男の如きは、幾んど外交の初歩だも解せず、餘子は乃ち碌々論ずるに足らずして、帝國の大外交一に我が双肩にありと自負するに拘らず、健康勝れず、拔くべからざる重き宿痾の外、更に痛むべき疾患を得て、手術を受くること兩度に及ぶ、其の苦心實に諒とすべきもの莫くんばあらず、然れども形勢今日の如くして、謙抑自から持すべき秋に方り、税權回復の空名に泥み、求めて自から列國と折衝を始む、事功を急ぐは健康の然らしむる所ならんと雖も、吾人は其の措置に就て多くの歎惜を禁ずる能はざる者也、何ぞ況んや新關税法其のもの既に國民に取つて眞に利益ならざるをや

（八）

率直にいへば、新關税法は我が國民に取て甚だ價値あるものに非ず、否、物價騰貴の因となつて國民の生計を困難ならしめ、國の經濟を損ずるもの也、故に之を更改する素より可也、之を全廢するまた太だ妙也、區々の名分權義論に拘泥して之を固執す可らず、然り、之を固執するがため、同盟國との情誼に罅隙を生じ、列國との感情を益々不良ならしむるが如きは、深く戒めざる可らざる也

日英同盟の價値は、今や何人も之を認めざるは莫かるべし、英國は印度の防備を堅くし、清國に於ける其の利權を支持するがため、東洋に於ける其の傳統の權威を輝かして、益々之を發揚するが爲め、殊

に此の同盟を必要とすべし、自から中心となりて露佛等と提携して、以て獨逸を中心とする墺伊土の同盟に對抗し、世界到る處に之と峙立するがためにも、日本との現同盟を維持するを必要とすべし、然れども後進の小島帝國たる日本にして、苟くも禮容を失し謙讓を缺きて、動もすれば大英帝國を凌ぐが如き態度寸分たりとも表示されん乎、英國民は大國民たる體面上、斷乎として此の同盟を抛たざるべからず、輿論政治の國としては、多く國民の感情に殉ずることまた已む可らざるを以て、其の政府も、勢ひ然かせざるを得ざるのみ

我が日本に至ては、今や最も清國と惡く、米國と相下らず、獨逸には嫉視せられ、墺國には怒らる、若し英國と相叛かん乎、露國との交情また久しきを保つ可らず、孤立必らずしも不名譽にあらず、天の大任を降す先づ我れを試むとして、萬難を排して邁進するの意氣あるを要する論なしと雖も、好みて英國との同盟を拋棄するは甚だ愚也、試みに思へ、露國との交戰中、我が英國に負へる恩義の大なる、到底忘るべからざるにあらずや、之を忘るゝは不信不義の極にあらずや、我れは多くの犧牲を拂ふも容易に英國との同盟を斷つべからざる也

日英同盟の如き最高なる政治は、之を他の俗問題のために紛更せしむ可らず、國民に取て不良なる新關税法を執て、之を搖撼する甚だ非也、內閣と政黨との爭ひを以て之を煩累する最も非也、區々の名分權義に拘泥して國民の生計と國の經濟とを顧みず、若くは黨派の便宜、政爭の卷舒にのみ急にして、世界外交の大勢を察せず、我が國今日の地位を解せざるが如きは、實に國を誤まるもの也、吾人は兩つな

から切に之を警めざるを得ざる也、愛國憂世の士、果して然らずと做す乎

新聞記者の自覺

(一)

英國人の政治に野心あるもの多くは曰へらく『男兒生れて大宰相たる能はずんば、當さに倫敦タイムスの主筆たるべし』と、ナポレオンは曾て屢々劍の力の筆の力に及ばざるを慨したりき

一枝の筆を以て言を立つ、之を新聞紙に刷出して公けにすれば、人心をして或は激越悲壯、節を拍て蹶起せしむべく、或は怡然駘蕩、腹を鼓ち地を撃て宴樂せしむべく、或は毛髮逆まに竪ち、拳を劍にして疾走し、火を放ち石を飛ばして狂踊せしむべし、一劍を揮つて千軍萬馬を指揮し、疾舒開闔意の如くならしむるも、單に軍隊に限らる、筆の力は啻だ軍人を驅るのみならず、總ての老幼男女を起たしむべく、其の力の大なると、實に劍に十倍し百倍す

記せずや、日露の戰局を收めて和を米國の北阪ポーツマスに講ずるや、我れは如何にしても和約を成立せしめざる可らず、識者皆認めて是と爲すも、然かも空疎なる多數新聞紙が之を非とし、呼んで國辱と做し、其の廢棄せざる可らざるを絶叫するや、人心の激昂幾んど其の極に達し、竟に日比谷燒打事件なるものを現出して、全都の警察官をして悉く其の影を失はしめたりしことを、人心を激して滔天の洪

水の如くならしめ、煽して燎原の火の如くならしむる、實に新聞記者の力也

新聞記者が能く人心を支配するの力は偉大也、此の點より視て、新聞記者に與ふるに無冠の帝王若くは布衣の大宰相なる名を以てするものある、未だ必らずしも失當と爲すべからざるに似たり

斯の如く偉大なる權威ある新聞記者にして、其の地位勢力を自覺せず、動もすれば市井斗筲の輩と伍して、汲々乎として敢て低くせんとするは何ぞや

（二）

人生の職分には、素より貴賤尊卑の階級あるの理なし、然れども吾人は暫らく之を大別して精神的物質的の二樣と爲さんとす、精神的とは、金錢を得るを主とせず、重もに己れのためにするよりも他のためにする名譽職をいひ、物質的とは、富を作るを主とするものにして、重もに自個を本位とする營業に從事するものをいふ、或は非生產的、生產的と稱するも太だ妨げず、即ち政事家、宗教家、官吏、教育家、美術家等は前者にして、總ての企業家、株式業者、銀行會社員、製造者、職工勞働者等は後者に屬す、而して新聞記者が前者即ち名譽職たると素より言說を俟たずとす

精神的職分に從事するものにして、心を金錢に寄するは汚れたる也、其の職分として世に尊貴せらるゝ以上、黄金の代りに名譽を得、其の己れを犧牲として、人衆のためにする報酬として得る所のものは貧也、然り、貧の代りに名譽なる貴き報酬を享く、故に貧は彼等の常習にして、當然の所得也、單に衣食するに甘んじて、別に美祿を求むべからず、美衣美食を期すべからず、彼の官吏たる幾十年にして、

百萬數百萬の富を蓄積するが如きは、決して正當にあらず、必らずや不正不義にして然りしや論なきのみ、世上若し例證を擧げ來つて然らずと做すものあらば、吾人は一々反證を擧示して吾人の言説を支持し得

新聞記者にして此の睹易き理義を解せず、動もすれば俗情に惹かれ、妻兒の俗情を滿たすがために、黄金を欲求する切ならん乎、是れ墮落也、其の地位勢力を自覺せざるの罪也、彼等が往々にして市井斗筲の輩と伍せんとするが如きは、豈此が爲めならざらんや

新聞記者にして、或は權家富豪のために筆を枉ぐるものは、此の黄金のために墮落せる也、全く其の職分を忘れし也、天下恐らくは之より卑しきは莫からん、彼の黄金のために貞操を沽る賣春婦と雖も、如何ぞ多く之に過ぎんや

吾人の看る所によれば、新聞記者として第一流の地位に立つものは、政事家としては桂西園寺と比肩すべく、富豪としては三井三菱と相下らざるもの也、故に彼等自から高く標置して、苟くも此の政事家富豪に下るべからず、是れ以下の政治家富豪輩に至つては、寧ろ冷然瞰視して可也、然るに自から抑損して對立せず、遙かに下りて拜跪するは何ぞや、吾人は其の謙遜の太だしきを歎美するよりも、寧ろ其の見識の餘りに低きを痛歎せざるを得ざる也

（三）

世に御用記者なるものあり、政府若くは政黨、若くは政事家其の他一個人の機關たる新聞に記者た

もの是れ也

彼等は其の事ふる所のために盡して、多く獨自一個を立つると莫し、時としては桀の犬と爲つて堯を吠ゆることなきにしもあらず、然れども彼等果して記者たるの見識を少しにても存せんか、其の主公を導きて至善の方途に向はしむること、猶ほ佐命の良相が君を堯舜に致すが如くなるべし、御用記者として多く獨自一個を滅すること洵に已む可らずと雖も、尙ほ少くも君を堯舜に致すの抱負なかる可らず

吾人の聞く所によれば、朝比奈知泉氏の日報社に主筆たるや、偶々其の事ふる所の伊藤公(當時は伯)議會と衝突して辭表を闕下に捧ぐと聞き、憲法を楯として極力公の非違を攻擊し、公自から辯疏百端するも聽かず、益々論鋒を鋭くして辯難抵らざる所なかりきといふ、氏の如きは御用記者の模範と稱して可也、苟くも理義の大にして而して明らかなるものあらば、其の事ふる所に悅ばれざるも、尙ほ侃々諤々として理義を正すべし、由て以て其の事ふる所の政府、政黨、政事家其の他を指導するは、是れ御用新聞記者本然の任ならざらんや、否、此の抱負見識あるにあらずんば、御用新聞の記者なるもの、竟に一種のスレーヴと異ならざるのみ

伊藤公の如く理義に明かにして、且つ寬宏能く論客を容るゝの雅量ありて、而して後始めて朝比奈氏をして其の材力を伸べしめたりしのみと言ふこと勿れ、今の桂侯西園寺侯と雖も、政友會國民黨若くは原、犬養其の他の諸氏と雖も、豈新聞記者の天分を解して、之をして其の理を盡し義を盡さしむるを難んず可んや、唯だ之に事ふる新聞記者動もすれば超然として之を指導する識見なく、孜々として其の意

を迎へ歡ぶ所に媚ぶるに急なるのみ

政事家又は富豪貴紳の門に趨走し、時としては玄關拂ひを喰ふも意に介せず、唯だ謁を求め席を共にするを以て無上の光榮と爲し、また對等に應酬して寸毫も自から降さゞるの意氣なきは、滔々たる今の新聞記者の習俗ならずや、彼等自から筆の力の劍に勝つを覺らず、新聞紙が人心を支配する權威の偉大なる、多くの場合に於て政府と人民との上に在るを覺らず、却つて自から小なりとして地位を卑くするは、實に憐れむに堪えたりとす、其の延きて新聞紙の品位と權威とを漸滅する、また必至の勢ひ乎、吾人深く慷して以て慨せざる能はず、乃ち一言して彼等新聞記者の自覺を促がす、彼等は能くナポレオンと比肩するにも足る、それ以下の群小輩の如き、寧ろ小兒視して可なるにあらずや、朝廷の榮爵勳位を有するものに對しては、素より相當の禮意を表せざる可らずと雖も、容恭しくして而して心は斷じて降す可らざる也

公論

工場法制定に對する反對說を駁す

法學博士 戸田海市

一 反對の要點

今回政府の公表したる工場法案は昨年の夫れと齊しく大體は三要項より成る。第一は特別被護者たる婦女幼者の工場勞働の禁止制限なり。第二は工場に於ける勞働者の生命健康の保護の設備なり。第三は業務上負傷疾病死亡の災厄に罹れる勞働者に對する雇主の扶助責任なり。此中第三の點は一般工業家の實行しつゝある所にして、我國人の目よりすれは人情の當然なるが故に、法案の希望するが如き程度の扶助に付ては殆んど何人も反對するものなし。第二の點も工業家の當然の責任なるのみならず、或程度までは既に各府縣の規則に由り取締りを行ひつゝあるが故に、此點も强て反對するものなし。獨り第一の點特に婦女幼者の勞働時間の制限と夜業禁止との規定は實業家の反對の集中せらるゝ點にして、又此二項目は實に工場法の骨子を爲すものとす。故に此第一の點に付き反對する者は他の點に付き如何なる意見を有するを問はず之を工場法制定に反對するものと云はざるべからず

工場法制定の必要は夙に學者の主張せし所にして、實業家の常に反對せし所なり。昨年及本年工場法案の諮詢に對して商業會議所其他實業家團體の發表せし意見は、大體工場法制定の必要を認むることに一致せる

が如しと雖ども、其提議する所の修正意見は本來骨拔きと稱せらるゝ法案を更に骨拔きにして、殆んど之を有名無實のものたらしめんとするのみならず、個々實業家に就て其眞意を敲けば彼等の多數は尙ほ內心工場法の必要を認めざるが如し。何故に多數實業家が此の如く工場法に反對するやと云ふに、其大原因は法律に由り收益を減少し自由を束縛せらるゝことを厭ふ利己的思想に在るは疑を容れずと雖ども、我實業家が單に利己的見地より此の如く頑强に反對するものと見るは公平の判斷と云ふを得ず。彼等の反對の一大原因は實に我勞働狀態の未だ工場法の干涉を必要とするほど不滿足のものにあらずとするか、又は其制定は國民經濟上若くは國民道德上更に患ふべき結果を生ずべしと信ずるが爲めなり

昨今多數實業家の新聞雜誌に於て個人的に發表する意見を見るに、其の主張する所は學者側の意見と非常の相違ありて、其間に殆んど踰ゆべからざる溝渠の橫はれるの感なきを得ず。實業家の多くは工場法の必要を論ずる學者官吏の意見を以て單に歐米學說の翻譯に過ぎずして、日本工業の實況より割り出したる適切の論にあらずと信ずるが如し。成程我國の學界は今尙ほ歐米の學說を崇拜して我國の實情に甚だ暗きの弊あるは拒むべからざる事實なり。是れ勿論我學界の尙ほ幼稚なるの罪なりと雖ども、一は我實業家が從來默して語らざるの主義を採り、自己の事業に重大の關係を有する立法に付ても甚だ無頓着にして、立憲治下の國民たる責任を盡さゞりしの罪少なしとせず。今回多數の實業家が工場法案に對して其意見を發表したるは甚だ喜ぶべき現象にして、余輩學究は之に由り利する所少なからずと雖ども、其の工場法に反對する不必要論、有害論及尙早論に至ては決して吾人を首肯せしむるを得ざるなり

二　不必要論を駁す

實業家の我國現時の勞働狀態を滿足のものとして工場法の不必要を唱へ、其論據として指摘する所なる主なる事實に付て見るに、何れも當を得ざるものなり。

或工業家は曰く、製糸業其他に於て一日十四時間以上の勞働を女工に課するは一見時間の過長なるが如しと雖ども、其實女工は敢て不平を訴へず、寧ろ時間の長きは給料の增加を來たすものとして之を歡迎し、時間の短縮を要求するが如き例は甚だ少なしと。然れども勞働者就中知識の程度低き女工が不平を訴へざるの一事を以て直ちに時間制限の必要なき理由と爲すは甚だ誤れり。幼稚なる勞働者は一文にても多く給料を得ることに腐心し、長時間勞働に由て健康を損するを顧みざるの弊あるは各國に於て見る所なり。故に工場法に由り兒女の時間を制限すべきや否やは決して獨り職工就中幼稚なる女工の之を欲するや否やに由て決すべきにあらず、國民健康の保持上及優良職工の發達上の利害より決すべき問題なり。此點より見れば農業勞働又は家事勞働と異なり、仕事の單調にして且つ規律を守るを要し、又概ね機械の運轉に伴ひ迅速に爲すことを要する工場勞働に付き、體質脆弱なる兒女をして一日十二時間以上の就業を爲さしむるが如きは決して無害と云ふを得ず。政府の工場調査は尚ほ甚だ不完全なりとは云へ、現時の過度勞働の恐るべき惡結果を生ずることは之に由て充分に證明せられたりと云はざるべからず

　或紡績業者は曰く、晝間勞働して夜間睡眠するは生理上必要の原則なるが如しと雖ども、少しく反對の慣習を續くるときは生理的變化を生じて何等の害を生ぜざるに至る。彼の娼婦の如き夜間に業を執る者は之が爲め初めは幾分健康を損するも、慣るゝに從つて更に其害を見ざるに至る。紡績女工の如きも亦之と等しく多年夜業の慣習を有するが故に健康上何等の害を蒙らず。特に我國の女工は自宅より通勤する者の如く晝間睡眠を採り難き事情の下に立つ者にあらず、其大部分は寄宿舍に收容せらるゝ者なるが、近來何れの紡績會社も大に寄宿舍を改善し、女工をして晝間充分に睡眠するを得せしむるが故に夜業禁止の規定は不必要なりと。此說にして果して眞なりとせば今日工場法の制定は殆んど不必要に近しと云ふを得べしと雖ども、余輩

は生理上の一般原則に照らし、又各國に於ける實例に徴して到底之を信ずる能はず政府の調査せる恐るべき反對の事實に信用を置かざるを得ず。我實業家にして若し此の如く生理上の一般原則に反する異常の事實を主張せんとすれば、須らく大多數の夜業に付き正確に調査したる結果を公表し、以て政府の調査は全然誤謬なるか、又は偶ま政府の調査せし場合は例外的性質を有し、之を以て一般に推すを得ざることを證明せざるべからず。謂ふに有力なる工業家中長時間勞働及夜業の國民健康上有害なるを認むる者あるの事實に照せば、此種の異常なる主張は蓋し一般の意見にあらざるや明かなり

或工業家は我國の工場設備の歐米に比して優れるを論じ、且つ曰く、今日我工場の主なるものは何れも新式のものにして其設備には相當の注意を拂へるが故に、勞働者の住家よりも遙かに健康上有利なり。人若し一旦勞働者の住する裏長屋の如何に不健康なるかを見るときは、今日法律を設けて工場設備に干渉するの必要なきを知るに難からずと。成程市外の廣濶なる敷地に建築せる數十の我工場は同種類の歐米の工場に比して概ね健康に適せりと云ふを得べけんも、今回の法案の支配を受けんとする我一般工場の設備が歐米の夫れに比して優れりと云ひ、特に宮殿と棟割長屋との差ありと云ふが如きは全然事實に反す。苟くも内外工場に付き相當の知識を有する者は概して我工場設備の甚だ劣れるを認めざるを得ず。是れ先進國に於ては多年嚴重なる工塲法行はれて設備を完全ならしむるのみならず、一方には鞏固なる勞働組合存して常に工場法の命ずる程度以上の設備改善を雇主に迫るもの甚だ多ければなり

次に我工場設備は勞働者の住居に比して一般に勝れりとの説も亦一概に主張するを得ず、成程多數勞働者の住居する裏長屋は甚だ不健康なりと雖ども、一方には多數工場に於けるが如く有害なる塵埃瓦斯の充滿又は不斷の音響の刺擊の如き事實は存せず。加之例令へ勞働者の一般住居は工場よりも不健康なりとの事實存

するも、尚ほ之が爲め工場衛生の取締の必要なしと云ひ、又工業主は設備改善の責任なしと云ふは何等の根據なし。工場の設備を完全にして職工の生命健康を保護するは工場主の責任なり。住居を改善して下級民の生活狀態を健全ならしむるは社會一般就中都市の責任なり。而して工場は勞働するの場所、即ち勞働者の生命健康に最も危害の多き場所なるが故に、之が設備の改善は最も急を要するや論なし。多年工場法を勵行せる先進國に於ては工場の設備は概ね完全に近づかんとするに反し、勞働者の住居は大都會に於ける地價家賃の騰貴に由りて甚だ狹隘不健康となれり。是れ實に今日先進國に於て住居問題が非常に重要となれる所以なるが、我國に於ても近來各大都市は財政の窮乏を觀るに遑なく、市區改正を行ひ、上下水道を設置し、其他市民衛生に向つて巨大の經費を投する是れ下級民の住居改善に向つて歩を進めつゝあるに外ならず

工場法を制定する以上は義務教育を終らざるが如き幼年者の工場勞働を成るべく禁止するの規定を設けざるべからざるや論なし。然るに我實業家は幼年者を使用して些少の給料を得せしむることを以て大なる恩惠なりと主張し、之が使用を禁ずれば貧困なる勞働者の家計に不利益を與ふべしと論ずる者少なからずと雖ども、是れ甚しき誤りなり。小學校令には教育の義務を規定すと雖ども、一面工場に於て就學兒童の勞働することを認むるときは、目前の小利に惑ふ下級民は妄りに其子女を工場に送らんとするが故に、教育の義務規定は到底完全に實行せらるゝを得ず。又假令へ其勞働は輕易のものなりとするも、元來不健康なる工場内に於て長時間の勞働を爲すときは其發育上有害の結果を免るゝこと能はず。此の如く工場勞働に由て幼年者の身體上精神上の發達を毀損することは、固より本人終世の大損失となり、又長じて父母に奉養するの能力を失ふが故に家族の大損失となるは言を俟たず。又勞働者にして其幼少なる子女を工場に送り、僅々五錢十錢の給料を得せしめざれば目前家計を維持すること困難なるが如き場合は甚だ少なきのみならず、元來此の如

き幼者の廉價なる勞働を多く供給することは一面に壯年者の給料を下落せしむる大原因を爲すものとす。即ち幼者を使用することは勞働者を惠むものにあらずして其實は非常に之を害するものなり。而して此事たる獨り勞働者全體を害するのみならず、工業家自身にも大なる損害を加へて其前途を危ふするものなるは余輩の既に評論せし所なり（日本經濟新誌第八卷第四號）

之を要するに工場法の制定を不必要なりと云ふは何れの點より見るも當を得ず。然るに我實業家の多數が公然又は內心其必要を認めざる所以は、我勞働狀態に何等不滿足の點なきが故に工場法を不要なりとするにあらず、之が制定は一面に於て重大なる不利を來たし、國民經濟より見るも其利は其害を償ふに足らずと信ずるが爲めなるべし。即ち多數實業家は次に論ずるが如き有害論者に外ならざるなり

三　有害論を駁す

實業家の工場法制定に反對する他の大原因は、其制定に由り我工業界に恐るべき打擊を與ふることを思ふるにあり。而して此打擊には二種あり、第一は工場法の命ずる制限負擔の爲め工業の收益大に減少して其衰退を來たすべしと云ふに在り。然るに工場法の制定は決して獨り國民全體の健康風紀の保持の上より必要なるのみならず、實に我工業の前途を安全にして益之を發達せしめ、從つて又工業家の收利を確保する上にも必要なり。我國の基本工業は云ふ迄もなく紡績製糸の如き纖維工業にして殆んど全部女工の力に由るものなるが、今日の如く之に體力不相當の勞働就中夜業を課するときは、西洋に於けるが如く年と共に女工の技能上達すると能はず、其大部分は或は工場生活の不快に堪へざる爲め、若くは之に由り健康を害せられて工場生活を繼續する能はざる爲め、長くとも數年の後には全然職工生活を廢止するの已むなきに至り、加ふるに今日の如く體力不相當の勞働を課するに於ては、事情を知悉せる都會住民の中より女工を得る能はず、巨費を投じて之を遠隔の田舍より募集し又は誘拐し來らざるを得ずと雖ども、此種の女工の一大部分は都會住民

と異なり數年を經過したる後は婚姻の爲め離職せざるを得ず。此等の原因により我國の最大工業に於ては未だ眞正の永久職工なるもの發生せず、僅かに素人の片手間仕事に過ぎざるの觀を呈し、其勞働能力は先進國の夫れに比して三分の一又は五分の一以内に止まり、將來彼我技術の懸隔は益々大とならざるを得ず。此の如くんば到底我工業は先進國の夫れと競爭し得るの望なし。加之將來我工業の最大市場は東亞諸國就中支那なるが、支那に於ては國民の生活程度甚だ低く、原料の供給は殆んど無盡藏なるが上に、近來は外資輸入と共に外國技術者の輸入も非常に盛んとなりしが故に、劣等職工を使用して廉價品を生産するに付ては遙かに我國に優り、從つて此數年來國内に於て紡績摺付木を初め各種の工業勃興し、久しからずして我工業品を排斥するの實力を得んとしつゝあり。

此の如く妄りに婦女幼者を多く使用し、特に之に對して過度の勞働を採らしむる從來の方針は、我工業をして獨り先進國の競爭に堪ゆるものたらしむるを得ざるのみならず、後進國との競爭に於ても日に益々不利に陷らしめざるを得ず、況んや我職工の技能は發達の見込なきも一般生活程度の進むに從ひ其給料は年々相當の騰貴を爲すは避くべからざる勢なるをや。從來の方針にて進行するときは恐く今後十年ならずして我工業は非常の打撃を蒙むらざるを得ざるべし。余輩は我工業家が列國經濟界の進歩の大勢を達觀し、工場法の制定が我工業を發達せしめ、從つて工業家の利益を維持するに付き如何に必要なるかを明にすることを切望せざるを得ず。若し工業家にして此知識を缺くときは、假令へ工場法は幸にして成立するも到底其の有效なる實施を見るの難きを免れざるなり（日本經濟新誌第八卷第四號參照）

我工業家の恐るゝ第二の打撃は工場法の制定の爲め從來雇主勞働者の間に存する主從の美風を破りて、之を冷酷なる權利義務の關係に變ぜしめ、其結果勞働者の反抗的精神を強くして遂に歐米に於けるが如き激烈なる資本勞働の衝突を生ずることに在り。我實業家の

殆んど例外なく主張するが如く、我國の雇主勞働者の間には今日尚ほ歐米と甚だ異なれる特種の主從的關係の存ずることは余輩も亦之を認むるものなり。學者の往々にして兩者の關係を全然歐米に於けるものと同視せんとするが如きは當を得ず。凡そ政治上たると經濟上たると將た社交上たるとを問はず、多數人の團集して其間に事業を爲さんとするに方り、歐米に於ては各人主我的にして互に相下らざるが故に、共同事務を處理するの方法としては共和制度を採るか、然らざれば相互の勢力關係に基きて互に權利義務を定め、各自其本分を行ふの方法を取るを原則とするに反し、沒我的傾向の大なる我國に於ては常に元老主領親方親分等と稱する有力なる個人が中心となり、多數者を個人的情誼に由て結び付けるを要し、此中心的人物を如何なる場合に於ても歐米に於るが如く頑强に個性を發揮し、自我を主張する人物にあらずして多大の義俠的要素即ち一種の沒我的要素を備ふる者たらざるべからず。各自互に他の人格の侵すべからざるを認めて之れと共和的の態度を採り、又は互に越ゆべからざる權利義務の限界を立て、各自其本分を行ふことに由り共同一致の實を擧ぐることは、元來主我的なる個人の激烈なる自我の主張を爲し、鬪爭し、掛け引きしたる上、相互の勢力關係上各自一定の限界の確定せる結果として現はれ來るものにして、此の如きは權利思想の發達せりと稱せらるゝ我上流社會に於ても甚だ難しとする所なり、此事實は蓋し何人も熟知する所なるが、今ま雇主の職工を使用する場合即ち企業者勞働者共同して生產を行ふ場合に付て見るも、吾人は亦同一の事實を發見すべし。我國に於て勞働者を使用し、之をして事業に誠實勤勉ならしめんとせば、單に權利義務の關係を適當に定め、相當の給料を與へ、勞働時間を相當に制限し、其他一般に勞働條件を客觀的に確定することを以て足れりとせず、必らずや雇主又は役員職工長等が相當の義俠的態度を採て之に向はざるべからず。換言すれば職工を有効に使用するには獨り利を以て誘ひ、威を以て脅するのみならず、更に涙を以て之を服せざる

べからず。是れ實に我國に於て未だ法律の勞働者を保護するものなく、又勞働組合と云へる有力の武器も存せず、特に工場勞働者の過半は抵抗力なき婦女幼者なるに係はらず、資本勞働の關係が歐米の往時に比して割合に良好なる一大原因なり

此の如く我工業界に於ては概して特種の主從關係の存在するは事實なりと雖ども、經濟の大に進歩したる今日に在ては最早や資本勞働の關係を此主從的情誼に一任するを得ざるに至れり。其原因は第一に此の如き個人的情誼の充分に存立するには雇主が比較的少數の勞働者を使用して常に之れと接觸し、且つ其勞働者も長期間同一の雇主の下に業を採る場合に於て見るを得べきものにして、經濟の幼稚なりし時代には通例此等の條件存在せしも、各種工業に付て大工場起りて勞働者の數非常に增加し、且つ勞働者の新陳交代の頻繁となれる今日に在ては、到底舊時の如き親厚なる主從關係は成立するを得ざるなり

第二に雇主勞働者共に如何なる勞働條件が勞働者に必要なるやを熟知する場合には、勞働者の利益は能く主從の情誼に由りて保護せらるゝを得べしと雖ども、雇主勞働者共に勞働者階級の眞利益を保護するに必要なる勞働條件の何たるやを知らず、例へば過度の勞働就中夜業を執らしむるも給料を夫れ丈け多く與ふれば勞働者の利益なりとし、塵埃瓦斯の充滿し又は通風採光の不完全なる工場の如何に勞働者の健康を害して其勞働能力を失はしむるやを知らず、又義務敎育を了らざるが如き勞働者の兒女を雇用して些少の給料を與へ、之をして家計費の補助を爲さしむるを以て雇主の恩惠を與ふるものとし、其の將來の勞働能力の發達を妨げて終生の不幸を來たすのみならず、此の如き兒女の廉價勞働の競爭に由り一家の主人たる壯年男子の給料を下落せしむるの大弊あることを覺らざるが如き現狀に在ては、到底資本勞働の關係を主從の情誼に一任するを得ざるなり

第三に企業者間の競爭激烈なる今日に在ては如何に勞働者に多大の同情を有する企業者も、到底自己の正

當と信ずる待遇を勞働者に與ふるを得ざる場合多し。蓋し一般企業者は勞働者に對し大なる同情を有する場合に於ても、其中人情を解せざる少數企業者ありて安りに勞働者の待遇を粗惡にすることに由り、生產費を減少して市場に競爭を試むるときは、一般企業者も已むを得ずして此短見且つ不人情なる少數者の爲に倣ひ、勞働者を虐使せざるを得ざるに至るものとす。此の少數企業者の行爲たるや明かに不正競爭の一種にして、工場法が此の如き行爲を禁止制限するは即ち一種の不正競爭禁止に外ならず。故に工場法は人情を解する一般企業者に向つては多くの點に於て何等の强制的束縛を爲すものにあらず、却つて少數者の不正競爭を禁ずることに由り、一般企業者をして安んじて遠大の利益を計り且つ其良心の命ずる所を行ふの自由を得せしむるものなり。換言すれば工場法の制定は決して論者の云ふが如く我國特有の美風たる主從の道德的關係を破壞するものにあらずして、却つて之を維持するに必要缺くを得ざるものなり。勿論工場法を制定して勞働時間を制限し又は夜業を禁止するときは、勞働者は時間外の勞働又は夜業を拒むの權利を主張するに至るべしと雖ども、是れ決して或實業家の主張するが如く從來の道德關係を變じて冷酷なる法律關係たらしむるにあらず、從來不人情又は短見なる一部雇主の行ひ來りたる、若くは此の如き少數雇主の競爭の爲め已むを得ず一般雇主の行ひ來りたる專制と不道德とを一掃して、眞の道德關係を成立せしむるものに外ならず。元來法律は常に道德を擁護するものたるべく、之を破壞するが如き法律は一日も存ぜしむべからざるは言を俟たざる所なるが、若し論者の云ふが如く從來當事者双方の道德的關係に由りて行はれし事項を法律に由て規定することを以て道德の破壞と云ふを得ば、一般の法律就中親族法や相續法の如きは我國道德の一大基本を爲す家族制度を破壞する大々的惡法にして、一刻も速かに之を廢止すべしと云はざるを得ざるに至るべし

四　尚早論を駁す

我實業家の工場法に反對する最後の大原因は、我國

の現狀より見て工場法の制定は未だ其時機にあらずとするに在り。然れども我勞働狀態が未だ工場法を要する程劣惡ならずとの見地より尙早論を唱ふるの非なるは既に論ぜし所に由て明かなるが、此外尙ほ一種の尙早論あり。曰く、凡そ法律は已むを得ざるに至るまでは決して制定すべきにあらず。然るに從來我國に於ては妄りに先進國の例を追ふて不必要なる法律を制定するの弊あり。今回の工場法制定の企の如きも亦此惡例の一に漏れず。元來歐米に於て工場法を制定せしは勞働者の反抗運動の强烈となるにより已むを得ずして制定したるものなり。然るに我國の勞働者は今日未だ覺醒の域に達せずして何等の反抗運動をも爲さず、從つて此際工場法の制定を急ぐの理由なしと

成程歐米に於て工場法を制定せしは概ね勞働者の反抗運動の激烈となりし爲め已むを得ざるに出てしもの多きは論者の言の如しと雖ども、此の如く已むを得ざるまで勞働者保護制度を設けざるの主義は歐米自身に於ても甚だ誤れるを發見し、今日は各國競ふて社會的立法に努めつゝあり。是れ出來得る限り勞働者の利益を無視し、其反抗運動を壓迫せんとする從來の主義は、一般下級民の大に進歩せし今日に在ては到底効を奏せざるのみならず、益々其反抗運動を激成するの大弊あるに反し、勞働者の正當の利益を保護することは、其不平不滿を減じて險惡なる反抗運動を寬和するに多大の効力あることを發見したるが爲めに外ならず。顧て我國の勞働者の狀態を見るに決して滿足すべきものにあらず、勞働者の爲めには勿論、國家全體の利益より見るも、將た工業家自身の遠大の利益より見るも、速かに改善を要するの點少なからざること明かなると同時に、一方には假令へ我勞働者は今日尙ほ幼稚なりとは云へ、敎育の普及盛になる我國に在ては遠からずして大に其覺醒を來たすこと明かなる以上は、我國も此際速かに工場法を制定せざるべからざるや言を俟たず

從來我國の立法が早計に失するの弊少なからざりしことは、余輩亦論者と共に之を認めざるにあらずと雖

ども、其の尙早とは如何なる標準に由て決すべきものなりやに付ては、余輩は論者と全く見解を異にするものなり。余輩の立法上適當の時機と認むるものは、國利民福上其法律の制定を必要とするに至りし時期を指すものにして、此時期に達すれば假令へ其立法に由り直接の利害關係を有する社會階級の間に如何なる要求と拒絕との存するを問はず、國家は宜しく立法せざる可らずと爲す者なり。然るに論者の云ふ所の適當の時期とは獨り國家公益の上より立法を必要とするに至りしの一事を以て足れりとせず、更に其立法に由りて利益を受け弊害を免るべき社會階級の頑強なる要求起りて國家は到底之を拒むを得ざるに至りし時期、即ち工場法に付て云へば勞働者階級が自覺して激烈なる反抗運動を爲すより國家は之を寛和するが爲め工場法を制定するの已むを得ざるに至りし時期を云ふものなり。蓋し論者の主張する政策は從來歐米の採りし所にして、近來其非を覺り幾分の變化を之に加へつゝありとは云へ、本來此政策は歐米の社會組織上當然に起り來るものなるが、我國の社會組織より論ずれば此政策は決して實行するを得ざるものなり。請ふ其理由を概說せん

抑も歐米人は我國民に比して概ね強度の個人的主我的傾向を有し、從つて其個人個人の間に激烈なる生存競爭の行はるゝと齊しく、利害を同ふする者は鞏固なる階級團體を組織して、利害を異にする他の階級團體と激烈なる競爭を爲し、其結果として社會組織は嚴格なる主我的階級組織となり、又社會の進步し局面の廻轉するが爲めには舊來の階級と新興階級との間に激烈なる軋轢鬪爭の行はれたる後、双方の勢力均衡を得來りたる結果、到底互に相侵すを得ざるに至り、新階級にも舊階級と平等の待遇を與ふる所の新制度新憲法を立て、平和を回復することを必要とし、此新舊兩階級は相結んで更に最新に起り來れる他の階級に對し激烈なる鬪爭を爲すを常とす。學者の歐米の社會は階級戰に由らざれば進步するを得ずと稱するは此謂にして、現今勞働者階級の激烈なる反抗運動就中其社會主義的

運動の如きは、即ち古來より行はれ來りし階級戰の一種に外ならず。然るに歐米に比して遙かに沒我的傾向の大なる我國に在ては、假令へ社會組織に幾分の階級的色調を帶び、從つて又多少の階級戰行はれざるにあらずと雖ども、決して歐米の如く激烈なる個人的階級的鬪爭行はれず、國民各部の勢力は割合に多く調和統一せられて社會の進步局面の回轉を平穩の間に行ひ來り、特に世界列國と交通するに及び國力を集中統一して之に對抗するの必要上、此傾向は益強固となりつゝあり。是れ實に近世に於て封建制度の廢止も立憲政體の確立も歐米と異なりて平穩の間に行はれし所以にして、又論者が我立法の常に早計に失するを嘆ずる所以なり

主我主義と沒我主義との利害得失は容易に判斷するを得ざる大問題なりと雖ども、論者が工場法の制定に對し早計の弊を責むるは即ち歐米の主我主義個人主義を是認して之を我國に移すべしと云ふに外ならず。余輩は敢て此兩主義の利害を此に批判せんとするものにあらずと雖ども、一言以て論者の注意を促がさゞるを得ざるものあり。何ぞや、主我主義に多大の長所あるは明かなれども、其の激烈なる階級戰を惹起して社會の平穩なる進行を妨ぐることは其の最大短所にして、決して其長所にあらざることと是れなり。元と此短所は其長所と相結んで容易に分離するを得ざるものなりと雖ども、輓近歐米は其弊に堪へずして極力之を矯正せんとし、其結果往々にして極端に奔れる社會政策實行の主張となり、或は愛國哲學の提唱となり、或は君權を極大にして階級的利害の調和を此に求めんとするに至れり。彼の帝國主義的思想の大なる勢力となりし原因は種々ありと雖ども、個人主義階級主義の弊に倦みたることも其一大原因を爲すや疑ふべからず

要するに主我的傾向の强大なる歐米と異なりて我國民は古來全體的利益の爲めに個人的階級的利益を犧牲に供するの沒我的精神頗ぶる大なるの特色を有し、此精神は時勢の變遷に伴ふて其發現の形式を異にすと雖ども、精神自體に至らば今日特に衰退せりと斷ずるを

得ず、(太陽一月號拙稿社會主義的運動と日本國民)謂ふに從來我實業家が工場法の制定に反對せしは、單に其利己的見地のみに出づるものにあらずして、前に述べしが如く國民經濟上其不必要又は有害なるを信ずるが爲めなり。故に若し我實業家にして工場法の制定が國民經濟上如何に急務なるかを充分了解するに至らん乎、彼等は決して其勢力を恃んて妄りに反對を爲す者にあらずと信ぜざるを得ず。從來實業家の發表せる意見は多く不必要論又は有害論に基くものにして、此に述ぶるが如き主我的なる尙早論、即ち勞働者階級の反抗運動激烈となりて勢已むを得ざるに至るまでは決して工場法の制定に讓歩すべからずと云へる論は、僅かに一部の政客の主張する所に止まるが如し。故に工場法反對論を以て直ちに是れ實業家の貪婪飽くなきの利己心に出たるものと斷定するは當を得ず。而して我實業家が此種の主我的尙早論の主張を敢てせざる所以は、必しも我國人が主我的なる歐米人の如く意思强固ならず、從つて其欲する所を直言して之が貫徹の爲めに飽くまで奮鬪するの意氣を缺くが爲めなりとするを得ず、一方には沒我主義なる我國人の倫理思想は到底此の如き主我的なる尙早意見を主張するに忍びざるが爲めなり。只だ實業家の反對理由の何れに在るやを問はず、其の年來の反對説を今尙ほ固持して改めざることは、神經過敏に陷れる政府の警察的失政と相俟て、近時各地に勃興の徵を示せる社會主義的運動に好個の口實を與へ、特に漸々覺醒せんとして而も尙ほ識見の甚だ幼稚なる我勞働者階級の間に此運動を擴張するに付き多大の便宜を供するの危險あるは注意せざるべからず

硬教育と努力主義

鎌田榮吉

硬教育とは昨今聞こゆる聲であるが、硬教育とは抑も何であるか。硬教育は努力主義の發現であつて、努力主義なるものの鼓吹が現在の教育界に必要であるといふならばそれは尤な事である、我々も無論是には賛成の意を表せなければならぬ、既に分り切つた事である通り、注入主義では行かぬ、開發主義でなくてはいかぬ、手を持つて老婆的に教え込むよりも、生徒本具の能力を誘き出し之を發達させる樣に勉めなければならぬ。教育といふものは澤山の知識を外から持つて來て無理矢理に人の腦中に押し込むものではなく、各自本具の能力を誘導し陶冶して自ら多くの知識を吸收し獲得せしむるのである、それて初めて力あるものとなつて實世間に處し十分の活動が出來ることになるのである。即ち生徒をして自らの努力に因つて自らの知識を作る樣にする、斯ういふ主義の發現であり鼓吹であるといふならば固より結構なことに相違ない。鳥を食膳に供するとする、之を店から買つて來れば來られるが、併し自ら獵銃を擔いて郊野に驅せ山澤に入り、滿身の汗を絞つて、然る後其獲物を齎し歸り、之を庖丁に付する方が如何程愉快であり又幾多の副産物的利益があるか知らぬ、努力主義の教育は亦斯の如く、自ら山野に獵して鳥を獲しめるのである。鳥を店に買つて來るではない。硬教育なるものゝ求むる處亦此處に在るとすれば言ふ迄もなく宜い事に相違ない。

併し其所謂硬教育なるものゝ目指す所が此處になく、唯徒勞的努力さへさせれば宜いからといふので、其教授の材料や器械となるものに記憶に困難なものを用ひ、無理强ひに强ひ付け樣とするのであるならば、

是れは要も無い所に無暗に力を消費させるものであつて飛んでも無い量見違ひてある。教育の最も重要なる點は其材料や器械てはない、材料や器械によつて導かれ或は盛られて居る知識の內容にある、否此知識を得る爲に精神が得る訓練てある。それ故生徒をして十分努力し十分吸收し十分消化し十分體認せしむるならば宜しいけれど、然らずして只六ケしい材料や器械を用ひ、それを無暗に記憶させ樣などゝする事は、全く教育の眞義を了解せず、教育の目的を會得せぬ分らずやの言ふ事てある。即ち思想を盛る言語や文字の如きものが六ケしいからとて何にもなりはせぬ、それを只努力さへさせればよいからといつて、面倒な漢語や、漢字などをも、何等の選擇なく無遠慮向ふ見ずに使はうとするに至つては何の意味か薩張り了解出來ぬ、例へば子供といふ事は其儘子供といへば最も普通に行はれて居る言葉だから誰にも能く分る、然るに少年などいふと餘程六ケしくなる、更に青年などゝなると尙ほ六かしくなる。その六ケしいのを努力して分つて見た所て得る處の內容は矢張子供といふより他の內容は入つて來ぬ、之をも敢てするは丁度十錢て買へる品物に強ひて一圓を投じ二圓を投じ三圓を投ずる樣なもので、投じて見た處て摑む品物に變りはないとすれば安い方が宜くはないか。これをも思はず今頃六ケしい漢字漢語の復活を內容に含めて、そして努力主義を叫び、そして硬教育を名くる樣のものがあるならば、其徒は言語同斷大馬鹿物の骨頂てある。

しかしながら我國の現在の社會の有樣に於て漢字漢語を通用して居るのだから、其制限などといふ姑息の事は決して行はれるものてない。學校て制限して教えても世間てはそれ以外の字を澤山用ゐるとすると、勢ひ場合々々に順應すべく、矢張り制限以外の文字を覺え又用ふる事になる、迚も制限などて所期通りの効果を得られるものてない、それ故現在の社會からすれば幾分か漢字漢語を敎ふる事も已むを得まいが、これは單に記憶上の事て強ひてこんな無益のものを多量にえ込み、其樣な事て努力さするのは眞の努力主義て

何でもない。

其他にも或は趣味教育を抑えて無暗に文藝を壓迫するとか、女子教育に對して消極主義復古主義を取るとか、頗る暗中摸索の事が多い樣だが、又た專門を貴ぶの餘りに其知識が普遍的でなく一局部に偏し其專門以外は全然無知識である、眼界が極めて狹い天地に限られて居る、それ位はまだよいが其狹い專門內にも又小分し細分し甚しき局限主義に陷るから却て自家專門の事さへも眞に了解する事が出來ぬ片輪者が出來る。先づ要は一部局の事に深く精通する上に凡ての事に一わたりの知識を有し、各其事に從事するのでなくばならぬ。此意味に於て私は今日の高等教育の弊を痛切に認めるのである、素より精しからんと欲せば專ならざるを得ぬは當然の事だが、其專なるものを定めた上に更に自餘の學問にも相當の注意を拂ひ、一わたりの原則位は心得て貰はなくては叶はぬ、吾々の生活は共同生活である、從つて其上に生るゝ學問は何れか又互に交涉聯絡の無きものがあらう。即ち其關係を求め其絲筋を辿つて行くならば盡く繋がり合ふべく引き合ふべきものである、それ故專門に心を用ひ其事に精からん事を欲しても勢ひ其補助として自ら又他の知識を要する事になる、否他の知識を要する事なくして其專門にのみ精くなるといふ事は實に出來るべき筈のもので無い。然るに今の教育の仕方は此點に於て甚だ疎である。私は最少し實世間に觸接し、實世間の知識を獲得して、得る樣にしたいものと思ふ。

更に翻て國民教育の點に於ても私の理想としては小學教育の根柢からして全然改良したいのである、併し是は容易に今行はれる事でない、行はれるべきでない理由はチャンと自分にも心得て居る、而かも猶且つ理想として丈も語つて置きたい、それは日々の學校に於ける受業時間を大に減少して、其代りに學生をして日々實際生活に觸接せしめ、心身の發育に害なき範圍に於て父兄と同じく相當の職務に服し相當の勞働に從はせる事である、其代りに就學年限は今よりズッと長くても宜しい。即ち現在では義務教育年限を四年の處を

六年に延ばして居るが、更にそれを八年なり九年なりにしても構はぬ、僅か六七歳より十二歳迄では駄目だ、全體教育の時期と實生活の時期とを餘りに截然と劃定し過ぎて居る、教育を受けて居る時期には實生活の事は薩張り知らぬ、實生活に携はると爲つたら教育の事は又一擲して顧みぬといふ風である事は一般の教育も高等教育の方にも共通の弊風と成つて居るではないか實生活に處するも一つの教育である、其方の教育も幼時からでなければ眞の効果を得ぬものである、然るにその好機を空く逸して徒らに机上の學問で全部を占領せられては詰らぬ事である、又仕事の中にも自ら幼兒に當て篏まり、幼時に於て他の模倣し得ざる特長を發揮するものがある、之をも學校教育の爲に妨げられて其能力を社會が用ふる事が出來ないとすれば甚しき不經濟を見るではないか。特に況んや日々學び得た處が直に實際に行はるゝに於ては知識が一歩々々に踏み固められて行く道理、習つた事が仇に爲らず、日々夜々に實際の力と爲る。すれば又各自の頭に言ひ知らぬ快感が生じ、從つて又向學の念を加へる譯にもなる。即ち此の如くして私の言ふ意味に於ける努力主義の効果は十分に得られる事になる。そして初から實世間と離れずに行くから、趣味も注意も多方面になり、自ら知識も普遍的になつて、他日狹き專門に入るに於ても補助の知識が十分に備はり、自ら偏固の疾を免れしめる。今の樣に一日五時間も六時間も幼弱の者を教室内に閉ぢ込めて而かも教員等は之を以て尚ほ足れりとせず、或は宿題を課する或は豫習を命じて、成るべく多くの時間を日課に費さしめるを以て却つて自己の熱心を示すの具に供して居る。生徒の幼少なる腦力としては眞面目にやつたら殆んど學校の事以外に時間の餘裕はない、それでは六ヶ年の義務教育でも父兄は大に困る、と云ふ譯は前に十一二の子供を使役すると云ふのではないが彼等に子守をさせる時間もなき事となつては、農民等の仕事には多大の打撃である、此點からして實際に於て農民等は義務年限の延長には非常に困つて居るのが地方の實況であるが私の言ふ樣に學校の時間を

半減して一日二三時間にもし又午前と午後の二種にても分けて敎へたならば義務年限は八年と成ても父兄の仕事は餘程容易く遣繰が着き少年も學實兩樣の敎育が出來る、或は年一年と上級に至るに從ひ學校て其時間を短縮して反比例に勞働時間を長くするもよい、そして幾年かの後には在校時間を短縮し盡し、終に全く學校と絕緣して實生活の人となる樣にするのもよかろう。

素より幼兒を强き勞働に服せしめては惡いのは云ふ迄もない工場法案などにも十三歲以下のものゝ使役を禁ぜんとして居る、が既に上來陳述した樣な幾多の理由ある條件の下に、多少の服勞は決して差支ない事と思ふ。徒らに外國法律の形式に倣つて其精神の在る所を究めざるは大に正鵠を失するに至らん。外國人と日本人とては父兄の子弟に對する工合は大に違ふ。外國の下等社會ては親が酒を飮む、博奕を打ちながら小供を犧牲にして其賃錢を貪らんとする者が少からぬが、日本人は子を愛する事少しく程度を越ゆるものこそ多けれ決して無理非道なとはせぬ、故に此邊の事は今日の所ては父兄に任せて大概安心が出來る。又就學の部合も九割五分にも上りて居る。要は國民敎育も高等敎育も大に舊來の方針を改めて實地的にならん事を希望する。此意味に於て努力主義自力主義の方針に依る所の硬敎育を主張するのである。

現內閣と移植民政策

山口正一郎

一

我人口の增殖は極めて健全なる狀態にありて昨年度の如きは實に六十萬の增加を示せり。我五千三百萬の人口中三分の二は農民にして、而かも人口の增殖は最

も農民に高率ならざるべからざるの推測せらるゝに於て、今後農民の增加は每年必ず四十萬以上と豫想せざるべからず。然らば我全土の面積猶ほ此上に耕作地の增拓を許さゞるの事情に商量して所謂移植民政策なるものゝ我施政中最も重要なる位置を占むるものなることを認容せざるべからず。惟ふに本期議會に於ても本問題は又他の外交問題と牽連し、必ずや病弱なる小村外相を包圍して多少の波瀾を湧起するに至るべき歟。此時に方りて四十一年以來小村外相の表明し來れる謂れる移植民政策論を編述し、併せて之が評論を試みるは今正に其時機なるべきを信ず。

由來我移民に關する事務は通商局内における所謂移民課と稱せらるゝ一課に依りて處理せられ居るが故に移植民に關する問題は專ら外務大臣の管掌に屬し、其興廢取捨一に外務大臣の方寸に決し來り、別に之に關する内閣乃至國家の政策といへるが如き大方針の曾て存在したることありしや否や頗る疑問に屬す、從つて小村伯が議會其他種々の機會に於て所謂内閣の方針として表明したる移民政策なるものも其實は只小村伯自身の政策論にして、其國政上の實際問題とは全然沒交涉ならざるかの疑問なきに非ずと雖も既に主務大臣として之を議會に公表せし以上は其主張を以て内閣の政策となさゞるべからず、故に本論は小村伯の宣言を以て現内閣の方針と假定し、以て他の移植民に關する施政と對照し併せて之が批評を加ふる所あらんとす。

二

明治三十四年第一回桂内閣の組織さるゝや小村氏は駐清公使より入りて其外務大臣に任ぜられ貿易航海移民を以て國家の三大政策とするの主張を發表し、從來萎靡不振なる我が對外政策に向つて聊か人意を强からしめたりしが、如何なる動機にや依りけん四十一年第二桂内閣の外務大臣となるに及んで忽ち小人豹變し、意外の對外施政方針を議會に演說して太く國民を驚かすに至れり、彼の有名なる滿韓集中政策即ち是也、其論に曰く『移民問題を講究するに當り第一に注意を要するは、戰役の結果帝國の地位一變し、其經營を行ふべき

地域の擴大を見るに至りたるを以て濫りに我民族を隔在せる他國の領域内に散布するを避け成るべく之を一方面に集中し、其結合一致の力に依りて經營を行ふことを必要とするに至りたること是なり、次に注意を要する我對外的事業中最も重きを措くべきものは對外商工業なるを以て其發達を阻害すべき事項は努めて之を避けざるべからざること是なり、政府は是等の諸點を顧慮し、加奈太及合衆國への移民に關しては既定の方針を踏襲し、誠實に渡航の制限を實行しつゝあり、而して其他の方面における移民に關しては成績未だ判明するに至らざるを以て目下尙ほ講究中に屬する次第なり』と嘗て移民航海貿易を以て國家の三大政策なりと揚言したる小村伯の演說としては吾人は殆んど之を信ぜんと欲するも能はざりき、當時識者は多く之を以て政府の衷心より出でたる政策にあらずとなし只合衆國加州學童問題よりして激烈なる排日熱を惹起し、遂に渡米制限、布哇轉航禁止を餘儀なくせられたる前内閣以來の失體に懲り、一は以て對米外交難に向て一種の豫防線を張り、一は以て米國政治家に對して一種の辯辭を呈したるものと忖度したりき、當時都下二三の新聞紙は之に向つて批評を加ふる所ありしも或者は之を以て小村伯の用心深き宣言として冷笑し或は政策を以て勞銀の低廉なる方面に移民を送り得べきや否やを疑ひたる位に過ぎざりき、されば議會に於ても二三議員が當時米國の排日事件に對する政府の緩漫にして且つ拙劣なる外交を攻擊したるに止まり、別に政策論を以て直接之に辯難を加ふるものあらざりき。是れ主として國民の對外問題に對する冷淡と、對外知識の缺乏との然らしむる所あるも一は以て其解釋を異にしたるに依らずんばあらず、斯の如くにして小村伯は猶ほ從來一般に妄信せられたる怜悧賢明の人を以て無事本議會を通過したりき。

三

先之桂内閣は議會召集前に新内閣の施政方針を訓示すべく地方長官を召集したりしが小村外相は訓示の内容に對して秘密を守るべきを命じ移民に關する方針を

も纏述したり、固より秘密なるが故に明かに之を知るを得ずと雖も、傳ふる所に依れば外相は在外邦人特に在米移民の風習の賤陋にして國家の面目を毀損するの弊を指摘し、彼等が外人に指彈せらるゝの結果遂に本邦輸出品の聲價をも失墜し、內地多數の商工業者に多大の損失を被らしむるに至る、故に彼等にして多少の送金を爲すあるも國家大體の上より云へば決して利益といふべからず、且つ一び足を外國に入れたる勞働者は直ちに外國の惡風に感染し、大和民族の大精神を喪失し再び國家の用を爲さゞるのみならず、それ等が他日歸國するときは自然其惡習を內地に傳播するの恐れあり、斯の如きは移民に非ずして棄民なり、故に今後斷然之を禁止するの方針なりといふにありしと云ふ。

其眞僞は固より之を保證する能はざるも、當時氏が都下の一新聞記者に語れる所として掲載せられたる記事は之が傍證として充分の價値あるを見たり、曰く「北米及墨其西哥、布哇に於ける我移民の全然否塞の現狀にあることは人も知る如く奈何とも致方なし、近時は又頻に伯拉西爾を云々して南米移民を稱說するものあれども是れ又望なし、說くもの往々南米諸國を以て切に日本人移住の必要を感じつゝあるが如く云ふも今日猶不毛の儘放棄さるゝ土地は其土地元來天惠薄く人間の繁殖に適せざるに依ると多し即ち自然の故障の爲め開けざるものなり、自然に逆つて失敗に終はるなきを望むも得べからず、斯の如き地方には初めより移民を送るの必要なし、(中略)且つ今日國內の壯丁を驅て連に之を海外に移住せしむるの損得奈何は一考を要す、一旦有事の日に際して困却することあるべし、若し或は思ひ切て一ヶ年五十萬人位づゝの移民を輸出するに適する土地あらば移民も亦國益なるものあらんが此の如き廣大なる土地は發見すること能はず、然るに僅々千人に足るか足らずの移民を企て之が爲め每度移民先きの反感を買ひ紛紜を惹起すが如きは國家政策として取らず、此故に政府は今後絕對に移民を奬勵せざる方針なり是は政府の大方針なり」と此等に就て前後を對照し滿韓集中說は必ずしも合衆國に對する一片の外交

的修辭のみにあらざりしことを明かにするを得たり。

移民に對する小村氏の眞意種々の方面より稍明瞭を加ふるに從ひ新聞紙の之を論評するもの漸く多きを加へ御用紙も亦た辯護頗る努むる所ありき、曰く『伯の對外的商工業の發達を阻害すべき事項は努めて之を避けざるべからずと云へるは言甚だ簡なれども蓋し國中の働らきざかりの壯丁を驅りて海外に赴むかしむるときは内地に勞力の缺乏勞銀の騰貴工藝の衰頽を招くの類例の世間に多きを顧みて猥りに出稼人を出すの病を未然に防止せざるべからざるを云ふものならん』、又曰く『移民問題は畢竟枝葉の論のみ（中略）吾人をして露骨に云はしむれば縦令北米合衆國に於て我移民を歡迎するも此方よりは成るべく御免を被むりたき也、日本人の太平洋沿岸に於ける成功は吾人之を識認するに遲疑せず、されど彼等は米國に於て孤立せる一種の民族團たるに過ぎず、若し然らざらんと欲せば米國の人種中に呑込まるゝの外なし、故に論じ來れば我大和民族を濫用するもの也、切言すれば人口の濫費也』、と、小村氏の外交方針演説は四十一年二月の二日にありしが恰も當日の社説に於て『日本人口論』と題して盛に我が人口增殖の盛況を祝し、『遠くは南米諸國より近くは東洋南洋に於て我移民を歡迎し我移民に適せる地は實に宏く、我移民が移住の地なきに至るは決して十や百の少き年數の後には非ずと』放言したる御用紙が一變して此言を爲すに至りたるを見れば明に記者其人の辯護に非ずして寧ろ小村伯其人の口述の筆記と見て太過なかるべく、乃ち移民政策に對する伯の根據一層明白なるものあるを認むるに至れり。

四

滿韓集中論、海外移民絕對制限（措辭頗る奇なれども暫く借用す）の理由は小村氏が四十一年八月十二日渡米實業團一行を請じてなせる諭示的演説に依りて更に其全豹を竊かにするを得たり、此諭示演説は例に依て秘密を守るべきを要求されたるに拘らず超えて十六日の大阪朝日の社説欄に於て『外相の對米愛嬌』なる珍題を以て紹介せられたり、其一節を摘出すれば下の如

し『由來外國に移民を奬勵するてふ政策は日露戰爭前までは我國の努めたる所なれども日露戰爭後我國は一島國より總じて大陸國となれり、而して之を政治上經濟上より見るに斯く大陸國となりたる我國は最早人口の增加を憂ふるに足らず、否人口の增加する程其勢力を增加する所以にして增加したる人には之を東洋方面に集中して東洋に於て擴大したる勢力の支持を計らざるべからず、之れ我國が人口を自國附近に集め置かざるべからざる理由とす、又經濟上より云ふも我國が外國と商工業の競爭を爲して優秀の點は勞働の著しく低廉なる事にあり、こは他の點に於て材料といひ機械といひ劣等なるにも拘らず、我の能く競爭に堪へ得る所以なりとす、されば此優秀なる點を失ふは我商工業に取りて非常の損失といはざるべからず、此點より云ふも我人口の我國附近にあることを最も利益あることゝす、而して我政府は此に鑑みる所あり從來の海外移民奬勵の政策を捨てゝ我帝國附近の開拓經營に力を用ゐんとす現に三月以來米國に移民するものゝ數の著しく減じたるも此方針に基けり、されば我國が米國と解意せる移民制限は正直誠實に之を行ふことを得るや言を俟たざるなり。終りに將來日本商工業の大顧客たるべき國は世界中米國と淸國と二國より外にあらず、されば諸君は之を心に置きて渡米後も十分將來貿易の隆盛を計る道を硏究せられんことを望む、』是を實に我對外政策の指導者たる小村伯の移民問題に關する全幅の精神なりとす。

五

小村伯の移民政策論は第一に論理上自家撞着を來し、第二には事實上不可實行の空論に陷ゐり、第三には此宣言に依りて我對外政策に非常の惡影響を齎らせるものなり。第一、勞銀の低廉を以て我商工業の優秀點とし、勞働の過剩を企圖するを以て立國政策とするに於ては其米國たると滿韓たるとを問はず苟も海外移民は均しく其反政策にあらずや、然れども伯或は說あり、伯の敏捷なる外交手段に依り滿洲を併合して內國とし、都をも此に移して伯の所謂大陸國を作り、更に

此に過剩勞力國を現ずるを得べしとせば予輩の又た知る所にあらざるなり。第二、抑も滿韓移民集中案は苟も多少の常識を備へたるものは直ちに不可行的空論たるを認知するに遲疑せず、滿洲は白仁民政長官の丁寧反復の說明を俟つまでもなく我移民を收容し得るの土地に非るなり、近年小村伯の亞流たる錫總督の提案に依り支那南部の窮民を此に移殖せんと試み幾多の國帑を消費したれども是すら寸毫の成功を認めざるに徵しても其一斑を窺ふべし。朝鮮に至りては武斷政治家と投機的實業家とに依り大なる夢を以て創立せられたる東洋拓植會社の方針を以て大に日本人を移殖するに努め居れども創立以來三年を經過したる今日に於て未だ露程の進行を見ず向三ヶ年間に僅かに二三百戶宛の移住者を募集するの計畫を立案したりと傳ふるに過ぎず、其實情と資力とに依りて之を按ずるに將來と雖も其歸着する所知るべきのみ、滿韓集中論の如きは恐くば小村伯をして三百歲の壽を保たしむるも其成功は尙ほ甚だ困難なるべきなり。第三滿韓集中宣言は先づ伯が世界における我商工業の二大顧客として恃める米淸兩國を太く驚かしたり、抑も米國が我國に向つて動もすれば不快の感情を抱き往々にして日米戰爭を夢みるが如きは其由來する所決して小村伯の確信するが如き我棄民の關係にあらずして、彼等が主として着眼する所は支那にあり、蓋し彼等は其世界無雙の工業發展に對する顧客を以て四億の人口を有する支那帝國を想定し、而して之が競爭者を以て日本人なりと妄斷し、日本が滿洲に占據して其勢力を支那全部に伸張せんことを恐れ凡て猜疑の眼を以て吾を嫉視しつゝあるものなり、即ち移民問題の如きは此方面より見れば御用紙の所謂枝葉の問題に過ぎず蓋し小村伯以爲らく日米の禍根は一に只我移民の發展にあるのみ、今誠實に之を制限するに於て再び誤解を生ずるの恐れなけんと、此に於て得々として滿韓集中策を提唱せしに何ぞ測らん其滿韓集中政策こそ彼等が當面の逆鱗ならんとは、之よりして再三再四滿洲における我機會均等主義不履行の愁訴報告となり、或は滿鐵中立の提議となり、錦愛鐵

道の敷設要求となり、外交上種々の面倒を惹起したると同時に、清國に在りては事毎に反感を以て我を迎へ特に錫總督の如きは鋭意排日的政見を以て東三省に臨み、延て近日に至り、遂に米清同盟すら現出せんとするに至れり。勿論此等を以て悉く責を滿韓集中論に歸し得べからずとするも要するに小村伯の外交家としての相場なるものは之を以て略ぼ天下に曝露されたるを認むべし。

六

小村伯の移民政策の確定斯の如くなるに拘らず、又た伯が數次其政策論を以て政策の決定せる大方針なることを聲明したるに拘らず、政府の施政と各省當局官吏の主張とは殆んど之と沒交渉なるのみならず、多くは之と正反對の方針に出てつゝあるは甚だ奇とすべし。當時の管船局長たる内田嘉吉氏は航路擴張の方針を定むべく歐米を漫遊し其實地調査の結果商工業の發展には航路の擴張を必要とし、航路の擴張は必ず移民政策の實行に伴ふべきを主張し爲めに後藤遞相は南米航路補助委員會に於て下の如く説明するに至れり、曰く「南米の將來有望なるは爭ふべからざる事實なるを以て政府は敢て侵略的に殖民政策を取るに非るも通商貿易の發展を試むるの方針を取りたる次第にして獨り遞信省が航路を開始するのみならず外務省と雖も亦公使を派遣したる位にして漸次發展策を講ずるものならん」と政策の矛盾も此に至れば寧ろ愛嬌あり。

外相の集中論の結果關東州民政長官白仁武氏は滿洲殖民問題に對して五月蠅く公私の質問を受け、質問せらるゝ毎に滿洲の我移民地として全然絶望なる旨を答へ、甚しきは小村伯の政策論を一笑に附したることさへありしと傳ふ。石井次官は議會に於て滿洲には工業的移民を送るの餘地ありと辯明したることありしが現に南滿鐵安奉鐵の如きは撫順の炭坑を始め全部の工夫は殆んど支那の苦力を使用しつゝあり嘗て聞く吉原三郎氏の東洋拓殖會社副總裁に擬せらるゝや氏は一應朝鮮内地の情況を視察し、到底我移民を容るゝの餘地乏しきを見、若し創立當時の目的に依り專ら殖民政策を

實行せんとあらば到底予の見込立たず副總裁の職御免蒙りたしと申込みたるに桂侯は必ずしも創立當時の目的に副ふに及ばず、外に適宜適當と認むる方策に依りて業務を開始すべしと命じ始めて就職したりと、滿韓經營の實狀は概ね此の類なり、小村伯は果して誰と共にか其既定の政策を推行せんとするや。

七

小村伯の經濟事情並に外國の情況に通ぜざるの甚しきは滿韓政策の現狀を以てしても其一班を徵するに足るべし、伯が伯國を以て不毛の土地とし『今日猶不毛のまゝ放棄さるゝ土地は其土地元來天惠薄く人間の繁殖に適せざるに依る多し』との議論を以て之を排斥したるが如きは吾人甚だ其迂濶に驚くと同時に又一面には其非凡なる能辯に敬服せざる能はず、宜なる哉山縣公を始め桂侯等の如きも常に小村伯を以て世界通の大雄才となし、其主張するところ大抵これに盲從して疑はずといふや。

勞銀の低廉を以て我商工業の唯一の優秀點とし、之を失はざるを以て立國の大方針とするの政策論に至りては昨年七月『太陽』紙上『社會問題より見たる殖民政策』と題せる拙稿に依りて聊か評論を加ふる所ありしが、勞銀の低廉を以て立國策とするの政治家は恐くは今日の世界を通じて多く發見し難かるべきなり。蓋し小村伯は國民が悉く胃病に罹り其常食を半減するに至らば國家の富は必ず二倍すべきを信ぜんとするものならん。勞力過剩の爲に就職難を惹起せしめ、國民を饑渴に瀕せしめ低廉なる賃銀に甘んじて勞働に從事せしめ、依りて以て其製作品を廉價に供給し、外國の高賃所得者の便利に供するに至れば國運は隆々として興起すべしとの議論ありとすれば是れ既に批評の範域を超越したる問題を以て之を待たざるべからず。

惟ふに議會に於ける移民政策論は每會の一喜劇たり、本期議會に於ても亦必ず多少の波瀾を生ずべし、而して小村伯の移民政策論依然として斯の如しとせば議員の應酬其れ或は國民の視聽を新たにするものあらん。吾人は洗耳刮目して以て之を待たんとす。

桂内閣の運命觀

池邊吉太郎

一體桂さんといふ人は、自分で物事をよく考へた上て決斷する力を豐富に持て居る人に違ひないと私は思つて居るが、然し其外に可なり有力なる助言者を持つて居る人のやうに思はるゝ。殊に財政上については桂さんは從來餘り頭腦を使つた習慣を持てゐない人であるから、自分一人で考案することはしまいと思ふ。之について有力な助言者が屹度あらうと信ずる。然しそれが誰であるか、私には分らない。或は一人や二人でなく、可なり多數にあるのかも知れないし、或は又意外にも或一人位の説を、熱心に聽いて居るのかも知れない。そこがどうも私には分らない。が、財政上の事については、桂さんは可なり成功の緒口を摑まへたのである。即ち財政整理――これはいふまでもなく、西園寺内閣があの通りの事になつた、其後始末には是非無くてはならぬ事であつたが――其財政整理が識者の希望する程度までは行かなくても、或程度までは識者の希望に合ふこともやつたのである。結局仕遂げはせなかつたけれども公債の借換――五分利を四分利にしかけた類の事は一寸面白い。只、然しながら、あれ程迄整理といふ事を事實の上に行つたについて、矢張りそれ程の結果がなくてはならぬ筈だ。結果とは外ではない。世間の所謂景氣が直るといふ事がなければならぬ筈だ。が、どうもそれが思はしく行かなかつた。此夏頃は一寸直りかけたらしかつたが永く續かない。勿論、金融は緩漫であるし、企業はボツ〱行はれて居る。だから不景氣でも構はぬ。底に力があるから憂ふるに足らぬといふ論もあらう。此論も一論には相違ないが、然しながら昨年の整理で彼の歳入豫算の自然増

收使ひ方次第では大分景氣が直つたかも知れぬと思はれる。處がどうもあの遣り方は景氣を沮害するやり方であつた樣に思ふ。それで今日は何だか經濟上の活力が乏しい。モツと活力をつけるやうなやり方が彼の時あつたらうといふ氣がする。勿論活力にも幾種類もある。只上滑りの活力でなくて、根強い活力をつける法を取ればよかつた。去年のやり方を先づ税制整理といふ方面に向けてやればよかつた。今年は税制整理は斷念らしい。これは先づ桂さんの財政整理の頓挫である。廣軌鐵道といふものが、桂さんの案の通りに、三年か五年にやることが出來たとしても、其結果が直に大いに財政上の活力を添へるものとは認めることが出來ない。そこで財政整理の頓挫といふ事になれば先づ桂内閣の頓挫といふ事になる。もう桂内閣は存在してもしなくても差支がないといふ場合になりかゝつて來たやうに私は思ふ。

それから他の政黨との關係の上からいつて、桂内閣の地位が次第〳〵に困難になつて來て居る。今年などは大分困難のやうだ。そりやもう嘗て伊藤大隈聯合の勢力で喰つてかゝつて來たのを、どつこい、さうはさせぬと解散でポンと蹴飛ばして來た經驗を持て居る桂さんだから、當てにならぬ妥協などを當てにして、そんなへボな事はやりはしないが己れには己れのやり樣があるといふ自信は多分あるんでせう。然しながら外から見た所ではどうも危つかしい。それにもう三年間も政府を持ち續けて居るから、世間からも多少厭きられる時機に遭遇して居る。その上、今の衆議院議員の年限も今年で三年になる。あと一年しかない。だからいくらか人氣も荒つぽくなる時代である。それが又危さ加減を大分増して居るやうにも思ふ。此等の點から見れば、假令桂内閣は日本の爲めに存活せしめる必要があるとしても、内閣自身の存活力がどの位あるか、隨分疑問でありませう。

近頃聞く所では、何でも大藏大臣の後任が出來たらしい。出來るとか出來かゝつてゐるとかいふ噂を聞く。所で桂さん自身は大藏大臣を罷めて、兼任を解か

うといふ氣はない筈である。私こそ整理が頓挫したと見るもの丶、桂さんは勿論さう思うてゐますまい。總理大臣としてよりも大藏大臣としての得意が却て桂さんに多いかも知れない。其得意の大藏大臣の地位を捨てるとすれば他に何か其必要がなければならぬ筈だ。想像によれば、桂さんが外務大臣になることが必要な境遇に陥つてはゐなからうかと思ふ。こいつは內閣の統一上、何か一寸其處に缺陷が出來たものと思はれる。內閣を引續き維持する上に小村外相を罷めさせねばならぬといふ事情が起つたものと思はれる。これは桂內閣にとつて根本的に危險でせう。恰度第三次伊藤內閣の末路に陸奧さんが辭職をした。表面は病氣といふ事てあつたが、內實は病氣丈けてもなかつたかも知れぬ。それと多少似寄つた形勢が桂內閣にもあらはれて來たものと思はれる。もう長い事はなかりさうに私は思ふ。

財政整理がモツと充分に行はれる見込があれば、もそつと維持して貰ひたい氣もするけれども、其方の見込がないとすれば、大して惜しいものでもないやうにも思はれる。(十二月十日)

事業と批評と

文學博士　三宅雪嶺

事業と批評と區劃の判然たる無く、事業家は或る程度まで批評家、批評家は或る程度まで事業家、時として事業家即ち批評家にして批評家即ち事業家たることあり。アダムスミスの富國論は一の批評に過ぎざるも、英國の政治界及び經濟界に於ける大なる事業たるを失はず。之に反しグラッドストーンは首相として國政を

司りしかど、平和論なり、愛爾蘭自治案なり、容易に事實となるべくも無く、畢竟するに批評たるに止まりき。さまで推究せば、普通の意義に於てするも、如何なる事業家とて、何等の批評を試みざるなく、如何なる批評家とて、全く生計を念とせざるなく、唯だ事業よりも多く批評を事とすと認むべきあり、批評よりも多く事業を事とすと認むべきあり、其の極や、言ふものは行はず行ふものは言はずとの語あるに及ぶ。

事業より見れば皆等しく事業、批評より見れば皆等しく批評、ゲーテの詩は一面に於て批評とすべく、一面に於て事業とすべし、ナポレオンの用兵は一面に於て事業とすべく、一面に於て批評とすべし。エヂソンとロックフエラーと孰れか事業家的分子の多く、孰れか批評家的分子の多き急に決定しがたし。されど普通の解釋に從ひ、事業を以て立つと批評を以て立つとを分つに、尚ほ其の各々立つ所に於て相ひ同じきを見る。事業家の成功し失敗するは、批評家の成功し失敗する所以の者、批評家の成功し失敗するは、事業家の成功し失敗する所以の者、成功及び失敗は種々の事情よりし、幸不幸の加はるの少からざれど、多數の上に於て幾許か概論すべし。

成功といひ失敗といふは或は語弊の伴ふべく、暫く或る部分に印象を留むるよりいふに、概して二種に分つを得、一は己れの信ずる所を守り、飽くまで之を貫かんとするもの、一は何の守る所なく、機會次第に動かんとするもの、此の二つは何事をか爲すに堪ふ。己れの信ずる所を行ふものは、多大の妨害の爲に破らるゝ事あれど、自ら運命を開拓し、社會に一生面を開くこと無しとせず。頑冥不靈とすべく、或は誇大病とすべきあるも、甚しく常識を失はざる限り、小にして一身の立脚地を得、大にして文明に紀元を造るに至る發明家なり、革命家なり、ピット、ビスマルク等なり、此の類に屬す。時代と浮沈し、機會のみを捉ふるものは、昨是今非、節操なく、義理なく、實に賤むべきを覺えんも機會を誤りて湮沒するあると共に、富貴を極め一世の耳目を驚かすあり、或る實業家なり、或る政

治家なり、此類に屬す。何にせよ、多少世に印象を殘すは、固く守る所あるか、然らずんば全く守る所無きに出づべく、守るが如く守らざるが如きは、遂に見るべきあるを得ず。

世間は兎もあれ我は斯く爲すべし、斯く爲さゞる可らずとするものは、事業家として立つを得べく、批評家として立つを得べし。今日は今日の善しとする所に從ひ、明日は明日の善しとする所に從ひ、時に從ふてと流るゝが如きものも、事業家として立つを得べく、批評家として立つを得べし。其の中間に一種の人物あり、新時代は云々なるが故に云々ならざるを得ずといひ、新時代の名の下に或る事を假定し、是より以上に出てて確信する所を貫くの意なく是より以下に出てて變幻飄忽出沒自在なるも無定見とし憚るが、斯かるは大なる困難に逢着せざる代り、一生を通じ特に稱すべき無し。常人に比し稍々知識に富み、先見の明あるらしく感じ新知識あるものは斯く〳〵の態度を取るべしとするも、時代は其の考ふるが如く單純ならず、或る部分の進み、或る部分の進まず、或る部分の大に進み、或る部分の却て退き、或る部分の退くと見えて却て次第に進み、同じく進むが中にも或は波狀を爲し、或は渦狀を爲し、或は表面緩にして底急、決して一目して判定するを得ず。然るに一小部分を觀察し、早くも云々なりと定むるは、全く觀察し得ざるに優るも、一小部分に限られ居るを奈何すべき。斯の如きも幾分か世の進歩を促すことあるべけれど、世は確信の徒若くは臨機應變の徒の世の中にして、他は中間に彷徨し、或は其の孰れかに從はざる能はず。

ハイカラの語は解釋區々なるも、一般に滑稽の意味を含むと聞ゆ。ハイカラ視せらるゝものは自らハイカラの効用を說き、進步の率先者なりとすれど、眞實の進步の何たるを知るよりも、流行に伴ひ、邊幅を修むるに止まるの嫌あり、言はゞ少しく目先が利き、胸中深く恃むべきあるにあらず。從つてハイカラにして目覺ましき活動を敢てしたるなく、目覺ましき活動を敢てしてハイカラたるなし。政治界に實力あるものにし

て誰かハイカラと呼ばれたる、實業界に實力あるものにして誰かハイカラと呼ばれたる。大久保利通なり、星亨なり、岩崎彌太郎なり、古河市兵衛なり、指してハイカラなりしとするも、人多く解せず。西園寺侯にして眞にハイカラならば、到底桂寺內等數氏に對抗するを得ず。ハイカラは多少の知識を具へ參謀として調法なれど一方面の將として足らざる所あり、將に將にして最も足らず、信念の固らざる割合に、偏狹にして拘泥す。實力あるものは深く時代の如何を慮らず、我が信ずる所に向て往き或は彼も一時、此も一時、時の宜しきに應じて平然たり。二者正さしく反對なるも、新時代は云々など、卑近なる空想を以て自ら制限せざるに於て一事業家にして、某は時代向きなり某は時代後れなりといふは、大なる事業家たるに堪へず、僅か許かりの時代の先後を憂ひ、何程の事を爲すを得んや。

或る批評家は好んで時代向き若くは時代後れを口にするが、目前の事に汲々たる者にして、發達の望み難きを示す、從來「新」の字を看板に着けたる事業にして永續きしたる例なしといはるゝが、時間よりせば今月の新は翌月の舊、翌月の新は翌々月の舊、新舊を念頭に置くが如きは、元と眼界の狹く志望の小さに出づべく少しく困難に遭逢し、早くも轉業するは怪むに足らず。今は自由黨の名稱なく、改進黨の名稱なし、自由といひ改進といふの誤れるにあらず、單に新時代を標榜せんとしたるの久しきに續かざるのみ。事は優劣を以て判斷すべく、新舊を以て判斷すべきにあらず。人に間歇遺傳あり、賢質の顯はるゝあれど、愚質の顯はるゝもあり。社會に復古あり、或は稱すべく、或は稱すべからず。周の井田法は國家社會主義に類し、希臘の文藝は現代にも活用せらる。ルーソーは自然を求めて太古に復せんとし、自然は最舊か最新か、疑問と爲れり。新や、舊や、事に於て何かある、唯だ己れの善しとする所を善しとし、惡しとする所を惡しとすべきのみ。世の多くは薄志弱行、右顧左眄して行く、時代に後れたりと言はるれば大罪惡を犯したるかの如く懊惱す。而も孜々汲々として追ひ行ける所、十年廿年を過ぐれ

ば消えて跡なし、果敢なきわざにこそ。斯かる徒の多きが故に、融通の利かぬといはるゝ確信者流及び節操も主義も無しといはるゝ臨機應變者流並び世に立ち、歴史を組み立つるなり。輕々しく新時代といふ型を作り、強て此に適應せんとするものは、多少の知識あり多少の見識あるだけ、頑僻なる若くは利慾一方なるに優るも世に印象を留むること少し。要するに事業家たるも、批評家たるも、凡流の尤なるもの、又は凡平として凡なるものなり。

社會政策の必要

遞信次官　仲小路廉

（一）立派なる國家を形造るは人類本來の目的●

一體人類といふものは、其本然の性質上、孤立して生存を續けて行くべきものであるか、或は又群居して社會を造り、國家を造つて其生存を全うすべきものであるか。これにはいろ／＼說があつて、今日の如き社會組織、國家組織に疑を抱くものも少くない模樣である。然しながら私は確信する、今日の如く人類が群居し、風俗を同じうし、習慣を同じうし、言語を同じうするものが一團となつて國民的國家を形造るといふことは決して偶然でない。之れ全く人類本然の性質より出て來りたる必然の結果であると確信する。此點については私は毫末の疑をも持たない。何故かといへば、人間といふものは肩身の廣い事を望むものだ。俗な言葉でいへば、何處へ行つても幅の利くことを望むといふ氣持が附纏ふものだ。然るに人間が若し國家を形造

らなければ到底巾を利かし、肩身を廣くすることが出來ない。今度私が洋行して其好適例を見て來たのである。金錢といふものは人間が一番最初に考へて、且つ之を尊ぶもの、一つてある。千萬圓か一億圓もあれば、地球の何處の果てまて行つても構はない。何處の國籍に入れられても構はない。一寸さういふ風に考へられる。處がさうてない。歐洲の諸方に散在する或國人――彼等は數百萬乃至數千萬の富を有して居るものが少くない。然るに彼等は何處のホテルに行つても具合がわるい。何處の食卓に座つても、同じ食卓の人は皆嫌がる。だからいくら多く金を持つてゐても、之れを心持よく遣ふことが出來ない。て彼等は或はゲルマン人だと稱し、或は英吉利人だと稱し、或は佛蘭西人、亞米利加人と稱して、それて自分の肩身を廣くせんとして居る。彼等には本籍がない、國籍がない、所謂里親がない。實際目に見て憫れむべきものだとの感じが起る。どうしても人間には本國がなければならぬ。之れは己れの國だ、己れは英吉利人だ、己れはゲルマン人だ、己れは日本人だといつて我本國のグレースを誇り、且つ人からも尊敬さるゝ程愉快な事はない。之は足一度海外に出づれば誰しも實際痛切に感ずることてある。今より數億年後にはどうなるか、そんな痴人の夢は我々は說いて居られん、現在及び少くとも近き將來に於ては、斯くの如き事が事實として儼存して居る。故に今や各國共に國を樹てゝ、銘々其富強を講じつゝある。六つかしい言葉ていへばいろ〳〵理窟もつかうが、俗に砕いていへば右の如き譯合て、實に營々として汲々として皆其本國を尊くしやう、我國旗をブリ、アントにしやうグレーシアスにしやうと腐心して居る。之れ即ち現今世界の實情てある。

(二) 帝國主義と社會政策

世界の各國が、銘々自己の國の隆盛富強に腐心しつゝあることを述べたが、此力の外側にあらはるゝ形を稱して帝國主義といひ、内側に働く形を稱して社會政策といふのてある。この事は善かれ惡しかれ、兎に角事實として現世界に行はれて居るのである。

自國をして隆盛富强ならしむる、之が立國の基礎てあつて、萬事が此方針から割出されて來る。即ち國民が結晶して一國を作れば、先づ之を統率する所の尊嚴なる君主を要する。次には國家富强の基をなす所の立派なる國民を要する。各個の國民はみんな物の役に立つやうにならねばならぬ。處がみんな物の役に立つやうになる基は何かといふに、各個人が、學問をさせればよく學問が出來る、算盤をやらせればよく算盤が出來る、鐵砲を擔がせればよく鐵砲が擔けるといふ人間にならなければならぬ。處が學問もよく出來、算盤もよく出來、鐵砲もよく擔げるといふことは、素より生れつきにもよることであるが、身體强壯、頭腦明敏でよく物事に堪ゆる人てなければならぬ。さういふ人が一人たりとも多い事を望むといふ事になる。處が一番こゝに困るのは貧民といふものだ。身體は營養不良にしてよくない。思想はどうしても僻んで發達しない。實際貧民の多數は身體も虛弱、頭腦もわるくて事に堪へない。そこでこれをどうかして今少し役に立つ國民にしなくてはならぬといふ事になる。今日最も大切なものは所謂中流以上のものである。これらの息子は實に役に立つ。勿論私が貧民といふのは極貧にして自立の出來ない最下層のものを指すのであつて、勤勉なる農夫や鐵道工夫などは私のいふ貧民てはない。此貧民といふものには實に困るが、今一つ其外に困るものがある。それは非常なる金持の息子である。これも身體虛弱にして頭腦もよくない。之について思ひ當ることがある。流石に英國だと思つたことがある。英國は何人も知るが如く、國が最も富み、且つ富豪貴族の最も多い所てある。然るに今に至るまで國の土臺がしつかりして居る。それは何故かといへば、貴族富豪の子弟の敎育に對する觀念が餘程しつかりして居る。注意が行屆いて居る。實際英國では身體もよく頭腦もよい、所謂 handsome といふべきものは貴族富豪等の子弟に多い。運動を盛んにやるし、衛生にも注意するからだ。處が下等社會になると血色もわるいし、骨組もわるい。英國の富强の永く續くのは主として此上流社會の人が

教育に心を用ふるが爲めてあると私は見て來た。嘗て羅馬帝國も大いに隆盛な時があつたが、忽ちにして衰へたるも、富强を恃んで驕泰奢侈に流れたからてある。然るに英國ては富豪貴族皆其子弟の教育に心を用ふるが故に國運益々隆盛となるのてある。

富豪貴族の子弟を物の役に立つやうにするといふ事も國家にとつて必要の事に相違ないが、社會政策の主として目的とする所は實に貧民の方向にある。

（三）　社會政策の實行方法

社會政策の主なる目的は成るべく貧民を少くするにある。即ち成るべく富の分配を公平にして、富豪益々富み、貧民愈々貧なるが如きことなからしむるにある。其方法としては産業組合といふものを設けたり、或は各自に勤儉貯蓄の思想を涵養せしめたりする、一言にしていへば勉勵努力の氣風を吹き込む。獨立自治の思想を吹き込む。其上、國家の働としては、教育を普及せしめて生活の向上、思想の堅實を促がす。或は田園生活に誘導して、郊外に家屋を建設し、新鮮の空氣の中に清淨なる生活を營ましめる。又其處に書籍館を設けて知識を增進せしめる。又協同の體育館を作つて身體を鍛錬せしむる。又上水下水の事に盡力して惡疫の豫防を勉める。交通機關を完備し、教育制度を普及して人文の發達を助ける。さういふ設備の總體に國家が干與して實行せしむるのを社會政策といふのてある。而して之が現今歐米の列國が競うて實行して居る所のものてある。

（四）　社會政策は我國古來の理想

て、私は此社會政策についていろ〳〵な事を考へるが、一體社會政策は現今歐米の專賣物の如き觀があるが、然しこれは日本固有にあつたものと考へらるゝ。是等の思想の全體は一國を以て大いなる一家と看做すので、其根本には家族主義がユニットになつて居る。即ち一國の尊嚴なる君主は大なる家族の家長てある。一國の人民は此君主の指導を仰ぐ家族てある。古い言葉ていへば、普天の下王土にあらざるなく、率土の濱王臣にあらざるなし、之れが社會政策を行ふ根本の思

想である。そして銘々が奮發して、一國を富强ならしめる。歐米では今日に至るまでいろ〳〵な歴史を經て來た。或は封建制度、或は個人主義となり、而して今の如き國家制度となつたのである。我國にも素より時代によつて小變動はあつたが。根本に於ては君臣一家の大義は數千年來馴致し來つたところの思想である。故に社會政策を實行するといふ事は取りも直さず、我數千年來の理想を實現するといふ事になるのである。

　經濟學者などの説明を聞いたならば、いろ〳〵議論もあらうし、又六つかしい理窟もあらう。而し俗に解り易く碎いていへば私の以上述べた趣意の外なるまいと思ふ。今度歐米を漫遊して來たが、各國共實によく社會政策を實行して居る。小國は小國でよく纏まつてやつて居るし、大國は英國は素より、獨逸は素より其他の國々でもなか〳〵大仕掛にやつて居る。我國でもどうぞ今一層此方面に力を入れて、我數千年來の理想を完全に實現せんことを望むのである。





其の跡

楚人冠 杉村廣太郎

一、麥畠

天妃山の麓、枯葉落ちつどふ昔の下道を過ぎて、濕つぽい小路を東へ通り貫けると、荒れ果てた小家の六七軒列んだ角に出る。之を右に曲つて、間もなく又左に曲れば、此處は谷町とて細い人通りの絶えた昔の屋敷町になる。其屋敷といふのは、明治の代になつてから追々に取り崩されて、今は南側に唯一つ小笹垣に圍まれたのが立ち殘つたきり。其の他は一面の麥畠て、はづかに此の頃萌え出した麥の芽がうす寒い北風にちら〱と打震へてゐる。道の兩側はありし昔の物々しい武士屋敷の表長屋の面影をとゞめた門前の小溝が

今は一條のいぶせき井の流となつて、どろ〳〵と濁つた水が意地のわるさうに淀んだまゝ動かうともせぬ。溝の彼方の畠の縁には、何時誰が植ゑたのか當世臭いポプラーの樹がひよろ〳〵と幾十立ち列んで其の黄ばんだ葉がひらり〳〵と中空に舞ひながら落ちて來る。ともすれば時雨れんとする雲のたゞずまひ、冬の日脚は短うして、わりなくも暮れ行かんとする空の様――何處でか烏が啼く。

此のさびしい〳〵麥畠の中が僕の生れた處である。

二、三十六年

つい此の十月の末つかた、折ふし國に居られた母上の出迎かた〳〵僕も丁度國に歸つてゐた折の事。一日ぶら〳〵と和歌山城の邊から、二人て此の谷町の古き家居の跡を尋ねた。

餘りの變つた樣に僕も母も顔を見合せたまゝ、殆ど互に何と言ふべきか知らなかつた。兎も角もと、此の小さな町を端から端まで通り貫けて見る。いやに冷たい風がふう〳〵と顔を吹く。

此の町の北側の中程に、昔のわが家があつた。其の東隣は何がし、西隣はくれがし、向側に誰某の家が列んで、今僅に殘つた一軒の家が昔の僕の父の伯父の家、今も尚此處に其子の夫婦とかが住んでゐる、と行く〳〵母上の曰ふ。其の頃の僕の家は、藩主から拜領の地とやらで、庭廣く樹木生ひ茂つて四時花を絶なかつたといふ。此處に僕の父が召使の老人夫婦を相手に只獨り住んで居た。其處へ間もなく僕の母が嫁入つて來た。夫から三四年立つて僕が出來た。其の後又三年經つて父が亡くなつた。杉村一家の波

禍は之から始まつたのである。

嗚呼春風秋雨三十六年。さても此三十六年は長い〳〵月日であつた。

三、押　領

三年越しの父が病の看護に身も心も疲れ切つてゐた母は、父が亡くなると共に、一家の全責任を其の身に負ふこととなつた。父の逝ける時、父の年僅に二十八、母は二十三で、僕は三歳であつた。二十三の寡婦が三歳の孤兒を杖とも柱とも頼んで、一生兩夫に見えまいと決心したゞけでも、僕の母はえらいと僕はいつも感心してゐる。況や彼は此の決心を貫いて、寡居三十六年遂に今日に至つたのである。人若し僕の一身に何等の誇るに足るべきものがあるかと問うたらば、僕は此の貞烈無比の母上を有するとを何よりも先づわが誇とすることに躊躇しない。

母は其の未だ嫁がざる前から、美人の聞え高き人であつたさうな。僕の家に來てからは、軍人氣質の萬事に大まかな僕の父を助けて、溫順にして曾て忤らふことを知らず、細心にして何事にも氣のつかぬ限のない人として、知人の間に評判されたといふ。夫が父の死と共に美人らしい貞女らしい、其のやさしげな所はかなぐり棄てゝ、忽然として烈婦の本相を現じたのである。

思ひ出せば、幼な心に僕の耳に留つた話頭が大分ある。

父の伯父に香取の何某といふがあつた。此の伯父もと〳〵格別の腹黒い人でもなかつたらうが、僕の

父の死後僕の家に多少の家祿と家屋敷のあるのを見込んで、相手は女と子供といふので、不圖した出來心から之を横領しやうと企てた。其の企てた狂言の大筋は、先づ僕が母を末期の離縁といふことゝして實家へ返し、僕を一先己の家へ取引つた上いづれかへ里子にてもやらうと申し出てたのである。而して末期の離縁には僕の母も承知てあつたと觸れ出した。其の實彼は父の死んだ後悲嘆の涙に暮れ居た僕の母を夜一夜脅迫して、とう／＼自分ぎめにきめて了つたのだつたさうな。

葬式も出ぬ前から斯んな問題が持ち出されたのだから忽ち親類中の騒動となつた。之に第一番に反對の聲を上げたのは、僕の母の實母て僕の祖母に當る木村の隱居てある。此の人今尙九十に近い高齡て存命してゐる。母が今度國に歸つたのも此の老人を見舞ふのが目的てあつた。此の人あつたればこそ、僕の家が潰れもせずに今日に及んだので、僕は今に至るまで此の祖母の大恩は忘れぬ。祖母は初から伯父の腹を見ぬいて居るとて勢荒く之に食つてかゝり、自分の娘に末期の離縁などいふ汚らはしいことを承知する譯はない、といふ所から斯の如きは畢竟爲にする所ある者の所爲てはないかと迄切り込んだ。祖母の夫の兄なる秋本の伯父も之に言葉を添へて、苟も武士の娘ともあらうものが、夫が死んだからとておめ／＼實家へ歸つて來べき筈のものてないと睨みかけて敦圉いた。併し頑強な香取の伯父は一向平氣で人が何と言はうが、本人が承知した上てしたとて、今更取り返しのつくものてないと空嘯いて相手にしない。居合せた縁者一同は齒がみをする。祖母と祖母の兄は怒る。僕の母は泣き入る。葬るに葬りかねた父の遺骸を前に置いての此の騒ぎ――僕は此の時のことを思ひ出す毎に、己れやれ今日ならましかばと、

腕を扼らぬとはない。僕の長じて旋毛の曲り出したのは、そも〳〵之からてある。

此の騒ぎの中にも、男まさりの木村の隠居は分別を運らした。畢竟是れ爭は自分の娘をして婦道を全うせしめると否とに在る。杉村家のなけなしの財産に對して母方が父方と爭ふものと見らるゝが如きは千秋の遺憾てある。といふとに氣のついた祖母は、折ふし僕の父の姉、東の伯母といふが嫁入先から乳呑兒を抱へて來合せてゐたのを說いて、其の口から叶はぬ迄も、香取の伯父に迫るに、僕と僕の母とを杉村家に留めおかしめんとを以てした。父の姉が譯の分つた人てあつた上に、昔の人は總じて斯な事に對して物堅かつた。利害を眼中に置かずして、義理不義理を考へた。此の姉其の身は父方に屬しながら、香取の伯父の横暴を憎んて、始終母の爲に盡して呉れるとゝなつた。實際に盡しても呉れた。話頭は一寸外れるが、此の恩に報うる爲とて、木村の祖母は其の時專斷にも伯母が抱いてゐた乳呑兒を當時三歳の僕の許嫁にしてしまつた。尤も故あつて、此の女は到頭僕の妻にならなかつたが、僕には少くとも三つの時に結髮の女があつたとを此に白狀しておく。

父の姉が父方に味方せずして、却つて香取の伯父に刃向つたのは、母方に取つて、百萬の援兵を得たよりも心强い次第てあつたが、夫よりも尚此に人々をして心强く感ぜしむべきことが此の時二つ殆ど同時に起つた。此の二つは當時此の事件に加はつた秋本の伯父の子の秋本陸軍大佐が近衛師團勤務中、僕が日曜每に遊びに行くのを捉へては、十年の役の何とか山の占領と共に、いつも手柄顏に話して聞かせたものだ。僕も亦之を聞く每に一種言ふべからざる愉快を感じて、幾度手柄顏に繰り返されても飽くこ

とを知らなかつた。

斯いふ事情である。

丁度香取の伯父と木村の隠居とが口角沫を飛ばして大論判の最中であつた。隠居には秋本の大伯父、東の伯母、平生無口な母の兄なる本村の伯父までが言葉を添へて、頻に香取の伯父を説いてゐた。一方では慥に離縁を承知したといふ、一方には承知するやうな譯はないと、押問答果てしがない。此の時しも今の今まで正體なく泣き崩折れて、何を問はれても答ふるとを知らなかつた僕の母は、何と思つたか、突如として突ッ立ち上つた。之はと人々の驚く間もあらせず母は次の間に驅け入るが早いか、ぷッつと根元から緑の黒髪を切つて棄てた。口吃して言ひ得ざりし千萬無量の思を、母は切り棄てた黒髪に言はせて、又泣き倒れた。承知したせぬの問題は之で小氣味よく解決されて了つたのである。

其の時早く彼の遅し、門前の方から聲あつて長屋監軍の使といふが來た。香取の伯父は颯と顔色が變つた。

監軍の使者何をか齎らし來ると見てあれば、香取の伯父が人にも諮らず獨斷に監軍の手許迄差出しておいた離縁の屆を、監軍流石に人を見るの明あつて、之は何かの間違だらうとて特使を走せて突返しに來たのであつた。間違だらうといふは、ほんの口實で、其の實監軍が平生目をかけてゐた杉村一家の面目の爲に、夫となく僕の母の再考を促がす積であつたのださうな。名を間違に藉つて再考を促すなどいふやり口は何處やらに古武士の俤がある。夫が後に眞實間違てあつたと知れて、監軍は深く其計らひ甲

妻のあつたを喜ばれたといふ。――兎に角之てさしもの香取の伯父も我を折つて之れから先き全く口を杉村一家の事に噤むとゝなつた。何ても其のむしやくしや腹を慰する爲か、父の四十九日の精進あげにはわざと醉拂つて大あばれにあばれたといふ。

監軍といふは、僕が父の上長官であつた。其の頃の和歌山は津田出氏の發意にかゝる一種の軍隊組織て、監軍が市內の行政事務も視たものと見える。夫とも僕の父が陸軍の將校て有つた爲、斯な屆出を監軍にしたのてあるか、其處は僕も知らない。此の情義並び至れる長屋監軍は、其の後軍隊を退いて、長い間和歌山市の市長として令聞頗る高かつた。僕が二十の秋から和歌山新報の編輯に從つた頃、田舍小新聞とて、主筆自ら材料取りに市役所に出て行くと屢々てあつたが、其時いつも材料は二段にして市長は丸て自分の子か孫てもあるやうに近々と僕を延いて、朴訥なぞんざいな言葉て僕が父の死んだ時の模樣を談して聞かせて吳れたものだ。嗚呼此の好箇の老市長も逝いた。

『まアあの時は丸て芝居のやうてあつたぞいシ』と、其の時震へながら側に座つて居たといふ僕の母の妹なる井上の小母が時々僕に言つた。其の芝居ならぬ芝居の演ぜられた當年の舞臺は、今見るといつしか麥畠になつてゐる。其の間には老監軍許りか香取の伯父も秋本の大伯父も其の子の大佐も木村伯父も皆逝いて、平等一如の夢に入つて了つた。

潸然として、母と僕とは今此の屋敷跡に立つた。

無量の感慨。

四、みなしご

波瀾一たび收つて後、母は家屋敷とも賣り拂つて、僕を携へて實家の長屋に移り隱れた。世間が鬼だとは、此の移り隱れた長屋の中で養はれた僕の思想である。

實にも僕等親子に取つて世間は全く鬼許りであつた。此の年若き寡婦と東西をだに辨ぜぬ孤兒とが、涙片手に其の日〳〵を送つてゐるのを見て、機乘ずべしとて迫り來る惡鬼羅刹は有り餘る程あつたが、顧みて同情を寄する者とては、親類の中にも、父が恩顧を受けた者の中にも殆どなかつた。家屋敷は賣つたが、賣つた金は中に立た男が着服して一厘も母の手に入なかつた。多少の小金が有ると見てか、無盡講だ貸附金だ、株劵だと、木に餅が生るやうな話をもち込んで母を誘つた。誘つたと言へば、母は此の時廿を三つ越えた許り、しかも勝れた容色とあつて、之に目をくれて言葉巧に母を誘ふ者がどれほどあつたか知れぬ。僕は今も尙うろ覺えに覺えてゐるが、僕が七八つの頃、戀歌を窓の中へ、投り込んで行つたものがある。外出を要して何やら言ひに來たものがある。夜ふくる迄居座つて動かぬ者もあつた。其の度毎に母はそゝ毛をふるつて、いやらしい〳〵とつぶやいて居られた。僕も子供心に男といふのはさもしい心のものだと思つた。

尤も中には、兄の母の手を經て、堂々と正面から再婚を申し込んだのも大分あつた。金持もあつた。地位の高い人もあつた。退引ならぬ親戚の者もあつた。併し一旦髮を薙つて決心を示した母は斷乎として一切の誘惑を斥けた。母が年若うして何時しか延びた髮を小さな髷に結つて、僕を連れて、父の墓に

諦てる、彼等を見ては、事情を知つた者て、誰一人涙を流さぬはなかつたといふ。

頼みに思ふ親類はといふと、木村の隱居が流石に實の子とて、渾身の愛を傾けて、萬事の世話をして與れたのがある切り、父方は元より母方にも、厄介にこそなるのはあれ、頼み甲斐あるものとては只の一軒もなかつた。父の姉なる東の伯父の家は、家産いつしか傾いて、見るも淺ましき貧しい生活に入つた。母が實家の兄といふは、平生は無口のおとなしい人てあつたが、醉ふと氣違ひのやうに狂ふ人で、之が屢醉つ拂つて、或時は僕等母子の寢込んだ處に亂入し、或時は眞夜中母を連れ出して酒の相手をさせたこともある。氣に入らぬことは、隨分打ちも叩きもしたに相違ない。平生は僕を子のやうに可愛がつて、僕も伯父さん／＼と追ひ回したものだが、彼れの酒をのんで騷ぎまはるのを見た時は、僕も餘りの暴狀を憤つて、いつそ一思ひに伯父を殺してやらうかといふやうな大それた考を起したとも偶にはあつた。

伯父に一人男の子があつた。之が又癪にさはる奴てあつた。元より幼い時のことて、深い惡意も何もあつたのてはないが、彼と僕は從兄弟同士の、而かも僕よりは年下の身てゐながら、何につけかにつけ僕を窘めた。僕の身の貧しいに比べて、彼はあるに任せた贅澤三昧、したいまゝの仕放題、己れ大家の坊ちやんとなつて、僕を己が家の長屋に住む一孤兒とさげすんだ。夫に又之を伯父伯母が愛するのは聞えたが、隱居迄が可愛がつて、僕と喧嘩てもすれば、必ず彼を庇つてやる。喧嘩といへば僕は必ず負けて泣かされるに定つたものだ。其の度毎に僕の若い母は、口惜しがつて、僕の頰に傳ふ涙を拭いてやりながら、「お父さんがお出てゞあつたらばねえ」と泣かれた。

倫敦のテート、ガラリーの中に「孤兒」と題した畵がある。二人の男の兒が悲さうな顔してしやがんだ所をかいたもので、弟が涙ぐんでゐるのを兄が慰め顔に其の側に立つてゐるのだ。僕は松居松葉君と此處に來て松葉君がいろ〳〵説明して呉れるターナーや何かの樣々の他の畵には目も呉れず、唯此の孤兒の畵を一心に見入つたまゝ、殆ど身動きもせず、はてははら〳〵と涙の顔に流るゝを覺えなかつた。此の畵の孤兒は兄弟二人だが、僕は一人ぼつちである。孤兒の身のつらさを具さに知つてゐた僕は、ふと此の畵を見つけて感に打たれざるを得なかつた。嗚呼僕が孤兒の辱めを受けたこと、夫れ幾度であらうぞ。内に在つては從兄に窘められ、外に出れば近所のいたづらな子供から「後家の子」〳〵と一つかみに罵られた。中にも口汚い其の邊の嬶ア共が、僕の母の私行に何か疚しいとでもあつたかのやうに、僕に聞えよがしに樣々の惡體をつくとも屢々あつた。小學に於ける、成績存外によくて大抵いつも級長の席を占めてゐた僕が、或年の大試驗の結果異常の特待として、一時に二級上へ飛ばせて貰つたとがある。之をさへ僕の先生が僕の母の歡心を得んが爲の處置であると、岡燒半分に言ひ觸すものが有つた。先生ば僕の母を見も知りもせぬ謹嚴な老人であつたのである。又或時は同級の生徒一同聲を合せて、僕の氣をわるくするやうな流行歌を歌つてはどつと笑つた。其の頃小學の教科書であつた龜谷省軒翁の修身兒訓の中の鰥寡孤獨廢疾の者は人なみの者でないから憫れんでやれとか何とか書いた所を高々と讀み上げて僕を嘲けるともあつた。此類の聞き苦しい陰口やら何やら聞かせられたこと、小學から始つて中學に至るまで止まなかつた。僕は極幼い時から中學の一年位迄殆ど一日として泣かされなかつたとのない程

の泣聲であつた。思ふに僕が泣いたゞけ、母上も泣かれたに相違ない。

此の間に嫁がんと思はゞ如何なる處にも嫁ぎ得べかりし母は竟に嫁がなかつた。只僕一人の行末を樂まるゝ許りに、一身の榮華の望を一切犧牲に供して、母はあらゆる誘惑に勝つた。父の死後「親切な隣人」の爲にごまかされた金は隨分少くはなかつたが、家祿だけは何としても手離さなかつた。之が金祿公債證書になつて總額千餘圓、其の利子といふが年々六十餘圓はあつた。之では親子二人の口を辛く糊し得るだけのとて、衣物の一枚も出來さうなとはない。僕が他日の學資なんどに至つては、元より以て殘りさうな氣遣ひはない。此に於て一種理財の才を具へた母は、生活費に出來る限り手をつめると共に近邊の娘を集めて裁縫を敎へ、且つ其の合間には望の者に三味線も敎へれば、賃仕事も受けた。此の又裁縫の稽古なるものが追々非常の評判となつて、市内は勿論二里三里の先から贄を捧げて敎を乞ふものが出た位。母が裁縫の名手であつたにも由るが、行儀の正しいのが何よりの呼物であつたと僕は聞いてゐる。隨つて來り學ぶ者は多く女子許りで、美人が多かつた。僕等の住んでゐた長屋といふは、八疊と三疊きりの薄暗い一構であつたが、僕が小學校から歸る頃は、娘達十餘人が此の八疊の間にぎつしりと押し詰つて冬などは入るとむうと女臭かつた。其頃の僕は坊ちやん／＼とて皆なからちやほやされたものだが、其の當年の美人も今度國に歸つて會つて見ると、いやもう大分老いた。

女の話で思ひ出したが、其の時分父の掛殘した無盡や、母の餘儀なく賴まれて入つた賴母子講などが時々料理屋で開かれて、母は能く僕を背負つて出掛けたものだ。男ばかりの席のとて、母は初から座

敷へ出て片隅に小さくなつてゐるのが忌だとて、先づお茶屋の長火鉢の側で僕を下して、お主婦や居合せた藝妓共に途中で買つた辻占を分けてやるのが常であつた。此處で色々の話が始まるといつも母の髮の結ひ方が話題に上つて一同から其の恰好がいゝとて羨ましがられた。何でも母が十五六の時、或日何處かへ出かけやうとして、いつも母の髮を結つて呉れる姉に頼んだところ、姉はどうしたものか、此日に限り頗る不出來な島田に結つた。斯な下手な髮で外に出られますかと母がだゞをこねれば、姉も出られなきや勝手にしろとて、負けては居らぬ。其處へ折あしく祖母が出て來て、姉に向うてそんな不埒な口を利くならば一生結つてやらぬがよいと口を添へた。利かぬ氣の僕の母は此の「一生」といふ言葉をぐッと癪にさへた。言ふ言に事缺いて一生とは大袈裟な、好矣左らば一生結つて戴きますまいと、其の日は到頭外出もせずに、一日鏡臺に向つて、結ひかけては崩し、結ひかけては崩し、はては思ふ通りにならぬとて、突伏して泣き入つて仕舞つた。が併し此の日一日の苦心空しからず、其の日から斷然人手をからずに一生獨て髮を結ふことになつた。嫁入の當日其の頃結つた下げ下地といふに結ふのさへ自身で結つた位である。母の髷の結ひ振りの評判になつたのも、斯ういふ次第である。

僕は斯く小供の時から女共と同席することが多かつたので、何だか女なんどは極めて平凡な有りふれたものだとの感じが、今でも僕の頭に遺つてゐる。僕が女の爲に亂るゝに至らなかつたのは斯いふ感じのあつた爲であるまいかとも思ふ。――いや之はちと横道に走り過ぎた。

母が節儉と勤勉とで僕等母子は幸にして不自由なく其の日〳〵を送ることが出來た。僕が十五六になつ

た頃までには、家祿の外に小千圓の小金を貯めてゐた位である。金は幸にして貯へらるゝ位であつたが、如何にともせん方なかつた難事は、母と僕とが兎角病身がちであつた一事だ。母は性來胃の弱い人とて時々床に就いた。僕は又今でこそでく／＼と太つたが、幼い時は「癇のお化」と言はれた位の痩せッぽちで、始終藥を浴びるほど呑んだ。天上天下互に唯一つの杖柱と賴み合ふ母子が、斯う病身では、其の心細さが察しられる。僕は餘り母の心配もしなかつたらうが、親を思ふ心にまさる親心の、僕が爲に心配せられたことはどれほどであつたらうか、今思ひ出しても勿體ない氣がする。

母が心配は之許りでない。僕は十三四の頃迄こそ、始終外で虐められ泣かせられてばかりゐたが、子供同士のいがみ合ひが已む頃となつて、元來が母より外に怖いものもなければやさしいものもないと心得てゐる僕のことて、昔受けた迫害の反動とでも言はうか、いつしか手も足もつけられぬわんぱく者となつて了つた。而して十六の春、天にも地にも唯一人の母上を、故郷に殘して僕は東京へ飛び出した。

姑く御免を蒙つて、物語は僕の一身に移る。

五、浪々十年

實に／＼僕は一種の蕩兒と化した。

僕が縣の中學にゐる頃、中學令の改正があつて、從來全課半年宛の八級に分けてゐたものを五年級の一年制度と改めたことがある。所て此の時僕等は一つ下の級の者を合して、之て一個の三年生なるものを

編制したが、何しろ半年進んだ者と後れた者と相集つたのだから、教師も教へにくいし、また生徒も折合が悪い。其處で僕は餓鬼大將となつて、此の難局に處すべき一大名案を、時の校長菅波政經といふに建言したが、校長は何うしても之を容れない。強て言はゞ罰則にも處しかねぬ勢であつた。之に避易して、僕等は一先づ泣寢入に寢入つたところ、忌々しや、一月立たぬ中に、校長は僕の前日建言した通りのことを實行した。僕等の思が叶つたのだから、僕等は當に大に喜ぶべき筈であつたかも知れぬが、其處は血氣に逸る少年の意地だ、孰も此の校長の處置に少からず不快を感じた。忠告する時に拒絶して置いて、後からそつと其忠告通りに改めるとは、人を馬鹿にするにも程があると憤つた。其の揚句僕は翻然として學校を出た。僕と前後して出た者が其の時大分あつた。其の以來僕は何でも學校のストライキと聞く每に落度は學校に在つて理は生徒にあるものと心得て居る。僕等が期せずして大勢退校した爲、一級の人員殆ど半ばに減じたので、今に其時のことをストライキと認めて、僕をストライキの大將の如く解じてゐる者がある。當らずと雖も遠からず、其の頃の僕は通學生控所で仙臺節を歌つて幹事に衝突を喰つたことが屢々あるやうな昔も今にかはらぬ蠻カラであつた。併し若し斯ないがストライキとするなら、僕はストライキの起る落度は學校に在つて理は生徒に在ると確信せざるを得ない。之位の勢であつたから、もう此の頃は從弟の野郎なんどに負けてゐるものでない。僕は逆さまに彼を虐め返して積年の怨を報じたとが一再に止まらぬ。悲矣哉、彼も今他界の人となつた。

斯くて東京へ出て、僕は某法律學校へ入學した。僕の初の考では何でも三年ほどで此の學校を卒業し

て後、裁判官か辯護士になつて、早速母を東京へ引取つて養はう位の單純な計畫であつた。所が一年ほどやつて行く中、何だか法律家といふは揚足取りの稽古許りしてゐるやうな氣がして頓と面白くない。夫や是やて、學校は試驗每に落第に非ずんば假及第、とても仕方があるものでないと悟つて、僕は二學年目の終に退校して某英語學校へ轉じた。此の學校だけは不思議と僕の理想に合して、僕は非常の好成績で卒業したので、今度は大學に入らうとした。所が其の準備中突然病氣に罹つた。醫者は今にも死ぬものゝやうに言つたのが、べらぼうな、醫者なんどに死生の命が分つて堪らうか、僕は二月程の間にけろりと治つた。治つてから尙念の爲に田舍に靜養、和歌山新報の客となつた。此間に中學校のストライキに僕が紙上で大聲援を與へたとて恐ろしい小言を諸方から食つた。ストライキはおしなべて學校の落度といふ僕の持論から出たのだから、仕方があるかい。

居ると一年にして又東京に出て、今度は三田の某學校に入つた。此學校にも僕は出てはやめ、やめては出て居たが、校長の米國人が、親切に面倒を見て吳れて、僕がやめさうにすると、海外留學をさせやうとて引留め、奬學資金をやらうとて引留め、はては校則の上にのみ存して實地に未だ與へたとのない稱號を與へやうとて引留めたので遂に僕は不承無精に卒業して了つた。卒業後本願寺文學寮の敎師となつて京都に下つた時、初めて母を引取つて十幾年振りに母子再び同棲するとゝなつた。當初の三年計畫が飛てもない長いものになつて、僕は其長い間さん／＼の心配を母にかけた譯になる。唯誇りたいのは斯くだら／＼とだらしなく年月を送りはしたものゝ、此の十餘年の學生生活中曾て酒色に近づかず一厘

半錢の借財だも拵へなかつた一事である。

やつと京都におちついたが、二年目に寮長薗田宗惠君と喧嘩すべき必要が起つて、僕は足手纏ひのないやうにと、先づ母上を國に還し、したゝか薗田君と喧嘩した後、僕はぶうと東京へ上つて來て仕舞つた。

僕はもう夫から後の事を説く勇氣がない。十六故國を出てより今日に至るまで、母上には何につけかにつけ心配をかけた外何一つ子らしき務を果さず。而して身は依然たる窮措大、何の日に僕は此の母の大恩に報い得べきかを知らない。僕は全く僕にふさはしからぬ母を持つたのである。

六、ノーベル賞金

と思つて、悵然として思はず母の方を見やれば、母は感に堪ぬものゝやうに、屋敷の跡を兎見斯う見、立つてゐる。

心を取り直して思ひかふれば、此の屋敷が人手に渡つて、立派な家が新しく建つてゐる處へ我々二人もとの主人が見る影もない様をして來て見たのよりは、斯う家は潰れて粉も灰もなくなつた處へ母と僕とが達者で來られたのはまだしも愉快だ。『家が無事で人がおちぶれてしまつたのより家が潰れても人が無事な方が宜いぢやありませんか』と僕は言つた。

「さうですとも」と何事にも滿足し易い僕の母は言つた。

强て愉快がつては見たものゝ、不孝に不孝を重ね來つた僕は心頗る疚しい。せめて僕がノーベル賞金の候補位に數へられる迄は、――母樣どうか長生をしてゐて下さい。ちと手後れかも知れぬが、僕は之からえらくなる積りてゐる。（四十三年十二月十一日稿）

附言

毎年の吉例に遵つて、余は四十四年の中央公論初刊の爲に二箇の實事譚を準備し置けり。然るに其の一は話中の主公たるべき人物未だ其の職を去らざるが故に詳らかに之に關する事實を報じ難き事情あり。今一つは、其の事實と記者との間に全く何等の關係をも缺けるを以て、之を其まゝ叙せんは、如何にも新聞紙の雜報めきて面白からず、さりとて記者が身親しく其の物語の中に立ち入らんには、是非とも其事の起りし地に出掛けざるべからず、是れ年末多忙の際到底行ふべからざる事に屬するを以て之も見合せたり。已むを得ずして此に掲げたる物語の如きは、畢竟僕が一家の私事大方に示すに足るべきものならず、唯是れ例年の責を塞がんが爲の手すさびのみ、まづきは固より其の所也。

四十三年十二月十一日の夜　然

倫敦寫生通信

倫敦　繞石生

十一月の五日

夕食を濟ましてから、久し振りにゴールド君をチヨドク、フアームの寓居に訪ふと、外出の衣裝で、ステツキを手にして居る。

『ヤあ、暫らく。行つて見やうぢや無いか、一所に』と言ふ。

『何處へ？』

『ハムステド、ヒースへ』

『何があるんだへ』

『今日は君、ガイ、フオークス、デーだよ』

僕は忘れて居たのだ。さうだ今日は十一月の五日だ。千六百五年、ガイ、フオークが三十六樽の彈藥を議院の床下へ埋め置いて、一擧して爆破せんと企てたその計略が見事露顯して、勿論の事死刑に處せられたが、爆破の災害を免れたのを紀念する爲め、毎年十一月の五日には、町々で花火を揚げる、郊外の小山では祝火(ボンファイア)を焚くことになり來つて居る。尤も近年は花火も祝火も下火になつたと言ふことだが、でもその花火見をかこつけに野次馬が騷ぎに出るのだ。僕も野次馬の一人となつてゴールド君と共に出かけることにした。

チヨーク、フアームからチユーヴに乘ると、二つ目がハムステド停車場だ。乘客の九分通りは此處で下車した。僕等二人は直ぐとヒースへ足をむける。

ハムステド、ヒースといふのは、倫敦の西北隅にある大公園で、花壇や植込は無いが、その造り飾りの無い、ワイルドな、イルレギユラーな處に野趣を偲ぶことが出來て、却てたゞの公園よりも散策逍遙に適するのである。海拔四百四十呎で、廣さは約二十九萬三千八百坪ある。東は約三十二萬四千四百坪の廣袤を有するパーリメント、ヒルに接し、は西一萬一千坪に餘るゴルダース、ヒルに連續して居るのだから、非常に廣いもんだ。池がある、ブラクベリイなどの繁茂してる谷合もある。樫樺などの雲突く許りに立ち並んで居る小山もある。

砂利の堅くしまつて居る道の他は雜草の交じらぬ綺麗な芝生だ。飛鳥山の規模の素敵に大きいものと思へばいゝ。人波について、初めの小池を右に、芝生をつっきつて、西北へと進んで、ヒースの中の最も高い處へ出た。其處に、幅四五間のアスファルト敷の車道を中に、同じくアスファルト敷の人道が兩側に在るヒース、ロードといふ坦々たる大道がある。其處から北は傾斜の緩るい谷になつてゝ、灌木が其處此處にこんもりと茂つて居る。此の谷をゴール、ヨヴ、ヘルスと呼んで居る。

居るは／＼、此のゴールは人で埋められて居るやうだ。僕等が今出たヒース、ロードも動きのとれぬ程の人出だ。然し暗いから能くは見えぬ。

道傍に聲高の物賣りの男が居る。近よつて見ると、こわい白毛で造つた、日本の拂塵やうの物を幾束と抱えて居るのだ。この拂塵で、女の襟や顏をくすぐるのださうな。ゴールド君は一ペニイはづんで一本買つた。

僕等二人は、暗がりのダラ／＼小道をゴールへ下りて見る。

やがて其處此處から花火が揚がり出した。花火といつても本式のものぢや無い。大筆の軸位な筒のを、手に持つてゝ揚げるのだ。高くて四五間しか揚がらない。シュシュシュー、ポン／＼と矢鱈に揚げる。中には卷線香の大きな形したのに火をつけて、處擇ばず投げつける奴が居る。シュー／＼と粉火を吹いてはポン／＼と八九回爆竹のやうな音をさせる物だ。何處から、何時投げつけられるか判らぬから、絶えず注意して居なきやならぬ。險呑なとだ。僕等のつい一間許り前に居た或る男は、飛んで來た卷線香的花火が外套のカクシへ引懸つたのを氣付かずに居て、大きな燒け焦げを出來した。

また直徑二三寸位の圓板を中心にして、同じく卷線香的になつたのがある。これはその圓板をピンで木の幹へ挿し留めて置いて、そして口火をつける。すると粉火を吹いてクル／＼廻轉しながら、ポン／＼玉火を出す。

大變高い處で花火が上がると見て居ると、何んだ、何處のいたづら小僧か、松の木の上へ登つてゝ、あげて居るのであつた。さうかと思ふと、線香花火の長いのをステッキの先へ結ひつけてシュー／＼言はしてる奴もある。右を見ても左を見ても、前も後にも、シュー／＼ポン／＼で、あぶなくて仕方が無い。

向ふからイースト、エンド者らしい二十許りの女が來た。女だてらに、例の拂塵を持つてゝ、僕の顔を横から擽ぐりあがつた。

「シリイ、ガール」

と言つてやつた。すると僕の眞後で、その女がキャーッと叫んだから、何事かと振りむいて見ると、獨逸人らしい二十三四の若者が三人、その女を捕まへてゝ、無理矢理代り番に接吻して居るのであつた。

人出は倍々多くなるやうだ。此處へ出る奴は、貧民暴漢で有名なイースト、エンドの者が多いときいたから間違でも起るとつまらぬと思つて、切りと拂塵を利用したがつて居るゴールド君を促して歸途に就くとにした。

ヒース、ロードの西詰に、かの有名な、ヂヤク、ストロー、カスルといふ居酒屋がある。晝間、天氣のいゝ日には、此邊からの四方の眺望は仲々に棄て難い。南は、幾萬千の家を距てゝ、遠くセントポールスの堂が見え、その先き、霞にうすくサレイの山々が朧氣に見える。西の方は、森や野のずつと遠くにハロー、オン、ゼ、ヒルが見える。東は、すぐハイゲートの小山が眼界を遮つて居るが、北はトタリッヂ、バーネットあたりまで、百姓家や牧場が森の間に點綴してるのが廣く眺め渡される。

此のヂヤク、ストロー、カスルの前の廣場は、眞に肩摩轂擊だ。それでも流行歌をマンドリンに合はして歌つて一文二文の憐を乞ふ大道音樂師も少なからず居る。人と人との間を縫ひ〳〵、ザ、グローナ町へ下りると、歩道から少し引込んだ處でパンチ、アンド、ヂユ、ディをやつて居つた。駝背の、鼻の大きなパンチが女房のヂユディと喧嘩するといふ、くだらぬ人形芝居だ。その横を通る時に、妙な面をかぶつた、十一二と覺しき男の子が、

『ヂヤパニーズ、ゼントルマン、ペニー、プリーズ。』

と言ひつゝ、つきまとふて來た。ポケットから銅貨一枚出してやつたら、

『サンキユー、カヴノー』

と、飛んで行つた。斯んなとして六ペンスも溜めて花火の錢にするのであらう。

一時二時頃迄も賑ふといふとだ。道理でグローブ町はヒースの方へ向ふ人許りであつた。

（十一月八日記）

市長就任式行列

倫敦第五十四回目の市長(ロード・メーヤア)サア、タマス、ヹジー、ストロングSir Thomas Vezey Strong氏の就任式(インオギュレーション)に先だつて行はるゝ行列(ページェント)は、舊慣に依つて、今日――十一月九日の正午十二時を以て開始された。

朝餐をしたゝめながら、新聞の天氣豫報欄を見ると、

『寒し、雨又は霙又は霰、西の軟風』

とある。然し庭の芝生は眞白の霜で、寒いには寒むいが、空はからりと霽れて居る。食事を終へて――九時前――窓の外(そと)の寒暖計を覗いて見ると正に華氏三十五度。寒い筈だ。一年に一度しか無い此の市長就任式の行列、來年は折能く見られるかどうか分らぬ。今日のを見外づしてはと、厚い外套を着こんで、ステッキ片手に停車場へ驅けつける。

オルダースゲートの停車場を出たのは九時半頃だ。南へ舊郵便本局前、進んでセント、ポールス寺院の方へ行つて見る。

雜沓の爲めに破損されてはとの懸念からか、店頭のショーグラスの前を厚板で圍(かこ)つてある店が多い。二階三階の窓からは縫模様のある毛氈を垂らして、斜めに國旗を出して居る。そして此邊では、三階の窓から向ひ側の家の三階の窓へ綱を張り渡して、それへ萬國旗を數多く垂らして居る。街燈は、柱の人長(ひとたけ)より少し上の處に、八方へ垂れるやうにユニオン、ヂャックの小旗を結ひつけて、飾られて居る。景氣がいゝ。

さて何處で見物したがよからう、三時間も四時間も立ちづくめで待たなきやならんやうでは困るがと、セント、ポールスの裏通りを歩いて居ると、幸ひ

『オフイシャル、プログレム、〳〵』

と叫んで通行人に賣りつけて居る婆さんが居たから、一片(ペニイ)出して一枚買つた。

『正十一時四十五分を以て先頭ギルドホールを出發し市長は正十二時に出發すべし。通路は左の如し。』

とあつて、グレシャム町、セント、マルチンス、ル、グラン、オルダースゲート町、バービカン以下、十八の町の名が列記してある。フリート、ストリートからして式場たるローヤル、コーツ、ヲヴ、ヂャスチスに入るのだといふ。尤も歸途はストランドから町を五つ、近路

を取つてギルドホールへ踊るのである。

通行人は多いが、眞の見物人はまだ少いらしいから出かけの處で見るとに決定して後と戻りする。そしてグレシャム町から右へセント、マルチンス、ル、グランへ曲る、その向ひ側の石敷の人道に陣取るとにした。グレシャム町から進んで來るのが遠くから見えて、曲つて行つた後まで見えるから、頗る形勝の地である。

車馬道を直ぐ前にしてステッキを突いて立つて居る。退屈だ。寒い。煙草を一本ふかす。追々と僕の右にも左にも同類が立つ。向ひ側の人道にも次第に同類が出來た。車馬道は、往來止めにならぬうちにと、石炭の袋を山と積んだ荷車、品物配達の車、パン屋牛乳屋の車、ホースバス、キャップ、モーター、遲いの迅いの、織るやうに往來する。

僕の後ろは二列になつた。やがて三列になつた。向ひ側の人道も二列になり、三列になつた。

十一時を過ぎると車馬は往來止めになつた。車馬が車馬道を通らぬ代りに、四五丁北のオルダース、ゲート停車場から一分置き二分置きに吐き出す見物人が、何處か明いた場所は無いかと、續々北から車馬道をあるいて來る。僕の左側には十四五のお店ものらしい男が立つて居る。右隣には二十三四の女が居る。その後ろには其の連れの二十七八のが居る。切りとペチャクチャしやべる。退屈まぐれに話に耳を傾ける。

『ルック、アト、ザット、ハット』

『スマート、イズントイット』

近頃流行の、裾の窄んだスカートを着けた、そして日傘程もある大きな帽子に駝鳥の白羽がツンと聳えて居るのを冠つた女が通つたのだ。

『ルック、――ア、ジャイアンテス』

『オー、――ツウ、ヤーヅ、ラウンド』

ボンネットは小いが、身體は常陸山に劣らぬ婆さんが通つたのだ。

橫丁から砂利車を曳いて山高帽の人夫が二人出た。一人は梶棒をもつて居る。一人はシャブルで砂をすくつて程能く往來へ撒ひて進む。小豆粒程の砂利の少し交じつた綺麗な砂だ。その後から、大きな塵取とブラシュを提げた子供が、往來に散らばつてる紙切れや屑切れを掃きとつて行く。郵便馬車が此の車馬止めの道を已れ許りはと轆々と走る。

『カント、ストップ、ザ、ローヤル、メール』

『ノー、ゼー、カント、カンゼー』

時々走り雲が日を遮る。
『イッツ、ダル、アゲーン』
雲が通りすぎると、カッと日があたる。
『ゼ、サン、イズ、ゴーイン、アウト、アゲーン』
騎馬巡査が出て來て、道をうろついてる奴を去らせやうとする。道の兩側は、もう三重四重の人垣になつてるから、行き場が無い。左側のを追ひちらすと右側をうろつく。右側へ巡査が行くと、左側へ行く。
『ゼーアー、スタンヂン、バーバスッ』
『エース、アイノー、ゼー、アー』
『ウフ、——ゼー、アー、ラフイング』
應援の騎馬巡査が來た。
『モア、ポリスメン、カミン、ツ、ドロー、ゼム、バック』
そのうち、向側の二階三階の窓々には、見物客の顔が見えて來た。子供が多い。三本目の卷煙草をふかしながら、其見物客を眺めて見る。
『クック、アプ、ゼア』
『エア？——オー、イエース、ア、リトル、ギクトリア』
如何にも可愛いゝ、下げ髮の、濃茶天鵞絨の服を着た女の子が、眞向ひの二階の窓から首を出して居る。

僕等三重四重の人垣の後ろを、まだ物賣りの女が、歩いてるやうだ。
『プログレム、ア、ガイド』
『チョコレッ、チョコレッ——ペネ、イーッ』
僕の右側の女は之に對しても
『デア、——ホワット、ア、ボイス』
前をぶらついてた連中は、到頭多数の巡査に、何處へか追ひやられた。ガターに七八間置きに立つてる巡査が能く見えるやうになる。
そのうち遠くて樂隊の音がする。
『ゼ、バンド、イズ、カミン、——ヒア』
『イエース、アイ、ヒア』
來る〳〵。
先頭は、服と同じ色の紺のナポレオン帽を冠つた騎馬巡査一分隊だ。
次は、肋骨の黄な、白帽の第七驃騎兵（フサー）の分隊。次は赤の飾り毛の立つた黒帽の砲兵乘馬樂隊。こいつは服は淺黄で肋骨は黒い。次が倫敦テリトリアル、トループ。倫敦市（シチー、オブ、ロンドン）ヨーマンリー樂隊。白毛の立つた黒帽の、肋骨の黄な名譽砲兵隊の乘馬隊一小隊。同じく名譽砲兵隊の徒歩半小隊。倫敦市ヨーマンリー（ラ

フ、ライダー）半中隊。倫敦市第一旅團野戰砲兵隊一分隊。倫敦市フュジール兵第一、第二、第三、第四大隊が半中隊づゝ。倫敦市旋條銃第六大隊の半中隊と第七大隊の一中隊。倫敦乘馬旅團（輜重糧食縦列）の分隊。第一、第二、第三倫敦市野戰病院の一分隊づゝ。第一、第二倫敦ゼネラル、ホスピタル分隊。第一倫敦衛生中隊の分隊と順次ゆるやかに行進する。

次が、キングス、ローヤル、ライフル、コアの第一カデット大隊の樂隊。それに續いて熊毛の大きな帽を冠つた、赤服のローヤル、フュジール兵の第一カデット大隊の一中隊。黑服のローヤル、ライフル、コアの第一カデット大隊一中隊。

次がマリン、ソサイテイの練習艦ワースパイトの樂隊と生徒だ。笛と太鼓とから成つてる此の樂隊はビクピッピッピー、ドコドンドコドンドンと仲々賑かだ。水兵の服をつけて居るので非常に可愛らしい。

この後は諸組合役員の行列だ。第一が履物製造組合だ。八旒の大旗の次に、組合のビードルが居る。組合の役員の乘つてる馬車に次いて、チャプレンとクラークを同乘せしめて組合頭取と副頭取とが四頭曳の馬車て堂々と進む。運動會の時にかぶるやうな紺の鳥打をかぶつた、赤服の馭者の方が、見る眼には綺麗だつた。尤もチャプレンもクラークも式服を着て居るのである。

次は馬具商組合の役員。バンナーは十二旒あつた。こいつはクラークが別な馬車に居た。頭取はその次の同じく四頭曳の馬車に居たんだが、スタフを捧げたビードルは歩行て隨行して居た。

次は果物商組合役員。旅宿組合役員。

その次にテリトリアル軍の第一倫敦アーミー、サーキス、コアの樂隊に續いて、鉛工組合のバンナー、前市長ニル氏のバンナーが進む。

次は私立消防隊の蒸汽ポンプ。次が、倫敦消防隊の分隊。眞鍮のナポレオン帽形の兜が勇ましく日に輝く。

次が倫敦チャレンジ、シールドのコーポレーション。その後が、倫敦聯隊（ポスト、オフイス、ライフルス）第八大隊の樂隊。それから革商組合のバンナー、倫敦市のバンナー、ユニオンヂャックと三旒續いて、この組合の役員の馬車。それから、ロンドン、コーポレーションが保管して居るオープン、スペースの大旗が五旒。大きな疊三疊敷はあらう。銀金絲の縫ひ美しいものだ。エストハム、バーク、エッピン、フオレスト、バーナ

ム、ビーチエス、クルスドン及びサレーコンモンズ、ハイゲート、ウッヅの旗だといふとだ。旗持はいづれも天鵞絨の、ビーフイーターの着て居るやうな古風な衣物を着て居る。次がフアニソガムの少年樂隊。

その次が有名な少年斥候隊(ボーイ、スカウイツ)の一隊だ。先頭にブラス、バンドを置いて、カーキ色の可愛いのが歩調を揃えて進む。鍛工、大工、自轉車隊、乘馬隊、信號兵、野戰病院隊其他各種の少年兵を四人八人づゝと選抜して出したものらしい。今迄無言で行列を見て居た見物は

「オー、ラヴリー」

「ブリッテー」

と賞めそやす。向ひ側の家々の窓から見て居た女子供は拍手したり、ハンケチを振つたりする。今迄の行列のうちて、それが一番人氣があつた。

それから倫敦監督教會が組織して居る少年隊(ラツヅ、ブリゲード)の分隊、ローマン、カソリックの少年隊(ボーイスブリゲード)の分隊に續いて、軍樂隊を先頭にしたロード、ロバーツ、ボーイスの少年隊が進む。野戰機關銃や、諸處て得た勝利記念牌を載した砲車が幾つか通つて、コンミッショネール隊の樂隊、倫敦フユジール聯隊第二大隊の樂隊とて、兵隊の行列は終つた。

この後(あと)が沙翁紀念會の催しにかゝる時代行列だ。沙翁の戯曲中、場を倫敦にとつた劇中に現はれる代表的人物を出したのである。四組ある。

第一は、千四百十五年、顯理五世がアヂヤンクール戰後倫敦へ歸つて來る時の有樣を現はした行列だ。沙翁の「顯理五世」の五幕目には

And solemnly see him set on to London,
So swift a pace hath thought that even now
You may imagine him upon Blackheath;
Where that his lords desire him to have borne
His bruised helmet and his bended sword,
Before him, through the City; he forbids it,
Beeing free from vainness and self-glorious pride;
Giving full trophy, signal and ostent,
Quite from himself, to God. But now behold,
In the quick forge and working-house of thought,
How London doth pour out her citizens!

とある。正に之を現はさんと試みたのである。

最初に旗持(スタンダード、ベアラ)が四人、手銃持(アーケイバス)が四人、バンナーを持つたメン、アト、アームズが九人、銅鐵の兜を冠つて紋章のある楯を左手にしたナイトとノーブルが九人、

ガモイス侯、古風な弓を手にして居るロングボーメン六人、矛を肩にしたパイクマンが四人、捕獲した敵の軍旗を捧げて居るメン、アト、アームズが三人、貴族が三人、將軍サー、タマス、エルピンガム、ヘラルドが二人、ワーヰック伯、その次に四人の轎夫がかついでる昇床に乘つたグロスタ侯、エスクワイアを供に連れた盛裝のノーブル六人、戰場で翻へした軍旗四旒をかついだ旗持四人、王旗を捧げてるのが一人、エスクワイアを連れたヘンリイ五世、バンナーを持つたメン、アト、アームズが二人、スタンダアートをかついでるのが四人。かういふ順序だ。

鎖惟子に身をかためて、紋章鮮やかな楯を手にしたナイトや、メリヤスのヅボン下めいた物を穿つて、赤黄白のだんだらの直垂樣の上衣を着た轎夫など、古繪卷を見るやうな心地がした。見物の歡呼喝采は言はずもである。

第二のは、サア、ジョン、フオルスタフが、イースト、チープの『ボアス、ヘッド』を出かけた時の樣を現はしたものだ。沙翁の『顯理四世』第一、初幕二齣目だ。フオルスタフ、近侍、其他の七八人の後から軍旗を捧げたのが四人。

第三が、千四百八十三年、グロスター侯リチヤードが、エドワード五世並にヨーク侯と共に倫敦塔に向ふ行列を現はしたもの。オルダマン六人が先頭で、王の侍臣たりし貴族三人、バキンガム侯、時の倫敦市長、ヘラルド二人、グレイハウンドを曳いてる侍臣、グロスター侯、エドワード五世、ヨーク侯、サー、ヰリアム、ケーツビー、矛兵十二人、貴族三人、四人の旗持といふ次第。沙翁劇の『リチヤード三世』三幕目第一齣の

Welcome, sweet Prince, to London, to your chamber,

といふ、あの幕に出る人物を現はしたのである。

第四が、恰も目下ヒズ、マゼスチー座で興行中の『顯理八世』の二幕目第四齣、時は千五百二十八年、女王カザリンに關する裁判へ、王とウルゼーとが出向く行列を現はしたもの。戟兵が二人、それに次いで頭から長い黑い衣をかぶつて居るモンクが六人、ヘラルドが二人、貴族が十人、近侍、チヤプレン、劒を捧げて居る者大僧正ウルジー、大僧正カムペイウス、顯理八世四人の旗持といふ一行である。

此の間芝居で見たのよりも趣味が深い。衣服が總て古色を帯びて居る。見物の喝采は殊に四番目のに注がれた。

少し間を置いてカウンテイ、ヲブ、ロンドン第十一大隊の軍隊、軍旗、文房具組合の役員の乘つた馬車が幾輛か續いて、さてそれから市參事會員の旗、下級助役が乘つてゐる馬車、他の高級助役員の馬車と續く。馬車が次第に美しくなる。馭者の服裝も漸次華美のになる。

次がチャプレン同乘て、セリフのバキンガム氏、四頭立の公式馬車だ。

次が、同じくチャプレン同乘て、オルダマン兼シエリフのジョンストン氏、これ亦同じく四頭立の公式馬車。

その後に居殘りになつた市參事會員と、書記長と、退職になつた市參事會員との馬車が續いて、第七驃騎兵の樂隊を前に前市長ニル氏の公式馬車。その次に第一近衞兵の乘馬樂隊を前にいよ／＼新市長ストロング氏の六頭曳の公式馬車が來る。

道の兩側の見物は、ハンケチを振り、帽を振つて喝采する。車中のストロング氏は左右を顧みつゝ會釋の絶え間無してある。

華美なものだ。馬車の前にはトランペターが徒歩して居る。その後に馬上のシチイ、マーシャルが居る。

馭者は盛裝だ。三者とも服裝は異ふが金光燦として人目を射る。劒持ち、メース持が隨行して居る。メース持の服裝が、日本の勅任官の正裝に一寸似て居る。他は推して知るべしてある。

馬車は第七驃騎兵の分隊に後方を警戒されて緩々と進む。市長就任式はこれで終つたのであつた。

行列は、物珍らしい僕には、どの部分も面白く美しく眺められたが、新市長の前後を護つて居た騎兵――黑い帽に白い房を立てゝ、服には黄な肋骨をつけた驃騎兵と、紺天鵞絨の鳥打めいた帽をかぶつて、赤地のフロック風な上衣へ、地の見えぬ許りに金絲の縫模樣あるのを着て居た近衞兵、それと少年斥候隊、それと、時代行列、この三つは長く長く僕の記憶に殘るとてあう。

行列が通つてしまうと、今迄神妙に見て居た兩側人道の見物は、いづれも車馬道へ推し出て、南へ北へと歸路に就く。僕も人込みのせぬうちに、何處か近い停車場へ行かうとしたが、初めからては三時間も立ち詰めて居たので、兩膝頭が强張つてゝ歩るけなかつた。

此の行列の起源は余程古いもので、極の古昔は樂人

馬上のビードル市參事會員、市吏員より成つた、質素な行列であつた。千四百一年に市長になつたジヨン、ワルコツトは、出(で)が雜貨商人だつたので、雜貨商組合が奮發して、六人の樂人(ミンストレル)に四十志(シリング)、途中それ等に食はした晝飯と葡萄酒とに二十一片(ペンス)、ビードルの馬代に四片(ペンス)支拂つたといふことが記錄に殘つて居る。質素な行列といふことは之でも伺はれる。行列が華美を極めたのは、エリザベス治世中で、此時分には、ギルドホールへの歸り途に、頗る手のこんだ寓意のある見世物を用意しなきやならぬことになつて居つた。勢ひその見世物に就ての相談合手を要することになり、文士に依賴して、歌を作つて貰つたり、餘興の趣向を考へて貰つたりするが常となつた。ベン、ジヨンソンもタマス、ヘーウッドも依賴を受けて餘興の趣向を考へたことがあるといふことだ。それから、水上行列も屢々行はれたのだ。深紅の揃ひの衣裝(ユニフォーム)をつけた漕手が乘つた國王の公式の傳馬船(バージ)が出る。文房具組合染物屋組合其他の私有の傳馬船が出る。そして市長の乘つた公式の船に隨從して、テムズ川をエストミンスターへと漕いで行つたものださうな。が水上行列は次第に行はれぬやうになつて、千八百五十六年にマス、クエステド、フイニス氏が行つたのが最後の水上行列となつたといふ。

その後は騎馬行列ばかりになつて、それも近道を行つたものださうなが、千七百十二年に初めて公式の馬車を用ひることになつた。現時の樣式の馬車は、千七百五十七年から用ひるので、その當時のは、下級助役が醵金して六十磅で造つたものださうな。それからはオルダマンに就職したものは、必ず馬車修復料として六十磅、市長は百磅寄附しなきやならぬ掟になつて、次第に壯麗な物に改造修復せられて來た。今はゼネラル、バーパセス、コミチーが馬車修繕を司つて居る。古昔(むかし)はエストミンスターにローヤル、コーツ、ヲヴ、ヂヤスチスがあつたのだが、ストランドへ移轉したので、道程が非常に近くなつてしまつた。本道を行つては餘りにあつけないので、それで現今のやうな道順で、大廻りに練つてあるくんだといふことだ。

年俸一萬磅即ち十萬圓の倫敦市長は、別に一年十萬圓以上の自腹を切らなきや、勤まらぬと聞いて居る。此行列の素ばらしいのを見ても萬事が窺はれる。

（十一月九日記）

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

秀吉の南方經略

文學博士　辻善之助

秀吉は信長の後を受けて天下統一の業を創め、先づ差當り自分の反對黨たる柴田勝家を平げ、小牧長久手て家康と長く對峙したけれど、遂に媾和して局を結び、其時背後を衝かんとした根來と四國の長曾我部とを、其翌年即ち天正十三年に打平げ、又同時に北陸の佐々成政を降參させ、近畿、東海、東山、北陸に掛けては片が附いた、次には天正十五年に九州の方へ島津征伐に行き、それて西の方の片は附いて仕舞つた、此に於て丁度天正十五年である、朝鮮に向つて初めて入貢を求めた、此朝鮮に入貢を求めた原因は、支那と日本との交際を舊に復したいから、朝鮮に其間に立つて周旋をする樣にと求めたのである、それを聽かぬものだから遂に征伐に出掛けたのである、是には從來色々の説があるけれども　私の考には如何しても通商を求めたこと、即ち支那との通商を舊に復さんとした事がそも〳〵の原因て、朝鮮が其斡旋を肯ぜぬものだから一所に遣つて仕舞ふといふ氣になつたものと思ふ、此事に就いては先日出版に爲つた歴史地理の朝鮮紀念號に少し述べて置いた。

兎に角秀吉は日本國内の統一がまだ十分着かぬ中から已に朝鮮、支那の方に向つて其經營をしたのである、天正十八年に及んで夫の小田原の北條征伐があつた、是て漸く國内が統一したものだから愈よ支那、朝鮮征伐に出掛けたのである、そして出掛けて居る中に秀吉の抱負は段々に增大して來た樣である、即ち支那、朝鮮のみてはない、東洋より南洋に掛けて盡く日東に朝貢せしめんといふ大抱負を抱くに至つた。世間ては能く朝鮮征伐といふけれどもそれては少し狹過ぎる、事實は支那征伐であるといふ事は、既に先輩が屢次言ふ所て、今更言ふに値せぬ事てあるが、尙ほ一層能く考へれば只支那征伐のみてはない、彼は實に此東半球全體の統一の計畫を持つて居たのては無いかと思はるゝ程てある。即ち支那征伐の經歷を言ひ現はした秀吉の朱印狀があるが、其中には屢次「唐、南蠻國迄も仰付け

らるべしと思召候」といふ事を言つて居る、又或るもの、即ち毛利家文書及び鍋島家文書等に見ゆるのだが「處女の如き大明國を誅伐するは山の卵を壓するが如かるべきものなり、啻に大明國のみならず、況んや又天竺南蠻も此の如かるべし」といふことを屢次言つて居る。

が初めに私どもの考には、唯言を誇大にした丈のもの、一時その時の元氣を附ける丈の語であつたらう、それにしても仲々盛な事を言つたものであると、斯く思つた丈の事であつた、然るに其後段々新材料の發見せられるに因つて、決して空言ではない、實に秀吉の計畫中に立派に立つて居つた事が分つた。彼は實に南蠻、即ち南洋諸國、それから天竺即ち印度の方へ迄も遠征の計畫を、或る點迄持つて居た事は事實である、その計畫の一番早く物に見えて居るのは、彼が印度に送つた書面である、それは日本西教史に、その文面は傳はつては居らぬけれども兎に角書翰を送つたことだけは見えて居り、其文の英譯がヒルドレスク「ジャパン」に出て居つた、が其本當の文章は從來世に知られなかつたが、先年京都の富岡謙三君の處から遂に發見した、是は秀吉の右筆即ち秘書官を勤めて居つた山中橘内の家に傳はつて居つたものが、轉々して遂に富岡君の手に入つたものである。其全文は左の通りである。

遙寄音章、披而讀之、則不異見萬里海山於眼界、如來簡、本朝者、邦域六十有餘、積年亂日多而治日少、故凶徒奸奸謀、群士作黨與而不得服從朝命、予也壯歲之日、憮旭嘆惜之、修身之術、治國之要、深謀遠慮、而以仁明武之三、撫養諸士、哀憐百姓、正賞罰、定安危、由此久不曆星霜、而天下混一、如安盤石、及異邦遐陬、亦莫不來享、東西南北、唯命之從、當此時、傳聖主勅於寰中、振良將威於塞外、四海悉通關梁、討海陸賊徒、安國家人民、吾邦已晏然、雖然、一有欲治大明國之志、不日泛樓船到中華者、如指掌矣、以其便路可赴其地、何作遠近異同之隔乎、夫吾朝者神國也、神者心也、森羅萬象不出一心、非神其靈不生、非神其道不成、增劫時此神不增、減劫時此神不減、陰陽不測之謂神、故以神爲萬物根源矣、此神在竺土喚之爲佛法、在震旦以之爲儒道、在日域謂諸神道、知神道則知佛法、又知儒道、凡人處世也以仁爲本、非仁義則君不君、臣不臣、施仁義則君臣父子夫婦之大綱其道成立矣、若是欲知神佛深理、隨懇求而可解說之也、如爾國土、以敎理號專門、而不知

仁義之道、此故不敬神佛、不隔君臣、只以邪法欲破正法也、從今以往不辨邪正、莫恣胡說亂說、彼伴天連之徒、前年至此土、欲魔魅道俗男女、其時且加刑罰、重又來于此界、欲作化導、則不遺種類可族滅之、勿噬臍、只有欲修好於此地之心、則海上已無盜賊艱難、城中幸許商賈往還、思之、南方土宜如注記領受、自是所給賜之方物、目錄在別楮、餘楮分與使節口實也、不宜

天正拾九年七月廿五日　關白

印地阿　毘曾靈

目錄（別紙也）

給賜

太刀　國房
腰剣　光忠
脇刀　貞宗
長刀　秋廣
甲冑　貳領
頰當　袖
鐵蓋　脚當

天正十九年七月廿五日

是は天正十九年に秀吉が印度の毘曾靈（ビソレイ）、即ちパイスロイ、印度副王即ち總督に送つたものである、是より先天正十九年閏正月八日に、宣教師ヷリニアンが秀吉に謁見し、ホルトガル領印度の副王の書を呈したといふことは、當時の公卿衆の日記に散見し居ることとて、日本西教史などには委しい記事が見えて居る、此に據るに此ヷリニアンが副王の使として齎して來た其趣意は、日本に基督教の宣教の許可を得る事の樣である。

それより少し前天正十五年に、秀吉は基督教に對して禁制を出し、宣教師等を追ひ出して居る、此事實を印度で傳へ聞く、丁度其頃に兼ねて九州の大村、大友、有馬の三人から歐洲に派遣した使、彼の有名な伊東萬千代の一行が印度に到着する、そこで初めて日本には基督教の禁令の出た事を聞き、それは容易ならぬ事だとて、爰に請ふ所あらんとしてヷリニアンを遣はすことゝ爲つたので、それてヷリニアンは副王の書を齎して來たのてある。

副王の書面は只秀吉に對して十分の敬意を表し、秀吉が能く宣教師を愛し、大に恩惠を施して之を保護し此に抵抗するものを拒ぎ呉れる樣であるが誠に難有い事だ、抑も宣教師なるものは善心を以て諸國に行き、衆人を教へて神の法を說き、永生の幸福を得しむるの

道を弘むるものである、今殿下に使節を遣はし、代つて謝辭を述べしむるの意を婉曲に説いたゞけのもの、つまり是を以て秀吉の彼の禁令を弛めんことを求めたのであつた、ヴリニアンは伊東萬千代の一行と共に來て秀吉に謁見したが、其時是に對して初め秀吉の與へんとした返書の案文が即ち前記のものである。

此返書の趣を言へば、自分が國内を平げ、長い間亂世であつたものが太平に歸した、自分は若い時からして身を修め國を治むるの道を考へて居り、遂に天下を統一したので、外國の者も來て朝貢する樣になつた、今や明國を征伐せんとし、不日其地に達せやうと思ふ、それ故其序を以て其地印度にも行かうと思へば何でもない事、遠近異同の隔はないのである、即ち何時でも汝の方へ趣いて征伐するぞとの意が含ましてあるのだ斯くて更に副王からの來旨に對する答としては、我國は神の國である、此神道なるものが萬物の根本なものて、印度ていふ佛法も支那ていふ儒道も皆是と同じい事てある、神儒佛は元と一致のものである、それ故神道を知れば佛法を知り、同時に又儒道をも知ることが出來る、人の道なるものは仁を本とする、それによつて此五常の道が立つ、然るに汝の方の教理は仁義の道を知らぬのである、それ故神佛を敬せぬ、又君臣の隔もない、唯邪法を以て正法を破らんとするのである、今後は左樣な胡亂の説を爲すを許さぬ、彼の伴天連即ち宣教師の徒が前年我國に來り、國民を魔道に引入れんとしたから、一切それを禁じて刑罰を加へた、今後は重ねて來ることを許さぬ、只我國に來て好を修めやうと思ふならば、海上には已に盜賊の憂なく、國内は安全に通行し得るから、來て商買をするが宜しいといつて居る。

秀吉の此書翰は西教史なり及び其他の書て見るに、ブリニアンは其案文の意味を傳聞して、左樣の返書ては困る、激烈な辭のある左樣の書翰を持つては本國に歸り難いとて大に困り、遂に當時京都の市政を司つた前田玄以に賴み込み、少し其辭を書き和げて貰つたとの事てある。されば西教史及びヒルドレスの「ジャパン」に見えて居る秀吉の書翰の意味と、此富岡文書の意味とを比較し見ると其間に少しの相違がある樣だ、そこて私は先づ此富岡文書を以て秀吉の最初の案文てあると定めて居る、然らば修正された秀吉の書翰は如何かといふに、其宣教師が宜からぬといふ處だけが省けてある、其他は大體同じ樣に見える。要するに秀吉

が天竺、南蠻迄も征伐すべしとの抱負を述べて居たのは、單に語の上の粉飾ではなく、實際の上に左樣の考を持つて居たものと思ふ事を、此富岡文書によつて證據立てられる事と信ずる。

此頃にはそれよりは少し日が後れ、天正十九年九月に、矢張り印度へ遣つた書翰と同樣な意味で、比律賓に對して入貢を促した、それには原田孫七郎なるものがある、元と是はつまらぬ一介の商人であつたが、此ものが秀吉に對して比律賓征伐を勸め、遂に其年の九月十九日附を以て書を比律賓の西班牙大守に送つた、斯くして來貢を求めたのである、此事は已に割合によく世間に知られて居る、其時原田孫七郎は滯なく彼地に赴き秀吉の書を渡したが、それに對する比律賓太守の回答は、西班牙の方なり其他色々の方のものにも見えて居る、けれども其文意は色々まち／＼になつて居る、それが矢張り又此富岡文書の中に、その時の漢譯の備見えて居る、是はまだ世間に知れて居ぬものだから茲に其話をしやうと思ふ。

其返書の端の裏書には小琉球よりといふ事がある、元と此小琉球とは何處を指したものかといふ事に就いては色々前から議論のあつた事だけれど、是は呂宋を指すものだとは一般の學說で定まつて居た事だが、此文書に據つて見るに矢張り此說は正しかつたのである秀吉の當時の人は、皆呂宋を小琉球といつて居たのだ、そこで其返書は小琉球即ち呂宋の太守ゴメス、ペレスといふものから秀吉に宛てて寄越したのである、それには先づ最初に、イスパニアの皇帝ヒリピウス國を立てゝより以來大小の國を併すること十八國、東西南北來り享せざるものなく、皆其下に歸したのだといふ樣に己が國力の大なる事を誇りて書き、斯くて恭く惟みるに秀吉殿下の芳名久しく顯はれ、雄才大略を以て一方を統御し居られる、今原田孫七郎なるものより其書を得、それを見て甚だ欣然たるものがある、然るにそれと見了つて又駭然たるものがある、それは何故かといふに、今國と國との交渉を爲すに當り、其使節として來るものは孫七郎一人である、恐らくは是れ殿下の本志より出たものではあるまいけれども其書翰を見るに謹嚴なるものがあり、其禮大に備はつて居る、が其使は單獨で來て從ふものとては他に無い、加之徒に商船の便に由つて來た、是は果して眞であるか抑も又僞てあるか、群疑鼎沸して狐疑の心を生じた、依つて更に書を裁して殿下に呈し疑を霽さんが爲に御尋をす

る、若しその書にして誠のものであるならば、それは實に難有い事である、然らば來年を待ちて使のもの歸來すべきにより、其時には伏して罪を待つ次第である。尙ほ近頃議して人をイスパニアの都に遣はし、皇帝の旨を稟けしむることに致した、想ふに我國の皇帝は隣交を修め通商を開くことを元より希望して居らるゝ事だから、必ずそれを容れることであろう、左すれば誠に幸であると。斯樣な意味のものである。是はイスパニアの太守が一時遁れの策て、斯くして單に其時期を遷延せんとし言を左右に托したに過ぎぬのである。

秀吉は之を見て更に其前の趣旨を繰返した返書を與へ、彼地より來た宣敎師コボスなるものと一所に、原田孫七郎の主人である原田善右衞門といふものを使者とし、呂宋に遣はしたが、此一行の船が過つて難破し、原田のみがマニラへ着いた、マニラては其原田の口上を聞いて十分秀吉の意のある所を諒したなれど、肝腎の秀吉の書翰が難船の時に無くなつたから、それに對して返事を出さず、原田の歸る時に宣敎師のペトロ、バプチスタを使者として更に我國に遣はし、かくてバプチスタは來着して秀吉に謁見し、コボスが難船の災に逢ひ、其爲伏命を聞き得ぬから、再度の使者として自分が來た由を述べ、秀吉の書翰を更に貰ひ受け、それをば或る他の宣敎師に托してマニラに歸らせた、マニラては千五百九十四年、即ち日本の文祿三年の四月に秀吉の書を受取つた、然るに其頃丁度時の太守のゴメスペレスが支那人の爲に暗殺され、其子のルイスが職を襲たが、マニラの政廳に重なる人々を集めて相談し、遂に日本と隣交を結ぶは最も喜ぶ所だから、本國政府に建議して永く兩國の和親を約せやうと思ふとの書を秀吉に送る事に定めた。斯樣な風て、マニラは甚だ要領を得ぬ書翰を出して時日の遷延を勉め、秀吉の方ても其儘て、遂に遠征軍を出すに至らなくて仕舞つたのてある。

此比律賓と交渉して居る間に、秀吉は更に今の臺灣當時の高山國(タカサグニ)に向つて比律賓同樣書翰を出した、それは左の如きものである。

夫日輪所照臨、至海岳山川草木禽蟲、悉莫不受他恩光也、予際欲處慈母胞胎之時、有瑞夢、其夜已日光滿室、室中如晝、諸人不勝驚懼、相士相聚占筮之曰、及壯年輝德色於四海、發威光於萬方之奇異也、故不出十年之中、而誅不義、立有功、平定海內、異邦遐陬嚮風者、忽出鄕國、遠泛滄海、冠蓋相望、結轍於

道、爭先而服從矣、朝鮮國者、自往代於本朝有牛耳盟、久背其約、況又予欲征大明之日、有反謀、此故命諸將伐之、國王出奔、國城付一炬也、聞事已急、大明出數十萬援兵、雖及戰鬪終依不得其利、來勅使於本邦肥之前州而乞降、繇之築數十个城營、收兵於朝鮮域中慶尙道、而屢決眞僞也、如南蠻琉球者、年々獻土宜、海陸通舟車、而仰我德光、其國未入幕中、不庭之罪彌天、雖然不知四方成享、則非其地疎志、故原田氏奉使命而發船、若是不來朝、可令諸將征伐之、生長萬物日也、枯渇萬物者亦日也、思之。不具。

文祿二歲星集癸巳十一月初五日

日本國前關白㊞

高山國

即ち初には自分の生るゝ時から非常の奇瑞があり、卜者に見せたら壯年に及んで威光を萬邦に發するの兆候だといつたが、その通り十年を出でずして海內を平定し了つたから、今や將に朝鮮や支那を平定せんとして居る、然るに其國の如きは未だ我國に入貢せぬ、誠に不庭の罪、誅伐すべき筈だけれど、想ふに他の諸國の來りて入貢し居るを知らぬに坐し、元來其國の疎志てはないのだから、今原田孫七郎を遣はし使命を傳へさせる、若し來貢せぬに於ては即ち諸將をして征伐せしむであらうと、其最後の句が非常に振つて居る、即ち萬物を生長せしむるものは日なり、萬物を枯渇せしむるものも亦日なり、之を思へと言つて居るが、誠に其意氣の壯を見るべきである。

是は如何して傳はつたものか其傳來の系統は分らぬけれども、其時の本書が前田家に傳はつて居る、即ち是は先般行幸啓のあつた時に同家より御覽に入れたものである。質は鳥の子紙で、下地に金箔で色々の模樣があるもの、此文を書いた人は例の支那から「封爾爲日本國王」の國書を持つて來た時に、小西行長等から其文意を矯めて讀んで吳れと請託する所あつたにも拘らず、忌憚なく其儘に讀み、遂に秀吉の赫怒となり、再度の支那征伐を起さしめた當時の讀み手、相國寺の僧承兌である、奧には關白といふ秀吉の金印が捺してある、此臺灣に就いては當時の人は隨分着目して居たものと見え、少し是よりは後れるけれども、慶長十四年に肥前の有馬晴信が家康の旨を受けて臣下の千々岩淸左衛門を遣はし、臺灣の探檢をさせる、淸左衛門は土人と戰ひ、十分に其樣子を見て歸つたといふ事がある、秀吉の此高山國に書を送つた前後の事情は如

何であつたか、是より恐しい事は只今は不詳である。

此の如く秀吉は臺灣から比律賓印度へ掛けて遠征しやうとの考を十分胸に抱いて居たのである。彼の支那征伐に就いて出して置いた檄文に、天竺南蠻迄もと書いたのは決して一場の誇大の言でないことは愈よ以て確められる。

世に「秀吉事書」なるものがあり、群書類從の中にも見える、是は秀吉が支那征伐に就いての色々の計畫を一つ書きにしたものである。是によつても亦秀吉の抱負の盛なのを見る事が出來る、それの當時の本書は前田家に保存されて居るものがある、それから又若州小濱に組屋といふ家があり、此處に傳つてある文書がある、是は元と屏風の下張になつて居たものだが、それを伴信友翁の時に發見し、遂に中外經緯傳に載せられて初めて世に現はれたのである。此文書は假名書きであつて、山中橘内から大阪に居つた秀吉の女中に送つた書である、右の二つを合せて見るに、秀吉は支那征伐の最中、文祿元年の頃に、既に支那を蓆卷し了つた様な考を持つて居り、そろそろ支那の國々の配分を考へて居つた、それに依ると、先づ我天皇を北京に迎へ其周圍に於て御料所十ヶ國を進上す、それに秀次は支那の關白として、其政務を總理せしむべし、次に日本の本州には、只今の皇子若くは八條の宮樣を据ゑ奉り關白には浮田秀家か羽柴秀保を任ずべし、朝鮮は誰を置かう、九州には誰を置かうといふ樣に、實に盛な個條書きが見える、然らば秀吉自身は何處に居る積かといふに、自分は南方寧波に居所を構へんと言つて居る、此一言が餘程面白い、彼は文祿の初に於て其意氣已に四百餘州を併呑し居るのみでなく、更に進んで南方の經營に從事する爲に、最も船着きの宜い寧波を選んで、自分は其處に居らうといふ考を洩したのである。

此樣な盛な計畫も不幸にして秀吉の意の如くならず支那との媾和談判も其間に立つたものゝ姑息の考によつて遂に殆んど我國辱ともなる如き有樣に至り、秀吉は悶々の中に遂に世を去つて仕舞つたのである、斯くして彼の遠大なる計畫も遂に實行せらるゝに至らずして了つたのである。が此の如き彼の壯大なる計畫、其遠大なる抱負よりして當時の國民の意氣は如何ばかり鼓舞され發揚されたかといふことは、其後我國民が平和の手段によつて遠く南洋より印度地方に赴き、國民の勢力を扶植したもの多かつたことによつて證明される、世には家康が海外貿易を奬勵した爲に、南方に出

掛けて行くものが多かつたといふものもあるけれども、それは單に事實の一面のみを見たものである、家康の其政策も本づく所は秀吉にある、私は家康は單にそれを模倣したに過ぎぬと思ふ。併し乍ら秀吉の望んで居つた高山國も今は我帝國の版圖となり、其士人も我皇化に浴することになつたといふから、彼れ若し靈あらば幾分かは滿足して地下に喜んで居るだらうと思ふ。

（談話筆記校閲濟）

動物の呼吸機關

理學博士　丘淺次郎

動物の呼吸機關は肺ばかりでなく、外にもいろ〳〵ある。先づ第一動物には陸上に住んで居るものと、水中に住んで居るものとがある。陸上に住んで居るものは空氣を呼吸し、水中に住んで居るものは水を呼吸することは分り切つた事で、そこに已に非常な違ひがある。一體水と空氣とでは非常に重量が違ふから、水を吸ひ入れるには空氣を吸ひ入れるよりは遙かに骨が折れる。太い管には吸ひ入れることが出來ても、細かい管の尖までも吸ひ入れることは困難である。それで水中に住んで居るものは大抵鰓で呼吸をするやうに出來て居る。肺は大抵身體の内部に引込んでゐるものだが、鰓は身體の外に出て居るもので、水が鰓の周圍を流れて、其處で呼吸するやうになつて居る。どうせ呼吸の出來る爲めには血液の流れる處と、水の流れる所とは接近しなくてはならぬのであるから、鰓は柔かく薄く出來て表面も廣く、複雜に出來て居る。表面が廣くて柔かく薄いものであるからして、從て傷き易い。外の動物が喰ひ附けば破れて了ふ。て鰓を保護する爲めに一枚の骨が之を掩うて、其骨の中に入つて居る。元來外にあらはれてゐるものだが、其骨の爲めに中にかくれてゐるやうに見えるのである。

又陸上に住んで居るものゝ呼吸機關でも皆同一ではない。肺もあれば肺より外のもある。蝶、蜂、蜻蛉などのやうな昆蟲類の呼吸機關は肺でなくして氣管であ

る。吾々人間に於ては氣管は段々氣管支となつて其尖が極めて微細なものになつて居るが、之れは空氣を肺に出入せしむる丈けの働をなすものなるに反して、昆蟲類の氣管は、肺といふものに連接せず、先々に細かく分れて、身體の全體――例へば胃でも腸でも、直接に氣管から空氣が通ずるのである。人間ならば呼吸する時に空氣の入る所は肺丈けで、肺に入つた空氣を分配するものは血液であるが、蜂、蝶、蜻蛉などは氣管が直接に空氣を全身に通ぜしめるのである。

今迄いつた事は水中に住んでゐるものでも、陸上に住んでゐるものでも、主として幾分か大きな動物についての事であるが、小さな動物になれば肺もなく、鰓もなく、氣管もなく、只身體全體で呼吸する丈けである。獨り呼吸のみでなく、さういふ小さな動物では、身體全體で、生存に必要な事をするのである。極めて小さな動物になれば身體の表面に凹凸した部分がなくてもよいのであるが、少し大きな動物になれば、表面の廣さが充分でないと、身體全體の容積に對する割合が違つて來るから、是非共凹凸した部分が必要になつて來るのである。例へば同じ形のものでも之を倍にすれば面積は四倍、容積は八倍になり。之を三倍すれば面積が九倍、容積が二十七倍となるのである。だから大きな動物は其全體の容積に對して、一部に襞が出來ぬと、呼吸する面積を廣くする譯に行かない。で、水中に住むものには鰓。陸上に住むものには肺、氣管といふ風に極めて襞の多い、複雜した、面積の廣い呼吸機關が出來て居るのである。小さなものになれば、凹凸がなくても容積に對して面積が間に合ふのである。

一體動物が何の機關、何の機關と、專門の機關があるのは、身體が大きくなつて、分業によらなくては生存が出來ないからである。小さな動物になると身體全體で以て何でも總ての生活作用をやる。我々大きな動物には呼吸機關もある、消化機關もある、排泄機關もある。小さな動物は身體全體でこれらの機關代用をするのである。

それ等の事から考へて見ると、我々が日常物を論ずるのに、よく幾つかに分つて論ずる。例へば生活作用を論ずるにしても、消化作用は消化作用、呼吸作用は呼吸作用、排泄作用は排泄作用として、初めから別々に獨立して存したものゝ如く考へて了ふ。然し動物の本來から考へて見て、此等は初めから分れたものではなく、皆集つて一つとなるといふのか本である。今日の

如く分れて居るのは變化の結果であるといふ事を忘れてはならぬ。

丘博士近來多忙にして執筆の暇なく、一場の座談をせられたるものを記者が筆記し、無理に博士の許諾を乞うてこゝに掲載せるもの也。(記者しるす)

汝鐵槌柄長幾尺

法學博士　和田垣謙三

私は日本女子商業學校といふ女學校の校長をして居るが、昨年の春、其卒業生に向て、御餞別として一場の談話をした事がある。それは獨り其卒業生のみならず、一般の女學生――又延いては男學生にも多少の參考とならうと思ふから、同じ趣意の事を話して見やうと思ふ。雜誌に採録せらるゝと否とは一に記者足下にお任せ申す。

此頃米國の經濟書を讀んで感じた事がある。今假りに題をつけて見れば『汝の鐵槌、柄の長さ幾尺ぞ』とでもいふべきものである。賴山陽の『本能寺』の詩に、本能寺溝の深さは幾尺ぞとあるのを學んだのである。

さてその事柄は斯うである。御承知の通り、亞米利加には、外國の移住者といふ者がある。歐羅巴からも又その外の國からも行くが、その書物には唯外國の勞働者とある。だから伊太利人であるか、和蘭人であるか分らないが、兎に角或る外國の勞働者に命じて、道路修繕の爲に、大きな石を鐵槌――玄翁――で壞さした。處が、その勞働者は、半日ばかり其の仕事に從事して非常に疲勞し、とても續かぬと云ひだした。そこで亞米利加の其の工事の監督者ともいふべき者が、その鐵槌(ストーン、ハンマー)を手に執つて見ると、その柄(ハンドル)の長さが僅に三尺しかない。そこで三尺の柄の鐵槌を以て斯ういふ風に石を打つのであるから打つ度に體を曲げなければならぬ。長い仕事の中には幾度か曲げねばならぬ。隨つて、腰も痛くなれば、また腹も撚れる。兎に角餘程の疲勞を覺えた。これは亞米利加流でない。監督者

は直にその鐵槌を取り上げて、四尺の柄を付けてやつた。今度は一尺長いから、前のやうに屈まなくても可い。立つて居る儘で、ボンボンと石が打てる。腰も痛まず、腹も撚れず、直立して居つて、トントンと愉快さうに石を破つたが、單に使用者が苦痛を覺えないばかりでなく、其の仕事の工程と云ふものが非常に増した。と、話はこれだけなのである。

私は之を讀んで、面白いと思つた。又之と反對の話が一つある。既に御承知かも知れないが、今出陣すると云ふ、或羅馬の青年の刀が、少し短かゝつた。三寸か四寸か短かつた。これでは、斬り合ふ時に不利益であるから、もう少し長い刀を渡してくれと請求した。その時、父であつたか、母であつた、忘れたが、「刀が短かければ短いだけ先方に進め。」と云つた。是は寔に意味の深い話であるが、それは先づそれとしておいて今の亞米利加の鐵槌の長さは、一種の教訓としてよからうと思ふ。

即ち、此の鐵槌と云ふものは——既に經濟學で知つて居られやうが、この勞働者にとつて、鐵槌は何であらう。一般の場合ならば、鐵槌はいふまでもなく一つの器具——道具に過ぎないが、之を經濟學の上から云ふと、資本である。器具の形に表はれて居る資本、或は資力である。資本と云ふものは、生産の要素の一つである。生産の要素と云ふものは、曰く自然、曰く勞力、而して第三に資本或は資力である。其の資本のあるとないと、資本の多いと少ないとは、生産事業或は勞力と云ふ上から見て、そこに餘程の違がある。例へば、單にそこらを流れて居る水、其れを必要であるところに持つて行かなければならぬとする。持つて行くには、勞力と資本とが要るが、人間が殆ど裸體であるといふやうな、原始時代には、勞力はあつても何の資本もない。即ち、水際まで行つて、やつと掌で掬んで來る。間違へば水を溢してしまふ。餘程まづい話で、うまく持つて行けたにしても、僅に掌一杯ぐらゐに過ぎない。併し、こゝに一つ柄杓といふ資本がある。而も長柄杓である。さうすれば、下に下りないで一杯汲むことが出來る、前よりは餘程樂である。けれども、柄杓一杯の水を、一町も二町も持つて行くことは隨分臆劫な話である。ところが、今日いふ、バケツ、之に汲んで提げて行くとすれば、是はまた柄杓よりも餘程樂である。往復の勞力は同じで、而も何十倍の分量を運搬することが出來る。バケツも只一個でなく、二つ

あつて兩方に提げて行く時には尙宜い。然るに水桶――バケツの三四倍もあるのを、天秤棒で擔いで汲んで運ぶ。幾つかのバケツを以て行くよりも、餘程便利である。天秤棒と水桶とが資本である。然し、一々、水を杓むに小川に行くといふことは、時間もかゝるし、骨も折れる。そこで遂に井戸と云ふものが出來、釣瓶といふものが用ゐられるやうになつて、勞力を省く。或はポンプと云ふものがあると、尙更骨が折れぬかも知れぬ。是は非常な進歩である。けれどもこれは又、水を杓む最良の手段ではない。遂には水道といふものが出來て、鳥渡捩る許り、一擧手の勞力で澤山の水を得ることが出來る。然しながら、水道と云ふものには餘程多くの資本が投ぜられてある。之は只水を杓むと云ふ一小事に過ぎないが、それでも其の道具の整つて居ると居らぬとで、斯くまでに難易便不便の差がある。かやうに器具器械と云ふ資本をかけて仕事をするのに其程度によつて、一方は勞多くして効少なく、一方は勞少なくして効大なりと云ふ事になるので、この最小の勞力を以て最大の結果を得るのが、即ち經濟の理想とするところで、之は既に何人も知つて居るところである。そこで、「汝の鐵槌柄の長さ幾尺」――私は學生諸君にお尋ねしたい。又今度は學生諸君が自問自答せられん事を希望するのである。即ち鐵槌と云ふものは資本で、其の鐵槌に付いて居る柄と云ふものは、やはり其の資本の一部分である。三尺よりも四尺の方が、それだけ効が多くなつた。そこで私の考へるには、學問と云ふものは、一種の資本である。無學文盲――生れた儘の人間が石を打壞すと云ふとであると、鐵槌の頭だけで壞して居る。なかなか骨が折れる。然しながら相當の學問の素養のあるものは、即ち柄の付いたもので、如何なる艱難でも、いかなる堅いものでも之を打壞して行く。そこで、學問の多くない人は柄もなければ機械もない、――學問の少ない人は、短かい柄を以て居るので、柄が長くなるほど、ちやんと立つて居て、今話したやうに、樂に仕事が出來る。今の學生諸君が今後、社會に出て働くのは、石を破るのと同じく、困難な世の中である。其處へ出て働く時に必要な鐵槌――それを學校が學生諸君に與へるのだ。その鐵槌も初の一年は柄の長さも或は一尺であつたが、二年目には二尺となり、三年目には三尺になり四年目には四尺となるので、つまり四尺柄の大鐵槌を以つて、世の中の艱難の岩を破ることが出來るやうにして貰ふのであ

る。併しながら諸君の背の高さも智慧の分量もこれでとまつてしまつてはならない。これから先、智、德、體、共に、ズン／＼上に伸び、高くならなければならぬ。或は、四尺の柄でもまだ短い。五尺――六尺――或は一丈――何十丈といふ長い柄を持つて振り廻すといふ位の勇氣がなくてはならぬ。又それだけの準備を怠つてはならぬ。其意味に於て、私は學生諸君に對して『汝の鐵槌柄の長さ幾尺ぞ』とおたづねしたのである。而して四十四年の今日と四十五年或は五十年になつて、其柄の長さが幾尺增したか、時々自から顧みて自問自答せられたならば、必ず學生諸君の前途に利益のあることであらうと思ふ。であるからして今迄學ばれた學問、それは緒で、それをだんだん伸して行き、豐富な學問といふ資本を以つて世に立ち、各自の事業を助けしめて資本の効用を十分に得られん事を希望する。

終に今一言添へておきたいのは學問の活用といふことである。學問はいふまでもなく男子にも女子にも必要で、その學問は又活用して行かなければならぬ。學問は學問、實地は實地と、背中合になるやうなことではいけない。亞米利加などは此點に注意して居るが、日本では此弊に陷つて居ることが多い。であるから學生諸君はそれ／＼學問を勵んで活用するやうに力めねばならぬが、婦人などはあまり學問を鼻にかけるといふことは宜しくない。寧ろ有る程ます／＼無い樣に見せなければならぬ。學問を眞に活用するのは常識といふもので常識が發達しなければならぬ。それに就て想出したのは大隈伯爵の美人の標準論である。何處の國でも美人の標準は何かといふと、其國の貨幣制度にある。日本では天保時代には天保錢で瓜核顏が美人であつたが、今日では金貨本位である。即ち圓い。圓顏が大に持囃されて居るといふことである。顏はどちらでもよい。私は特に女子諸君の圓滿なるを望むのである。即ち圓滿なる常識の發達を希ふのである。

雪國美人論

青柳有美

其一　一人種の血液三千年

雪國に美人ありや。確かにある、雪の降らぬ國よりも確に多くある。然し、美人とは如何なるものなりやと言へば、これは不可解の懸案で、容易に決せられぬ。是に至ると、雪國に多いと斷定した美人なるものも、果して美人なるや否やが疑問になる。疑問なら疑問にして置くがよい。然らば、雪國の女は如何なるものなりやとの問に答えて事實を列擧し、說明を加へて見やう。之を綜合して美人なりと斷ずると否なとは、讀む者の勝手次第である。

人類の相貌が其棲む土地と氣候とによりて變化せらるゝものたるは、否定すべからざる事實で、人種の區別は土地と氣候との差によりて來りしものたる事も、今更ら珍しく言ふまでも無いが、此の變化この區別は、僅々たる短歲月の間に生ぜらるゝものでは無い。人類學者タイロー氏の說などに據ると、或る一人種が全く從來と土地氣候を異にするやうな地點に移住しても、其新らしい地の風土に同化されて、舊き風土の間に養はれた血液の傾向を全く脫し終るまでには、少なくとも三千年を要するとの事だ。世界に現存する最古の遺跡や記錄でも、今日までは四千年以上を經過したと思はるゝものは殆んど無い。隨て、考古學や歷史の上から推知し得らるゝやうな人種の移動は、古くとも漸く三千年內外のものに過ぎぬ。是れが今日尙ほ雪國に暖國人らしい相貌の人種を見、暖國に雪國人らしい人種の棲息するのを目にする所以である。況んや、今日の如く交通機關の發達して、人々が永く一定の住所に落ち付いて居らぬ時代にありては、雪國人の標準相貌が果して如何なるものなりやといふ事さへ、之を定むるに頗る困難せねばならぬ。

地質學者は、前紀層の遺物たる動物の一骨片を發見すれば、これを基礎に推理を進めて、その動物の骨骼の全形が果して如何なるものなりしやを臆斷することが出來る。而も、此の臆斷が後に至りて誤謬ならざりし

を證據立てられた例などもある。恰度同じ筋合で、理論の上から推して行きさへすれば、雪國の女は如何なる條件を具備すべきものたるかの結論に達するは、決して不可能で無い。此くして得られたる條件が、これ即ち雪國女の標準相貌を作る條件になるのだ。

其二　雪國に塵埃少なし

雪國とは、讀んで字の如く、雪の國である。一年のうち少なくとも四ヶ月は、その國の地盤が雪に覆はれて居る。若し、雪が解けて水になつてから後なほ地面を潤ふして居る間までをも加算したら、一年のうち半分は、雪國の地盤が雪の影響を受けて居るものと見て差支は無い。

女の容貌を害するもの丶一つは、塵埃である。化粧に苦心する者が、日々入浴を怠らぬ所以は、皮膚面の老廢物を除き去ると共に、之に附着せる塵埃を洗ひ落さんが爲めて、所謂垢なるものは、老廢物と塵埃との混合である。

塵埃の皮膚を汚ならしくずる事は、誰の目にも明に觸るゝところであるが、之が皮膚に附着すると、更に皮膚の氣孔を閉して身體の新陳代謝を阻害することにある。是に於てか忽ち血液循環に惡影響を及ぼして、不潔の血行が體中を流れることになる故、自然其人の血色も引立たず濁つた醜いものになる。

西洋の女が、ヴェールに顏を包むのも、塵埃によりて此く容貌の害せらるゝのを厭ふからのことで、近來我が邦にも三越ヴェールなどいふハイカラものが出來て兎も角之を被いて見やうと志す女のあるのも、皆塵埃によりて容貌の汚さるゝのを厭ふ一念から來たものに外ならぬ。

雪國では一年中の半分近く、地盤が雪に覆はるゝか或は雪の解けて流れ出でた水に濕されて居るのだから三百六十五日のうちでも塵埃の立つ期間が、之を雪の無い國に比べると半分しか無いことになる。つまり、雪國の女は、塵埃に其皮膚を汚さるゝ期間が頗る短いのだ。

加之、雪國人は冬期に於て、冷水を避け湯を常用にする慣習があるので、それが春期に入り夏期に入るも、尚ほ惰性になりて改まらず、依然、手を洗ふのにも顏を拭ふのにも、湯を用ひることになる。米人ドクトルモーレーは、塵埃を除き去りて皮膚氣孔の代謝作用を鋭敏ならしむる美顏術の秘訣を、一に熱湯を用ひるにありとして居るが、雪國の女は、湯を常用することに

より、期せずして美顔術の奧の手を實行して居るのだ。此る女は、美人たる一條件を具備せるものといふを得ざるべきか。

其三　雪國人は皮下脂肪多し

人體の骨骼、纒附せらるゝ筋肉は、紡錘狀の片を幾つと無く寄せ集めたものである。之を單に皮膚を以て覆ふのみては、凸凹が甚しくして容貌が隨分醜いものになり、女の顏なんかても山や谷が一面到るところに起伏して、二タ目と見られたもので無くなるに相違無い。

ところが、此くあるべき筈の容貌の甚しき凹凸無くフックリと綿を入れたやうに出來上ッて見へるのは、皮下脂肪の存するが爲めて、骨と皮ばかりの瘠せた女は、世間果して之を美人なりと稱するてあらうか。

雪國は雪が降る位故、無論氣候が寒い。天然は常に用意周到て、寒い氣候の土地に棲息する種族には、其身體をして寒を防ぐに便なる構造たらしむる。寒國の女の身體は、是に於てか、防寒に便なる構造に出來て居る。

脂肪は熱の不良導體てある。されば、皮膚と筋肉との間に、此の熱の不良導體たる脂肪が恰も衣服に綿を入れたやうな具合に多く入れられてあると、體溫を放散することが遲く、又外界の寒氣を感ずるのが鈍くなる。皮下脂肪は此くして體溫保護の最も有力なる器關て、皮下脂肪の多い人は、强烈な寒氣に觸れても、寒さを容易に感じはせぬ。

是に於てか、天然の保護作用によりて、寒國人には總じて皮下脂肪が多く、依りて以て寒氣を防ぐに便なる身體の構造にせられてある。

女が老年になりて容色が衰へ、皺クチヤの梅干婆さんになるのは、此の皮下脂肪が減じて皮膚にダルミが出來るからのことて、慳（けん）の强い骨張つた女は、即ち此の皮下脂肪が少ないのてある。

當時世間に持て囃さるゝ天平式の顏とは、皮下脂肪が充分にある爲めにフックリとして居るのを指すものて、赤坂春本の萬龍などの顏が、喝采を博するに至つたのも、畢竟するに皮下肪脂の賜てある。

寒國の女は、瘠せた角張つた顏のものは少ない。總て膨味（ふくらみ）のあるポッテリしたのばかりてある。新潟から出て新橋に嬌名を鳴らすに至つた靜江は、此の標本てある。たゞ非難を言へば、皮下脂肪の多い顏は、輪廓が總て明瞭を缺き、ボンヤリした曖昧なところのある

事だ。

新橋の鄙江のやうな皮下脂肪の多い女は、美人といふことが出來無いものだらうか。

其四　雪國人に雪の膚あり

阿弗利加などには、黑色の染料を樹脂に溶解して之を皮膚一面に塗り、以て其美を誇とする人種もある。これは、英國の阿弗利加守備隊軍醫監オールコックの說の如く、阿弗利加のやうな太陽の熱線が直射する地方では、皮膚の色が暗色で無いと、皮膚の眞皮層に終ッて居る神經末端が熱線の爲に激烈な刺戟を受けて、殆んど堪え難き苦痛を感ずるに至るからの事で、天然の保護作用によりて、皮膚の色を黑くせられてある上に、尙ほ人工に依りて此く其の色を一層黑くして悅ぶのである。

人の皮膚のうちでも、日光に曝らさるゝことの烈しい顏や手首は什麽しても色が黑い。歐洲の縱斷旅行を試みても、北に行くほど皮膚の色が白くなりてブロンドを發輝し、南に下るに從て黑くブルーネットになり、獨逸人は西班牙人や以利人より白く、瑞典人や那威人は、北獨逸の人々よりも更に白い。恰も氷と雪の北極に住む熊が其毛の色の白いやうに、雪國人は其膚が總て雪の如く白いものである。否な、雪國人は其皮膚が是非とも白からざるべからざるのである。

總じて、白色は熱を吸收することの少ないと同じ割合に、又熱を放散することも遲いものである。故に、此の點から言ふも、黑色の皮膚を有する人種は體溫の放散が速か故、熱帶生活を營むに當りて苦痛を感ずる事が少く、白色の皮層の者は、苦痛が多い。然し、雪の降るやうな寒國では、白色の皮膚ある者は、體溫の放散が鈍いために、頗る凌ぎ易いといふ事になる。

かの北極の熊が其毛の白いのも、又雪國人が其皮膚の色の白からねばならぬ原因も、皆な之が爲めで、要するに天然の保護作用である。此くして雪國人は必ず其皮膚の色が白い。

日本民族には、如何に南の端の九州に行ッても阿弗利加人の如く黑色顏料を塗り立てゝ其美を誇るものは無い。皆な白粉を塗ッて精々白く見せやうとして居る女ばかりで、古來色の白いのは七難を隱すとさへいふ諺があり、色の白い女を珍重する。

然らば、色の白いが特色たる雪國の女は、美人たる一條件を具備するものといふを得ざるべきか。

其五　寒國人には氣孔少なし

たゞ皮膚の色が白いといふ丈けては、上等の膚とは之を稱するを得まい。白いと共に滑かて光澤が無ければならぬ。

汗といふものは、暖國に於ての生活に缺くべからざる一品てある。汗が皮膚の氣孔から分泌せられて蒸發をするには、什麽しても體溫を奪ふことになるから、如何な熱帶地方ても汗を流してさへ居れば、頗る暑さが凌ぎ良い事になるのだ。是に於てか、天然の保護作用によりて、暖國の人は、寒い國の人よりも汗を多く流すやうな構造に身體が出來て居る。即ち、熱帶地方に棲息する人種には、皮膚面の汗を分泌する氣孔の數が寒國人より多いのみならず、其の又一ッ／＼の氣孔が暖い國に棲息する人種の氣孔よりも大きいのてある。その實例は容易に阿弗利加人に就て見るを得べきて、黑人の膚には歐州人なぞよりも、遙に多數の大きな氣孔がある。

大きな孔の澤山あるものゝ、小さな孔の少數にあるものよりも滑ならざるは、彼是と議論をするまても無く頗る簡單明瞭である。試に之に觸ッて見たら羽二重と日旂に觸ッた位の差は確に兩者の間にあるべき筈だ。

雪國は雪の降る位てあるから、無論寒い。少なくとも寒い期間が頗る長い。隨て、汗を流す必要が無いのて、雪國人の皮膚面上には、氣孔が少數な上に、而も其氣孔が小さいといふ事になる。此くして、雪國の女は、其皮膚の白いと共に又之が滑てある。

加之、皮下脂肪が多いんだから、脂肪の分泌も自然又多くなりて、皮膚面が絕えず其分泌脂肪により軟かにされて、暖國の女の如くに、膚の枯燥する憂無くッヤ／＼して光澤のあるものになりて居る。

頭髮は女の飾てあるが、寒國の女は矢張天然の保護作用によりて、頭部に襲ひ來る寒氣を防ぎ、又頭部の體溫を容易に放散せしめざらんとする必要上、頭髮が暖國の女よりも豐に生やされてある。阿弗利加のやうな熱帶に棲息する人種には、總て頭髮が少なく、アイヌや樺太の土人の如く寒い雪國の人種には、其反對に多いのを例とする。此くして寒い雪國の女は、唯に其頭髮の豐なるものあるのみに止らず、皮下脂肪の分泌によりて皮膚と等しく絕えず之に光澤を與えられて居る。

皮膚が滑て光澤あり、其頭髮の豐かて同じく光澤のある雪國の女は、美人たる條件を具備せるものといふ

を得ざるべきか。

其六　雪國は靜穩なり

人の神經を最も激しく刺戟するものは、音響である。瀕死の病人なぞは何よりも音響を氣にするもので、神經衰弱の患者なんかになると、夜中に少し高い音響を一度耳にしたばかりて、碌々眠むられ無いやうな事になる。

ショウペンハウエルは、是に於てか、人の思想を散漫にして思索の妨害をなすものは、何よりも噪音てあるとの言を爲してさへ居る。噪音ほど人の神經を惱し之を苦ましむるものは無い。噪音の間に生活する人は什麼しても氣が短く、悠々たる處が無くして、神經質なものになり、完全な睡眠を取ることの出來ぬものだ。

額に出來る邪慳らしい皺は、大に人の容貌を害するものであるが、これは騷々しい噪音を耳にした際に眉を寄せて作るところのものの、多く痕跡となりて遺るのに基因する。

以太利ヴエニスの女は、歐洲に於ける他の都府の女よりも、一般に活々して毫も疲勞せる如き態を示さぬといふが、これはヴエニスの街は、有名な水の都てあるところより、車馬の往復が殆んど無く、市中の道路は悉く水路て、交通は舉げて舟船によりて營まれ、車馬絡繹の噪音を絕ち、全市を舉げて常に靜穩なるため噪音によりて激しく神經を刺戟せられて神經質となる如き憂無く、夜中の完全なる睡眠を取ることの出來るに原因するとの事だ。

雪國には雪が降る。雪が降り積もるやうになれば、到底道路に車馬を通ずるわけに行くものでは無い。唯漸く橇の往復する位が關の山だ。同じ橇ても歐米の橇はベルなんかを附けて盛に景氣良くガラン／＼とやらかすの一、隨分騷々しいやうてあるが、日本の雪國に行はるゝ橇には、此ベルさへ無い。隨て、橇が如何ほど多く往來しても、一の音響をも發せぬ。雪國は雪に其地盤が覆はれて居る一年の約三分之一に當る四ヶ月間、殆んど車馬の往來を杜絕し、加ふるに吹雪に恐れて人の往來さへ稀となり、實に靜かに長閑なるものとなる。雪國の冬の日は、全く一の噪音をも耳にせずといふも可なりだ。

是に於てか雪國の女は、雪の降らぬ暖國の女よりも噪音の爲に神經の刺戟せらるゝ割合が、約三分之一だけ不足なことになる。それ丈け雪國の女は神經質て無い。顏が一體に穩かて邪慳らしい皺なぞも額に出來て

居らぬ。加ふるに、春夏秋冬を通じて化粧に湯を常用する慣習は、これも美顔術の奥義に自然と合一して、總て顔に出來る惡性の皺を除き去る効がある。

神經質な處の無い穩かな邪慳らしい皺の少ない顔を持てる雪國の女は、美人たる條件を具備せぬものだらうか。

其七　寒國人は其鼻長し

昨年の本誌三月號の長篇『名古屋女論』のうちにも論ぜし如く、鼻は顔面の帝王で、其形狀如何は、顔面美に影響する處頗る大なるものであるが、元來鼻の用たるや、嗅覺器關たると共に、肺の保護器關であるのだから、暖い土地では空氣を一旦體溫に近い溫度まで溫め、それから後に之を肺に送る必要無き故、鼻の長さが天然作用によりて什麼しても短かく小さいものに出來て居る。されば、阿弗利加土人の鼻などは、頗る小さい平ッたいもので、殆んど猫の鼻に彷彿たるところがある。

又、エスキモー人種の如く、四時悉く雪に覆はれて居る土地に棲む人種は、其地に塵埃といふものが殆んど絶無なので、鼻の毛や粘液等によりて塵埃の肺に侵入するのを防禦する必要無く、鼻は唯寒冷の空氣を溫める作用と嗅官機能とを完くしさへすれば、それで足りるんだから、阿弗利加土人と等しく矢張平たく短い構造になつて居る。

然し、雪國は一年の三分之一だけより雪に覆はれて居る時間が無い。さればとて又、雪が降る位故無論空氣が冷めたい。是に於てか、雪國人の鼻は、嗅官機能を營む外に、更に、其吸入する空氣を溫めて後に之を肺に送る事と、其の又吸入する空氣中に存在する塵埃を粘液や鼻毛によりて取り抑えて、之を肺に送らぬやうにする事との兩作用を營まねばならぬ。隨て、雪國人の鼻は、暖い國に棲息する人種や四季是れ雪の間に棲むエスキモー種族やの鼻のやうに、短かい平ッたいものでは、其官能を完全に遂行することが出來ぬ次第となる。

此くして雪國の女には、チョッピリ景物の印までに附いてるやうなシンコ細工然たる鼻は無い。何れも顔面の帝王らしい堂々たる威嚴のある大きな鼻ばかりである。

堂々たる威風のある鼻を持つ雪國の女は、美人たる一條件を具備せぬものだらうか。

其八　雪國女の三大缺點

(第一)表情に乏し　總じて、人の表情なるものは、筋肉に起る變化に依りて生ずるものである。少しく情感に動搖があれば、忽ち夫れが筋肉に傳へられて、或は伸びたり縮んだりする。この變化が更に傳へられて皮膚に移ると、それが即ち表情と稱せらるゝものになる。然し、雪國の女には皮下脂肪が多いので、筋肉の伸縮に變動がありても、それが容易に皮膚に傳はらぬ。微妙な細かい變化などは、皮膚まで其動搖の傳播せぬうちに、皮下脂肪によりて妨げられてしまふ。假りに情感の大動搖に伴ふ筋肉の大伸縮ありとしても、皮膚に現はるゝ頃には、勢が皮下脂肪の爲に遮られて頗る弱いものになりて出て來る。是に於てか、雪國の女は、什麽しても表情に乏しいといふ事になる。是れが雪國女の第一缺點である。

(第二)萎縮せる姿勢　熱の放散せらるゝ分量は、其熱を發する物體の容積に正比例するといふのが、物理學の原則である。されば、雪國人は成るべく其體溫を放散すること少なく、身を暖かに維持して行かふとの慾望から、冬期に入り雪の降り積む頃になると身體を縮めて其容積を成るべく小さくしやうとする。隨て、身體は常にノビ〳〵せずチヂこまりて萎縮したものになる。これは、甚しく姿勢の美を害するものであるが、一年三分之一以上も此く身體を縮めて容積を小さくするとの慣習が附くと、それが第二の天性になりて、春になり夏になり秋になりても拔けず、更に幾年も〳〵之を繰り返えすのであるから、雪國の女は、四季の如何を問はず、其身體の姿勢が萎縮して、甚だ醜いものになる。是れが雪國女の第二の缺點である。

(第三)眼を細く開く　女が眼を大きく開くといふ事、俗に曰ふ眼玉の大きいのは、女の顏に一大光彩を添ゆるもので、美人たるに必要の一條件である。然し、雪國の女は、眼の開きが小さくッて細い。これは、地盤が一年の約三分之一も雪に覆はれて居る土地に棲息するより來るものである。白色は總じて光線を吸收せずに、之を反射するのを法とする。雪は申すまでもなく白いものだ。故に、冬期約四ヶ月間は、この雪に反射せられた光線を雪國人は其眼に受けねばならぬことになる。此の反射光線は、往々にして眼病の原因になりて、雪國には特にユキメと稱せらるゝ結膜炎のあるほど故、この白い雪によりて反射せらるゝ反射光線の猛烈に眼に入らんとするのを防ぐ爲に、雪國の女は雪の降り積んで居る約四ヶ月間は、眼を充分に開かずして

自然に細く開く事になる。雪の無い國の女は、此る猛烈な反射光線に襲はるゝ心配も無ければ、年百年中充分に大きく明くことが出來る。然し、雪國の女には、それが出來ぬ。一年の三分之一も眼も細く開くことのみをして居れば、それが又第二の天性となり、習ひ其性たるに至りて、春になり夏が來り秋に進むも、依然と冬期の習慣が脱せずに、常に眼を細くのみ開く癖がつき、雪國の女の眼は細く小さいものになる。是れが雪國女の第三缺點であるが、歌麿や師宣あたりの浮世繪て見ると、此く眼の細いのも、美人のうちに入れられてあるらしいから、或は之れは缺點で無いかも知れぬ。(完)

酒の畫趣

黑頭巾

其一

◉青松寺を右に見て芝の三緑山の後の杉木立の中を、俥にて過ぐるに、左に折れる道ある角の一隅、……老杉の梢は見えず、わきて大なる幹の稍疎らに聳えて根は雜木もて雅やかに蔽はれ、其間に、二三本の紅葉樹、或は、低く燃えて老杉の根を燒き盡さん許りに、紅、照りまさり、其が中より、一本、……細く長き枝の、ありとしも見えて、うねうねと一丈許り、高くスラリと抽き出て、、其頂に、參差の小枝をひろげ、見事に染め上げたる友仙摸樣のように薄紅葉したる意氣姿の……極めて佗ッぽい中にも、凛としたる醉心地の見ゆる……人をして、陶然として『瘠せて色香の漂へる、丈高き佗者の微醉』の畫趣に醉はしめずんばあらざる也。

◉玉臂、雲鬟、花の顏に醉紅の上る、艶冶更に加ふるとはいへども、十七八の年少ならんには、初夏に見る紅楓の如ならん乎。

◉美人ノ醉趣は、廿四五年に至つて、始めて畫く可し。心の嬌恣、滿身の筋肉、動作に、同化し[illegible]して、天他間、艶冶の氣と感應して、知らず、識らず、總台

して、以て、艶曲なる肉線となり、其の線の變化の刹那に、百媚煥發す。

◉絢爛の花彩は、少女の醉趣のみ。艸木、凋落するの秋晩、霜に飽きたる枝ぶり仇めく紅葉樹は、枝々嬌々、葉々醉紅、天地艶紅の色を獨占して、「秋の女神」の醉に頽るゝ媚態を示す。

◉美人醉ふて頽るゝは、野中に散る紅葉樹也。チリチリに散るは、ひとり櫻花の美。紅葉の畵趣は、未だ散らざる微醉に在り。

◉源之助の俠美人の醉狂して白刄を揮ふは、一種、妖冶の氣、亂れ洒く漆髮頽れ、帶傾き、雪の腕、雲の袖、舞ひて翩りて、其の間、一道の白刄、電光の如くに閃めく。艶麗、言ふ可らず、蓋し、野末に嵐して「秋の女神」の怒り狂ふとき、紅葉を吹き飛ばし、杉の翠葉を震ひ散らして、紅葉、青葉、殘んの野花など、入り交りて、繽紛として舞ふて閃めくとき、又、一箇、「醉狂美」を發揮せずんばあらざる也。

◉小石川の林町の奥より、男岩村の邸に沿ふて、小さき坂を下る。邸内、籬落斜めに、小さき紅葉樹、叢がりて行儀能く紅葉す。小娘のおとなしく桃の白酒に醉へる、雛の節句を憶ふ。

◉美人と、花、紅葉とは、相貪緣して以て、酒の畵趣を示すもの也。花を描くは、必ずしも難からず、醉へる花を畵かんは難し。趣味は、其の刹那に在り。

其二

◉蘭陵美酒欝金香、玉碗盛來琥珀光、但使主人能醉客、不知何處是他鄕、吾輩、常に此詩を愛誦す。一たび此詩を吟ずれば、酒の畵趣、眼前に横溢す。

◉酒の透明にして芳烈なるは爽快無比也。之を玉碗に盛り來れば、一杯の中、秋の空澄み、精勁の氣浮ぶ。會心の友と、此杯を捧げて、健康を祝するときは、杯と杯との澄める空に、兩心、融解し、玉の緣を打つ一波々々に、兩箇の笑顏開く。杯と杯とカチリと、小さく觸るゝ響きに、人生の樂觀湧く。

◉芳烈の酒に銘ずるには、宜しく、凛々として響く名を擇ぶ可し。「劍菱」の名、何んぞ爽やかなる、山陽外史が、之を愛せしは、啻に灘の名酒たるが故のみにもあらざるべし。其後、正宗あり。此の二は、日本酒の佳名として前後匹儔無し。

◉「濁酒三杯豪氣發」朱子は流石に、野暮なりけり。濁酒は徒らに腹を膨らすばかり、以て、健康の盃に盛る可らず。以て畵く可らず。玉碗美酒は畵趣也。

其三

●嘗て、清初の聊齋志異を讀む。中に菊花精の事を記す。頗る書趣あり。

●秀才あり、貧にして勤苦、書を讀む。隣家に一姉一弟あり。姉は、其家の主人也。嬋妍として神女かと疑はる。後庭、百花を培養し、紅紫燎亂、麗華を鬪はす。書窓瀟洒、花に向つて開く。恍として仙境の想あり。家、業無し、花を賣つて產を爲す。就中、菊花、尤も、妍秀。而して家益富み、花益、多く、人愈々美也。

●姉は、時に花中に徘徊す。月夕、天を仰いで吟ず。月露凝つて明眸と爲る。白面、流盻、顏、月に似たり。秀才、一見魂飛ぶ。詩を贈つて思を寄す。女も亦た、其の才を愛し、結んで夫妻となる。是より牆を徹して一家と爲し、綢繆として共に花中に徘徊す。

●一弟、また風姿秀麗、姉に讓らず。古、未た如此、美少年あるを聞かず。酒を好み、頗る才調あり。花月の夕、客を會して盛讌を設く。少年、太醉甚だし。人に扶けられ蹣跚てとして庭中に行く。飛石に躓づき、横さまに倒れて、忽ち一本の菊と爲る。姉、之を聞き、蒼皇として至り、華氈を以て之を蔽ひ、月明の下に置く。月露、清曉、氈を排して美少年出づ。明眸、皓齒、宛として少しも渝らず。

●美人、弟を戒めて、深く飲を愼ましむ。其後また花月の宴を爲す。少年、再び、太醉淋漓、花中に倒れてまた一本の菊となる。姉、驚き馳す。憤恨甚だし。曰く、如何ともす可らず。頃刻にして、根を下し、花を開く。巨幹、大輪鮮麗比無し。試みに、酒を澆げば、益、精彩を加ふ。

其四

●書趣は淺酌低唱にあり。淺酌低唱は、雨中に宜し。いゝあほるといふは殺風景の一に屬す。酒は、小盃を第一とす。淺酌、また淺酌、靜かに、細やかに、以て興趣を涵養するを要す。

●小樓、鴨川に臨む。高柳軒を過ぐ。上枝は、欄を拂ひ、下枝は鳧鴨を棲ましむ。細々春雨、柳糸雨絲に交はる。柳を隔つる東山、煙雨空濛、水墨の畫を爲す。之に對して、終日、小盃を持す。畫を見るの人は、則ち書中の人也。

●岡山の後樂園に一茶亭あり。亭の中を、流泉を通じ香魚を放つ。亭中に座して、細やかに盃を勸む。水、清淺、香魚潑剌として、銀鱗、波を射る。世間、また得易からざるの酒境なりと聞く。

◉利根河畔、水國の酒境、また頗る書く可し。酒前、唯だ鯉魚の新鮮なるを皿に盛り、水香、酒氣を助く。平原百里、蘆葦茫々として眼を遮るものある無し。既にして布帆、山の如く、欄干を壓し來る。

◉酒境は、山水に在り。溪山、幽奇、尤も酒を味ふに宜し。箱根の底倉は、山高く壑深く、紅葉、谷に蔽ひかゝり、奇石疊層、流泉、其間を飛ぶ。遠く望めば、南畵の泉石を展開するが如し。之に對して、一杯を傾けば、酒味は、畵趣を涵養するならん。

◉又聞く、會津の東山は、溪谷の間に旗亭あり、凉味、殊に酒境を奇ならしむ。水、飛んで欄干を過ぎ、月光に映じて、水晶簾を散ずるが如し。東北の奇境也。

◉吾輩、嘗て、松島に遊ぶ。雄島の如きは、得難きの酒郷なるべきを憶ふ。此時實業大會なるに依て、八百八島、繁華を現出し、松形に紅裙滿つ。松島は、頗る幽に盃を擧げ、時に、鹿の白沙に鳴くを聞く。

◉幽奇の山水を得ずと雖も、雨は、紅塵を洗つて、自から幽奇の境を現出す。酒郷は必ずしも地にあらず。景に在り。酒境は、酒量にあらずして、酒味に在る也。

◉しめやかに打ち興ずるこそ酒境なれ、淺酌低唱に非されば、しめやかならず。酒境の清福は、歌ふにあらず、物語るに在り。賴みある中の酒境こそ、唐錦ならずとも、斷たまく惜しきものあるべし。

◉世辭てまるめて、歌三味線てこねて、而して騷々しくば、酒は毒藥也。寧ろ輜重輸卒となりて從軍し、「醉臥沙場君莫笑」を歌ふに若かんや。

其五

◉日本は、酒の國也。第一に天盃あり。盃に家紋あり。盃は國粹を現はし、趣味を現はす。

◉禁裏の御用、古來、土器（カワラケ）なることは、人皆な知る。近代、將軍の盃に至つては、知る者多からず。

◉狩野友信は、繪所の紀念物ともいふべし。彼、少壯、十四代將軍に近侍し、將軍が繪畫を好むの故に、頗る親近せらる。吾輩、嘗て彼と將軍の起居を語る。彼曰く、將軍の膳、四の膳まで備へ其の盃の「ギヤマンの「コップ」なるこそ面白けれ。ギヤマン、は所謂古渡の上乘なるもの。小さくて頗る妙味あり。輓近、また如此、雅趣あるコップを見ず。

◉繪に日は暮れかゝる。將軍、膳を呼んで繪師を饗せしむ將軍、自から起ち來つて「一、お酌しよう」といふ。突立つたる儘にて、徳利を以て、ジヤーと濺ぐ。酒、溢れて袴にこぼれ、疊に流る。

◉給師の儕に、盃無し、茶碗、汁椀の蓋を盃となして難有、頂戴す。而して其の蓋は、必ず懷中して引退かる。

◉天盃といひ、將軍の賜杯といひ、或は、大名の御盃といひ、盃にも、近世の武士道は籠りたり。日本の、フューダリズムは、唯だ一の盃を以て、能く之を說明するを得る。

◉日本に於ては、禁酒は行はる可らず。天盃の一語は日本人に痛切なる感動を與ふ。日本人は宜しく酒に依て冠婚葬祭す可き也。

其六

◉東北は酒鄉也。雪の國の酒境は、頗る詩趣ある也。

◉吾輩、嘗て、雪の中尊寺に詣る。山下、頗る豆腐屋の多きに驚く。里人に聞けば、豆腐屋は、則ち鳥渡一杯屋也といふ。豆腐屋が居酒屋なることそ、金賣吉次の昔の偲ばるゝならずや。

◉盛岡市の夜景を見る。到處の蕎麥屋に、歌唱の湧くを聞く。地僻にして、蕎麥屋は小料理屋に代用さるゝ也。

◉奥羽線を經過す。能代川平原の雪景こそ、日本の奇景なれ。銀世界に、鳥海山の、一入、眞白に峙つ、遠望は、富士千仞の雪と雖も尙ほ及ばず。沿路驛、車窓に近づきて蕎麥を賣る。雪の窓に、暖き、黑き、かけを急ぎ喰ひつゝ、一杯の正宗に、銀世界は、夢の仙境と爲る。

◉信州の「巨燵酒」は、信州人國記中の尤も奇なるもの世界の酒史を編せん者、須らく特筆せざる可らず。

◉吾輩嘗て謂ふ、信州は「巨燵の國」也。雪時となれば、家庭は巨燵に團欒し、客も巨燵に招じ、旅館の座敷、悉く巨燵あり。而して巨燵に談話し、飲食し酒宴す。

◉巨燵の上に、特設のチャブ臺あり、杯盤を配置す。美人來る。座敷に入つて一揖し、直ちに客に面して、巨燵の向ふに入る。巨燵に入つて、三絃を彈じ、追分節、米山節、雪國の歌、巨燵の中に湧く、巨燵酒は、酒の詩趣の、尤も奇なるものならずんばあらず。

其七

◉酒の趣味は醉の一字に在り。若し、飲まずして、生醉となることを得ば、必ず酒力を借るを要せず。

◉聞說、狩野芳崖は酒を飲まず。而して詩を論じて生醉となる。彼、詩を說くや、二更、三更、五更に至つて興益湧き、油愈乘り來る。菓子を摘んでは茶を飲み

茶既に盡き、人定まりて鐵瓶も亦冷やか也。乃ち、水指の水を飲みつゝ、書を談じて意氣益振ふ。たとへば、生酔の氣餘を吐くにも似たり。

●公伊藤の政治を談ずるは、芳崖の書を談ずると相似たり。公は、酒客也。然れども公の飲み且つ談ずるは、興趣、酒にあらずして政治に在り。夜深く、油乘りて、公は談じて已まず。左手、盃を出して、酌を受けつゝ談を續く。飲みて已まざるが故に、侍者竊かに、酒に代ふるに水を以てす。公、ますく受けては飲み、飲みては且つ談ず。其の酒と水たるを問はず、盃を擧げて、以て興趣を煽る也。

●蓋し、公伊藤の政治に於ける、芳崖の書に於ける、共に、曠世の才也。「曠世の才」者は、其の得意の壇場に立つは、酒客の酒に臨むと一般の感興を有す。則ち、『生酔』の書趣を發揮せずんば已まざる也。

●公伊藤と芳崖との間、一佳話あり。芳崖晩年、美術取調所に在り。取調所は、小石川植物園の中に設けて美術學校の素地を爲す。彼、歿する前、數月、其の大作、鷲の圖を携へて、公伊藤を訪ふ。

●公、時の首相也。一日、まさに登閣せんとして、馬車、既に玄關に待つの時、芳崖到る。刺を通じ、切に謁見を求めて已まず。公乃ち、之を應接室に引見す。

●芳崖則ち、美術無くんば日本無しの論を述べ、台閣諸公進んで美術奬勵に盡力せざる可らざることを切言し。畢りて、携ふるところの鷲の大圖を出して、公に贈呈す。鷲の書は、芳崖の傑作の一也。公、乃ち之を壁間に掲げしむるに、幅二間、長三間圖樣筆法ともに新意を出し、巨鳥摯雄の氣、人に逼る、眞に威震八荒の概あり。公大に喜ぶ。

●芳崖曰く、此書を作すの筆法を俯覽に供すべしとて突嗟、袴をかゝげて、扇を執つて舞ふ。舞ひ且つ言ふ、公願くは、僕の脚を見よ。書法、すべて、此の舞の足元より悟入すと。

●舞甚だ長し。公曰く、登閣の時刻廻れり。芳崖曰く、公暫く待て。見て、終局に到らずんば要領を得ずと。如此にして、彼は遂に一曲を舞ひ畢る。

●聞く、公、登朝し、閣僚に語る。今朝、面白ろき人來れり、云々の事あり、頗る脫俗、奇士也。公山縣、乃ち芳崖の事歴を語るといふ。抑、公伊藤を要して、首相官邸の應接室に、綺羅びやかなる椅子の並べる中に、朝早く舞ふ者、大酔漢にあらずんば、則ち「生酔の大書才」の外に、其人無き也。

●此日、炎暑甚だし。芳崖、滴る汗を拭き〳〵取調所に來る。曰く、今朝は公も嘸驚きたらん。破顏一笑す。滿坐乃ち大に驚く。

●鷲の畫、今、美術學校に藏す。或はいふ、芳崖重ねて公伊藤に至る。公曰く、末松、金子、此畫を評す。筆法奇に過ぎて醇ならずと、如何。芳崖默して答へず。乃ち請ふて、壁間の畫を徹去し、携へ歸て取調所に置く。相傳へて、美術學校の什寶と爲るといふ。

●後日、公伊藤、芳崖を品川の自邸に招宴す。待遇頗る鄭重。敬意を拂ふて、此の大畫才の畫談を聞く。良夜、雲無く、長風簾を拂ふ。樓頭月色、東京灣に滿つ。月下の二大才、飲み、飲まず、迭ひに生醉の畫趣を發揮す。

●芳崖、狩野友信に語る。當日、頗る盛饗。唯だ其中に、吸物あり。魚腸の如きものを容る。公に問ふ、何物ぞ。公答ふ、鯛の眼肉也と。心ひそかに、魚眼などを饗するは如何なる事ぞと思ひたれど、折角の御馳走なればとて、汁ばかり吸へりと。友信大に笑ふ。

●芳崖が、料理など一向知らず、唯だ一意、畫趣に醉ふの面影、此の一事を以ても、想見するに餘あり。

其八

●吾友、千山萬水樓主人、自ら閉戸閑人と號す。京都に在り。吾輩が「舊藩と新人物」を、讀賣新聞に連載するや、彼、書を寄せていふ、足下、日々、四五人を評論す、人を喰ふの罪亦甚しからずや。吾輩謂ふ、吾輩は人を喰ふにあらずして人を飲む者也。吾輩、近年、酒を飲まず、則ち人を飲んで生醉となる者也。閑人以て如何となす。

●吾輩、京都に遊び、一夕、閑人の書樓を訪ふ。書樓、吉田町の宗忠神社石鳥居の前の邸に在り、正に眞如堂に對して設く。

●閉戸閑人、嘗て門を閉ぢず、客つねに滿つ。閑人決して閑ならず。閉戸閑人といふは、自ら其名を喰ふ者也。然れども、千山萬水樓主人は「閉戸閑人」の理想に醉ふ者に非ずや。

●吾輩の到るや、山人喜び迎へ、共に手を携へて書樓に登る。時に煙雨空濛、眞如堂の塔は、亂松の中に抽き出て丶、一望、舊京の風景、染むるが如し。未だ一杯の酒を飲まずして、早く此の好景に醉ふ。

●二人者、共に欄に倚つて、京都の古今を論ず。山人、吾輩の健啖にして、而して飲まざるを知る。則ち、盛んに、山海の美味を並列し、以て吾輩を壓倒す。

●二人者、食ひ且つ談ず。景、賞して飽かず、談轉じて盡きず、飲まずして、共に陶然として醉趣を發す。更移り、都ホテルの燈光チラ〳〵として遠く雨夜に輝く。

●別後、閑人、吾輩に寄書して、凉味一篇を寄せんことを求む。別に十行界紙一頁を添へ來る。如此、淸簡、他人學び得ず。

●閑人は善く讀み善く作る。筆を揮ふこと飛ぶが如し。彼の頭腦は澁滯せず。彼は、つねに停留を嫌ふ。近年、京都を愛して、安然として永住の意あり。吾輩、彼が適處を得たるを喜ぶ。

●閑人は、極めて淸きも、つねに動きつゝある人也。靜かにして閑なるが如くにして、而して、其の中心、つねに流れて息まざる水也。彼は千山萬水にあらず、淸き溪流の如き人物也。是れ吾輩の醉言也。

其九

●白桃花を醉はしめば、紅桃花となる可き乎。若し白桃花醉ふて紅桃花となるとも、吾輩は紅桃花を取らず。白桃花といへども、花底、寸紅を潮するあり。吾輩は寸紅の白桃花を取る。

●野の百合は、ゆら〳〵として「地の女神」の醉へる風情あり。赤あり、白あり、吾輩は、赤を取らずして白を取る。殊に、箱根山中より、伊豆天城山に特生する白花の巨葩に至つては、秀然として、精采、人を醉はしむ。絕大の麗人の、凉風に微醉を吹かしむる浴衣の嬌態にも似たる哉。

●醉は紅色を發す。紅は微紅を可とす。紅牡丹は、白牡丹に若かず。

●牡丹花は、或は推して花王とす。莊麗、實に比無し。吾輩も亦た之を愛す。然れども、牡丹花は、色ありて姿無し。白牡丹は、姿あり、韻無し。白花は、白百合第一、白牡丹第二也。而して、白桃花は、自から別天地を占む。

●嬌態は、醉態に發す。醉はずんば嬌趣なし。偏へに白くして寒き梅花は、自から人を醉はしめず。

●花醉ひ、人醉ひ、而して後ち醉趣畵く可し。梅花は餘りに眞面目也。唯だそれ、窓前老梅、月下に淸香を送るのとき、幽人、閑に芳醇を酌んで詩を話す。始めて一幅の詩趣を爲すべきのみ。

●梅花の精、美人とならば、氷魂雪肌、詩人をして歌はしむべく、醉はしむるに足らず。

●其角に「饅頭て人を尋ねよ山櫻」の句あり。山櫻は人

を醉はしめず。

◉三日見ぬ間の櫻哉。櫻花發く時、人は渡り鳥の北歸の心の如く、ソワ〱として定まざること醉へるが如し。「花撲二玉缸一春酒香」庭前一樹の櫻花、天も醉ひ人も醉ふべし。

◉「酒無くて何のおのれが櫻哉」といふは寧ろ野暮也。櫻花亂發するところ酒有らざるごと然し。駒勇み花散る。チリ〱に散るは、櫻花の醉態也。醉ふて管を卷かず、淡として散る。散り際鮮かに雅趣あり。

其十

◉瓢簞は、酒をして古趣を帶びしむ。今に至つては、散髮頭に瓢簞は似合はしからず。恰も、錦繪に、結髮の似合はしきが如く、瓢簞は、禿頭を喜び、結髮を喜ぶ。現代のものには非ず。唯だ、雅趣の中に存す。

◉吾輩の小學に在りし頃、「記事論說文例」の一書、盛行を極め、兒童の文章も皆其體に倣ふ。花を見、山に遊ぶの記事、必らず「一瓢を携へ」と言はざるは無し。而して、兒童も亦た、他日、花を見、山に遊ぶ、必らず一瓢を携ふべきものと思へり。

◉當年、一瓢を腰にして、花月を吟ずる老人多かりしが、今は、是等の老人と共に、瓢簞も見えずなりて、時ありて、古趣味の脇床に懸りて、古の雅趣を留めつゝあり。

◉千瓢は、瓢簞の趣味の尤も豪壯なるもの也。朝鮮併合の既に成る。太閤や必らず地下に一太白を浮べしならん。吾輩も亦た、此際、千瓢に對して、一痛飲せずんばあらず。

◉園中に植ふべきものは瓢簞、へちま杯なるべし。其の青きとき、出世間の氣あり妙に、醉趣を鼓吹す。

◉吾輩、一昨年、京都の春を尋ぬ。櫻花、半ば飛んで、新綠漸く漲る。武德殿の前を過ぐ。其の廣野の草、青ばみたるに、東山の翠光、一杯に映ず。其の中に、翁媼あり。毛氈を布き、坐して瓢簞の酒を汲みつゝ、悠然として、仰いで東山を見る。

◉今の京都は、日々に現代化しつゝあり。電燈や煙突は、東山に相應しからず。東山に調和せしむる趣味は京都を繁榮せしむる所以に非ず。

◉吾輩は、京都を行盡して、武德殿前に至つて、彼の舊京の雅趣を見、一見、恍として醉へる也。

◉瓢簞の味は、其の色、其の形、雅趣を帶ぶるにあり、瓢簞の未だ醉はざるものは未だ妙ならず。大醉して、眞紅を爲すものは、酒氣發露して餘情無し。半醉、恍

惚の色を爲すものは、仙風道骨に伴ふべし。

◉吾が家に大瓢あり、八升六合を入る。宜しく一大酒豪に伴つて遊山するに足る。而して、吾輩の亡父、酒客たらざるを以て、古色蒼然として、閑却せらる。

◉吾輩嘗て、岡本黄石を訪ふ。彼既に八十六。夫人も亦八十二。共に壽康欽すべし。殊に、翁は渥丹の色、詩仙の風骨を帶ぶ。壽老人の持つやうなる長き古籐杖を掛け、其の傍に、古小瓢を置く。宛然、仙界の酒趣あり。

其十一

◉上方は酒の國なれども、酒の人にはあらず。其の趣味は奈良漬に存す。吾輩は、奈良漬を嫌ふ。奈良漬は寧ろ女性の趣味ならずんばあらず。

◉古來、三都の人國記を言ふ者、京の着倒れ、大阪の食倒れ、而して江戸の飲んだくれ。若し、酒趣を以て三都を月旦せしめば、京は「竹の兒」「木の兒」大阪は「昆布の兒」而して東京は則ち「酒の兒」ならずんばあらず。

◉屋根船は墨田川の趣味にして「牡蠣船」は則ち淀川の需趣也。屋根船の勢力、漸く衰へて、船料理あり。牡蠣船も亦た加茂川に浮ぶ。大阪の酒趣の、漸く、三都を醉倒せんとするを見る也。

其十二

◉「酒の燗」といふは、酒趣の緊要なるものゝ一たらずんばあらず。◉熱燗は江戸兒の趣味也、吾輩は熱燗を嫌ふ。嘗て思ふ、熱燗は、日本人をして過敏ならしむる一要素にはあらざる乎。

◉酒の燗は、熱からず。而して温(ぬる)からず。潑剌の味を失はず、而して芳烈の香を發揮せしむるに在り。

◉若し、淺酌低唱に、侍して、清談を妨げず。隱然、興趣を梶取ること、瓦斯ストーヴの栓を加減する如くに、婉曲にして、而して、酒の燗をして、つねに、其の花時を保たしむる美人あらば、又以て、一代の才人たるを失はず。

其十三

◉酒の書趣は、古色第一。幽味可也。豪快、馬場三郎兵衞の大盃の如きも亦可也。粹趣、奢趣は、其の下也。

◉薩摩の健兒は、澤庵を咬みつゝ、芋燒酎を煽つて、士道を練磨す。前兵兒謠の書趣想ふべし。大根酒は、やがて、屋根船を壓倒したる也。

◉維新前、薩長の軋轢のとき、土州人、其間に斡旋し。艦清に調停の宴を張る薩より大久保甲東出て、長より

は周布政之助來る。此に一代の大人物、殺氣を齎らして、酒肉の間に折衝し、精采、一樓に湧く。

●會、酣にして、語、鋒鋩を磨き、酒頻りに進んで、玉山頽れず。周布、某、一曲舞ひ申すべしとて、三尺の秋水を拂つて起つ。明晃々として、歴會者の鼻端に接して光る。劍氣先づ滿坐を壓す。大久保、某も亦、田舍藝を御目に懸け申さんとて、ヤット懸聲して、一枚の疊を引起し、隻手を以て之を頭上に環ぐらし盤舞す。其の危ふき事言ふ可らず。

其十四

●「天子呼來不上船」は、酒中の興趣をいふ。此時、神來の興動き、不滅の傑作成る。而して、其の成るの時は、酒醒むる也。

●白樂天、舟中に酒を載せて、江上、美人に逢ひ、其の薄命を聞く、娉婷十七八。涕涙眞珠の如く、雙々として月中に墜つ。此時、眞個、千古の書趣。而して、酒頓に醒むる也。

●閒說、中京の美妓、家を爲す者少からず。其の家、必らず、瀟洒たる茶室を構ふ。酒趣既に發揮するの後月を踏み、客を引きて、閑に松風を聞かしむ。玉露一碗。酒味則ち大に活く。

●酒の醒趣こそ、人生の高趣なる可し。醉一八分、尚ほ神身に浸みて殘り、神氣則ち益精明を加ふ。衣帶を脫して、寬濶のねまきを著け、花を活け、爐を擁して、茗を啜りつゝ、讀み且つ書く。酒氣、沸々として、筆墨の間に迸るを覺ふる也。

「酒中趣」一書、支那人の著述、酒間の情態を配して委曲を盡す、頗る反省に資すべし。其の中に、古今、酒中の聖は、孔子也。子の言に、酒無量不及亂といふと。又た酒中の一快音たるを失はず。此の書は、寸珍として、印行し、以て廣く、天下の酒客に頒つべきものなるべし。

吾輩、新春に、いつも思起すは、十七八歲の春の事、學校休暇を家に暮らし、時、村會議員を訪ひて、爐邊に、農事を聽く。主人、鷄小屋より新卵を籠に盛り來る。吾輩其の七箇を喰ひながら濁酒に頰を染む匆々、廿年、彼の議員と相逢ふ毎に、共に此事を語り出して笑はざること無し。

黑頭巾記

人物評論（十三）

大隈伯論



△大隈伯

文學博士　三宅雄次郎

明治の初、中井櫻州が九州より歸り、伊藤井上等數氏の神戸に居るのを尋ねて曰ふには、今度出て來る大隈八太郎といふものは大變な奴じや、我々は迚も叶はぬと、當時伯は斯う見られたのである。幾ばくもなく廟堂に要路を占めた、別段に功勞の著しいてもない、只才氣の煥發したるを以て

擧げられたのである。元より未だ薩長藩閥の確定せず諸藩合同して事を爲さうといふ事で、特に肥前及土佐に重きを置き、肥では大隈のみでなく、副島、大木等も重んぜられ、土では板垣、後藤等も重んぜられる。薩長にはそれぞれ先輩があつて、西郷、大久保、木戸、廣澤、大村等が有り、山縣、伊藤、井上等其下に從つて居つた、中に早く死んだのもあるが、長では木戸が代表者といふ有様である、大隈伯が初め伊藤、井上等數氏の上に位した故を以て强ち優劣を分つ譯に行かぬが、實際才幹に於て他の企て及ばぬ所もあつた、外國語の不充分なるに拘らず、外國人を相手とするに於て伊藤に優り、財政上の智識及び判斷に於て井上に優つた。外國人に照會する場合、人は多く思案に思案を重ね、ひたすら過失なきかを心配したが、大隈は即座に口授し、其儘發送し、それで事が能く運んだ。

書生より身を起し、外交事務に當り、財政事務に當り、其他何くれとなく携はり、珍しく才幹ある人物と認められ、岩倉大使一行の洋行の際、大隈は大久保の留守を引受けた。一行の歸朝する迄成るべく現狀を維持する約束であつたが、西郷板垣副島等を初め、朝鮮の忽せにすべからざるを主張し、何等か大事を決行せんとし、平素温厚な西郷も大に大隈を叱した事があるけれども内地より一行の早く歸るとを促し、歸つて遂に大破裂を生じ、大久保を中心とする内閣が組織された。大隈は大久保に信ぜられ、其留守を托されたが、外遊中の幕僚は伊藤であつた、伊藤は木戸と離れて大久保に從つたので、木戸は怒り、絶えず其不人情を口走つた、けれども大使の一行中最も働を現はしたのは伊藤であつて、爾後大久保の智慧袋となり、政治に參畫した。が大隈の才幹は尙ほ優に之を凌ぐかに見え、負けず嫌ひで自ら勉めた處もあらうが頗る閣員に重きをなした。ところが十年に西郷死し、木戸死し、翌年實權を握つた大久保も死んだ、岩倉公は存命であつたが實際寄合世帶の有様となつた、が長く寄合世帶で續く可でなく、權力爭ひの暗鬪が行はれ、薩長漸く相提携し、殆んど事毎に一致の態度を取る、大隈の負けず嫌ひは唯之に從ふを欲せず、逆に出て一擧に薩長藩閥を突き崩すとを算當し、御巡幸の際有栖川左大臣の手を經て國會開設を上奏し、事洩れて大騷ぎと爲り、大隈關係の者を放逐する事と爲つた。是より大隈は野に下り改進黨を組織したが、實に薩長に對し負けず嫌ひの態度に出たのである。薩長固く相結托したものゝ、尙ほ常に競爭を免れず、

十八年の末官制大改革の際、薩の黑田と長の伊藤と、孰れか先に首相と爲すべきかといふ問題の起り、黑田が前に爲るべきであつたのをば、故障を起したものがあつて伊藤と定まつた。が漸くして伊藤内閣の六かしくなつた時、黑田を迎へ、次いで黑田内閣と爲り、黑田は大隈を外務大臣としたが、實際は大隈内閣ともいふべきものであつた。後、長の山縣が首相と爲り、更に薩の松方が之に代り、次いで伊藤内閣が代り、後又松方内閣の成つた時、大隈は再び外務大臣として入り込み、是が分裂して伊藤内閣が成り、次いで大隈首相の下に憲政黨内閣が出來上つた、是れ大隈の政治界に於ける絶頂で、其瓦解すると共に漸く政治より遠かるの已むを得ざるに至つた。若し大隈伯をして薩若くは長に生れしめたならば、絶えず政治界に重要な位置を占め、公爵と爲り大勳位となつて居たてあらう。又薩若しくは長に從つて居つたならば、少くとも侯爵になつて居るてあらう、が生れが薩長でなく、又負けず嫌ひで之に從ふことが出來ぬ、忌ま〳〵しくてならぬ。併し全く從はぬではない、思ふ儘に働かすならば從ふ、それには長州に才幹を憑むものが多くて與に共にし難い、薩州ては人の助言を容れ智惠を借りる方である、それて大久保の下、黑田の下、板方の下に働いた。松方は嘗て己れの下僚であつたが、それにさへ從ふを辭せなかつたのは實權を得られたからである、實權が得られゝば甘んじて從ふが、得られなければ從はぬ。大久保は横死したので分からぬが、黑田とは手を握りつゝ共倒れとなつた、松方とは手を別ちつゝ共倒れと爲つた。

才幹に於ては啻に薩出身に優るのみでなく、長出身にも優り、優らずとも劣らぬ。が才幹の優つて殆んと何事をもし、行くとして可ならざる無しの調子である丈、それ丈精神が一つに籠らぬ、一つを全くせずして早くも他に力を分つ傾向がある、若し一つに集中し得たならば、何事をか大に爲し遂げたのであらう。慥に外交家たるの資格があるけれど、それに專らでなかつた、慥に財政家たるの資格があるけれど、それにも專らでなかつた、內務なり、農商務なり、遞信なりは何でもない、司法なり文部なり、言ふに及ばぬ、陸海軍とて爲れと勸められたら、辭せぬてあらう、が政治上特に成功として目すべきもの少く、概ね失敗を以て終つて居る、多能は天分にしても、多能の爲に事が中途に破れたと云はれぬて無い。併し多能でも全く自ら纏

むる事が出來ぬでもない、集中するの必要を認むれば隨分集中をもする、多能ではあるけれど、本來の性質からいへば、政治家として成長して來て居る、ポールンポリチシアンとすべきである。

薩長より放逐され、薩にも長にも舊同僚の公侯爵と爲つたものがあるに、自らは伯爵たるに止まり、元勳の優遇をも蒙らぬのは時勢の變遷に因る。若し薩長から放逐された當時の情勢で續いたならば、明治の政治家として第一に上り、薩長連をして顏色なからしめたかも知れぬ、然るに內治を先にし國權に及ぶといふ舊改進黨の綱領と全く逆行する時勢と爲つた、即ち陸海軍を擴張するの必要を生じ、更に之を實際にするの氣運と爲り、二十七八年役あり、北淸事變あり、三十七八年役あり、軍人が最も働を現はす樣になつた。斯かる大なる戰役が無かつたならば、山縣公は有れども尙ほ無きが如きものである、陸海軍の必要を增すと共に公は自づと必要なる人物と認めらるゝに至つた、二十七八年役後は伊藤公さへ山縣公に對抗するに困難を感ずる次第であつて、政友會を組織し統率しやうと思ひ立つに至つたのも大隈伯の改進黨を組織したと大差ないのである。三十七八年役後には益々勢力を失墜して但だ前よりの惰力、特に陛下の御親任の厚い所からして重く見られたのであつて、實は山縣公の一雨每に勢力を增し來るを眺むる外は無かつた。大隈伯は尙更である。元帥の隨一たる山縣公に對しては如何ともする譯に行かぬ、之に反抗すれば益々政權から遠ざからねばならぬ、況んや伯は本來公と餘り面白からぬ間柄である、現在の政治界に立つて雌雄を爭ふは極めて困難である、公の人格の當る可らざるではない、軍隊の重きを增して來た結果である、大隈伯が政治界で志を得ぬのは時勢が最も與つて居る。

多能の爲に失敗したといはゞいへ、志は首相たり若くは首相の實權を收むるにある。それで外交に專となり、財政に專となり、其他一つの事に專となるを得なんだのである、若し今少し志が小さかつたならば、一方面で何事をか爲し遂げたに相違ない。首相たるの志を持つて首相たるを得ず、一度首相と爲つても、期間餘りに短かく、爲に事概ね半途に終つたのである。自分で組織した改進黨をも去り、後の進步黨即ち國民黨に關係あるが如く無きが如きの形となつた。黨首としては不適當と見えるが、政黨ありてより黨首として成功したものはない、板垣伯も成功せぬ、西鄕侯、品川

子も成功せぬ、伊藤公も成功せぬ、西園寺侯は何だか分らぬ、原、松田二氏は總裁の下に働くもので、自ら總裁として如何かは分らぬ、只一人星は黨首の資格を備へて居つた樣てあるが、未だ確めらるゝに至らずして死んだ、大隈伯は星の樣に博徒の親分然として情を以て人を絡み付ける樣なことはない、其點に於て西鄕南洲とも性格を異にして居る、不言の間に人を引き付けるといふ樣な事はない、がそれといつて又別に長所もある、必ずしも黨首たるの器で無いとはいへぬ、黨首として失敗したのは時勢の爲に破られたのてある。

が多能なることと明治年間稀に見るの人物てある、餘力を以て起した早稻田大學は福澤翁の慶應義塾に頡頏し、將に之を凌駕しやうとしつゝある。學才に於ては福澤翁の上に在るらしい、翁は早く外國語を修め之を活用して世間に益したが、學才に富んだとは言ひ難い、明治十五六年頃時事小言を著はし、中にゴルトンの遺傳說を引用した、西洋の高等智識を酌み取つたのはそれ位の處てある、其頃盛んに進化說が入り込んだが、如何に之を解釋して居たかは分らぬ、三十四年逝去の頃まで種々の新說が入り込んでも餘り之に目を觸れなかつた樣てある、創見はあつても、科學的智識に乏しかつた。大隈伯は原書を讀むの力は翁に及ばぬ、が譯書を讀んだり人に聽いたりして理窟を消化することは翁に優つて居る、新しい智識の入り込んで來るのに後れぬ、若し學問に專てあつたならば大學者と爲つたてあらう。耳學問に長じて居ることは略ぼ高島嘉右衛門と同類てある、能く複雜なる理窟を飲み込む力を備へ居るが、若し比較的缺けた處ありとすれば美術文學の類てある、がそれも建築なり、園藝なり見分くることが出來る、專門に修めたなら立派な建築家と成り得たてあらう、が繪書は疑はしい、音樂に至つては愈よ疑はしい、詩を味ふが如きも望み難い。が何にせよこれ程多能、少くも多能で有り得るは珍しい、靑木子は智識を誇る方てあり、智識の分量に於て慥に伯に優つて居るが、消化して自在に活用するに至つては到底及ぶ所てない。しかし一得一失て、活用する能力ある爲に、餘り現はし過ぐる、言はても濟む事迄言ふ、爲に纒まるべき事の纒まらぬ事もある、が兎も角著しく天分に富むだ人物と言はねばならぬ。

維新前の小栗上野介は類似の人物てあつたと言はれる、十分才幹を伸ばさないて終つたが、才幹の秀てた事は或は似て居るやも知れぬ、幕末には智慧に於て小

果に敵し得たものは無い。伯は英國のヂスレリーなりグラッドストーンなりに比べても一層多能だとすべきである、けれどもヂスレリーの小說を書きグラッドストーンのホーマーを論ずる如きは伯の難んずる所であり且つ黨首として黨を統率し政治界を切り廻す點に於ても及ばぬ、ヂスレリーは伯の年齢で死んだが猶ほ政治的生命は盛であつた、グラッドストーンは九十迄政治の爲に奔走した。伯は政治家として生れ、そして政治に失敗し、餘命を政治以外の事に盡さうとして居る、政治家として一生を政治に委ねた者のやうな譯にゆかぬ。が是れ主として時勢の然らしむる處である、英國なれば一生政治界に濶歩したてあらう、が時勢の爲に敗北し、而も猶ほ優に活動するの餘地を占めて居り、國民讀本を著し尙ほ頻に社會教育に從事する。愈よ能力の富んで居るのを證するでは無いか。そして伯は從來事六かしくなると中途で棄つる嫌があつたが、近來南極探檢に飽く迄力を致したが如き、又意氣の重んずべきものを見る、伯の事業は今日猶ほ終つて居らぬ、望を屬したるものをして失望せしめぬ樣にあれ。

△大隈伯論

靜觀居主人

私が大隈さんに一番感心して居るのは、辯舌の面白い事だ。辯舌が面白いといつた所で、今の所謂辯舌家を見たやうに、別に巧みな言ひ廻し方を考へてやるといふやうな人ぢやない。頭の中で議論を組立てることの敏捷(すばしこ)く手早い事、何でも取込んで來て堂々たる大議論を突嗟に纏め上げる手際。さういふ點で私はあの人を感心して居る。どうかすると、歷史の上から數千年前の事に溯つて、又逆まに數千年後の事に飛んで來る。座つてゐて兩手を擴げると、片一方の手では亞米利加を摑み、片一方の手では歐羅巴を握るといふ有樣である。畢竟それは記憶がよい爲めであらうが、實際あの人の記憶の機關といふものは餘程よろしい。辯舌の上からいつたならば、あの位の年になつた政治家の中で一寸敵手(かなひて)はありますまい。死んだ伊藤公でも匹はない。尤も座談は伊藤公もなか／＼旨かつた。けれども演說にかけては到底も大隈さんに匹はない。兎も角も大隈さんの演說には、何も彼も言ひまくつて了ふといふ勢

がある。それがあの人の長所なんだが、詰る所それが又あの人の短所であるかも知れない。あの辯舌丈けで維新當時の諸豪傑に容れられるといふ事は先づありやうがなかつたらうと私は想像する。維新の諸豪傑の中て、政治家の方では先づ大久保が第一である。處て大久保にあの辯舌でやつたからとて取り入りやうがない。ナニ口先ばかりだといふ考を大久保に起させはしなかつたかと思ふ。それから政治家以外の豪傑は大抵軍人か若くは半軍人だ。そこらになつては尚更らで、あの辯舌で到底うまく矢利きはしなかつたらうと思ふ。

そこで先生が世にあらはれた腕の問題になつて來るが、辯舌では到底いけなかつた。然しながら其財政上の仕事は大分重寶がられたに違ひない。井上も澁澤も私共には出來ませんと大藏省から逃げ出した其後を引受けて思ひ切つて大山を張つた。歳入を思ひ切り大きく積つて、歳出を其中に篏まるやうにした。危ない事であつたが旨く當つた。あれは全くあの人の腕だ。腕は腕だけれども、私にはどうしても山としか見えない。然し面白い山だ。張つて見たい山だ。そしてあの人は張り當てた。若しあの調子で今の支那の財政整理をやつたならば詰度當る。目下の支那の財政は困難だ。けれども、國に力がある。維新當時の日本よりも更らに大きな力がある。總督衙門とか巡撫衙門とかで、停滯してゐるからあんな風だが絞つて絞つて絞り上げたならば、歳入も現在の幾倍ともならう。今一億かそこらの歳入が宣統三年には三億になるといふ事になつて居るが、之を六億位にするのは譯のない話だ。大隈流に一山張つて見たらば朝飯前の事かも知れない。大隈さんがもう三十年も年が若かつたら、支那の財政顧問に推薦して見たい。隨分面白かつたらうと思ふ。惜しいかな、大隈さんは七十幾つかになる。

一體大隈さんは支那の事には割に明るい人だ。佐賀といふ所は昔からよく歴史を讀んだ所だ。大木喬任でも副島種臣でも皆歴史で叩き込んだ人々だ。江藤新平丈けは韓非の刑名の學をやつた人だが、他は大抵歴史て仕上げた。大隈さんも江藤風の刑名學派でなく、學問の畠は矢張り大木や副島と同じだ。それに長崎に行つて西洋の事情も見聞したから早くから世界の形勢も飲み込めた。が其元は支那の歴史をやつて歴史の上から治亂興亡の跡を研めた。で支那の歴史、支那の學問には割りに明るい。だから支那の事は何でも直ぐ腹に

入り易いものと見える。其割合からいへば、西洋の事はエライことをいひ、エライ事を知つて居るらしく見ゆるが、實は極めて粗噛（あらかみ）だらうと思ふ。

大隈さんは一時エライ外交家と思はれた時代があつたけれども、然しどうでありましたか。私の見る所では、大隈さんといふ人は、割合に無定見な人、不決斷な人だ。それで失敗のどん底までずうと失敗して了ふ。踏みとまりがない。さう見えぬのは大言壯語で潤色して居るからだ。こいつは政治家としては餘程の弱點でせう。成功の出來なかつたのは其點なんだと私は思つて居る。極めてエライ意見、エライ決斷らしく思はるゝが、實は極めて粗造粗雜なものだ。只其れを緻密らしい議論で一寸潤色してある。それに比べると、議論が丸で駄目、説明も駄目、辯解も駄目な山縣のやうな人、あゝいふ人の方が政治家として成功するのである。山縣さんは矢張り多少大久保公に似た所がある。あの意地の強い、思ひ極めた事は是非やらう、手も足も動かなくなつても、剛情丈けても張り通して行かうといふ態度、あれはくつついて行く人からは當てになる、頼みになる所がある。あそこは一寸大隈さんのお齒に合はない。大隈さんの方からは、ナアにあれがと、山縣さんを思ふかも知れないが、山縣さんの方で大隈さんを見縊る程度はもつとずつと酷いもんでせう。初めの中はさうでもなかつたらうが、近十年はお話にならぬ位劇しいものだらうと思はれる。

もう大隈さんも何れあれでお終ひだらうと私は思つて居る。

惜しい事は大隈さんをもう三十年若くして支那に持つて行かない事だ。

もう一つ惜しい事は大隈さんを五十も若くして、今から新聞記者に仕立てゝ見たならば、日本中は愚かな事、どうかすると歐羅巴でも亞米利加でも、あの位吹ける人間はゐないかも知れんと思ふ。

△大隈伯爵

松井柏軒

◎大隈伯は大膽豪放な人で、細心周匝な方ではない、一氣呵成的な方で、愼思熟慮、能く謀り善く斷ずる方でない、素より聰敏活達ではあるが、政事家としては其の値が頗ぶる疑はしい

◎其の昔、八太郎時代から、長崎邊で早や千金一擲敢て吝まざる風が有つたとか、一個の平民でありながら、動もすれば山内容堂式の活達な遣り方が見へたやうだ

◎明治の初年に有ては、早くから西洋文明の事情に通じて居たから、又部下にも相當な新知識が有つたから、伊藤、井上の諸卿とハイカラ政治の急先鋒で有つた、殊に之を遣るに大きな大名のやうな活達豪放な氣象を以てしたから、其の政府に於ける勢力は、中々花々しいもので、何等の武勳がないにも拘はらず、巨然として明治政府の一隅に雄視して居た、此の點に於ては、流石の伊藤、井上諸卿と雖も、伯に一歩を譲らざるを得なかッたてあろう

◎其の大藏卿として多年樞位に在つたがために、一時は非常な實權が有つた、大藏卿は勘定方である、勘定方の如きは、算勘に達者な卑人のする事て、苟くも武士の携はるべきものでないとは、舊時代一般の思想て、幕府なとても、勘定奉行といへば、餘り高い地位てはなかッたのだ、明治の初年ても矢張り此の調子て、大藏卿などはといふ風が見へた、けれど大隈伯は西洋文明の事情に通じて居るから、政府財政の甚だ要樞であることを知つて居る、政府多數の人々は、寧ろ大藏如きへは大隈を置て澤山だ位ゐに見縊つて居たのであろうが、伯自身は之に甘んじて、其の大なる實權を握つて居たのである、現に大藏卿の勢力て岩崎彌太郎を助け、之と結托して、今に至るまで尚ほ一種の金權の一端を握つて居るのは、此の結果であるまいか

◎今の京橋弓町に在る萬朝報社の家屋は、其の初め京橋が未だ餘りに繁榮せぬ頃、即ち見世物小屋などの此の邊に散在して居た頃、大隈伯が建てたのだといふが、我々當代人に珍らしいのは、其の隱れ路なるものが多いことてある、女中部屋かとも思はれる二階の四疊半室の押入を明けて、右手の或る板をソッと押すと、其れが蓋に爲つて居る、之から這入つて行くと、天井の上に低い欄干を附けた通路がある、即ち秘密な逃げ途だ、又十六疊室(?)の床の間の疊を揚げると、底板に二尺四方位な穴が明く、之から直ぐ潜つて椽の下から外へ出ることが出來る、又其の次に六疊室の佛間かと思はれるのがある、佛壇らしい棚の下の漆で塗られた板をドンと突くと、其れがガン燈返しに爲つて、椽の下から又外へ逃げ出る途がある、何の事はない强盜か何かの邸のやうてあるが、實は刺客の襲擊から免がれる用意

てあるといふとだ、伯が當時世上の一部から咒詛されて居たよは是ても分る、併し其の建築の具合を看ると、當時に在ては隨分贅澤なもので有たろうと思はれる、夫人室の八疊六疊二室を通じての椽側などには、立派な日向杉が用ゐられてある、厠の一枚板の戸なども美事なものだ、今日からいへば何てもないが、當時に在ては、中〳〵思ひ切て數奇を凝らしたものと思はれる

◎其の次に譲請して引越したのが、飯田町の今の佛國公使館の處て、是は明治の初年に在て、大隈伯の驕奢を謳はれたものだ、玆にも秘密な逃路があるか否やは知らぬが、其の建築といひ、庭園といひ、明治の初年には實に大したものなそうてある

◎早稻田の今の邸ても大したものだ、其の溫室などは、最も伯の自慢なもので、時々世界無双とまて自讃して居る

◎何かの披露て、徳川慶喜公や鍋島侯澁澤男などを招待して觀菊會を催ふしたとがある、最初は庭上て宴を張る筈てあつたが、生憎風が寒いといふので、伯は一令の下に御殿のやうな大廣間へ、椅子卓子を持ち上げさせ、來客一統に、靴のまゝ立派な疊の上を踏ませ着席させたとがある、一寸したとのやうだが、普通人の遣り得ぬ處て、實に伯の活潑な氣象が能く見へる

◎政治家としての伯に至つては、幾んど御話にもならぬ、其の創立した改進黨は果して何の體ぞといへば直ぐ合點が行くてあらう、伯は自由黨に於ける板垣伯のやうてはないけれど、結局は併し五十歩百歩だ、其の松方伯と聯合した時でも、板垣伯と聯合した時でも、乃至伊藤公と聯合して桂内閣に肉薄した時ても、實に政治家とは思へぬ程に拙な遣口てあつた、新政黨組織談の有つた頃、犬養、大石兩派に對する應酬振ても、世間多く伯や耄せりと評したけれど、何も耄したのてはない、是が伯の政治家としての本色なのてある

◎或は外交家としての伯を云爲する人もあるが、其條約改正當時の御手際を看よだ、又布哇へ浪速艦を遣つた御手際を看よだ、當代の外交家から言つたら、伯の如き未だ外交の初歩だも辨へぬといつて罵るであろう

◎伯は外交家としては、少くも時勢遲れてある、田舍政客が伯の元氣の宜い説法を拜聽して隨喜するのは今も尚ほ有るらしい、若し夫れ新聞紙が往々にして伯の説なるものを掲ぐるのを看るに至ては、啞然たらざるを得ぬ、其の説は幾んど中流記者の議論よりも多く優

つて居るとは見へぬ、新聞紙が動もすれば好んで伯の意見を紹介するのは、唯だ伯の勢力の惰力に過ぎぬ、然らざれば其の新聞紙の不見識と斷じて宜かろう

◎伯を政界から葬むり去つたのは、殘忍のやうてはあるが、實は伯に執て却つて幸ひてある、伯は實に政界以外の廣い處へ復活して來たのてある

◎官學に對抗して、私學の名譽を輝かし、學問の獨立に取て偉大な効蹟のある早稻田學校は、其の實高田、天野、坪内三博士の力に俟つとが多いかも知れぬ、併し之を保護し庇護して今日あらしめたのは全く伯の力てある、伯の保護がなくば、到底今日に至るとが出來ぬと信ぜられる、果して然らば、伯は早稻田大學門頭の銅像と同じく不朽てある、伯をして不朽ならしむるものは之てある。教育家として伯の値の如き問はずして可なりて、唯だ此の儼乎として大なる私學の創立者保護者として、伯の彼の『日本の偉大なる平民福澤諭吉』と共に不朽てある

◎伯の大膽活達なる、常に一夕千金を擲つて盛宴を張る、日々六十人前の料理を調進して客の用意を缺かぬといふが如き、實に大きな大名式てはないか、外國人の來る毎に之を接見し饗應して、少しも費ひを厭はぬから、カウント、オホクマなる名聲は、今や世界的に爲て居る、伯や足一歩も海外に出てずして然り、交際術の妙を盡したもので、併し其れも伯の御手際ても何てもない、實に黄金を湯水の如くに散布して、豪放活達を極める結果に外ならぬ、伯もまた一代の人豪なる哉てある

◎日露戰役の當時の如きは、伯は世界の同情を日本に吸集すると謂つて、外客を逃さず盛饗したものである、此等は同じ大臣揚りて一廉の金満家たる松方井上の兩侯は勿論、山縣公でも桂侯でも、中々出來ぬ藝當である、此等の諸卿は畢竟するに伯の豪放活達がないので、此の點からいへば、伯は實に當世に冠絕する、若し伯に與ふるに三菱三井の富を以てしたら、伯や更に多く世界的に、又間接に多く日本國のためにもなるてあらう、吳々も伯に持たせて見たいものは、政權てもなく、教育の實權てもなく、唯だ三菱三井の富てある

◎伯の政治上の功過の如きは、本篇て評論する豫定てはない、玆には唯だ赤裸々の伯を拉し來つて、單純な人物評の一端を試みたまでとある、一言にして盡せば、伯は知識あり時勢に多く離れぬ大きな御大名である、最も豪快活達な大名氣質を具へた人てある

△大隈伯論

法學博士　戸水寛人

大隈さんについて私の考へて居るとをお話すれば、先づ第一に、個人としてあんなに澤山物を知つて居る人はたんとあるまいと思ふ。如何なる方面の事でも知つて居る。政治上の事にしろ、社會上の事にしろ、財政上の事にしろ、大隈さんの口を出せぬ問題は滅多にない。あの位に澤山に物を知つてゐる人は、世界にも其例稀であらうと思ふ。一體學者といふものは、獨立の研究をして、人の研究しない原理を發見する任務を有つて居るものであるから、其點からいへば大隈さんは學者ではない。大隈さんには獨立の研究はない。然し、多く物を知つてゐるものを學者といふことが出來たならば、大隈さん程の學者は少いと思つてゐる。

又大隈さん程に斷行力に富んだ人もない。是れ迄政治の局に當つてやつて來た事を見、又は聞くと、なか〳〵斷行力に富んでゐる人であることが分る。明治二十二年頃條約改正をやらうとした。井上さんがやり兼ねたものを大隈さんが引受けた。歐米人は日本の提議に同意しない。仕方がないから歐米人を日本の裁判所に傭入れて、埃及の混合裁判のやうなものにして、それによつて條約を改正しやうとした。今日から考へて見れば隨分突飛なやり方で素より贊成は出來ない。其當時に於ても隨分世人の爲めに批難された。それにも拘らず大隈さんは日本の爲めに利益なりと信じて、百難を排して斷行する考であつた。來島恒喜の爲めにダイナマイトを擲けられて隻脚を失つたのも其れが爲めである。政治家として大隈さんは此點について失錯したといつてもよい。然しそれと同時に大隈さんの勇氣には感心せざるを得ない。一旦之がよいと信じた以上には何人が之を非難しても之に屈することがない。百難を排して之を實行する勇氣を有つて居る。

又大隈さんは非常の智者であるから、六つかしい事でもいろ〳〵の方法を考へて之を貫くの道を案出する。之は私が一々例を擧げなくても大隈さんの傳を知るもの、皆異論なき所である。

然らば大隈さんは何故に政黨の首領として失敗したかといふに、私の考ふる所によれば、其唱ふる所の主義が日本の國情に合はんからだと思ふ。大隈さんは盛んに地租輕減を唱へた。之によつて地方農民の人望を

得やうとした。けれども其割合に人望を得ることが出來なかつた。其原因は議論が國情に合はんからだ。地租輕減を唱へ又其他の税を減じ若くは廢しようとしても、之がなか〳〵實行出來ない。何故といふと、日本は漸次に膨脹しつゝある。軍備を初め其他百般の施設に於てなか〳〵費用を要する。此等の事に關して大隈さんは消極主義を唱ふるけれども、然し日本の現今の狀况をいへば矢張り現政府の如く積極主義を實行した方がよいと思ふ、寧ろ此れ以上に積極主義を實行した方がよいと思つてる。それをするには多少の金が要るのである。だから地租輕減などは到底行ふ事が出來ない。日本の國情に合はん所の議論は之は無責任の議論である。大隈さんは屢々大言壯語して無責任の議論を唱へたから、政治家としての信用を失つた。だから私の考ては大隈さんは政黨の首領としては未來永劫成功しないと思ふ。一口にいへば大隈さんは地租輕減で農民の人望を取らうとして取り損つたのである。今日の國民黨の前身は進歩黨て、其前身は改進黨てある。今日の政友會の前身は自由黨てある。改進黨と自由黨とを比較して見ると、改進黨は都て出來た政黨てある。大隈さんは在朝の政治家として意の如くに政治をなすことが出來ず不平に堪へずして野に下つて改進黨を作つた。それて改進黨は都て出來た政黨である。之に反して自由黨は地方に出來た政黨である。薩長が德川幕府を倒して天下を取つたが、地方の有志は薩長に服しない。其不平有志が團體を作り、それが固まつて自由黨を作つた。それて田舍に出來た自由黨の方が地方の事情に委しい。故に日本の國情に合ふ所の議論を唱へる。都て出來た改進黨は都の事のみ知つて地方の狀况に暗い。之が即ち漫りに地租輕減などを唱へて失敗した所以てある。地租輕減固より惡るくはない。自由黨も之を行はんと思うた。けれども物各々程度がある。改進黨を卒ゐた大隈さんは程度以上に之を唱へて失敗したのである、だから私の考をいへば、大隈さんの政治家としての命脉は、過去の歷史に於て光を放つてゐるけれども、今後之より以上に政治家としては成功しないと思ふ。

大隈さんは政治の方面に於て失敗した。然しながら教育方向に於ては大いに成功して居る。即ち早稻田大學なるものは、慶應義塾と相並んて日本に異彩を放つてゐるのてある。大隈さんを助けた人の中にも、高田、天野、坪内其他有力なる人物があるが、然し此等の人

物のみがあつても大隈さんがなければ、恐らくはあんな事は出來ないと思ふ。今日にあつては私立大學は、官立の帝國大學に劣るが、數十年を經たならば、其勢力恐らくは相拮抗するに至らうと思ふ。だから大隈さんは政治に失敗しても敎育には成功して居る。一通り滿足してもよからうと思ふ。而して早稻田大學を興した功績は將來に於て益々光輝を放つであらうと思ふ。要するに大隈さんは頗る偉大なる人物であるといふに躊躇しない。

△早稻田邸の大隈伯

吉野臥城

一　早稻田の名物伯

大隈伯と云ふ名は、日本の津々浦々まで行き渡つて居る。遠く海を越えて、歐米まで聞えて居る。地方人士は大隈邸に伺候した事を榮譽とする。朝野の政治家は、能く法螺を吹く親爺ぢやと云ふ。偉人崇拜の歐米人は、大隈伯の謦咳に接して滿足して歸る。て、伯に面會する多數者は、早稻田大明神に參詣するか、日本の國寶を拜觀するか位の心持で來るのであらう。

伯の邸に半月も詰め掛けて居れば、居ながらにして世界各國の人士と交際する事が出來る。珍談奇聞も聽く事が出來る。新聞記者や雜誌記者で、種取りに來る者が一日でも絕えた例が無いさうだ。林子平式に洒落れて云へば、『早稻田の田甫路は世界の街衢と隣接して居る』のである。

更に誇張して云へば、伯の門戶は常に世界に向つて開放されて居る。何人の來り、何人の去るを拒まない。けれども、正玄關は平日鎖して人を出入させない。特別の賓客でも無ければ開けぬ。運慶作の仁王像が、退屈さうにのびを打つて居る。夫れとは反對に、伯は來訪者の應接に忙殺されて、應接間から應接間へと隻脚を運ぶ。勿論隻脚と云つても義足を用ゐて居るから、知らぬ人には少し跛を曳くとより外見えぬ。

椅子に腰を下すや、靴下を穿いた足を前方に投げ出し、兩手を帶に挾んて、さて話を始める。話が盡きさうになると卷莨を吸ふ。興に乘ずると、卷莨が指先で灰になるも忘れて話を續ける。問はれた事に答へると云ふよりも、自分で氣なりに閑語するのが得意らしい。聲にはさびがある。老いて益々元氣は盛んであるが、

近來少しく耳が遠くなり、聲が嗄れたやうだ。頭腦は相變らず明晰である。

二　大隈伯の平凡生活

伯は何うして一日を送る乎、并は伯自身の云ふ處に依つて明かである。左に之を紹介する。

『我輩の日常生活は甚だ不規則だ。朝は何時に起きて、何時に飯を食つて、夫れから、何ういふ仕事をする、夜は何時に寢るといふ樣な規則はない。自然に任せ、必要に應じて、爲たい事をするので、何も始から規則を定めて、夫れに依つて、一擧一動を律すると云ふ譯でも何でもない。

是れは我輩が成長した時代の境遇にも因るてあらう。我輩は少年時代に於て、さういふ規律的の教育を受けなかつた。

一つは又我輩の氣質に因るかも知れぬ。我輩の資性が、さういふ規律に束縛されるのを好まぬのだ。

世には規律嚴正て、一絲亂れずと云ふ樣な、立派な生活をして居る人もある。それは誠に結構であるが、我輩は夫れを學ばうとも思はぬ。

斯うして一日々々と送つて行く中には、善い事をしたと思ふ日もあれば、面白くなかつたと思ふ日もある。が併し、過ぎ去つた事は、悔いても及ばぬ。過ぎ去つた愚痴を云ふ程には、まだ老い耄れても居ない。

我輩は常に昨日の事よりも、寧ろ明日を思ふ。明日よりも明後日、明後日よりも來月、來月よりも來年の事を考へる。語を換へて云へば、即ち理想を追うて行くのだ。理想は百歳の後に活きて働いて居るのである。

過去を思ふと、心細い感じがする。そこて、頻りに前途を考へるのだ。前途を望むと、其處に光明を仰ぐのである。

朝は何時に起きると云ふ規則はないが、夜が明ければ臥床を出る。で、此頃ては朝は大概五時に起きる。夜眠に就くのが遲いから、まだ睡い。睡いけれども、之は多年の習慣て、然うなつたのだ。

だから、冬と夏とは、睡眠の時間が餘程違つて來る。冬は平均七時間、夏は五時間乃至六時間てある。そこて我輩の睡眠時間には、夏と冬とて一時間乃至二時間の差が生じて來る。

朝起きて、飯を食つて、餘暇があれば、新聞を讀み、書籍を讀み、客があれば閑談をする。用談をする。時には庭園を逍遙する。極めて平凡な生活だ。

年の故か、酒は自然に飲まぬ樣になつた。何か感ず

る所があつて禁酒したと云ふやうな譯ては無い。禁酒主義の人は、宴會に行つても、杯を伏せて、堅く飲まないのてあるが、我輩は然うしない。客てもあつて酒を出す時は、一杯二杯は相手に飲む。

人には、俳句をやるとか、短歌を詠むとか、謡曲乃至は歌曲をやるとか、色々の藝をやる人があるが、我輩は全くの藝なしだ。時には都々逸の一曲も唄つたなら、夫れにも亦趣味が有るだらうと思ふが、性來の藝なしだから仕方がない。

圍碁はやるが、必しも好きといふ譯てはない。相手があれば、三番五番は打つ。固より上手てはないが、普通の人並には打つ。

犬養か、彼れは巧い。特に理論の方が得手だ。碁の批評の方から云ふと、犬養の方が我輩よりも三四目上手てあるかも知れぬが、局に對して見ると、まづ先か二目の所てあらう。

我輩には何も娛樂と云ふ樣なものが無い。併し、強ひて我輩に娛樂がありとするならば、先づ庭をぶら〳〵散歩するとか、花を作つて眺むるとか、其樣なものてあらう。

百姓も亦面白い。時々菜園に出ては草取婆と話をする。そんな事が面白いのてある。

もと〳〵我輩は品の善い性質てはない。我輩は百姓が適當して居たかも知れぬ。百姓が少しばかり書籍を讀む、夫れが即ち我輩だ。

百姓は馬鹿だ。

世の中の人は怜悧だ。

此處に趣味がある。我輩は百姓ときめ込んて、此處に我輩の行くべき道が有らうと思ふ。

談話は固より好きだ。客があれば相手を擇ばず話をする。之は先づ我輩が一日の仕事の重なるものだ。

百姓も來れば、商人も來る。貴族も來れば、平民も來る。學者も來れば、宗教家も來る。文士も來れば、畫工も來る。政治家も來れば、軍人も來る。教育家も來れば、慈善家も來る。新聞記者も來れば、雜誌記者も來る。辯護士も來れば、神主も來る。支那人も來れば、朝鮮人も來る。印度人も來る。西洋人も來る。男も來れば、女も來る。爺さん婆さんも來れば、若い者も來る。各其の人々に對して、平等無差別に話をすると、其處に無限の趣味がある。朝から晩まて話して居ても、左程に疲れもしない。之も我輩が一種の道樂てある。

新聞は浮世の寫眞である。放火とか、泥棒とか、姦淫とか、心中とか、若い男女が出奔をするとか、銀行員が金を持つて逃げるとか、代議士が賄賂を取つて監獄に入るとか、警察官吏の犯罪者との結托とか、毎日惡い事も澤山出て來るが、又善い事もある。丁度演劇を見るやうだ。

そこで、餘暇さへあれば、新聞は必ず讀む。三面記事に至るまで讀む。時には之を何したら可からうかと考へる。

餘暇があれば書籍も讀む。手當り次第に繙讀するので、最初から何を研究しやうと云ふ目的があつて讀むのでは無い。あたるを幸ひ、何でも讀むのである。

我輩の生活は斯の如く不規則て、行き成り放題てある。我輩の境遇と性質とが然らしめるので、必しも之に理屈を附けるに及ばない。

若し強ひて理屈を附けて見ると、我輩は儒者と老莊とを捏ね交ぜた樣な者だ。或は儒と禪とを化合せしめたのかも知れぬ。が併し、之は理屈だ。理屈は何うても宜しい。

一日々々斯うして暮して行く。顧みれば、浮世は夢の如し、茫として何時の間にか消えて行く。

けれども、前途を臨めば、其處に光明がある。人間の妙は此處に存するのでは有るまいか。」

此の話に依つて見るも、伯は能く自分と云ふものを知つて居て、自分の爲さうとする事を成す人てある。座談中に於ても、時々今更に耳を遠近にする事があるので、伯が外相當時の事も徐ろに忍ばれる。平等無差別の話裡にも、ちよい〳〵と煽動的の語氣と犀利なる評語とが挿入される。伯の法螺は凡人と違つて吹き方が違ふ。何處かに偉大な處がある。愉快にこそ響け、決して厭味を感ぜしめぬ。大隈の大隈たる處が實に此處にある。

三　髯の無い大隈伯

僕も髯が無いので、同氣相求むると云ふ譯てもないが、大體に於て髯の無い奴が好きだ。鼻下に鴻溝を劃して居る朝鮮髯や、鼠髯も可厭だが、もみあげ續きの頰髯は一番嫌ひだ。大久保も榎本も頰髯が短かつたら惡相に見えなかつたてあらう。

大隈伯は髯が無い。口は大きい方てあるが、屹と固く結んで豺眼を見据ゑた處に、確固たる意志の力が表はれる。薄くて白い眉も髮も凛として霜のやうに閃く、ハヽヽと破顔哄笑すれば、春風春水一時に到つたやう

に、溫乎たる風丰人を懷かしめると云つた風て、座談の伯は誰にても親愛される人だ。

夫れから髯の無い人物に、星亨がある。原敬がある。阿部浩がある。原の頭髪は長くて眞白だ。伯のよりは、其の白さが目立つ。議場に一塊の雪ありと見れば、夫れは原てある。東久世伯や澁澤男は全くの不毛か何うかは知らぬが、矢張り髯が無い。生やせば物になるべきを剃り落して居るのは、無髯の人物中に數へぬ。要するに、無髯の人物は、新聞記者の筆に掛ると「童顔」の二字を以て評し去られる。けれども、大隈伯のは、童顔と評價するには少し長過ぎる。鶴髮童顔以外の字を當てたいやうに思はれる。

目尻の下つた伊藤公、顴骨の高い反齒の山縣公、苦虫を嚙み潰したやうな顔の井上侯、八字髯の少し歪んだ松方侯と、維新の元勳も夫れ〲の特色はあるが、髯の無い大隈伯と、目尻の下つた伊藤公とが一番平和さうな顔をして居る。

伯は現時、大日本平和協會の會長てある。併し乍らまだ胸裡に野心の火が燃えて居り、時に高言放論して平地に波瀾を起さうとする、維新の元勳にして在朝の元老に非ざる伯は、案外平和平凡を熱愛する人て無いかも知れぬ。「前途の光明」に憧れて居る大隈はまだ未來がある。活氣がある。南極探險の後援位では中々往生せぬらしい。

△大隈伯に對する感想

遞信次官　仲小路廉

我々の如き後進者にして、まだ世上の事物についても充分に知り得ないものが、國民の先輩とし、世界に名を馳せて居る大隈伯の如き人を假りにも批評するといふ事は甚だ烏滸がましい事てあると思ふ。てあるが、私がどういふ風に伯を考へて居るかといふ事をあなた方から尋ねらるれば、無下にお斷りすることも出來ない。知らざるは知らずとして、知り得た事によつて胸中に感ずることをお話するの外はないと思ふ。

凡そ人が得意の時に際して謙抑な態度を取るといふ事は、甚だ美なるものてある。人として斯くありたいと思ふのてある。然し、又失意逆境の時に處して、毅然として撓まず、敢然として猛進するといふに至ては、必らず異常の人にあらずんば出來ない事と思ふ。大隈

伯爵が屢々得意の境涯に居られた事は無論の事てあるが、然しながら失意逆境に立たれた事も亦少しとせぬ。然るに依然として濶達に、依然として撓まずに、殆んど失意逆境の身に迫ることを念とせず、堂々として濶歩せらるゝ其狀況は確かに偉大の性格を備へて居るものといふべきで、此點は蓋し何人も疑を容れぬ所と思はれる。

伯は性行極めて濶達に、言動亦磊落、而してよく種々の點に着目せらるゝ。如何なる事物についても意見のないといふ事がないに至つては其人眞に容易の人てはない。而して此等の事決して偶然てはなく、必らず人の知らない中に種々の事物に注意もせらるゝし、又人知れざる勉強のあることは、いふを俟たざる所てある。今や漸次高齡に向はせらるゝに拘らず、依然たる勇氣を持つて言論風發の態度、確かに我國の名物てある。のみならず又世界に於て其名を馳することの偶然でないと考へる。是れ亦我國に於て永く保存したい一つの名物であると考へる。

又私密かに思ふに、凡そ政治家となり、國民の上に立つて指導誘掖の任に當り、國家の重きに任ずる人には、玆に二個の必要な點があると考へる。其一は着眼の點を誤らざる事、其二は所信を實行するの才幹技能ある事、此二つが兼備らざれば、決して之を指して大なる政治家といふ事が出來まいと思ふ。普通に政治家といつても、國家の重任に堪へる偉大なる政治家といふ事は出來まいと考へる。

苟も政治家を以て任じ國民指導の任に當り、若くは國家の重鎭を以て任ずる人に大切なるは着眼の點にあると考へる。其國の立場なり、又全世界の情勢に鑑みて假りにも立脚の點を誤らざらんことを注意せねばならんと思ふ。世に多くの技量才幹を有　、非常なる智識を有しながら屢々蹉跌し、屢々失敗し、遂に自己立脚の點を失ふものゝあるのは抑々何に原因するか。惜しいかな、着眼の點を誤まり、時としては時勢と相容れず、時としては我國情、我國體と合せず遂に民心離反の基となつて、其人自らの立場を失ひ所謂逆境の地に立つものゝあることは餘り事例に乏しからぬ事と思ふ。我尊敬する伯爵に於てもかゝる點については素より常に注意はせられて居らるゝことゝ思ふ。

又第二には着眼の點を誤らず、抱持する意見は誠に其當を得、よく國家の前途を慮り、將來の經營をなす丈けの識見を有して居りながら、惜しいかな、その實

行に於て、方法其宜しきを誤り、手段其當を得ず、或は一時に事功を擧ぐるに急にして遂に部下に紛雜を來たし、收拾すべからざることになつて終るものもある。是等も亦大隈伯爵に於てよく其消息を解せらるゝてあらうと思ふ。人の順境に立つは自ら立つべき理由がある。人の逆境に立つは自ら立つべき理由がある。此等はよく心すべき事であらうと思ふ。

今や大隈伯爵は漸次年所を經られ、漸次經驗を積まれ、思想も漸次圓熟し來て、專ら國民敎育に力を盡さるゝ趣も見える。又上は　皇室を尊び、下は我國體に鑑みて國民讀本等の著作もあるやに承知する。而して漸次圓熟にして穩健なる思想を以て我々後輩及び一般國民の思想を指導誘掖さるゝ一段に至ては、甚だ失禮の申分てはあるが、確かに一段の御進境あつた事と考へる。

又伯爵の早稻田の經營――學校の經營、書籍館の經營、此等は確かに一代の事業として長く後昆に殘るべき事柄てあらうと考へる。而かも益々雄壯に、益々圓熟せられた思想を以て、かゝる點に御盡力になるといふに至ては是れ亦偉大なる人格の標本として、國民も長く記臆に存すべき事柄てあると考へらるゝ。

△明治英雄の大隈伯評

寧靜庵主

維新の宿星概ね潮落し、其僅かに殘存するものも光芒甚だ微茫たる中に、尙ほ聲名一代に隆く、黨與渴仰の一偶像たるを失はざるものは今や孤伯大隈重信一人のみ。吾輩は是史的人物に對し、多少の評論を加へんことを欲せざるにあらざるも、姑く之を他日に讓り、大隈と同列若くは班伍を均ふせし明治維新の人物が、奈何に彼を思考し、評論せしかを紹介して、傳はらざる彼の評を敍し、而して彼を正しく評せんと欲する人士の參考に供せんとす。

△鳥啄鷹眼情を解せず▽

大村兵部大輔暗殺の報は、明治政府の自爆せし霹靂なりき、在朝縉紳に非常の驚愕、非常の打擊を與えたりき。沈着溫厚なる三條大政大臣すら、反身に轉じ、方に逆倒に仆れんとし、

『兵部が暗殺されたッ?!』

とのみにて、總身を震慄せしめ、流石剛愎喜憂を顏色に示さゞる木戸孝允すら尙ほ忽ち愀容に顰み、曇りし

聲の律亂れて、

『生死は？犯人は？暴徒は？』

と連呼して、座を立ち、何方へか走去りたり。是報に接して、滿廷一人として憂哭せざるなく、悼惜せざるなし。其中に、只一人、大隈重信のみは、平然他を顧みず、執務の手を弛めず、常日の例に違ふなく職に切々たりき。堂上の大官、暫時にして大隈の態度を知り、或は恥ぢ、或は怨み、或は恚り、或は蔑みぬ。是時、寺島徽士は、

『是時に當り動ぜざる大隈は何如にして然りしなるか。』

聲を低ふし、切口上に自問しぬ。

座列に在りて、乃し駢肩の廣澤眞臣と、大村輔官生前の時どもを小聲に語合し西郷陸軍大將は、涙滴宿りて光る兩瞳を瞬きしつゝ、岩倉右大臣と顧盻を相交し、吐息を深ふし、頭を仰ぎ上げ、忿怒を含みし語調を放ち、鳩胸を更に張り擴げ、

『烏啄鷹眼、渠、重信や、骨肉の死にも泪を零さゞりき。死んや‥‥。』

△算用の確的な人▽

征韓の廟議、滿廷を左右に頒ちし時なり。彼は、大藏卿の任に在り、帝國財政を論じ、固く非征韓を主張す、江藤司法卿は、厲聲卓を叩き、彼を睨みて、

『大隈は、帝國の安危一に財政にありと極論し、今日は愼みて翼を收め、自彊自守の利なりと云ふが、爾く神州の尊威を侵されて、尙ほ那邊に帝國の體面がある。征韓に勝つて百倍千倍の利財を奪取るまでぢや。』

大隈は脣邊に笑を浮べ、

『武士の刀の手前と申した時世は最早過ぎ去り申しましたでござる。』

と卓に纒える繡綈の皺を徐に展ばし、語を紹ぎて、

『成程、工、勿論勝利必成でござるが、勝つた其時は、討伐の費用に五十倍、少くも三十倍の費用をかけなくては、相當の利得を收められませぬ。』

と靜に要を述ぶ。大久保卿は傾聽沈思しつゝありしが、良久時して、

『左樣。』

と感嘆の詞を放ち、

『流石は大藏卿でござる、算用は確的だ。』

と以來財政家として大隈を認めざる者なかりき。中にも大久保卿の彼を信ずる酷だ強く、西南の役後、大隈が商人と結託する不都合を詰責する某參議の言に應

じ、大久保は、

『大隈の爪の垢にも及ぶ財政家が居ませうか知ら。今日の所、彼の人を止めたら、日本は破産て、分産て、身代限てござる。十呂盤持つ人は儲けるが當然です。何も仰言らぬが善いでせう。』

と彼の非を擧ぐる人を却けぬ。

△窮して大廣告▽

彼、時の外交に長官として、條約改正の提案を爲し、滿天下の怨府となり、慷慨の壯士來島恒喜に爆彈を投ぜられ、その隻脚を失ふたるの時、首相伊藤は、

『暗殺を免れざるの人。』

とのみ、敢て一言も它を謂はざりしも、露骨極り、卒直に過ぎたる黑田清隆伯は、

『隨分、人を殺した人ぢやから喃。』

と倘ほも彼の舊秘を訐かんとするもの〻如し。西郷從道侯は之を遮ぎり、

『人を刺した事を云へば、黑田サンなんぞは其上强い筈ぢや、女房さへ蹴殺しにしたアンタぢや。』

『主人が家の內を成敗するのはお構なしぢやが、彼の人は文官の癖に……。』

將相公卿と雖も、其內輪同士の列座に於ては、倘且つ井戸端會議の如く、甲是乙非の諍說に無用の時を費すものか、山縣陸軍大臣は、謹嚴なる口調にて、

『氣の毒なこッてす。何うも、文官の方は、武官よりも多く暗殺される樣です。而して、爲れ方も慘酷です。否、銃砲や劍に死ぬ筈の約束でない人が、血の末路を遂げると思ふと、痛切な悲哀を感じます。』

斯くて、當日の閣議は遭難外務大臣に對する感想の交換に訖はりしが、彼を毎に「小人大隈」と嘲罵せし勝伯は、

『奴、刺られたかな。死なない限は、奴、益々壯語するぢやらう。窮する時に大廣告するが大隈の癖だからな。一體彼は自賛自衒を得意としてるからね。』

と而も、海舟老伯は、遭難と前後して、外務大臣辭職すと耳にするや

『何故辭職したのぢや、未だ至らぬ、器が小ない、一層頑執にやるべきぢやに。』

△眞男兒の眞經驗▽

爾時の事なりき。

自由黨總理板垣退助伯は兇變の報を聽き、侍伺の誡を退け、直に家人を走らして、官邸に彼を見舞ひ、憮然として

『黨員諸君が、彼を見舞ふ余を誹ふは、政敵の元首たる余の地位、而して刺客が曾て余の說派に屬せしを以てなるべきも、然るが故に余は尙ほ彼を惜む。否、彼と余とは共に維新の風雲に馳驅せし者、相思ふの情は亦格別、諸君の忖り知らざる所。』

と暗然として聲淚を共に呑み、

『だが、男兒が最高潮の時に暗殺に遭ふ程畢生の痛快事は無い。』

刺客難の經驗ある板垣伯は斯く彼に同情し、彼を尊敬したりし。而も、昨に相原尙褧が板垣伯を襲刺せる時、大隈伯は些の見舞をも爲さゞりしと傳へらる。

板垣伯の言を眞理と斷信し、英雄業を就すに當り、勢弱き反抗者の執拗なる毒手に斃るゝを男兒の最大滿足なりとせば、韓人李の毒彈に狙はれ、關外ハルビンの霜と消えし故伊藤公の如きは夫れ眞男兒の眞本意を遂げたりと謂ふべきか。

——是時、大隈伯、氣吾に復るや、天を指し、聲を高ふし、

『吾敵を赦せ!!』

彼、大隈重信は、自己を忘れて、氣慨ある日本人、日本人の眞精神を尊敬せるなりき。按ふ、偉人生死の刹那必ず「聖」に近くことを。——

△鍋島の原田甲斐▽

尊王攘夷の問題に天下序を失せる文久慶應の時代、大隈は拔擢されて、佐賀藩より長崎に留學し、蘭語を學ぶ。淹留數年に溺るも一寸の進步なく歸藩し、衆の笑を招く。而も、藩論二派に別れ、鍋島一藩の興廢に關せんとするものあるや、彼は奮然起ち、江藤、副島、大木の列に交はり、大に運動す。而して、彼の奔走功を奏し、一躍して藩内重要の人と囑目さるゝに至る。引續きて、彼は藩の要地にあり。而して、亦舊の如く、多く語らず、多く進まず、宛も眠るものゝ如し。一藩亦彼を輕侮し出す。彼敢て意に介せず。親友牟田某彼に活躍、只忘られざるの運動を勸むるや、彼笑ふて云ふ、

『仕事は一度に限る。』

とて、世の是非を顧みざりき。幾許もなくして、佐幕の大論議沸騰し來るや、彼は極端の勤王論を唱出し、一藩をして呆然たらしむ。彼の所論は當時に於ける無政府主義にてありしなり。明君閑叟公は評議の席上儼々諤々、堅白異同の辯を逞ふする彼を熟視し、溜息を深ふして曰く、

『大隈は人物ぢや。が、險しい。』と歎息を流し、更に、
『彼は、甲斐ぢや、鍋島の原田甲斐ぢや、恐しい胸の男子ぢや、太平の代には生置く代物でない。』

△奸雄奪邦の術を知らず▽

小池平一郎は、自由黨の演說家なり、亦大隈攻擊の急先鋒なり。彼は大隈の肉を啖ふも尙且つ厭かずと信じ、到所大隈を傷く。大隈も亦小池を非常に恐れ、小池一人は自由黨員全部よりも敵として恐るべし、彼の舌を買收し得ば、改進黨を滅すも辭せずと云ふ。時會々第三期の總選擧に際し、大隈伯は信州に下りて、改進黨員の選擧に應援す。小池も鄕里に趣き自選運動に奔走す。一日汽車中に於て、大隈伯の一行と小池と偶然會す。大隈伯は未だ小池を知らず、會見したる事一回もなし。隨行員に降旗元太郎あり、小池を認め、大隈伯に耳語し、
『彼所に酒壜を喇叭飲にする巨漢即ち昨夜伯を攻擊して寸腐なからしめし惡人小池なり。』
と苦笑す。大隈は然るかと首肯き、步を運びて、小池の傍に趣く。犬養毅あり、大隈の意を洞察し、『小池君』と呼びて、方に紹介せんとするもの丶如し。大隈は、
『旣に熟知の間ぢや。』
と犬養の紹介を却け、ツカ／＼と小池に寄り行き、殷に彼の手を握り、
『小池君、大に戰ふべし。』
と更に懇話を重ね、數驛にして相分る。當夜の演說會に於て、伯は、信州人に檄して云ふ、宜しく小池平一郞を選出すべし、彼は憲政の功勳者なり、天下の名士なり、余は反對黨の將軍として彼の選出を希望し、天下の士として彼の選出を慫慂すと。所謂眞に敵を知れる英雄の質を示せり。而も、小池は大隈の握手は我の落日なりと爲し、選擧運動を止め歸京し、奸譎大隈は我が攻鋭の鋒を折り去れりと慨く。後藤伯是消息を耳にし、
『正直なる小池、小膽なる小池、彼は利用の途を辨ぜざる田舍漢ぞ。』
と嘲笑し、更に彼を生殺にせる大隈伯を評して謂ふ、
『アハヽヽ、奸雄人を御する法を心得ては居るが、未しぢや、未しぢや、天下を奪ふの術に達して居らぬワイ、ウフヽヽ。』

△往生際の惡い男子▽

明治維新の勝利者が、意氣揚々、肩風を切りて、江戶に乘込み、政權を手に握るや、田舍武士は忽ち江戶

の風に浮れ染み、日夜酒色に耽溺し、攀花折柳を事とし、江戸の子女に殊更なる侮辱を加へ、上局官吏の多くは、殆んど總體は、郷里に殘せし糟糠の妻を忘れ、江戸人を容れて箒掃に當らしめぬ。大隈も亦其一人。彼は郷里の妻を去てたり。彼には豐太閤が政所を優遇せし愛を有せざりき。而して假言して曰く、

『江戸人の怨を去り、王政復古、海内和親の實を擧ぐるは、彼我の結婚に如くは無し、余は邦家の爲め、涙を呑んて、是質を爲す。』

と、洵に身を國家安康の犧牲になせしが如く聽ゆる彼の言は羊皮を被れる狼に外ならざりしなり。佐野常民伯は、例の如く、巨頭を掉りて曰く、

『聽えぬ理窟を云ふ男子ぢや。何故眞直に白状せぬのだらう。無妻の人が然うするなら尤もだが、一切天朝の臣となつた今、殊更舊の妻までも離縁するに及ぶまい。維新だと云ふて、一家まで維新にする必要がない。何とも往生際の惡い男子だ。あゝ云ふ根性は裏切の名人になるのぢや。』

と、謹厚の質なるだけに大隈伯の詭辯を甚しく嫌厭しぬ。

△齡毎に辛厲を加ふ人▽

大成の半に達せずして病死せしも、長の高杉晋作は明治維新第一の元勳なり。彼は、西郷、大久保の薩藩に在る如く、木戸と相伍して長藩に西郷の地位に立てり。彼は、西郷、木戸の群を拔きて、久阪玄瑞、坂本龍馬と相匹敵せし人。伊藤、井上等を長崎に送り來り、己亦上海に游べる蹤迹、數旬日長崎に俺留する間、大隈と交を訂し、寧ろ後進の來り從ふを導示し、傍人に彼を評して云ふ、

『寡言射覗、彼は斷獄の人ぢや。理數に明晰し過ぐる彼は、衆に長たるべき器てないが、軍に監たるべき質だ。併し最も能く發達して進む人、即ち誤たず、迷はず、目的に一直線なる人ぢや。』

と、而して、高杉は、明治維新の風雲生起し、慶應四年、辰の歲、政體の變制布かるゝや、三條公の質問に奏書して云ふ、

『佐藩の人物中、年少者に大隈あり、彼は亂騷の時、軍に劍を揮ふ士に非ざるも、帷幄の謀に座せしむべく。謀士の上に非ざるも、決處の任に充つべく。治平の世に於ては、班に首長として綜理の才たらしむるには急辛の嫌あるも、尙ほ事端を慾たず。登用第一の班を與ふべし。』

と、即ち高杉は大隈の融通きく才を推稱せるなり。越えて二年、高杉は西鄕の上京するに會飮し、天下の人物を論評し、

『稍々幾分の寛恕あらば、彼、大隈は大人物ぢやが。』

と、西鄕の大隈の近狀を語るを遮り、

『重信は年毎に峻嚴になり行く方の口ぢやから、聊か困つたものぢや。最も佐賀の氣質は一般に然うだが、大隈は、短氣でなくつて、辛辣なのだから、一寸も大樣の點がないのに困る。が、併し將來最も能く發達するのは彼だ、成功するのは彼だ。蓋し齢毎に苛厲になり行くは、齢毎に活氣を加えて、何日も夏日の烈しい氣溫を有してるからぢや。它の及ばぬ特質がある。』

猩々は巧に猩々を解す。性急なる高杉は、沈靜なる大隈を斯く察し、彼を愛する尋常ならず、寧ろ彼の後日を憂慮して、

『小西鄕の寛洪か、黑田の無邪氣か、「伊藤の慧巧か、河田佐久間の謹直か、山田の放縱か、後藤の磊落か、何れかの幾分を加味するならば、彼は明治首班の俊傑ぢやが、惜むらくは、天彼に之を與えぬ。按ふに、大隈は難局に使臣たるべき人だ。』

而も彼は認知の適所に適材を用ふる機會に接しなかつた。寧ろ不幸と云ふべきか。

△吾を誣りて吾を弔ふ大隈▽

佐賀藩の元勳、江藤新平が、征韓論に激怒して、桂冠歸鄕と決するや、先第一に彼を見舞えるは、反對參議の中、大隈を主とす。彼は、同鄕の出なるも、平常多く江藤と往來せず、今次又彼に反抗す。寧ろ兩人は犬猿の間なりし。而も今や首に彼を慰む。江藤の門下は大に憤怒し、

『卑劣なる大隈の所行かな。彼は我の失意を祝福し來る。宜しく詰責すべし。』

と、就中、少年豪壯の士、古賀等は公然大隈を斬殺すべしと云ふ。江藤辛く之を抑制して曰く、

『重信は眞に吾を惜むもの、吾去らば、設令反對なるも、彼臂を斷つの災あらむ。遂に凡夫ならざる彼は明に之を知る。』

と、漸くにして部下の恚を解けり。

越えて明年、佐賀の亂起り、江藤蹉跌し、失意に倒れんとするや、左右を顧み、笑を含みながら、呵哄して謂へらく、

『あゝ、吾を亡ぼしたものは大隈だ!』

斯く訐發せる秘相の事實は今に暗昧なるも、江藤は

大隈の心術に多少の不平を抱きたるもの丶如し。而も、「否、怨まず、彼は公人として吾を售りたらん。且つ私人として吾を弔し、吾を世話するものは彼のみ。吾斷罪の後は、彼必ずや主に吾を迎えて、吾を救はん。」と、併も、大久保、大隈の内意を受けたりと稱さる丶河野敏鎌は斷罪の宣告を師に下して、罪に江藤の言の然不然を檢し得ざりき。然れども、大隈は、江藤の遺族に對し、力の幾分を裂きて、盡す所ありき。江藤新平に對する近年の行動の如き然り。仍ほ故人の靈を慰する、薩人の西郷南洲に對するに及ばざるもの多く、其距つや實に相遠きものあるを見るなり。

△遣繰屋の大將▽

岩倉右府は最も深く大隈伯を信頼せる人なりき。彼は、西南の役、大阪に滯留し、長崎主張の大久保參議に書を下し、

「江戶樞府には大隈參議被在候上は財政の事只管なる懸念爲しと存候。重信殿は好良を撰り候兵站方の宰に候。上と存候。由りて小官はじめ貴官も安心能在られ候。」

と、好齋何の人物を陳じ、又三條大政大臣に宛て丶、同意味を布演して、

「今の所大隈參議の外、日本の勘定役一人も它になかるべく、參議頑なる間は、外國に對しても、內地臣民に對しても、一向變ふる所なく、大磐石の上に座りたる心地優かなるものなり。」

と、賞贊しぬ。岩倉右府が大隈伯を信頼せる斯の如くなれるは、先に端島炭坑問題に關しての英國交渉、後に外國銀行破綻事件始末の功に依る。岩倉卿は每も、

「大隈さへ居れや、破産する氣遣はない。彼は一萬圓の身代を十萬圓に見せて、百萬圓に動かす腕の男子だ。」

爾く岩倉右府の評せる大隈伯は、成程大風呂敷の親方として、財政に於ける手腕を政治の方面に轉じ、堅強なる記臆力を利用して、今や海の內外の渴仰と信用とを博しつ丶あるなり。

*　*　*　*　*

明治英雄の中にても、大隈伯は最も多く種々の方面より種々の評を受くる人、剃刀大臣の稱ありし故陸奧宗光は、大隈伯と余とは天下に最も憎惡さる丶評を受くべき資格性質を有すと云へりし。玆には、故らに大隈伯の先輩とも見るべき元勳の評を記すに止めぬ。

△大隈伯に對して思ふ所

田川大吉郎

大隈伯に對しては、僕は、從來二個の思想を繫いで居た、どうぞ一日も早く而して一年も永く總理の椅子に就て欲しい、且又其縱橫銳利、奔放忌憚なき評論を公にして欲しいと、然し乍ら縱橫銳利忌憚なき評論を公にすることは其總理に就くことを妨ぐる所以である、一面には早く總理になれよと望みつゝ、他の一面には縱橫忌憚なき評論を公にせよと望んだのは、即ち所謂矛盾の極、僕は抑も一種のヂレンマに落ちて自ら悟らなんだのである、世には僕と共に此ヂレンマに落ちた傍觀者若くは伯の附隨者は數少からぬこととて有たらう、或は疑ふ、伯自身も亦此迷轂に落ちた一人では無つたらうか、

然し其樣なことを言ふて居つては惟日も足らぬ、僕は僕の胸憶に泛ぶ許多の感想の中から只三點を述べて記者足下の問に答へ、以て此明治年間の巨人の一人たる伯の遭際に對する僕の多年の感慨を集約して顯さうかと思ふのである、

（一）　間者も彼の懷に入る

人間の長所は人間の短所である、善く泳ぐ者は確に水に死する、泳げばこそ溺るゝので、泳がねば溺れはしない、大隈伯は世に大風呂敷の人と謂はれて居る、其大風呂敷が即ち大隈伯の長所で而して又短所であらう、伯は氣象濶達の人である、開けつ放しの人である、人に對するに無遠慮、自ら處すると放曠、故に不謹愼の人と謂はれた、が、自信が無くては出來ない藝だ、內に自ら欺かざるの信念あり、外一世を空ふするの見識あればこそ、見識ありと信ずればこそ、遠慮會釋なき此の如きの姿態が出來るのだ、僕は伯の此の確信を偉なりとするのである、然も此あるが故に伯は天下の群客を引寄せた、而して間者も亦伯の懷に喰ひ入つた、敢て其名を擧げぬが、二十年乃至三十年前の伯の門客を見よ、どれだけの間者が伯の門から出たかは數へられぬ程である、人は之を以て伯の人を知るの明なき過ちに歸する、然し乍らそこが開けつ放しの人である、僕は寧ろ伯の美質に感服する、過ちといへば過ちだらうが、過ちを觀て仁を知る、且伯は勝氣一方の人である、よく〱の負け嫌ひ、痩我慢の隨一人である、間者の彼の懷に入る時も、伯は此く思つたかも知れない、昔は

眞田昌幸の上田城を守つた時、徳川家の使ひの衆、先方に使ひするに、城を廻つてまごつくよりは城を通して貰ふ方が男らしくて且便利であると考へ、昌幸に此く頼んだ、昌幸は感嘆してそれを通し、且城内要所の隅々を案内して見せ、いざ城攻の時は之を覺へ置きて先登せらるべし、去り乍ら要害は城郭の固めに非ず、唯大將の一心に在りと言つた、洵に大將の一心に在る、入り來る客に敵味方の隔てがあるものかと、伯は此く思つて訪び來る八方の客を、知ると知らざるとの差別なく悉く迎へて、いづれにも愛相よく、淡然として自ら得たりと爲したかも知れぬ、どうしても僕は此點に於て伯の快活の氣宇と奔放のやり口とを見るのてある、要するに美質と謂はざるを得ない、

序に言ふて置くが、伯は敵を畏れない、從つてそれだけ味方を重んじない、山縣公は敵を畏れる、それだけ味方を重んじる、依つて山縣公の門には味方が固く結ばり、大隈伯の門には味方が固くならない、山縣公の門には黨派がある、大隈伯の門には黨派が無い、閥は山縣公の長所てある、大隈伯には其閥らしい似寄の影も無い、大隈伯にして黨派を好むと謂ふのもおかしいが、山縣公にして黨派を嫌ひと謂ふのも亦おかしい、山縣公は自ら足らざるを知るの人てある、大隈伯は聰明餘り有り、餘りに自ら恃み過ぎて居る、

（二）　議會の無能　民心の蒙昧

然も大隈伯の生涯を想ふに當つては、どうしても議會の無能と民心の蒙昧を慨かざるを得ない、僕の察する所では、日本人中、議會の開會を最も熱心に企求した者は大隈伯てある、伯は十四年の失敗を議會に據つて恢復せんと期圖した人てある、議會が開けないから一二の閥族に跳梁跋扈せしめるが、ナーニ今に見ろ、議會が開けさへしたら、乃公が、一代の民望を負ふて天下を取つて見せる、閥族の跋扈は議會の開けぬ間の事だ、議會の開けてからの天下は乃公の有だと、伯は必らず想ふて居つたに違ひない、僕は伯の心事を此く推察する、而して此推想は屹度大いに違はないと盲信する、然も其議會が開けてからの有様は何のザマだ、議會は到底國政を左右するの機關て無いのだ、民望を代表するの公器て無いのだ、抑も又日本には議會に依つて代表せらるべき人民の意思も、希望も、計畫も、理想も無いのだ、極端に言へば、日本の人民は其參政權を適當に行使すべき智慧も、情操も、識見も、氣合も無いのだ、政府が議會を腐敗せしめたとのみ謂つては

いけない、議會先づ自ら何等の政治上の經綸、抱負なく、人民自身は倘吏の事、相背いて政府の前に米搗バッタの二の舞を演ずるの外何等の技能も主張も無つたのだ、政府が之を玩弄物にしたのも仕方が無い、政府が之をいゝ加減に手玉に使つて、外憲政の名を成して、內專制の實を行つたのも、要するに議會の無能、民心の蒙昧、之を招いたのである、日本の人民は、實際憲政の道にかけては驚くべき程蒙昧無智である、現在尙さうである、況や議會開會の始めに於てをやだ、

左れば大隈伯の望みは悉皆外れた、大隈伯は議會の開會を待つて、民心なる足場の上に其理想の內閣を建てんと期したのである、左ればこそ勉めて其民心を鼓舞激勵した、而して閥族一派との溝渠を益々深くした、而も其民心は豫想した程の半分の威力も、刺激も、情熱も無い、其豫想の足場は外れた、其豫想の建築も外れずして何をか成さんやだ。大隈伯は最も熱心に議會を期待したゞけ、從つて大隈伯は最も多く議會に失望した人である、

大隈伯一人の成敗は言ふに足らない、大隈伯をして此失望の淵に陷らしめたる日本民心の立憲的若くは非立憲的態度は深く慨せねばなるまい、我民心の此くてあらん限り、政治に心ある者は、皆、民心を度外に置きて、民心以外の或者に附趨し、夤緣し、迎合するて有らう、此くて日本に憲政ありと謂ふべきや思ふべきてある。

何にせよ、大隈伯は恃むべからざるを恃んだ、自ら恃むの外、恃むべからざるの民心、民情、民力を恃んだ、而して其的が外れた、大隈伯は多く人民に負かなんだかも知れぬが、人民は大隈的に其期待の十の一をも酬ひなんだ。而して大隈伯の失敗あり、確にそこに惆悵無限の恨みが有たらう、如何に曠遠、恬淡、無頓着なる氣象の伯だとしても、

（三）　不公明陰惡なる政爭

且大隈伯の一生を想ふにつけ、重ねて想はねばならぬ事は我政治上の空氣の、相も變らず封建時代の陋風を帶びたる事である、世人は西南戰爭て武力的競爭は止んだと謂ふ、武力的競爭止んて言論の競爭が起り、從つて其競爭の方法態度が公明正大になつたと謂ふ、然し乍ら十四年の政變は誰が見ても公明正大には見へない筈である、武力的競爭、それに伴ふ伐討、朝がけ、不意擊ち、暗擊ち、不規律にして詭變に富み、殘忍にして卑劣なる方法の爭ひは決して明治十年に終りを告

げて居ないて、十四年の政變も亦其公明ならざる、正大ならざる爭ひの一つてあつた、而して先年西園寺内閣の斃れ、桂内閣の起つたのも、亦其公明ならざる、正大ならざる手段の結果てあつた、而して歴代の内閣の議會を懷柔し若くは之と交綏する方法はいつても此公明ならざる正大ならざる方法てある、日本の政界にはどうしても此陰惡不公明なる空氣が脱けぬ、大隈伯は此空氣に中てられた一人てある、特に殘酷に此空氣に中てられた一人てある、僕は大隈伯の半途挫折を思ふ毎に混濁不純なる日本政界の空氣に就て深く憂ひ切に慨せざるを得ない。

十四年の政變の排大隈伯の中心は、僕は伊藤公てはない、井上侯だと思ふて居る、伊藤公は智の人て、井上侯は情の人、イザと爲れば伊藤公はしりごむが井上侯の熱は百倍し來る、井上侯てなければ彼の場合の猪突猛進は出來ぬ、井上侯は敵役に適して居る。

そは兎に角に、大隈伯にして彼の當時に死んて仕舞つたら如何てあつたらう、歴史の編者は確に薩長二派相謀つて大隈を毒殺すと書いたてあらう、大隈伯の生きて今日に在ることは薩長二派をして幸に其誹りを緩和するを得せしむる多大の恵みてある、去り乍ら伯果して當時に死んだら、他の一面に於て隈 謀叛の嫌疑を永く不可解のものと爲らしめたかも知れない、左すれば大隈伯の生きて今日に在ることは伯の爲にも其嫌疑を煙散せしむる顯著の酬ひと爲つたのかも知れない何れにしても時は至大の力てある、此力に依つて薩長の人も、大隈伯個人も互に其私忿を忘れ積怨を釋くことを得たのてある、兩方とも、今日當りは當時を顧みて嘆悔せずには居られまい。

然も大隈伯にして若し果して當時に死んだら、大隈伯は神に祭り上げられたか否か、板垣伯にして岐阜の難に斃れたら、伯は確に自由の神となつたに相違ない大隈伯はどうてあつたらう、大隈伯は陰險な人として奸惡な人として、散々に一派からは罵られたに相違ないが、或は一派の人からは神とも崇められ、憲政の多難、腐敗、萎靡、不振を見るにつれ、久ふして益々思ひ慕はるゝの人と爲つたかも知れない、それよりか、政界に於る危險なる陰謀史の終滅と爲つたかも知れない、僕の見る所ては、明治年間に於る政界の軋轢、排擠、離合、起伏は殆ど皆大隈伯を對手としての畫策てある、大隈伯が居なかつたら、薩長の士は、枕を高ふして眠ると共に、其政治的努力を怠つたかも知れない

が、同時に必らず彼の陋劣なる排擠軋轢を廢めたかも知れない、薩長の士が自然に此く寛濶の氣象に爲ると同時に、民間の士も大隈伯の死を以て陰謀史の最後のものたらしむべく、一層其邊の主張展開に勉めたかも知れない、而して最早今日當りは、我國にも今一段公明たる政治上の爭議を見ることに進步して居たかも知れない、此上から見れば、大隈伯の生きて今日に在らるゝことは、政界の爲に幸か不幸か、斷言し易からざる次第である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

以上て僕の話は終りとしよう、然も其終りに附け加へて置たいことは、

僕は必らずしも大隈伯の謳歌者ては無い、此篇が或は其嫌ひのある樣になつたのは、敢て大隈伯の個人を云々するのみては無くて、僕が政界の趨勢思潮に激する所があるからてある、僕は信ずる、大隈伯にして、若し英國か、佛國あたりに在り、其日本人間に在るだけの見識と膽略と經營上の開きが有るならば、彼の國の人々は必ず伯を擧げて幾度か首相の印綬を帶ばしめたに相違ない、彼に在つてはそれが出來て、我に在つてはそれの出來なかつたのは何の爲か、又只人民に其力があると無きとの差てある、僕は夙にそれを情けなく思ふ。

大隈伯は其人民の無氣力未修養に氣が着いた、依て大學を設け其他の社會敎育に勉めて居る、而して其八方往く所として可ならざる無きの才は、此方面に於ても亦一代の覇を稱へて居る、人は之を以て伯の成功と稱し、伯の才、政治よりも敎育に可なりと評して居るが、抑も實際の政治に志ざして、遂に敎育に終る、其慶すべきか、弔すべきかは、決して伯一人の問題ては無い。

僕は伯の努力を感謝するが、未來何時の世になれば人民の志を政治の上に成し得るに至るか、左樣な人民を得、左樣な國會を得、左樣な國家を見るを得るに至るか、之を諸君と共に考へたら、且耻ぢ且憤ふり、且焦らざるを得ぬ、而して僕が大隈伯の一生に牽連して之を言ひ出づることの決して不當に非ざるを信ずる。

△涙を濺さぬ人

早川鐵治

大隈伯とは明治三十年から心安くなりました、其前

は一向知らぬ、唯頻に時の政府に反對して居た改進黨の頭領だといふ事だけを知つて居た、改進黨の遣り口は何でも演説を遣つて自己の意見を洩し、輿論を作つて政府を多數で乘り取ろうといふ、即ち英國風を理想とするものであつた、尾崎の樣なヂスレリーを始め、グラッドストーンも居ればローズベリーも居りチャンバレーンも居る。そして機關新聞を作つて己れの主義方針を示し、輿論の勢力によつて多數議員を議會に入れ樣と心掛くる、全然英國流である、私は反對である。今も猶ほ獨逸風を喜んで英國風を喜ばぬ。それ故伯には會つた事も無い、寫眞だけ見て知つて居つた、即ち三十年迄は見ず嫌ひであつた。

三十年に、私も農商務省に官吏をして居たけれども元が外務省の出身である、何とかして外務省に歸りたいものと思つて居る中に、小村が次官になり、外務省て養成した人間を他へ遣るのは人材登庸上不得策だとし、それて私も元の外務省に歸ることになつた、私は農商務省ては殖民局長をして居たのてすが、丁度其時大隈伯が入閣して大藏大臣て農商務を兼任したので、農商務を今出ては困まる、今少し此方も勤めろといはれる、それて此時から私も外務農商務の兩省へ股を掛けることと爲つたのてす。

此時初めて大隈伯に會つたのてす。今迄見ず嫌ひて居たけれども、會つて見ると一見舊知の如く、少しも城府を設けずドン／＼意見を吐く、信用すれば事を任す、思ふ存分に遣らすといふ風がある、如何にも長に長たる處が有ると思つた。併しまだ非常に親しい事はなかつた、小村次官と私との間には、多少は先づ默諾といふ樣なものがあつたのだが、小村は人前を作つて居て捗々しくない、朝三暮四て約を守らぬ、それて私も馬鹿げた事と思ひ、官海を見切ることに決心した。此事を大隈伯に語ると、何とか處置を工夫するから待てと答へる、其結果として、私を拔擢して一躍辨理公使として呉れられた。此樣な事て愈よ大隈系統となつたのてす。

明くる年、憲政黨内閣の時に、私は無任所公使から又通商局長兼内閣書記官となり、全然一切を私に任されました、私は其知遇に感じたので、政黨出身て無い乍らも、政黨内閣の倒れた時には進退を共にし、實業界に降つて仕舞ひ、爾來政治上の關係はないのてす。即ち伯と私との交の最も厚かつたのは三十年三十一年てすが、今も猶ほ親しく往復はして居ります。

大隈伯を非常に相場をする惡い男との惡評があるけれども、交はつて見ると善人で、惡人といふ方には行かぬ、相場をするものは元老中にもあるけれども、伯はそれ程の人でない、それは相當の財產もあるから色々の賣買等のあるは實際だらうけれど、投機などはせぬ、が兎に角財政整理は旨い人だ、一時藩閥內閣の時に改進黨を撲滅しやうとし、大隈伯の金穴を探つたけれども分らない、到頭中村道太に目星を付けて、道太を取つて抑へたけれども、何等の反響は無い、大隈はおめず憶せず矢張り派手に遣つて居る。

近づいて見るに家政も上手で、金錢を活かして遣ふ、放蕩もせず、藝人も近づけず、彼の家に只奇麗にやつて居る計りで存外に金はかゝらぬ、伯の所有地は十幾萬坪かであらう、坪六錢と積つてもコーット、月一萬圓位の收入はあらう。されば或る元老がそこらの富豪に、大番頭の樣に結托してお賄ひを受ける樣なことをせずとも宜からう。彼の家を維持する財源を絕たうなどとした所で六かしい話である。

伯は餘りに理想が高くて實行が伴はぬ、是れが一つの缺點である、公平を尊び正直といふ考を頭に持つ、又太つ腹を粧ふといふ傾があり、反對者をも肉薄していぢめ拔くといふ事を能くせぬ。又自分の子分が如何程偉くても非常に拔擢することをせぬ、是が善いといへば善いが、惡いといへば又惡い。例へば我々の仕へた人の中にも、後藤などは、自分が拔擢しやうとする時には反對があつても斷行する。大隈伯は之をせぬ、蠻氣が無い。壓制を嫌ふ。何處迄も公平を貴ぶ。英國風の政治家を以て任じて居る。それ故子分に對しても、山縣の樣に家の事に迄立入つて心配する事はない、來る人は友人同志のみで偉い交の深い人はない。

私としても左樣である、大隈伯の爲に役人を止し、前途有望な官途を去つたのである、それからすれば今少し親しく爲つて居なければならぬ關係である、然るに只一通りの附合で居る。三十三年に私の家內の無くなつた時、ホンの通り一邊の交際なのだけれど、品川子爵は態々悔みの爲に私に會ひに來て、淚を流して吳れられた、三人の子供の居るのをつく／＼見並べて、年も若し、此子供のあるのに妻を失つて、世帶の苦勞もせねばならず、困るだらう。我は金錢の苦勞丈は無いが、それですら妻を失つては隨分困つた。自分の身からして人の辛さが察せられるといつて泌み／＼泣いて吳れられた、榎本も私が其秘書官をしたといふ丈の

關係だが、矢張り自身て來て同情して、共に涙を灑して呉れられた、然るに大隈伯は只一邊の代人を寄越して會葬させたばかりてある。斯樣いふ風だから親しくはなれぬのてす。尾崎などは私と違つて元々早稻田の畠に育つたのて、大隈を棄てて他へは行けぬ義理合なのだけれど、大隈伯は山縣や品川と違つて親しめぬ處がある。彼の去るのも矢張りそれ等の點からてあらうと思ふ。

元來が我々は俗人てあるから、涙のある人、涙を灑す人の方が、何となく親分子分の間が近く、親しめて嬉しいのてす、それ故世に立ち政治家となり、餓鬼大將と爲るには如何しても蠻氣、壓制、不公平といふことも自然に生じ、自然に要することになると思ふ。

伯を一括して評すれば、公平な、正直な、極理想の高い人と判斷する、が不公平な人間てなくては偉らい子分も持てず、偉らい金持にもなれぬと信ずる、不正といふと語弊があつて私の思ふ意味とは違つて來るが、何といはうか、矢張り先づ不公平な所のある人てなくては勢力は附くまいと思ふ、今度の陸海軍人の進級を見るに、矢張り權兵衛大臣系統の閥族などが比較して見ると拔擢されて居る、此樣いふ具合て勢ひ交が深くなれる事と思ふ。不正となつては感心せぬけれども、此者に金を作らせたいと思ふなら、多少の面倒があつても利益を其方に向けてやる位な事をすれば、それて其者は其人の爲に大に盡す氣になるのてす。幾分之を加味せなくては到底勢力の大をなすことは望み難い。

△憎まれ子世にはびこる

法學博士　某　氏

一言にしていへば大隈伯は憎まれつ子世にはびこるといふ諺によく當箝る人てある。伯が政治上に於て多くの敵を有して居つた事は世人のよく知る所てある。伯の政敵とならなかつたものは僅かに黑田伯や松方侯位のもので、其他の藩長の政治家は大抵伯を敬して遠ざけ、或は敬せずして遠ざけた。其點に於て伯は確かに不幸てあつた。然し伯にとつては不幸却て幸となつたのてある。伯は元來不平滿々の人てあつた、其不平が即ち伯をして今日あらしめた所以てある。伯が嘗て百二十五才まて生きるといつた事があるが、百二十五才まて生きても、まだ理想を達せぬ時はもう二十五才延ばすといふて居る。あの人がもう八年すると金婚式な

さうだ。然し正直にいへば、もう八年生きてゐるかどうか疑はしい。然し何時もあの元氣のよいのは實に感心する。

米國の或醫者がローズヴエルトを誇大妄想狂で、病的な人だといつた。伯は之を聞いて、我も亦誇大を好む。隴を得て蜀を望むは人情の常で、苟も向上進歩を忘れざるものはさうあるべきである。現在に滿足すれば退歩するの外はない。現狀維持を目的としては現狀維持が出來ない。今日早稻田で百萬圓の寄附を募つて居る、然し自分は之を以て滿足するものでない。百萬圓を得れば又更らに寄附を募る考である。然し自分は決して誇大狂ではない。本氣の沙汰である、眞面目な話であるといふて居る。

老いて益々壯んなるとは伯の事である。然しそれは憎まれつ子世にはびこるが爲めである。伯が政治上に於て孤立したのは、英國人の所謂「光榮ある孤立」(スプレンヂツド、アイソレーション)であつても、伯に於ては却て誇とすべきものであると思ふ。

△大隈伯の天禀

文學博士　久米邦武

大隈伯の事を世間では聞き學問で、餘り勉强せぬの、甚だしきに至つては電話交換手だのと言つて誹るのがあるけれども左樣ではない、私は伯と同郷で伯より年は一つ劣りである、それで別段伯を褒めもせず惡口もせず、實際の事を話すが伯に讀書の才は天禀に備はつて居た事を認める。それといふのは私は學業に於て常に他のものより一年若くは二年先に進んで居り、從つて朋友も二年以上長じたものばかりであつたが、伯は私の十五になるまで矢張り學校に於ても始終一年の長者で進まれた。佐賀の學校では十五で元服して十六になれば、內生寮に寄宿を許される定めであるけれどもそれ以前でも學業さへ早く進んで居るものなら同じく寄宿を許される、それで私は十五の時に即ち丁度安政元年寅の年に內寮に入つたが、伯も矢張り其前年に內生寮に入つて居られた、つまり伯は二年生で私は一年生の譯である、其內生寮の規則には、入寮しがけ二年間は寮頭の席を皆が酒掃する事になつて居り、之を酒掃株といつた、其中に首席から三人を酒掃頭と名づけ、

凡ての洒掃仲間を監督する定めてあつたが、私の入寮した時には大隈伯が其洒掃頭の筆頭てあり、其翌年には私が筆頭となつた、今でも洒掃頭仲間の事が能く伯とのからかひ話にも出るが、斯樣な次第て伯は最初から學問は極、人よりも進んて居たのてある。

けれども勉强家てはなかつた樣だ、人と談話することが好き。特に伯は美男子てもあり、人柄が溫和しくて人和のあるものだから、能く先輩の人達から呼ばれる、それて人からも話を聞かされゝば、自分からも亦好んてする、斯くて讀書と談話とて智識を得ることは皆初から伯に備はつた天禀なのてある、それが後になつては段々多く談話の方に傾いて來た、遂には如何も讀書はしても窃にして人にはせぬ樣な振をせらるゝ疑がある、今も猶ほ其事實を發覺し得ず、時々其話に及んても笑つて實を言はれぬけれども、話の端々によると、矢張り夜分などに存外讀書をして居らるゝ樣に思ふ、それてなくて、唯人の話をばかり聞いて彼れ丈の咀嚼の機能の出來るものてない。私は如何しても人に隱して讀書をして居らるゝと斷定する。

それから伯は十二三の時かと思ふ。彼の人の父は學館て劍術の會試のあつた時に劍術を遣ひ了ると俄に病を發して死なれ、その後は母の手一つて養育されたが、伯の家は藩ても大身てあり、家計も豐かな處から、朋友の集會などの時には、己の家へ來よ〳〵といつて連れ寄せ、其處て申合せ事もするといふが常てあつた。伯の客好きは初からてある。後に萬延文久の頃となり、佐賀にも尊王攘夷の一黨の起つた頃にも、伯の宅に集會する事が最も多かつた所から、會の仲間には先輩者の多かつたにも拘らず、伯も巨魁の一人と見做される樣になつた、それから長崎に行き、遂に明治の朝廷に出る迄、次第に客好きの性が發達して今日に至つたのてある、伯の客好きは其天禀といつて宜しい。

私の歷史學の初め伯に由つて敎えられたものだといふ事が、實業の日本かなどに書かれたが、彼れは折々話の出る事て記憶して居る、それは私の十六の時、即ち洒掃頭の時に通鑑を讀んて居つたが、伯は天台の胡三省の批評のある本を示し、此本て讀めば批評眼の注意を得て大益があるから、他の本を棄てても之を讀めといはれた、私は其言に從つて餘程利益を得批評眼を養ふことが出來た、それをいつたのてある。佐賀ては枝吉神陽の從弟に木原孝三郎といふ人があつて、歷史の批評に從來の經學者流のする樣な形式を棄て、歷

代の機括を見一代の機括を見る事をする、即ち論理的條理的に考へる事を已めて事實に就いて英雄の本色を見るといふ樣な事を、綱鑑の前書を讀んで發明した、其說が我々の五六年前から行はれたが、我々が內生寮に入つてからは更に其學風は進んだのである。

併し伯の十八九の頃の事、原因は伯に在るので、佐賀の學館に大騷動が起り、南北兩寮互に楯を突いて爭つた事がある、其結果伯は學館を放逐されたが、それ以來再び學館へは戾らず、轉じて蘭學寮に入つたが、それが蘭學を修める原因であつた、蘭學も初から天稟て、進歩は人よりも善かつたけれども、矢張り自ら勉强するよりも人に勸めて勉强させて聞くか、或は特に調べさせて聞くかして自己の智識に吸收したといふ風、つまる所勉强家といふ名は無い、先づ懶惰生といはるゝ一人であつた、伯の從兄で伯よりは二才ばかりの年長者に杉谷行藏といふ人があつた、隨分讀書家であつたけれども左程天才といふ程ではないが、只伯よりは比較的勉强したものだから、常に大隈の懶惰々々と後迄も言つて居つた、懶惰は本人も固より承知の事だが、でも杉谷は天才の劣つて居る處から、二年の年長であるに拘らず、伯のまだ朝廷に出ぬ中から次第に智識に懸隔を生じて仕舞つた。

大隈伯の經濟上の才のあることは、伯の佐賀に居る間は何人も氣付かぬ處であつた、多分長崎に出てから此方にも亦智識を進め活動を始めたものであらう、已に文久の頃から佐賀の商人に、所謂バハンと言つて、長崎近所で一種冒險的な密商賣するものが往來して居たが、段々伯はそれ等のものにも話し或は勸めて種々の貿易上其他の運動をもする、又自己の考案によつて資本、旅費を作る、又藩の爲に何呉れとなく運動することにも進まれた、その事は、折々伯自身の話に聞く所である。そして藩に勸めて長崎に青年の書生を出し、致遠館といふを其寄宿所として、泰西の事情に通ずる爲に西洋學の教育を始め、副島伯をも其時に勸めて長崎に出し、長崎に居たフルベッキといふ耶蘇教師を講師に賴んで遂に一の學校の如きものを創めた、是が抑も伯の一方には教育を爲し、一方には政治、經濟上に活動された起因を爲したもの、即ち文久慶應頃の事である。

其以前迄は伯は只人に接するに溫和で客を好む、先づ交際に宜い所からして諸藩各種の人が皆心措なく交はつて居たといふ點は伯の始終を貫徹して變らぬ所で

あるけれども、左程の大人物とは誰も思つて居なかつたてあらう、然し温和といつても只おとなしいてはない、きかぬ氣の處は初からあつた、自分が是と存じ立つた事ならば必ず押し通して屈せぬといふ事は初から具はつて居た性質てあつたけれども、實際人目に立つ程の事には觸れなかつたものだから、自然人にも心付かれなかつた、其後慶應の頃は私は閑叟公の傍に居る、彼の人は長崎に居るので、四五年間打絶えて實は何も知らぬ其間は所謂當世の有志連中の巨魁かなどに推されて居たのだけれど、一般には左程にも思つて居なかつたが、佐賀の政府て閑叟公の命により、學問に志ある士て將來に望あるもの一人を撰擧された時、伯が其選に當られた、其事は終に行はれなかつたけれども、是によつて伯の佐賀第一の人物といふ事を側からも認める樣になつた、それから更に明治の維新となつて、諸藩から人物が盡く朝廷に集まるに及んで、薩摩からは西郷、大久保、長州からは木戸、廣澤などが皆第一の位置に立つた時、伯は直にそれ等と比肩して同じ位置名望を得たのであるが、伯の名の最も著しく著はれたそもそもは夫の兵庫談判てあつた。

兵庫談判といふは即ち切支丹宗一條て、各國公使の總代としてパークスが差向けられた時に、我朝廷ては大隈八太郎を以て談判の主任として愈よ應接と爲つたのてある。是迄日本ては切支丹宗は厳禁故、之を信ずれば厳刑に處する定めてあつたのを、外國公使等は之を突き崩して信教自由とし樣といふ意氣込てあつたから事甚だ至難てあつた、が大隈は出て迎へて、依然國法は舊來の儘、他國よりの容喙を許さぬ事に談じ付けて來た、是が當時の有力家等が伯の非常なる學識才力を推稱して事に堪ゆるとした原因てある。明治の維新は尊王攘夷論の結果てあるから、凡て有志の士中學識家と稱せらるゝものでも、能く世界の大勢に明かに而かも外國公使と應對して其事を遂行するといふ、智識あり、才能あり、氣力ある者は先づ一人もなかつたといつて宜しい、是れが伯の時の朝廷に大名望を得る根原てあつた。

私は明治の初から國に居り、四年に鍋島家の家扶と爲つて東京へ出ると、俄に岩倉公から洋行の隨員を命ぜられ、急に支度をして亞米利加渡航の途に就いたから、明治六年迄の東京の事は少しも知らぬ、従つて事實として歷陳する事は出來ぬけれども、其洋行中岩倉、木戸、大久保には昵近して能く其性質を知つて居るが、

何れも同様、只幕府を倒して天皇の親政にするといふ、内治の事にのみ智慮を盡したので、其方の鍛錬は十分付いて居るけれども、經濟上即ち殖産工業とか或は教育上の事に注意を生じたのは、足一度び海外に出てて西洋を目撃してからである、此等の事を當時初から組織的にチャンと透見の出來て居たものは實際大隈伯が第一である、其頃迄は伊藤、井上等は伯に就いて自分の才力を伸ぶるといふ位置に居たのである。

朝廷では矢張り木戸、岩倉、大久保が柱礎で、次は即ち大隈といふ順序であつたが、西郷が事を起して西南役となり、其際に木戸は死に、續て大久保も刺殺されたから、最早や朝廷には大隈の頭をはるものはなくなつた、最早や自己の有爲の力を大に振ふの時期が來たと信じ、其運びに取懸つた處、薩長を始め諸人容易に承服せず、遂に竹橋騒動を起す、それから國會開設の急行徐行論に至り、遂に薩長の巨頭が一致して明治十五年に大隈伯をば廟堂より排斥したのである、其後も度々入閣したけれども、先づ伯の朝廷の上に大に才力を振はんとしたのは之を以て終期としてよいのである。其後さかぬ氣の伯は更に日本内地の趨勢を以て、立憲政治の根本に培ひ、兵に所謂公論の主張者とならんと勉めて改進黨を組織し、それより早稻田に學校を建てて全國の公論の基礎を据ゑ、自ら其等の上に立つて大に有爲の力を伸べんとせられた。

伯の仕事は多方面に亘つて様々に見えるけれども、私を以て評すれば伯は何處迄も政治家である、即ち時務に活動する人である、學者ではない、教育家でもない、人に學問をさせる人、人に教育をさせる人だ、一體此二つよりして凡ての人を言へば、皆活動的の人と思想的の人とは判然別れる様である、思慮に長じた人は其學ぶ所見聞する所が凡て思慮の方に多く傾き、それからして政治ともなり經濟ともなり種々の方面に働くけれど、つまる所思慮を世に與へるといふ方が主になる、福澤諭吉翁の如きが即ちそれである。大隈伯は活動的の人で、博學にも見え、達識にも見え、教育家の様にも見えるけれど、つまる所はそれ等の事を人を利導してさせるといふ方に向き、盛に活動する人物である、世間的にいへば何處迄も政治家で學者ではない。經濟の點に就いても其通り、凡ての實業上理財上に就いて伯の有する智識は逞しいけれども、自ら會社長となるとか、或は貿易をするとかいふことは、伯の性分には元と無いことである、今に一つも能くせぬものはない

けれども、自己の活動上費用の必要ある時に種々の方面に向つて其資を得るを勉める丈のことである、がそれによつて、或は會社師とも見られ、或は實業家とも見られ、又は投機者とも見られるけれども、要するに伯は只自己の活動に向つて必要な財を得るを謀る丈の事實である。此等のことを究めて伯を觀察せなくて、あの多方面な人物を只自己の向き居る側からのみ評するならば種々に見えるのも己むを得ぬ。

中には隨分惡口も聞こえる、私も多く聞いて居るが、その中に姦物といふ評もある。姦物といふ樣な斯樣な心理的に亘つた評を下すものは、概して其評するものの思想に何處か偏狹な所がある、姦といふ結論をするには其事實を擧げて曲折を盡した上でなければならぬのだが、それをもせずに言ふものは多く評者其者に猜疑心のあるものである、けれども世には又佞幸邪智の相といふがある。例へば人と對話するに、自已の好まぬことを言はれるとそれを根に持ち、必ず報えんとの念を發し易いか、或は人に接するに智を弄して自已の思ふ壺に導き落さんと巧むといふ者であると、多くは人の語を聞く時に顔を横に傾くるものである。が大隈伯と對談する時には斯る相を感ずることがあらうか、私は無いと思ふ。

元來前にも述べた如く、藩閥より排斥されて其反對に立つ改進黨を組織し、將來の大政の監督者に立つといふ基礎の上て活動したものだから、其反對側の者に姦とか邪とか種々の感觸を抱くもののあるは當然である、が如何に心理的に伯を揣摩したとて其姦と邪とは遂に發見し得べくはない。

又不親切だとの謗がある、私は是は左迄聞かぬけれど、併し是れ亦當然あるべきの評である、何故かといへば、餘り廣く交る上に、而かも其交りが皆活動的の事であるからには、必ずしも凡ての人が皆伯の語によつて運動し其事が屹度成効するとは限らぬが、而かも不成功の場合には必ず伯に對して依賴心を起すに相違ない、其場合一々嘆願を受けて助くるならば到底力の能く續く處でない。それ故餘り多數のものに交際せなくて能く自力の終始を全うし得る範圍に止めて置くのが普通或は普通以上の人までの遣り口である、が伯は大なるもの好き、多いもの好き、何ても盛なもの好きだから、人に接するにも多々益々愉快を感ずる、即ち恩の洽からざるは交際の廣過ぎるからてあらう。不親切の謗は起るべきて、起つても伯は甘受せなければな

らぬ。

又早稻田大學を徒に擴張し、唯人を多く集めるばかりて教育の實が左程に無いのを、直に商買的とか、博徒の子分救ひなどと種々の誹謗が時々聞こえるけれど、是も前と同前餘り大に過ぐるのてある、けれども是が伯の先天的嗜好だから仕方がない、何でも多數の人を集めて益々其事の擴がるのを無上の愉快とするのてある、さりとて自ら大して人を驅り込むてはないけれど自然の勢左樣なつて來る、即ち眞に敎育上の事を精しく論ずるなら、左樣な事は實は宜くない、一學校にはそれ相當の程度を限るのが敎育家としての立場からは本當てあろうと思ふ。(談話)

△進化せる大隈

櫻井熊太郞

大隈は無責任な男だ、他ではないが、彼のポーツマス條約の時に最も其威を切實にせしめた、彼の時には屈辱的條約てある、國家百年の長計を誤るものだと思つて我々は躍起必死の運動をやつたが、それが濟んて翌三十九年一月の進步黨大會に、大隈は一場の大演說を遣り、縱擊橫擊、情理を曲盡して餘力を殘さず、所謂ポーツマスの屈辱條約なるものに殆んど完膚なき迄の大痛棒を加へた、それは演說としては實に雄大な立派なもので、新聞記者等は皆偉いとして盛に書き立てた。

が其處てある、大隈にして初から左樣な考を持つて居るならば、何故其時に其意見を發表せぬか、まだ御裁可にならぬ時になぜ言はぬか、其時には默つて居つて、六菖十菊の後祭りとなつてからケチをつける。何になる。須らく僕等の遣り方を見るがよい。問題の活きて居る時には騷ぐが、後て女々しく愚圖々々は言はぬ。此に於てか、大隈は徒に大言壯語を敢てするものて法螺吹てある。と此一事に就いては言はなくてはならぬ、他の事は知らぬ。

何?、伯には伯の事情?、それは聞いたら有るも知れぬ、然し僕の大隈を論ずるは、歷史上の人物の豐臣秀吉や石田三成を論ずるとは違はぬ、僕は公平なる史家の見地に立つて彼を評するのてある、聞いたらそれは其時の事情も有ろうさ、然し判官となつては左樣一々被告の辯解ばかりも聞いては居れまい、僕は只事實

の跡に就いて言ふ丈だ、辯解などは聞かずして宜しい。それは大隈は彼れ丈の人物だ、偉らい處は多いさ、が偉らい處は誰でも言ふ、必ずしも僕の口を假らずともよい。僕は自分の蟲に好かん處を遠慮なしに言ふんだ。

が今度の南極探檢の後援には本氣になつて働き、十分責任を全くしたね、それは社會一般の同情はあつたけれども、曠日彌久する中には間に色々譏誣中傷も行はれ、困難な事情も横生したに拘らず、大隈は名譽を賭して盡力し、到頭一行を送り出す迄にやつた。是で一先づ段落が着いた。大隈が本來無責任か如何かは此に至つては分らぬ、本來といふ事に就いては何とも言はぬ。只事實だけを言つて置く。

廿八日の芝浦送り出しの日は丁度井上侯爵の祝の日で、大隈も招待を受けて居るに拘らず、彼方へは顏を出さずに南極探檢の方へ顏を出したといふので大分惡評された相だよ、その下には何だ、櫻井といふ樣な桂内閣にケチを着けて廻る奴等が居るつてんでね、惡くいへば現内閣に忠勤を抽んずる奴等からは色々に騷がれる、それにも拘らず、大隈が直往邁進前後を一貫して責任を果したのは感心だ、急に進化したんだね、百二十五歳説を唱ふる大隈だから、まだ今は坊つちやんだ、是から段々進化するだらう。僕等といふ樣な奴と交はると段々進化するよ。

大隈は條約改正て足を一本失つたが、彼の時の刺客來島恒喜の二十年祭に臨んで僕は斯う言ふ詩を作つたよ。

無缺金甌忽欲ㇾ摧、舍ㇾ生取ㇾ義氣豪哉、
誰知赫々邦威盛、偏自二霞關一擊一來。

之を見せたら大隈もギャフンだらう、彼時彼樣な條約の改正をして置いたら、日露戰爭も何も出來はしなかつたからね。其改正の邪魔をしたのが即ち此來島なんだ。

△大隈伯の大なる所以

法學博士　高田早苗

我輩は、大隈伯を批評するには餘り伯と親近過ぎる。然しながら伯と親近であるからと云つて、別に遠慮する必要はない。遠慮せずに思ふ存分な事を述べて、伯の短所を擧げて論じた所で、これが爲に憤られる樣な大隈伯でもない。我の如くに我を描けといふクロムウ

エル的襟度は大隈伯は確かに有して居らるゝ所てある。けれども云ふまでもなく、我輩が大隈伯を批評すると云ふ事になると、自然伯を贔屓する事になる。他の批評に對して伯を辯護する傾になるであらうと思ふ。我輩は大隈伯に最も敬服する一人である。それ故に伯の下になつて仕事をしてゐるのである。さういふ傾になるのは自然の事である。然し伯に對する他の批評が解つて居らぬのに、肩臂を張つて無暗に辯護するのも頗る可笑しい話てあるから、極めて簡單に大隈伯に關する我輩の感想丈けを述べて、御免を蒙らうと思ふ。

我輩の考ては、大隈伯は維新當時から今日迄あらはれた政治家の中で最も自力の強い、自信の篤い人の一人であると思ふ。事によつたらば其點については所謂維新三傑までも引くるめて考へて、伯が第一であるといつても宜からうかと思はれる。大隈八太郎と云ふ一介の書生であつて、而かも年少てあるに拘らず。又何等武功があつたと云ふ事も聞かないのに、又薩長以外の出身者てあつたに拘らず、數多の先輩を凌ぎ、忽ち臺閣の上に上つて、西郷、木戸、大久保等の諸先輩と肩を並べるに至つたといふ一事を見ても如何に自信の篤い、自力の強い人であるかといふ事がよく解るのてある。

竊かに考へるに、大隈伯は、何事についても「第一流」にならなければ我慢が出來ぬと云ふ人のやうに思はれる。「第一流」と云ふ事が、少年時代から今日に至るまで一貫して伯の理想てあるかと思ふ。暫らくたりとも第二流と云ふ事ては安んじて居られない人てあるかの如くに思はれる。大隈伯が書を書かれないと云ふ事は有名な話てある。噓か本當か知らないが、其昔鄕里にあつて、父君の法事を營まれる時に、自分で手紙を書かれるのが厭だと云ふ所から、足駄がけて親類へ一々案內して廻つたと云ふ話がある。ともかくも大隈伯は餘り筆を執らるゝ事はない。內閣大臣として詔勅に副署される場合の外は、筆をとられぬ事は事實てある。何が故に伯は筆をとられないかと考へて見ると、蓋し伯の書は第一流てないのてあらうと思ふ、手筋のわるい人は、幾ら手習をしても第一流の名筆にはなれないと言ふ事は、自分自らが經驗のある所である。「第一流」てあると認めなければ、如何に不自由てあつても筆を執られないと云ふ點から考へて見ると、苟も人の前に立つて事をなす以上は、暫らくたりとも第二流

たることは忍ぶ事が出來ぬと云ふのは、伯の元來の性質てはあるまいか、と思ふ。伯は之が爲に成功し、之が爲めに失敗し、之が爲に大名を世界に馳せ、之が爲めに多くの政敵を得られたのてはないかと考へる。又いかに自分が不自由を感ぜられても、一生涯自ら筆を執らずに濟まされるといふ一事についてみても、伯の意志が如何に强烈てあるかといふ事が能く解るのてある。大隈伯は、負けず嫌ひの權化てあると自分は考へるのてある。

大隈伯は五千萬同胞中の最も自力の强い人てあるといふ事を自分は信ずるが、自力の强い力士が必らず角力が上手てあるとはいへない。角力に勝つのには、力も必要てあるが、四十八手も必要てある。角力の取り口と云ふ事になると大隈伯以上の人が、世間に少なからずある樣に思はれる。力量の上て言へば、大隈伯は無論横綱てある。けれども土俵の上の勝負て星を附けて、角力の位置を定めると、大隈伯より先きに横綱になる人のあるのは怪しむに足らぬ譯てある。即ち伊藤公爵の如き是れてある。伊藤公と比較して見て、力は僅かに大隈伯が上てあると思ふが、角力は或は伊藤公の方が上手てあられたかも知れない。勝星は伊藤公の方に餘計ついた樣に考へるのてある。

大隈伯は意思の强烈なる人てあつて、負けじ魂の權化てあると思ふけれども、同時に又大隈伯ほど寛大な人は餘りあるまいと思ふ。政敵に對しては、遠慮會釋のない人てあつて、他人を批評するに當つても隨分峻烈を極むる事がある樣に見えるけれども、然しながらそれは政治上の意見の相違から起る事て、私の交際の上からいふと、大隈伯は最も暖かい人てあるのみならず、部下に對して寛大を極むる人てある。殆んど寛仁大度といつて差支ない人と思ふ。其點は大隈伯を長官に戴いた事のある官吏の人々は、大概感じて居ると思ふが、自分の如き或は政治上の關係、或は學校の經營の上に就て殆んど三十年間伯と離れずに居るものは、最も深く感ずる所てある。帝國議會が開けて、立憲改進黨、又は進歩黨が政府攻擊の急先鋒となつて、隨分世の中を騷がしたのてあるが、世間では、大隈伯が親ら采配をとつて、一々指揮された樣に思つてゐる樣だけれども決してそう云ふ事はなかつたのてある。改進黨なり進歩黨なりの行動の大體に就ては、伯の指揮を受けたと云へば、受けたのてあるけれども、それもどちらかと云へば、黨中の主なるものが、方針を定めて

伯にお屆けをして置く位に止まつたのである。況してやその先の事になると、伯は全く放任して黨中の主なるもの丶爲す所に一任して置かれて、その行動から起る所の責任のみが、伯の一身に集まつたといつても差間へないのである。又學校の事などに就ても同樣であつて、世間では伯が色々指揮される樣に思つてゐるものもあるか知れないが、それは全く事實に反してゐる。三十年に亘る經營について伯は、可と云はれた事はあるけれども否といはれた事は一度もないのである。總て我々に一任されたのみならず、我々の立てた所の方針を容れられて、其遂行について、輔助されると云ふ態度を終始變らずに今日迄取られたのである。此等の點より考へてみれば、大隈伯ほど寛大な人は、世間に餘り類がなからうと思ふのである。

今一つ大隈伯について述べて見たいと思ふ事は、世間普通の人と違つて、伯は年をとらる丶に從つて、思想が若くなると云ふ一事である。此點については伯は全くグラッドストーンと東西軌を一にするといふて宜しい。嘗てウォルターー、バゼホットがグラッドストーンを評した時に、グラッドストーンは若い時分にはピイルの下に立つて保守黨の一人であつて、穀物介廢止の時にピイルと共に自由貿易主義を執る樣になり、更らに進んで英國自由黨の主領となり、最後には、自由黨の人々よりも一層進歩的な一層自由な意見を懷く樣になつて、遂に愛蘭自治を唱ふるに至つた。世間の人は若い時分に進歩主義であつて、年をとると保守主義になるのが普通であるが、グラッドストーンは全く反對であると云ふ事を云つたが、大隈伯についても同樣の感がある。若い時分には尊王攘夷黨の一人であつて、大久保公等と共に廟閣に立つたときは漸進主義の政治家であり、世間からは官僚臭味のある政治家の樣に云はれた事もある。野に下つて、改進黨を組織された時も、板垣伯の自由主義に反對して、秩序的進歩即ち漸進主義を唱へられたが、漸く年の老いると共に、思想の範圍は益々廣くなつて理想を現實にし樣とする考へが、益々盛んになる樣に認められる。元より大隈伯は政治家であるから、トルストイの樣な不實行的な事を唱へらる丶事はないけれども、然しながら理想的の傾向は、年と共に加はる樣である。是れ畢竟肉體の老いるに拘らず、精神の若やぐ事を示すのであつて、伯の大なる所以の一であると考へられるのである。

前に述べた點から云ふと、大隈伯とグラッドストー

ンとは大分似てゐる所がある樣であるが、然し大隈伯は何れの點もグラッドストーンと同じであるとは言はれない。グラッドストーンの大隈伯に及ばぬ所もあるが、大隈伯もグラッドストーンに及ばざる所がある。詮ずる所大隈伯と云ふ人は、一面グラッドストーンに似てゐる所もないでもないが、他面パルマーストーンに髣髴たる所がある。その辯舌の爽かにして、且つ有力なる事、その愛嬌多くして、ユーモルに富むで居らるる事、その外交振の花やかなる事等の點を擧げると頗るパルマーストーンに似てゐるのである。パルマーストーンはその昔、英國の首相としてドン、パスフィコ事件と云ふ外交問題に就て、英國衆議院に於て演説し、今日の夕刻より明旦の拂曉まで大演説を續けて、最後に「昔羅馬人は我は羅馬の市民なりと名乘れば世界の人皆慴伏したと云ふ事であるが、我英國の臣民は世界の何れの隅にあつても英國國家の手を以て必らず之を保護するのである。寸毫たりとも他の損害を受けしめず、他の侮辱を受けしめないのは、我が外交の方針である。」と演説して英國の上下を驚喜せしめたと云ふ事であるが、日本の議院政治が最う少し進歩してゐて、大隈伯が政府又は議院内の人であつたならば、必らず之れ位の事は言ひもし、されもするであらうと思ふ。我輩は常にグラッドストーンと、パルマーストーンとを合せて二つに割つて之に多少の東洋的色彩を加へたのが即ち大隈伯であると思つて居るのである。

（完）

酒五題

○酒の話

林田龜太郎

私は元來酒は餘り好きでない。飲むことは隨分飲むが、旨くて飲むといふのではない。世間で私を何時もグデン／＼に醉ばらつて居るもの〻如く想像して居るのは誤解である。其證據には、私は醉うた顏をして衆議院の議場にあらはれた事は未だ一度もないのである。

私は酒に對する趣味といふものを殆んど持たない。然らば酒を何故飲むかといふに、トルストイや何かゞいふやうに、神經を痲痺させる爲めではない。又酒で勇氣を附けて犯罪をしやうといふのでもない。哲學者などにいはせると、いろ／＼六つかしい理屈を捏れるやうだが、私のは極めて簡單である。只座興を助ける爲めに飲むのと、時としては酒の力を借りて勉强する爲めである。例へば第一議會の時などは一日も二日も續いて徹夜をした、處が徹夜をするやうな時の翌日は乾度忙しいので、矢

張り一日働かなければならぬやうな事が多い。さういふ時にブランデーか何かを引かけると、大いに力を得る。トルストイにいはせると疲れたる神經を麻痺させて、其疲れたのを感ぜしめぬのだといふかも知れないが、さういふ時には私には是非必要なのである。藥用として、興奮劑として必要なのである。

どういふ酒が旨いかと問はれても、酒に餘り趣味を持たない私は、一寸返答に困る。でも山道などを歩いて冷たいビールを引かけた咋などは非常に旨い。又二日も徹夜して、精神朦朧とする程疲れた時に、ブランデーでも飲むと非常に藥になるやうに思ふ。

私は酒好きといふ程でないかも知らんが、まづい酒は飲まん方が餘程御馳走だ。今日まで一番よい酒だと思つたのは、皇太子殿下の御渡韓の時に菊正宗の本店から殿下に獻じられた酒を、殿下が伊藤公に二箱賜はつた。伊藤公は其一箱（四合瓶五十本入）を鮫島と私とに分けて下すつた。今まであの位よい日本酒を飲んだことがない。又一番まづい例をいへば、洋行中に、或大使館で、私が酒が好きだといふので日本酒の御馳走をした。私は一寸口につけると盃を下に置いた。處が何故飲まぬか、病氣でゞもあるのかと頻りに聞く。私は笑つて、日本酒なら幾らでも有難く頂戴するが、之は日本酒ではない、ザルチリ酸アルコール水だといつた事がある。

私は平常家にあつて餘り酒を飲まない。夫婦對酌の時でも殆んど日本酒を飲まない。又洋酒を飲むでもない。僅かにビール一本位のものだ。然し宴會などには二升三升の酒を傾けることなきにしもあらずである。それでも身體に障るやうな事は至つて少い。

今亞米利加の大使館に居る内田大使は私と同窓同級で最も親しい友達であるが、一日二人で談じた事がある。酒を飲んで身體に障るか？、いゝやちつとも障らない。翌くる日事務が取れないやうな事があるか？ない。斯くの如くして翌日事務が取れぬやうな事はない。亂れることがある？ 酒を飲んで亂れたり、事務が取れなかつたり病氣になつたりするやうでは酒を飲む資格が無い。お互に酒を飲む資格があるんだなといふて笑ふた事がある。

私は平常こう思ふ。煙草は少しばかりでも必らず害を受ける。酒は少しなら害がないと思つてゐる。（完）

○酒と佛教

文學博士　前田慧雲

佛教と酒は早く言へば中の惡いものである。涅槃經に、酒は「不善諸惡の根本なり」とある、又舍利弗問經には「酒は多失あり、放逸の門を開く」とある、阿含經には「酒に六失あり」と言つてあるし、大智度論には「酒に三十六失あり」ともある。三十六失は餘り煩はしいから略すとして、六失の方を擧ぐれば、「一には財を失ふ、二には疾を生ず、三には鬪爭す、四には惡名を流布す、五には恚怒發生す、六には智慧日に損ず、」である。又律の中には、「我を師とするものは草頭の滴の如きほどの酒と雖も口に入るゝ事を得ず、」梵網經には、「若し自ら酒器を手にして以て酒を飲ましむるものは、五百生の間手無し、何ぞ況んや自ら飲むをや、一切の人飲み、及び一切の人をして飲ましむるを得ず、況んや自ら酒を飲むをや。」とある。

此外にもまだ左樣な酒を戒めた語を佛典中から擧げれば、實に枚擧しきれぬ程あるが、右に擧げた丈でも大體は分る、即ち佛教者として酒を

飲むことは佛が堅く戒められたもの、何故かといへば、要するに酒を飲むと心が亂れ、それからして種々な罪惡をも犯す樣になるからで、その罪惡防禦として戒められてある。

が佛が左樣に堅く戒めて居るにも拘らず、矢張り飲みたいものと見えて、多くの宗旨中にも特に戒律を固守する律宗を除いての外は、通例の僧侶ならば殆んど酒を飲まぬものはない有樣である、是は今日に始まらぬ、古から左樣である。酒の事を或は大乘の茶、或は般若湯といつて、秘密には飲むものが往々あつた、禪宗の如きば「不許葷酒入山門」の碑を建てながら、矢張り酒を飲まぬ坊さんは殆んど無い樣である。

眞宗の如きは他宗とは振合ひの違ふ宗旨だから、酒を飲むことならぬと眞正面から嚴かに禁酒を命ずることは無いけれども、猶は蓮如上人の如きは、「坊主分の人近頃特の外重杯の由、其聞こえあり、言語道斷然るべからざる次第なり、あながちに酒を飲む人を停止せよといふにあらず、佛法につけ門徒につけ、重杯なれば必ず勸もすれば、醉狂のみ出來せしむる間、然るべからず、さあらん時は坊主分は停止せられても誠に興隆佛法ともいひつべき歟、然らずば一盞にても然るべきか、これも佛法に志深きによりての事なれば、之を止まらざるも道理か、深く思案あるべきものなり」といふ樣な、眞綿で首締める樣な戒を言て居られる。

併し眞宗は極人情的の宗旨だから、酒を惡いものだ、害になるものだ、それだから禁酒だといふ樣に廉（かど）を立てゝ極端には制止せぬ、早く言へば、人が親切を盡して其人の爲に御馳走を設け、態々遠方から灘の結構な酒を取り寄せて呉れた時に、一言の下に我は禁酒だとて斥ける事はせぬ方である。自分は假令禁酒するにしても矢張受ける丈は杯を受けて、先方の好意を有難く感謝し、滿足を與へる樣にするのである。

近來禁酒といふことを八釜しく言ひ、克巳的の事を堅く守るといふが流行の傾になつて居る、結構の事である、殊に學生と限らず、一般の青年の間には禁酒を守ることは至極結構である、假令人から御馳走があつても學生の間は無論斷つてよい事と思ふ、けれども一般の人に在ては如何な場合にも圭角立てて、表向きに禁酒の看板を揭げて、飲まぬ〳〵といつて力むのは我々は餘り感服せぬ方である。矢張り前に言つた樣に、先方の好意を察してそれに滿足を與へるといふ事が、角立たぬ溫厚な遣り方だと思ふ。

一體佛法の上のみではなく、世間にしても左樣であろうが、佛教で禁酒といふのは決して絕對的のものではない、酒を酒として飲むのは禁ずるけれど、酒を或るものとして飲むのは强ち禁ぜぬ。何となれば酒其物に咎の有るべきてない、飲み樣の如何に在る事である。只世間多くの場合が皆酒を以て快樂を取るものとして飲む、それからして色々の過失を生じ罪惡を犯し易い、爲めに之を禁ずる譯である例へば之を藥として用ふるといふ場合なら決して之を禁じはせぬ、否藥といふ所迄いかぬにしても、茲に一種の人間があつて、酒を用ひれは自分の職務の勉强が出來るとか、或は宗敎上の修行が却つて都合よく行くといふ事であるならば、左樣の人に向つて禁ずる必要はない、

祇陀末利唯酒帷戒といふことがあるが、是は如何なる事かといふに、祇陀といふ人があつて、此人は酒を飲まなくては何も出來ぬ、師から敎えくれた事も、自分の居る敎派の戒も、酒なくては一切駄目であつた、即ち此人に在つては酒は却てその人をして善に赴かしむる具である即ち酒が即戒律である、

又昔の學者にも酒が無ければ勉强が出來ぬといふ人があり、夜々勉强するに、酒を一合づゝ燈火の上にぶら下げて、その沸くのを樂みにセッセと勉强する、燈火は種油であるから酒の煖まるのは容易でない、二三

時間はかゝる、其間勉強して沸くのを待つて居る、その善い加減に沸いた頃に飲んで又勉強する、斯うやつて毎晩殆んど夜明け方迄も勉強したといふ、斯様な人に在つては酒が大變な助をして居る。酒あながち悪いものではない。

一體凡て佛法なるものは、物や事柄に善悪の差別を立てて、それを絶對的に棄てるといふ事はない、物その體は何れも皆之を實相といふ、有の儘の本性が現はて居るのである。之を是非するは此方が悪いのである、即ち此方の用心如何によつて物は利ともなり害ともなるので、物そのものに固着した善悪なるものは無い譯のものである、即ち此用心に注意を與へて悪い方面に傾かしめぬのが佛教である、此理合ひが十分會得出來れば、佛教なるものは一面甚だ窮屈相に見えながら、他の一面から見ると誠に寛大なる教である。

○酒と維新の英雄

魏　昌　卿

一、高杉晋作＝主の請求は酒か

「三千世界の烏を殺し、お前と朝寢をして見たい」と、馬關對帆樓の妓谷ウノ＝梅月尼の手を握り、有無を云はさず、全女を身請して、隱宅へ引込んだ高杉晋作は、非常の愛酒家で、肺結核を患えて、喀血しながら、酒を禁じなかつた。彼は、小杯を手にし、立膝してチビ〳〵杯の縁を舐め、小唄を口吟むを例とした。彼は、酒に量なく、亂に及はずと稱してたが、公會の席、又は有事の場合には强に杯を手にしなかつた。强いて彼に乾杯を要むる士あらんか、彼は、「主の請求は杯か、肴か、肴なら此調だ」と、乳の邊を指し、「肴は誠の赤心、酒は身の涙、身が血、味ふて下さい」と、杯を獻し、強く相手の手を握占め、凝乎と其人を視射た。馬關の町醫石田梅逸の二階で、西郷隆盛と會した時、彼が、懐中から、紙で封口した二合徳利を出し、「こいは身が放さぬお薬だが、主と飲み合はう、差合の酒を飲むのが、主ぢやからさ、チェッ杯がないなら、儘よ、代る代る徳利の口から」と、飲み合ふた。彼と非常の親交ある山縣公と雖も、彼と差合の酒を打寬いて飲んだことはないと云ふ。此の通り、親とも、友とも差合ふ酒は一杯か二杯に過ぎなかつたらうが、さて内房に入ると、直に酒を命じて、長く深く杯を弄んで、「女小供を相手にしては酒だ」と、一向他を云はず、氣持能く醉ふて、三味線を取り、「おい、謡へ、彈くから」と、駒落しの爪彈で、「上手だらうが、上手だらう」と、嫣然笑むのである。彼が、死病に罹らん數日前、馬關下町の名主、林を召連れ、櫻山の奇兵隊招魂墓に詣で、瓢簞酒を飲み、三絃を彈し、小唄を吟み、之は久坂が蛤御門で討死する前に謡ふた都々逸だ、是は松陰先生を送別した時の詩だと、縷々甲を吟じ乙を誦じ、故人に關係ある歌謡を懐出し、數刻にして、「あゝ、嫁だッ」と、額に蚯蚓腫した青筋を蠕動させ、三絃擲出して、溜息ついた。彼が、長洲征伐の際、酒樽に腰かけ、直衣着て、三絃を彈じ、主將の氣悠々たるを部下に示し、士氣の騰るを待ちて、小倉藩に突喊した話は傳つて有名である。

二、木戸孝允＝冷酒の徳

冷酒を愛した英雄として、木戸孝允の名を逸してはならぬ。彼の、寒最中一夜水渡しにした冷酒と云ふ位、冷酒の味を解した人であつた。彼は、酒の醇趣は除ろに醉ふと云ふ點にある、燗酒は火氣、熱氣に托して、醉を早めるもの、酒の理法に背いてる。更に冷酒の徳は醉が深い、除ろ

に醉に導きて、靜に醉を發して、長く醉を續けると云ふた。木戸は、決して、ガイ飲はしない、殊に盃洗飲みを嫌ふた。苟も士は、分ある者、品あるもの、節あるもの、淺に下郎と仐型に生活すべからず、元來酒は操守の興趣を扶くるものだと、說を爲して居た。

丁度、彼が、伊豫の日下燕石の許に、姿を讃實に變じて、京都から潜行した時の事、三日五日一滴の酒を口にしなかつたので、赤穗の渡船内で、貧送の伊丹酒の樽口を嘗めて、幕府の間諜に尾行され、已むなく其人を暗殺したことがある。爾時の事、彼は四國に上陸して、宿坊下婢の赤襷に南畫の蘭を描き、緡錢三百を贏ち得て、寢酒數鑰にありついたことがある。

三、黑田淸隆――酒亂の功

絞り小紋模様の手拭頰冠して、行司溜に胡座搔き、股火鉢に土瓶燗酒呑んで、相撲に力瘤入れた故黑田伯は、一生を通じて、酒に因れた男兒だ。

彼は痛飲豪酒の徒、酒の失敗譚を多く有してる。

一日、彼に酒の講釋を訊れた客がある。卒直なる彼は、「サム酒」と便腹を叩いて、「お前は女の味を知つてるか」と反問して、客の怪む顏色を覗ひ、「酒の味を知つてる奴ア、酒に呑れる奴だワイ。酒を飲む儂は酒てふものを知つちよらん。」斯く答えし意味の消息は今に傳はらぬ。

彼は、美人お濱なる女に愛著して、一日酒勢を借り、強いて彼女を姦した。爲に お濱の母に談じ こまれ、參議從三位が直筆で謝罪狀を出した。爾時、その仲裁役に入つた調所某はお濱と通じて、彼を舁ぎ、大に飜弄した小說的事件がある。犴は筆するに忍びぬ。兎に角、彼は非常の酒亂家で、土曜日の午後より日曜日終日、新柳若くは吉原の美妃數十を邸宅に招集め、酒池肉林の長夜宴を張り、馬鹿遊に贅を盡すを慣としたことがある。而して、爾時、彼は、「お前だち、酒飲め、飲んで醉はなけや、操な淸隆の機嫌を取れまい、醉つて狂ふてこそ、誠に貰はるゝンだ」と云ふを例とした。實に彼は酒を以て亂序、遣情の具としてたのである。

酒亂で失敗勝ちであつた黑田も酒亂で成功したことがある。それは榎本赦免の一事で、即ち、明治五年の事である。時の政府は、函館の英雄、榎本武揚を斬罪に處さうとした。斯議を聽くや、彼は、酒を被り、東京市中を白晝横行し、

「榎本を殺すなら、儂は江戸を斬り捲くる。」と、叫喚し巡つた。政府は從三位參議の此狂態に閉口し、丁に榎本を釋し、官に任用した。蓋し黑田は、釋放の約を以て、明治元年、死節堅き榎本を說服して、降參せしめたので、今し彼は其約を重んじたのてある。後日、榎本が黑田の酒癖惡しきを諫むるや、黑田伯は、「云ふな、云ふな、鎌公、儂が酒亂で、其方の首が落ちないのだ。掃部天神(井伊直弼の異名)の擬物の辭に、儂の酒を云ふな、惡くも其方に恩のある酒だ。それより、然う云ふ親切があるなら、儂の娘子を嫁女に貰ふでくれまいか。」黑田、榎本兩家緣組の約は立所になれりと云ふ。

四、後藤象二郎――使酒の術

生命懸で酒を飲まぬと、晩年酒を廢した後藤象二郎伯は、其出生が名門なるだけ、酒を飲むにも一體壓揭てあつた。彼は、酒に對し一種の主張を有して居て、酒は交際の具だから、衆人寞座の外、杯を手にせぬと斷じて、公席ては、雨飮の如く、彼に投じ來る獻酬を一も辭せず、滿を引いて、斗酒尙ほ辭せざるの槪を示して居た。彼は、誰人も酒數行亂

れて、序を失ふに反し、酒に從ふて益々居座を正し、威儀を嚴然と整え、張肩に一座を見廻はし、評定席の年寄格に構えて居た。曾つて、其子の酒に耽溺する風聞を耳にし、一日猛太郎伯を膝下に招き、「其方は「酒」を使ふ術を勉强しろッ」と、一言叱して、他を云はなかつた。親に肖らざる豪放の子は、父の一言を何如に感ぜしか。其日から嘗に倍した放蕩を敢てし、新橋の妓樓に流連荒亡を極めた。而して、殊更に揚言して曰く、「謹んで父命を拜し、「酒」を使ふ術を研究中だ」と、後藤老伯は莞爾として謂ふ、「不幸にも、彼奴の仕事する舞臺はない。」

五、三條實美――白馬の味

公卿程世事に通達した者はないと云はるる堂上の出身である三條公は、七卿の宰となつて、長州に在られた際、白馬の味を語つて、毛利藩有司を驚し、紅葉を焚いて酒を溫むる風流は禁衛逸話の一である以上、卿が白馬を解して居た迄、怪むに足るまいと、倘更に有司を驚した。彼は單に酒に於てのみでなく、何時の間にか、平康街の事情に通じて居て、伊藤公等を引具しては、數々吉原に解語の花を遊んだものだ。彼の酒は、極上品の酒で、故近衛篤麿公のそれと均しく、牛肉屋、居酒屋の遊もよく、又岩倉卿の如く、數寄を凝した席室、艶なる侍女の給仕に、數獻の快を娛みもした。が、酒は懷を潤くものとあつて、猪口に三杯、四杯、五杯に至らば、直に筆硯を命じて、書畫を認むるを例とした。玆に一珍話がある、明治十四五年の頃の事であらう、一日瓢然江戸の市中を散策して、只ある天麩羅屋に登つて、酒を味ふた公は、興に乘じ、二階の唐紙に墨痕淋漓唐詩一律を書いた。醉客の惡戲と信して、非常に憤怒した主人は、公の陳謝を容れず、交番に訴へた。訴に依り出張した巡査は、詩後に「梨堂」と記した落款と公の顏とを見較べ、何事も云はず、償金若干を樓主に拂ふて立去り、事は[illegible]からんと。唐紙を携へ歸つた公は誰あらう、現在の農相大浦兼武男であつたと傳えらるゝ。

○酒害は遺傳せず

海野幸德

Les alcooliques engendrent une plus grande propotion d'enfants monstrueux ou hemiteriques que les gens sains, et les expériences de Féré montrent qu'il ne s'agit pas là de simples coïncidences, car les oufs de poule incubés dans des vapeurs d'alcool donnent aussi une forte proportion d'hémitéries et d'arrêts de développement.

C'est là d'ailleurs de la tératogénèse et non de l'hérédité, car il n'y a aucune ressemblance entre la modification acquise par le parent et celle héritée par le produit.

—Delarge.

酒害の遺傳するが如く言ひなすは遺傳の何者たるかを知らざる衆人又は徹底的の智識なき一知半解の學徒のみ。酒害の遺傳につきては、(一)飲酒の原因、(二)飲酒の結果を攻明せざるべからず。通常酒害論者は飲酒の結果のみを切言大語すと雖も、飲酒の原因をも討究せざれば到底不動の斷案をうること能はず。飲酒の原因にして遺傳せず、從つて永續せざるものならば、酒害は如何に顯著なるも原因なき結果の成立せざる理

により實に消失してその痕跡を存せざることゝなるべし。

飲酒の原因は、(一)形質によるものと、(二)外國によるものとよりなる。即ち飲酒家には形質的に飲酒するもの、並びに境遇によりて飲酒するに至りしものとの二類あり。形質的に飲酒するものは、(a)渇を醫せむが爲め、(b)味はむが爲め、(c)醉はむが爲めの三種を包容す。渇を醫せんが爲めに飲酒するものはその要求するところ一つにアルコールの水分にあるが故に必ずしも飲酒せざるべからずと言ふにあらず。アルコールなければ茶又は珈琲にても滿足することをうるなり。味はむが爲めに飲酒するものはアルコールの特種の味を嗜好すること吾人の諸種の味を嗜好するが如し。されば此の種の飲酒家は惡酒よりも良酒を嗜好するを常とす。醉はむが爲めに飲酒するものは酩酊によりて生ずる特種の心的狀態を現ずることを目的とす。渇を醫せむが爲めに飲酒するもの又は味はむが爲めに飲酒するものは鯨飲家にあらず節酒家なるを以て特に取り立てゝ言ふべき害惡を現生せず。たゞ害惡の顯著なるは醉はむが爲めに飲酒するものに限る。されば禁酒論者の根絶せむとするところのものはこの種の飲酒家たるのみなり。されどこの種の飲酒家は形質的に飲酒慾の旺盛なるものなるを以て素質を變改せざる限り飲酒慾は減退せず、又根絶せざるなり。禁酒論者と酒害論者の淺薄と迷妄とはこゝにあり。如何に大言切語して酒害の恐怖すべきものなるを明らかにし禁酒の必要を强說すと雖も素質上自然に飲酒するものなるを以て、素質の變改せざる限り飲酒癖の減退し又は根絶せざること、形質的遺傳的犯罪者の形質を改造せざる以上如何に努力するも改善すべからざると同一なり。通常禁酒論者は飲酒癖を矯正するに意志又は克己心に依る。されど意志力强大にして七又は八を有するものと雖も飲酒慾の一〇なるときは意志は如何ともする能はざるべく、これに反し意志力微弱にして二又は三を存するものにありても飲酒慾殆むど無きものにありては容易に禁酒することをうべし。されば意志によりて禁酒を現實せむとするの不可能なるを知るべく、これに依賴する禁酒論者の淺薄にして徹底せざるは明らかなり。飲酒の根源は形質にあり。されど形質は飲酒の結果現生せしものにあらず。飲酒とは何等の關係をも有せざるを以て形質の遺傳はあれども酒害の遺傳は無之し。されば飲酒の害惡を防止し根絶するには唯一遺傳の如何に留意することにありて存し、酒害論又は禁酒論を唱說することにあらず。酒害論者又は禁酒論者は何は一歩を進めその皮相の見解を撤して形質改造に腐心するに至らざるべからず。酒害論又は禁酒論の聲のみ大にして其効果の一笑を禁じえざる程貧小なるは全く酒害の根源の何處に存するや又如何なるものなるやに明徹せざりしに因るものなり。今後何ほ予の言に耳を傾けず有害無用なる禁酒論又は酒害論を强說するならば予はその効果全く無く骨折り損の疲勞儲けなるに終るべきと今より斷言すべし。

禁酒の現實は形質を改造することにありて禁酒を强說することにあらず。意志を弄ぶも何等の効果あらざるべし。

境遇によりて飲酒するに至るものあり。されど飲酒の根本的原因をなすものは素質なるを以て、飲酒によりて生ずる特種の心的狀態を欲求するものは多少の飲酒的形質を有するものならざるべからず。されば飲酒癖の現在せむには多少の素質を要す。されど素質のみにては飲酒癖の現在せざること甘味を嗜好する性癖を有するも之れを口にせざれば甘味嗜好癖の發達せざるが如し。是の故に飲酒癖の發達せむには素質の外必ず多少の經驗を要す。經驗は境遇によりて容易に獲得せらるゝを以て飲酒を事とする家庭又は朋友を有するもの多く飲酒するに至るも怪むに足らず。されば禁酒に熱中するものは境遇の如何に留意し惡境遇を去りて

良境遇に代ふることを努めざるべからず。飲酒によりて酒癖の異稟増加せし證據は毫も之れ無し。されば形質の遺傳はあれども酒害の遺傳は之れ無しとせざるべからず。酒害の結果新たに獲得せし形質の次代に復現せらるゝことあらば酒害は遺傳すと稱すべきも酒害の遺傳せし確證は毫も之れ無し。世人の稱して酒害の遺傳となすものは酒害の傳達なるなり。即ち遺傳と傳達とを混同せるものなり。酒害の結果食道並びに胃は損害せられ、肝臟並びに腎臟は退縮し、血管は傷害せられ、心臟は脂肪を増加し、頭腦並びに神經は甚だしく侵蝕せられ、精神も亦諸種の變化を現じて精神作用の衰退となり精神病となる。されどかゝる變化のそのまゝ次代に遺傳せし確證は毫も之れ無きところなり。飲酒は親の心身に變化を生ずる外直接に生殖細胞を侵蝕するを以て小兒に變化を現ずべきは明らかなれども、かくして生ぜし變化は遺傳にあらずして傳達なるなり。されば酒害遺傳説は薄弱にして強固なる基礎を有するものにあらず。されど小兒に影響を及ぼす一點に於ては遺傳説も傳達説も大同小異なりと言ふべし。すなはち遺傳説の酒害復現に對し傳達説は酒害に因る變化の現生を肯定す。

酒害は遺傳せずして傳達す。されば傳達により片山國嘉博士の主張せらるゝが如く兵力の減退、産業の挫折、社會の衰退、國家の潰滅となるにあらず。却つて社會の強健、道德の振長、國家の興隆となりて現はる。蓋し片山博士は個體變化と社會變化國家變化とを混同し居らるゝなるべし。醫學上より論斷するものは多く片山博士の如き口吻を弄するを見る。されど社會並びに國家にわたりてその振長衰微を論ずるには個體以外種の變化を攻究せざるべからず。然らざれば個體に對する結論をうるのみにして種に對する論案をうること能はず。片山博士の論案は個體に對し又は一時代の象個體に對する論斷にしてその適用しうる範圍は現在に限られ毫も未來に關することなし。されば片山博士の兵力の減殺、道德の衰敗、産業の挫折、社會の衰退、國家の潰滅を大呼せらるゝに拘はらず事實は飲酒に耽る國民並びに人種ほどアルコールに抵抗する能力強く決して、衰退又は潰滅せしことなきを見る。アルコールを最も多く使用し且使用すること久しきに渉る希臘人、伊太利人、西班牙人、葡萄牙人の如き南部歐羅巴に居住する人種は絶えて潰滅せざるのみならずアルコールに抵抗する力最も強し。之れに反しアルコールを使用すること少なく且つ使用すること久しからざる英國を初めとし其他の北部歐羅巴に居住する種族はその抵抗力弱く、南部歐羅巴の種族に比し壞敗すること多しとす。アルコールに接知せしことなき野蠻人中にありては其霜威最も顯著にして一度之れを口にするときは忽ち失神して前後を辨ぜざるに至るものあるを見る。飲酒と人種との關係以上の如し。個人上の論案を移して人種も亦個人の場合に同じと言ふが如きは膚淺なる見解なりと稱せざるをえず。飲酒家は粗放怠惰にして心身上一つも異性の注意を牽くに足るものなし。されば雌雄淘汰により子兒を殘留せずして死亡すべし。かつ飲酒家の子孫には死亡するもの多きを以て早晩飲酒家の家族は滅亡すべく、かくして後に飲酒せざる個體とその家族とのみを殘留すべし。さればその結果心身の強健を來し道德の振長となり社會國家の興隆となりて現はると言ふなるべし。豈道德の衰敗、兵力の減殺、産業の挫折、社會國家の滅亡あらむや。

「酒害は遺傳せず」「禁酒運動は有害無益なり。」「飲酒は人種を破壊せず却つて之れを精良にす。」更らに筆を更めて片山博士を筆頭とする我國酒害論者の論據を檢討しその言説を論究すべし。

○洋酒の話

某洋酒店員

日本人には洋酒の味を知つて居るものはまだ極めて少い。宴會などでも日本酒ならば初めから終まで仝じ酒を飲んで居るが、西洋酒はなかなか種類が多い。一つの宴會でも最初には先づセリーを飲んで食慾をつける。其次に魚(さかな)を喰ふ時には白葡萄を飲む。肉を喰ふ時には赤葡萄を飲む。トーストをする時にはシャンペンを飲む。(尤もシャンペンは初めから終りまで飲むでもよろしい)一體シャンペンといふ酒は一盃飲むとポウとして萬歳といひたくなるやうな酒だ。それから飯が濟んで、珈琲を飲み終る時は、リクオアといつてアルコール分の多い――ブランデー、ヴエネデクチン、ウヰスキー、シヤトリユース、ペパーミントなどを各自の好みに從て飲む。それから喉咽が乾くとビールを飲む。

然し今申したのは極く正式の饗應の場合をいふので、ザッとした簡單な宴會などでは初めから葡萄酒とかウヰスキーとかビールとかを飲むものもある。之れは西洋酒の用ひ方の大略である。

西洋酒と日本酒とを比較して見ると、西洋酒では何が一番酒の上下を區別するに肝要とかいふに、先づ味は固よりの事であるが、次にはフレーボアといつていふべからざる酒の匂――それで以て主もなる標準の一つとする。日本酒にも匂といふ事があるはあるが、又それが日本酒を品評する一標準ともなるだらうが、それが誠に乏しい。葡萄酒などは馴れて來ると、いふにいはれぬ匂が出て居る。日本酒にはどうもそれがない。それが非常な缺點である。

もう一つ日本酒の西洋酒と違ふ點は、日本酒には何十年といふものはない。古酒といつても一年か一年半の間だ。何十年も經つてゐるといふものはない。處で葡萄酒などになると、古い程いゝといふので、樽に入れて穴倉に蓄へて置く。百年前のものなども乏しくない。それで日本酒は古いからとて發達するものでない。處が葡萄酒になると、年處を經るに從つて、段々變つて行く。初めはよくても年を經るに從てのして行くのもあれば、初めはよくても左程發達せぬのもある。酒を飲む人は、大きな穴倉を有つてゐて、何年の酒〳〵と各年の酒を蓄へて、其酒がどんな風に發達して行くかを見るのは非常に面白い事である。非常な金持になると、それが樂みで、何十万圓、何百萬圓といふ價の酒を穴倉に藏めて置く。そして其等の酒が永年の間にいろ〳〵歷史が附いて來る。これは那翁が飲んだ酒だ。モルトケが飲んだ酒だといふ事になつて來る。日本でも劍菱は賴山陽が飲んだ酒だといふやうな事はあるが、それは只名丈けの話で、山陽の飲んだ酒そのものは今飲めない。此等は西洋酒に伴ふ特酒の趣味である。

現今日本でも洋酒を利用さるゝお方は段々年毎に殖えて行くのであるが、まだ極めて幼稚にして眞に之を味ふ人が乏しいのである。されば何處から出たどういふ酒だといふ事を見分ける人は誠に少い。此頃漸やく、宮内省のお方とか、外務省陸海軍人の外國に遊れた方、又は外國に行つて交際社會に出入したやうな人には、それが分つて來たが、これは段々發達することであらうと思ふ。

以上述べたやうな、日本酒に異つた點が西洋酒にあるから、日本酒を愛玩さるゝ人が、西洋酒を飲まれたなら、必らず深い趣味を見出さるるであらうと思ふ。

特價發賣

新釋。挿圖 近松傑作全集

坪内逍遙
饗庭篁村共
幸田露伴選
島村抱月序
水谷不倒論
校訂註釋
水谷不倒

菊版三千五百頁
總洋布製頗美本
全五冊（索引共）
本文四號假名附
鼇頭註釋圖書入
寫眞版三十餘面
毎篇解題を附す

●本書全部完成を●祝し小部數を限●りて特價提供を●爲す希望者は速●に申込まるべし

特價規定

特價八圓五拾錢

▲▲豫定部數に達する時は正價に復す至急申込まるべし

◉小包料 東京市内四錢 内地三十六錢 清、韓七十錢 樺、台七十錢

正價拾壹圓

泰西諸國に於ては其の國粹文學の大作に對して幾多の註釋書を有せざるは無し然るに本邦に於ては我が文學の巨擘たる近松の大作に對して未だ完璧の註釋あるを聞かず豈遺憾の極ならずや是れ本書の發行ある所以なり本書は近松文學の精華たる世話物全部の時代物の大傑作歌舞伎狂言の代表的大作を網羅し之に綿密なる校訂を加へて總假名附とし故事難句狹斜語等は悉く註釋圖解し又古版本の版式、外題、奧附、繪番附等の有らゆる標本を鮮麗なる寫眞版と爲す近松研究者の良友一般家庭必須の好書、書齋の珍たるべし

◉發行所 東京牛込早稻田 振替一一二三番

早稻田大學出版部

取次所 各地書肆



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る御旨附記を乞ふ



小說

ある女の日記

鮫島大浪氏著

發行所　東京市麻布區笄町百五十五　飯野書房

定價金四拾五錢

郵税金四錢

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

英雄偉人號の大附錄を以て飾れる新年號

實業之日本

一月一日發行 第拾四卷 第壹號 本號に限り一部 貳拾貳錢 郵稅貳錢五厘

▲日露戰後俄に大きくなりし實業家名々調べ……

▲列國競爭の大波瀾中に在る我が商工業の根本方針……大浦農商務大臣

▲初夢の說（夢は如何に善用するか）……新渡戶博士

▲余が事物觀察法（余は此の如くして觀察す）……大隈伯爵

▲英雄崇拜論（近來の快文字）……新渡戶博士

▲大陸的大國民たるべき我國民性の研究……增田社長

新春の大偉觀 百三十頁の大附錄は左の大文字

世界十大人傑

是れ現代の五十六名士が撰定せる十大人傑也何人が如何なる人傑を投票せしか、悉く之を揭載す。

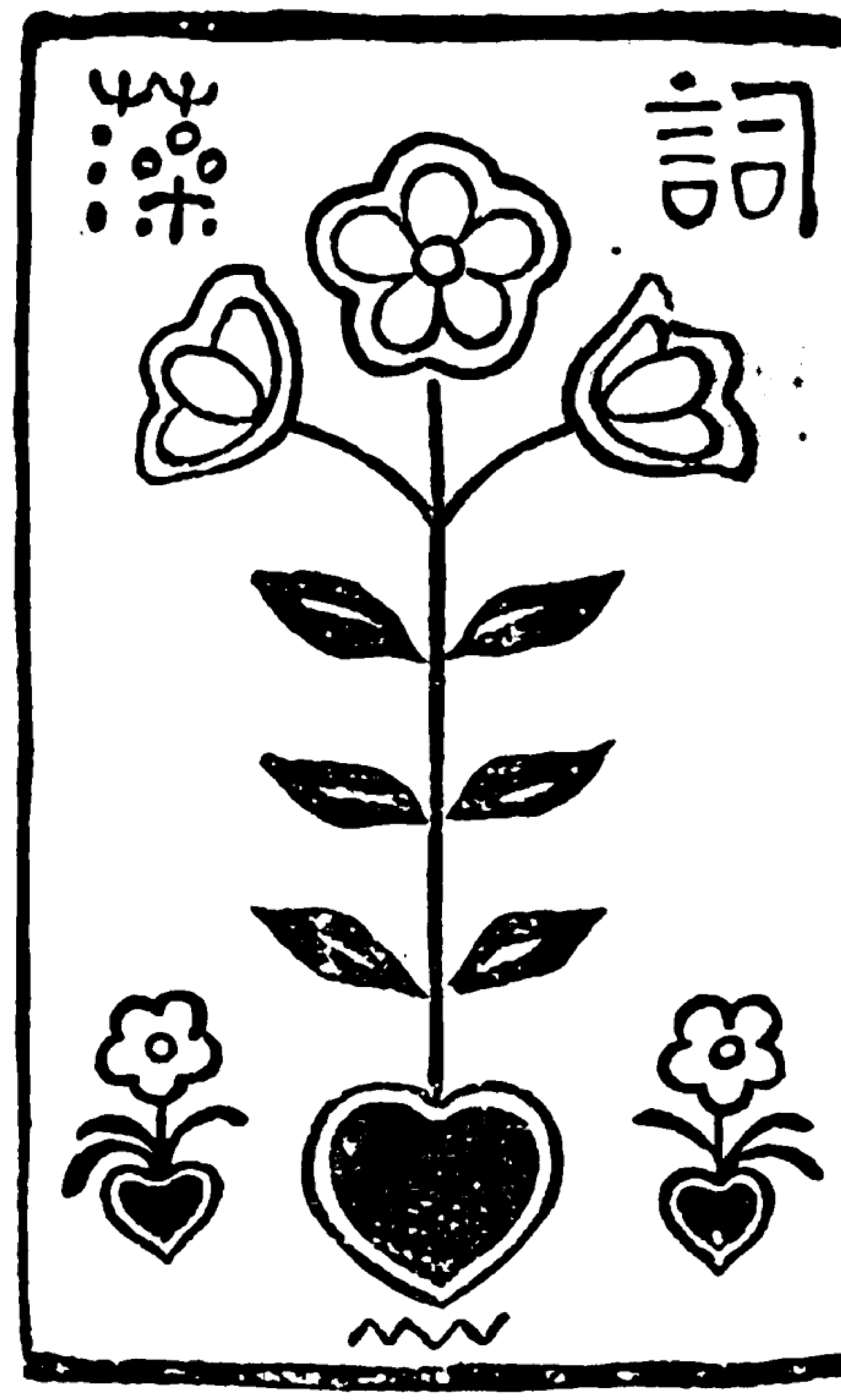
評者

△大隈伯爵△坪井博士△瀨川博士
△新渡戶博士△湯本武比古氏△大石正己氏
△市村博士△末松子爵△南條博士
△阪谷前藏相△星野博士△田中博士
△添田博士△元良博士△黑板博士
△牧野前文相△上田博士△森村翁
△天野博士△金子前法相△海老名彈正氏
△元良博士△以上廿二大家

▲四十八回の失敗より跳起きたる成功の快男兒 奮闘經歷……記者

▲日本人の食物改良に關する一新發見……農學博士鈴木梅太郎

發行所 東京京南紺屋町 實業之日本社 振替口座三二六番 全國賣捌書店



冬の日

柴舟

音もなく香もなく明けて暮れてゆく冬の日ばかり悲しきはなし

安らけく過ぎにし今日をいはゝばや得がたきものをわれは得てあり

今著きし電車の前に後による人の渦にしまた捲かれぬる

名づくべきことこそなけれ匆惶と行きかへりする日々のこゝろは

遠汽車の息づく音すあはれ人寒き夢のせ旅を行くらむ

うらやまし昨日にあらぬ心もて今日のあしたの道をゆく人

よりどころなきこゝちして今日もまた事にぞ當たる淋しいかなや

たゞ一つ思ふことあり名をしらずしかはあれどもそがために生く

心から日をぞよろこぶおく霜にふせるあしたの庭の草とも

白々と冬の月さす玻璃の戸の中の火桶の火のうつくしさ

和歌

尾上柴舟選

小澤紫紘

○

電線に月波風のからなれるこの水國の街の淋しさ

水よりも冷たき影のゆらぐみゆ林の奥の枯草の上

窓の外樹々は落葉しいやさらにあかるき中にうぐひすがなく

哀しめる朝をしばらく默想におちいらしめよ鳥よ來啼くな

空しくも心おびえてやるせなし淋しや秋もいまは去ぬめり

いとけなき夢にいだかれ草山をゆきつもどりつ冬を嬉しむ

そのむかしむかしとたゞに語られて涙さしぐみし幼年の日よ

師走悲し巷行く人みな我れにかゝはりもなきさましてぞ過ぐ

すら／＼と夕べの風にゆらめけるこの秋草のいのち淋しむ

亡びゆく秋の花かや龍膽の鋭くさむき香に泣かまほし

牛堀の灯影かすけく湖のはてにゆらめく頃をなほ北に行く

たゞ青し月は船をも大湖をもたゞ安らかにてらしてありぬ

佐野光雄

○

やうやくに生くる力の盡きてゆくおもひに秋の寂(さび)にひたれる

山茶花はしづかに散りぬ午後の日のひかり俄かにかげりくるころ

蔦の葉の青と赤とがもつれ這ひ月の光りのしたたれる家

山のかげ山にうつりてたそがるゝ刈入れ頃(ころ)のしづかなるかな

くらがりに深く沈みて白く咲く花の微動に眼をとめて見る

秋の日のありのすさびに投げてみる石より起るかすかなる音

夕ぐれの汁より白くたちのぼる湯氣越しに見つ母の横顏

終點をかろがろ出てし空電車われわりなくも片隅に乘る

借りて來し錢より起るうらやすきおもひの中に一夜をば寐る

○　　龜山敬外

汽車にゆられ電車にゆられうきごとのしげきがまゝに旅ゆきてあり

君共にゆかずや海の夕暮に潮ひたにみつ悲しみを見む

酒飲みし後のさびしさわけもなう君を思ひて夕となりぬ

こゝよりは消息だにもなしがたき大海原の船の上にあり

水色のとばりしづかにゆるゝ見ゆ曉方の六月の風

君ありてまたも一路に足ぞゆく山の奥なる小さなる街

ふるさとにかへりてものを思ふ日の夕さびしきからたちの花

思ふこと言はてかへりぬあまりに木の葉のそよぎ靜かなりしに

筧より落ちくる水をきく一夜旅の夜なれば君はいまさず

うら若き夢にし別れ悲しみに別れて今日も天地に生く

○　　尾張穗ぐさ

鐘鳴り出づいづちを伺ひてこゝに來しひえ／＼と頰にふるゝ夜の風

人去りし後にちらばる紙片をまとめて物を思ふ夜かな

冬の夜は火鉢に炭をつぎなどしやゝさびしさをなぐさめにける

疲れし身歸りて部屋に投げにけり午後の濕みのたゞよへる部屋

海鳥よ汝が目はよくも堪へ得るや彼の燈臺の波を射る灯を

何の樹か白き葉うらをひるがへし雨ふる前の秋にかなしむ

列車今はたとゝまれば本を閉ぢ先づ乗客の一々を見る

〇　　　　下村淳

からからと帆船の帆をば上ぐる音に秋の港の夜はあけにけり

くり見ればくり見るほどにかなしかりあまた並べる我が虚偽のうた

秋の夕べかがみの中の骨ばれるかほをさびしく見てありしかな

何の香かかすかに甘くにほひくるものあり夕べ室に座れば

靴の底歩む度毎きゆきゆとなる秋の夕べの丘のさびしさ

三等の箱にからくも席をえてはこばれて行くはかなきいのち

〇　　　　中村玉野女

青空のしづかにうつる川面を流るゝ船の赤き絵日傘

乳色の帷の中に明方を冷たく光る冬のともし火

明方のくらき一室の片隅に冷たく光るわがまろ鏡

うら若き少女が獨りピアノひく館の窓のしろがねの月

しづかにも更け行く町の冬の夜の闇の中より川千鳥なく

青々と澄み渡りたる初冬の空見て瞳しづにうるほふ

〇　　　　逸見雨山

おのづから心の暗き陰きゆるこゝちに見入る青の大空

察するに早き女の瞳に浮ぶ恐れの色を我はおそるゝ

蒼ざめし瓦斯の光に反射する君がりぼんに泣かるゝこゝち

〇　　　　小島ます子

よかりける昔を思ひ浮べつゝけにくき様にあざみのたまふ

身をすてゝすがるは人よ我が心神をもとむる隙なくもかな

あてどなく一人あゆみぬ聲そろへ歌はむ友もなき淋しさに

遂に消ぬ身やと儘に笑まれける術なき事を思ひしむ宵

山茶花の花咲く見れば母戀し夕日に膝のあたゝかくして

新しき旅より旅にゆきゆきてふるさと遠く我は死なゝむ

○　玉野光二郎

落葉焚く林の上のうすぐもる寒き空より舞ひ落ちし霜

さめざめと雨に惱める病葉のなるがやうなる君が泣聲

まつしぐらまひるの町を走り行く狂女のあとに立つ秋の塵

音もなく靜かにひとり暮れて行く冬の夕べの心の疲れ

なめいしの女神の像にうす白く青き光の這へるあさあけ

夜は更けぬ別れて一人歸り行く淋しき君が足音きこゆ

青白き月の光のしたたれる夜の館の白き階段

○　摩文仁蕉葉

二階より旅の涙をたたへたるわが目は朝の海を眺むる

一人なるまして旅なる身はさびし秋風のきて菊のにほへば

水ぎはの芒はかるく村雨にぬれてひかれりこほろぎの鳴く

うつくしき夢をのがれし少年は現實（うつゝ）の海にゆきておどろく

公園の冬の敷石ちり迷ふ木の葉にまじりわれも走れる

○　小出秀月

草まじり白き花咲くゆく秋の丘にしあれば泣かまほしかる

霜月の眞白き光りしたたれる渚近くに一人かなしむ

晴れし日の海のかをりのなつかしみ心ゆくまで眼を閉ぢにけり

そことなく冬の入日のちらばれる林の中の冷たさを吸ふ

天地は白く冷たく死の色に似ていたましく夜明けぬるかな

○　外山燎三

さびしかりし吾が少年期みかへればわりなき悲哀胸にあふれ來

着なれたる夜着につゝまれまじ〳〵としづまらぬ胸をだきて横臥す

白日につめたく光るなみ頭路の人に秋風ぞ吹く

雨に濡れし驛名標のその下の名もしらぬ花のなつかしきかな

闇が這ふ部屋に坐りてしみ〳〵と身にせまりくる孤獨をば愛づ

○　桑田寶

身をちゞめ矢に似る風をきゝてあり秋より冬にうつる日ごろは

はしやぎし心のまゝを持ちて來し夕べの街に霧ぶかく降る

冬枯のあらはに見するなげかひに身をおくすべも忘れはてたる

ゆく秋のさ[illegible]て憂ひはなけれども慰まぬ日のながうつゞきぬ

○　寺島芦丘

ことさらに君のゝしりし其の後の淋しさいたく胸にしみ來る

ひえ〳〵と冬の夜風は頬をながる思へば安き一日なりける

しと〳〵とカンナの花に雨降れり靜かに今日も思ひつゞくる

朝となれば宿の娘が消炭の火種もて來る冬とはなりぬ

○　正木哲夫

たたみ代へ障子はれるに心足り小春のひるをうたたねに入る

林間のあかるみの果湖（みづうみ）の白う光れり十月のひる（榛名湖にて）

閑にゐ[illegible]眼をとぢぬやみの中にわれの影ありそれが悲しき

よろこびをこばみ愁をしりぞけていつまで心老いんとすらむ

○　石野義博

ゆるや[illegible]に手足のばしていねてある朝床の間の生命の輕るさ

ゆくりなく田舍の町の夕ぐれに旅てふこころ秋

にふれけり

暮れそめし山の手道に置きさりし荷車の輪の光るさびしさ

○　橋本芳生

眼の痛さ時雨の後の瓦どもなやまし氣にも白く光れる

現實に倦めり人なき國に行き一人生かなむその黒がりに

反物を斷つ音の悲し秋の夜を淡き化粧の君が夜仕事

○　鈴木風影

小驛に終列車待つ其のひまの悲哀追はんとうたなどうたふ

忙しき編輯局の卓に倚りもの書きつゝも君を思へる

○　鷲尾草堂

靜にゐて物もおもはず冬川の河原に轉(ころ)ぶ石ならなくに

子等去りし校舍の裏の向日葵のゆたかに晝の日光を吸ふ

○　池内啄耳

石段を五つ昇りて京を見る七つ昇りて淸水を見る

消えてまた出來てまた消ゆこの川の泡沫にうく暮がたの色

應募和歌は東京市小石川區原町百三十三尾上柴舟宛の事

俳句

惠方　高田蝶衣選

惠方詣づ梨園の弟子日は高き　黑佛
惠方路や大厦を反れて畑に入る　同
雪沓穿く深山人なん惠方路に　同
畜舍惠方に當りて牛の吼えにけり　同
心そそる不識の觀や惠方來て　木犀
妻と行きし惠方も思ふ沮心かな　同
惠方詣づ幸は先師の孤も抱いて　同
惠方ぞと指す邱書棟紫に　同
年棚や荒壁住みも竈分け　不寐庵
惠方向て人馬動くよ此晨　同
酒肆すでに旗飜す惠方かな　同
囚屋人鷄なく方を惠方かな　同
惠方道法師に逢ひし凶ならん　雨郎
惠方道島人連が慇懃に　同
惠方宮土師部が祭る神なれど　同

惠方戻り渡頭鄕人落ち合ひし　同
苞にせる鷄高鳴けり惠方路　但翠
樵具のせてたわみ見えけり惠方棚　同
祝ぎ事に呼寄すも惠方魚屋かな　同
女夫牧聳ゆ御山や惠方なる　同
惠方位や隣財主が家の梅　耳山
裾に媚ぶ枯草淋し惠方道　同
捨て石も惠方の空に夜光かな　同
月老も祀る習ひや歲德神　同
龜井戶の闇に人行く惠方かな　無腸子
年棚や油搾木の片楔　同
東天の雲賑はしき惠方かな　同
年棚や和田一門の大座並　同
七ツ井の惠方汲みけり灘長者　五黃
倉建つ木惠方林に選びけり　同
詣る道惠方の社家の灯も詠みて　同
雪霽るゝ東嶽の旭を惠方とも　月樗
雪一簑惠方詣の風も愛づ　同
祖母が意に在る賽錢や惠方神　同
いつも汐汲みに來る道惠方かな　彩步
惠方道今朝や爐外の主たり　同

臼借りに來し家と知りぬ惠方道　同
茶屋暖簾人吸ふ灯あり年棚に　鶯樓
宮木曳く繩張除けて惠方道　同
歳德を祭る五穀の飾俵　同
酒家村の祖井惠方の道に見て　火碧
陶國や戶々惠方縈築く習ひ　同
惠方連れ箸立杉の口碑解く　同
菅笠窺ふ惠方の町や晴れ凪ぎて　對山樓
朝餉して惠方詣ては浦寂びて　同
活碑文惠方にありと人告げぬ　同
惠方詣曉靄道の惡所をも　孤風子
土情染む里人高聲や惠方道　同
惠方社に又も邂逅や忌避す友　同
梅村の一酌や惠方歸るさに　鷺江
惠方から上陸る船屋の船頭かな　同
惠方道舊態を師と語りつゝ　同
惠方道開の御陵を拜み行く　風車
大阪は河風寒し惠方道　同
北山に閃く雪や惠方道　同
都から地下の小社を惠方かな　雪骨
惠方神の御文庫開き雪霽れて　同

惠方詣山影うけて歸路寒し　同
歸依に住む町の灯や惠方道　虹涼子
繞る水ある四脚門惠方かな　同
洛中の妓漫步して惠方日和とも　山彥
惠方出て足跡無爲に彷徨ひし　同
論主この風流の事惠方に見し　蓮窓子
詩仙の座に一字銘あり惠方棚　同
拾ひ物あらば孕まむ惠方かな　薔薇
王孫に侍して惠方を拜しけり　同
惠方棚君陶朱どんに彷彿たり　鬼哉生
わが戀の惠方もあれと興じつゝ　同
一瓢の飲に惠方を闕せざる　掬泉生
惠方路や吉凶も知らで拾ふ櫛　同
追放されし女も見たり惠方宮　霞翠
神に疎かりしを惠方詣てかな　同
大望に旅立つも我惠方路を　保赤
理疎きが富つくる事に惠方見て　同
酒毒して惠方もあらず籠るかな　水竹
送り出す先も惠方の荷積かな　同
惠方棚妓に寄す文の載せてあり　卜鹽
杜撰なる古事引く娘が惠方かな　同

石階の馬齢に等し惠方神　美醉郎
出嫌ひの島司が妻も惠方かな　枕水
惠方道曲る三村五橋かな　栗川
賣花翁春は曙惠方より　紫明
女連れが髷を品すも惠方道　人生
米食はぬと誌にある村や惠方道　兎笑子
年棚にふさはしきもの干鱈かな　燕閣
繪馬抱ける供の女中や惠方道　行々子
此里の惠方神てふ星拜む　寸江

汲々と一女に奴たり歌かるた　蝶衣
家士に含むる舟車の事や縣召
鏡臺祝風流宰相の文を展ぶ
綱引に彼の彌次が又異裝かな

課題　氷　一月十日締切
引鶴　二月十日締切

規定　△淡路國假屋在高田蝶衣宛　△一人三十句限　△字體明瞭

評論

英國政府如何

一

英國總選擧は今正に酣也、是時に當つて縱横の論評を試む、恐らくは危からむ、然かも下院議員總數六百七十名中、已に四百四十六名の選出を終ゆ、而して政府諸派の得點二百四十、統一黨の得點二百〇六、差引き在野黨側の新議席增加僅かに三名に過ぎず、吾人は此形勢に照して、英國々民が果して兩黨の主張に明確の判斷を與へんとするや否やを疑ふ、

顧みれば統一黨首領バルフォル氏の策戰は巧妙なら

ざるにあらざりき、昨夏來、同黨内部に關税改革派と非改革派とあり、軋轢止み難きを見るや、俄かに關税改革を人民の直接投票に委するの議を建て、以て兩派を融和したるが如き、何等の妙腕ぞや、將た自由黨に對し、關税改革問題同様に愛爾蘭自治案を國民に諮らんとを求めたるが如き、何等公正の主張ぞや、然かも一般人民は幸か不幸か、頻々たる政爭に飽きたりき、是に於て乎選擧に於ける投票數は著しく減少せり、而して其投票の命ずる所又甚だ曖昧ならざるを得ざらんとす、

　斯くの如くして選擧を終了したりとせよ、政府の勝利（假りに勝利を得るものとして）は果して勝利と言ふ可き乎、在野黨の敗北は果して敗北と言ふ可き乎、

二

　斯くの如き事情の下に在りて政府は其上院改革案を斷行し得可き乎、換言すれば上院は選擧の結果を目して國民が政府に贊成せる徴證となす可き乎、又上院が服從を敢てせざる曉、英國皇帝は「民論を重んずる」の故を以て貴族の新造を肯んじ給ふ可き乎、

　又政府は更らに進んで、直接人民に諮らざる愛爾蘭自治問題に對して迄も、民命と稱して同計畫の斷行を謀り得可き乎、換言すれば一八八六年に失敗し、一八九四年に失敗し、爾後復活の途なかりし帝國分裂の一案を俄かに實現せしめ得可しとする乎、

　吾人は大に之を疑ふ、從つて英國の改革は此曖昧に終らんとする今回の選擧に決定せられずして、寧ろ今後こそ一層激烈を加ふ可き也、然かも是唯だ選擧の趨勢に鑑みて懐想するに過ぎず、猶今後異常の變動起り、最終の結果顛倒せんか、固より別箇の結論を見ざる可からざる也、

墨西哥の内亂

　十一月來、墨西哥國に革命あり、旬日にして平ぎ、國内靜穩也、之を聞くもの大統領チャス氏の威望實力依然たるを賞贊せざるは無し、

　チャス氏の勢力偉大なるは怪むを要せず、氏や一八七六年大統領就任以後、鋭意治を圖り、先きに戰亂相踵ぎたる同國をして始めて平和を見せしめ、殊に國内産業の發達に熱意し、一昨年の如き同國の輸出超過額は實に一億四千九百萬圓に達したり、况んや國家の財政順境に在り、一昨年度の如き一千八百五十九萬圓の

剩餘を生じ、巨額の國債を償還し得たるに於てをや、然かも氏の執政は、專制に過ぎ、宛然獨裁的君主の風あり、加ふるに在職三十年を超ゆ、從つて民主的運動勃興するも亦自然而已、何ぞ必らずしもマデロ將軍を待つて起りしものならん哉、

遮莫、ヂャス氏年正に八十一、餘命幾許も無し、一般墨西哥國民の溫情恐らくは其至深の愛國的至誠と絕大の勳功を思ふて、其執政を覆すに忍びざるものならんも、其後繼者コーラル氏の時代に至らば、必らず民主的思潮と革命黨が志を成すの機ある可き也。

米國大統領の苦境

十二月六日、米國大統領タフト氏、教書を議會に朗讀す、其內容を檢するに日韓合併あり、日露協商あり、航路補助問題あり、巴奈馬運河防備あり、外人保護を目的とする裁判所管轄變更案あり、然かも米國々民が最も注目する關稅改革に對しては徒らに漠然たる言をなすに止め、其他重要なる內政問題に關しても何等明快の提案を出さゞりき、

是何故ぞや、十一月戰敗の結果、議會は最早や共和黨の物にあらざれば也、而して今年の米國立法史は喧噪紛擾の外、遂に何の得る所あらざる可き也

(備考　新選議員が着席するは昨冬よりにあらずして今春なれども、それ以上には時日短ければ、共和黨も重大なる新立法を試むに能はざる可し)

伯剌西水兵叛亂

十一月二十二日夜、伯剌西(ブラジル)戰鬪艦乘組水兵叛亂し、數日間屢々リオジャネイロ市を砲擊す、其要求に曰く、水兵の勞役難苦に過ぐ、宜しく人員を增加して之を緩にせよ、又叛者に對しては大赦を約す可しと、而して大統領と議會と、共に此脅喝に畏縮して其言を容る、爲めに市民三名の慘死を見たるのみにして、事漸く平和に歸するを得たり。

一國の元首を以て叛亂水兵に屈服せる大統領フォンセカ君の心事は憫察に堪えざるも、是果して軍規を維持する所以と言ふ可き乎、吾人は竊かに其惡例を將來に遺し、第二第三の叛亂を誘起し來るを恐る。

露國兩院衝突

露國上下兩院衝突す、露帝ニコラス、下院議長グチコフの上奏を斥けて曰く、獨逸議會を見よ、改革の進渉遲しと雖も上院を咎むるを聞かず、朕は國防、大學、芬蘭（フィンランド）案に關し帝國參議院（上院）の措置の非難す可きを見ざる也と、下院啞然たり。

露帝が上院に味方せるは怪むに足らず、海軍擴張に於て、行政諸問題に於て、政府の頤使に是れ從ふの外他を知らざる同院はストリヰピン伯の喜ぶ所なれば也、然かも斯くの如くにして、立憲政體の實、それ遂に何くにか在る、

回々教徒聯合の潮流

年久しく紛紜を極めたる土耳其波斯間の境界問題俄然解決す、其故を問へば則ち曰く齊しく回教國たる双方が相爭ふて下らず爲めに他國の干渉を受くるは、其忍び得ざる所也と、

土耳其青年政治家、盛んに英國を攻撃す、曰く埃及人民を苦しめ、波蘭を分割せんとし、各方面に於て回教徒を迫害す、斷じて許す可からざる也と、

阿弗利加蘇丹に於て激戰あり、佛人四十餘名之に死す、獨紙大に恐れて曰く北阿弗利加に於ける回教徒の團結、牢固拔く可からざらんとす、佛蕃戰役の教訓は即ち是而已と、

讀み來つて誰か回教徒同士の接近てふ一事實を認め得ざるものぞ、而して吾人は竊かに恐る、此禍ひを釀むるものは三國同盟（獨墺伊）にあらずして三國協商（英佛露）にあらんことを、

排日議案提出

排日案加州議會に出づ可しと傳ふ、是蓋し我が屈辱外交の罪ならずんばあらず、一歩を讓るは是二歩を讓る也、寸を讓るは是やがて尺を讓る所以也、米人は已に霞ケ關の鼎の輕重を問ひたりき、此報に接するも、何の怪む所ぞや、

暹羅新皇帝

今にして漸く暹羅新皇帝即位式（十一月）の詳報に接す、而して最も注意す可きものあり、他なし、即位の詔勅是也、

皇帝は先づ國家の進歩人民の繁榮幸福を謀る爲め佛教を支持せんことを宣明せり、これは同國々體に照して何等奇とす可き所無し、然かも皇帝は一轉說いて曰く皇帝は常に其臣民によりて近き得らる可きものなり、朕は臣民に仲介者なく朕に奏上し得る權利を與ふと、是則ち上下意思疏通の新策を宣明せるものにあらざるなき乎、

今日の暹羅は、歐洲文物を輸入し開明の境に近けりと雖も、代議政體未だ成らず、況んや佛英兩國の間に介在して、國基猶ほ安泰ならざるをや、是時に於て新帝滯歐多年、國運の求むる所を悟り、上下一致の大針を宣明す、誰か其處を得たるものにあらずと曰はむ、

清國斷髮問題

傳ふるが如くんば、淸國政府は愈々本年を以て斷髮の決行を謀る可しと、果して眞歟、

顧みるに伍廷芳、米國公使の職を去るや、歸國直ちに斷髮の議を建てたりき、曰く臣が南、中米を巡るや、同胞十中九迄斷髮し、斷髮せざるものも之を外面に現はすものあらざりき、是辮髮の不便にして邪魔多きを見たるを以て也と、然るに政府は冷然之を斥けたりき、而して最近載濤貝勒、金枝玉葉の身を以て、長旅五千里、歸來同一の議をなすや、朝廷の態度一變す、何ぞ彼に淡くして之に厚きや、

然かも吾人を以て之を觀る、斷髮の如きは片々たる末事のみ、國運に於て何の關する所かある、多數の廷臣が他の重要問題に冷淡なるに係らず、獨り此點につきてのみ囂々を極むと傳ふるもの、一は事柄の何人にも解し易きに依るならんも、聊か滑稽の感無しとせず、併し飜つて思へば斷髮の何如は亦同國民が舊習墨守の惡弊を脫却するや否やを示す指針たり、是蓋し其外人に執りて注目を値ひする所以なるか、

墺伊海軍競爭

墺國政府部內、海軍擴張の聲漸く盛ん也、曰く伊太利は一九一五年に於てドレッドノオト型八隻を備へん、之に他の軍艦と合算せば、墺國の海軍は其脚下に雌伏するの外ならんと、然かもその宰相エーレンタトル伯は宣言して曰く、「三國同盟は鞏固なり、墺伊關係は最も親善なりと。」

是抑何等の奇なる自家撞着ぞや、

(備考　伊太利は墺地利に三倍する海岸線を有す、從つて海軍擴張の程度が墺國に越ゆるも異とするに足らずと知る可し)

女宗教家逝去

米國「グリスチアン、サイエンス」宗鼻祖エディ夫人長逝す、行年九十、國內數十萬の信徒、之を聞ひて慟哭せざるは無し、

笑ふを止めよ、迷信と稱して死人に鞭つを止めよ、彼女は信念に活き、信念に仆れたり、豹變是事とし、節操を售つて恬然たる徒輩の比にあらざる也、

(以上懐沙隱客)

內閣小更迭說

專任大藏大臣として日本銀行總裁松尾臣善氏補任され(其の結果、高橋副總裁昇りて總裁となり、三島彌太郎子橫濱正金銀行頭取となる)而して小村外務大臣罷むるを俟つて、桂首相外務を兼任すべしとの說、先づ朝日新聞紙に傳へられ、御用新聞始め二三の新聞に由て取消さる。

此の說は所謂株式市場に上れる噂さの由、從來此の方面の早耳なる、實に意表に出づること稀ならず、隨つて此の說の如き、早晩事實として出現するもまた保すべからず。

吾人の耳にする所によれば、桂侯と昵近なる某々銀行家等は、關稅問題のため小村外相の或は辭職すべきを揣摩し、外相の後任其の人を物色して得ざるがため、首相兼任の外なしと信じ、且つ今や財政の方針略々定まり、今後は唯だ正直に之を遂行するを要するが故に、寧ろ專任藏相を設くるを可とし、柔順にして而して循吏たりし松尾氏を其の任に擬し、私かに氏に內談する所ありしに、氏は一應其の任にあらざるを以て辭退したるも、若し桂首相より內命あらば、必らずしも辭拒せざるが如き態度なりしといふ、其の事の或は桂侯の內意を承けてするか、若くば單に銀行家の衷心より出てしなるかは、未だ之を確かむるの便あらず。

小村外相が英國の政變を豫想して別に協定の餘地ありと做し、若くば英國現政府より妥協點を發見するの內議を受けて、今現に考慮中なるは事實らしく、若し結局我が關稅々率を更正するの外なきに至らば、直ち

に掛冠する意向なりと聞く、桂侯等は始めより更正の外に策なく、乃ち断然之を議會に提案する意圖なりとも傳へらる。

解散風

凛烈たる朔風と共に、孰れの一方よりか、解散風の吹き渡るは事實也。

在朝政事家の一部は以爲らく、英國との交情を支持するがためには、結局關税率を更正するの外あらず、現在の關税法は議會また協賛したる以上、全く責任なしとす可らず、且つ我が任意に定めたる法律を、任意に更正する素より不可なし、今日は是れ以上に執るべき手段なしとせば、別に責任論の生ずべき謂れなし、其の謂なきに責任論を唱ふるは、是れ政府を攻撃して故らに時局を難くする也、斷じて議會を解散して國民の意向を問ふに如かずと。

彼等は斯る議論を以て解散を主張し、一方には又早く其の準備に怠らざるものゝ如し、溫良を欠ぐと論なきも、其の敏捷は則ち稱するに餘りあり、在野黨たるもの之に應戰して機先を制せらるゝこと勿れ。

非妥協非譲歩

政府と政友會とは、再び妥協を繰返さゞるべし、政府は別に妥協すべきものなしと嘯きて故らに强硬なる態度を示し、而して政友會は民黨聯合を聲言して敵の肝膽を寒からしめんとす、彼れ眞に民黨聯合の志ある乎、抑も又之を藉りて政府者を威嚇し、己れに都合好き妥協を求めんとする乎、而して政府の强硬なりといふも、また一種の恫喝ならざる乎、妥協譲歩の有無多少未だ俄かに言易からず。

民黨聯合如何

伊藤公を喪へる政友會は、今や獨力内閣を組織するに堪えず、第一は貴族院に有力なる味方を有せざる欠點あり、第二は陸海軍に味方を有せざる欠點あり、第三は宮中の御信任を有せざる欠點あり、第四は實業界に味方を有せざる欠點あり、恃む所は唯だ多數の撰擧民なれども、其れさへ今は危からんとす、國民黨と聯合せば、或は勢ひの大なる、他を風靡するに足らん、然かも風靡するは撰擧界のみ、宮中の御信任は以て奈

何ともすべからず、軍人の彼等を見縊る既に多し、貴族院と實業界と聊か動かんも、又全く動かし得ざるを奈何せん、所謂民黨聯合に由るも然るのみ、況んや獨力を以てするをや。

政友會にして眞に民黨聯合を策せんとせば、選擧の結果如何を打算せざる可らず、民黨聯合せば議會の解散疑ひなく、政府また百方して黨派團を攪亂し、彷徨するものを誘引し、心を變ずるものを吸集す可ければ也。

民黨聯合今或る有志の心中に企畫さるゝや事實ならん、唯だ其の成立するや否やは、姑らく疑問とせざるを得ざる也。

陸海軍進級

陸軍は十一月卅日を以て、海軍は十二月一日を以て、各々常例の進級を行ひ、且つ若干の轉補を行ふて後賢の進路を開きたり。

去れど長人の陸軍に於ける、薩人の海軍に於ける勢力は、依然として他を壓する勢ひあり、而して長人跋扈の說最も高し、勢ひは窮せざれば變せず、變せざれば通せず、長人の跋扈其の頂點に達して、國民皆切齒するに至らば、弊や始めて矯むるを得んか。

貴族院議長重任

貴族院議長德川家達公の任期十二月四日を以て滿了し、翌五日更に重任せらる。

始め政府部内に一說ありき、曰く、公の一門皆政府に反對す、現に伯爵同志會の急先鋒となり、暗に之を助くるもの皆德川家の一門也、政府乃ち之に酬ゆるがため、公以外に議長を求むべしと、此の說の一種の威嚇なるや否やは知る可らざるも、公の適任なる、中外已に定評あり、政府が其の重任を奏薦したる、流石に之を動かす能はざるが爲ならざらんや。

大博覽會々長任命

金子堅太郎子が日本大博覽會々長を辭せし以來、久しく缺員なりし地位は、十二月十三日に至て、平山成信氏に由て補はれたり。

明治五十年の大博覽會は、其の規模に於て世界的な

るべく、殊に聖上御即位五十年と、金婚の御式とを慶賀する紀念として、最も心を用ひざる可らず、明年度に在ては先づ敷地を整理し、道路及び電車線を横斷すべき大鐵橋及び給水線を通ずる準備を爲すべく、斯くして四十九年までには、約二千萬圓を支出すべしといふ、費用の大小は必らずしも問はず、吾人は切に其の圓滿なる成功を望む。

無政府主義者公判

大審院に開かれし無政府主義者大陰謀の公判は、九日より公開されしも、治安に害あるがため、傍聽禁止となれり、而して連日警戒最も嚴なりと聞く。

彼等不忠の徒を極刑に處せよとて、大審院に郵書を贈るもの幾萬通あるを知らず、一國民憤激の情實に怖るべきものありといふ。

米國の社會主義者はまた彼等を救はんため、一種の抗議を爲せり、其の忌憚なき驚ろくべし、唯だ我が裁判は神聖也、豈彼の輩のために寸分だも法を枉ぐ可けんや。

豫算内示會廢止

例年行はるゝ豫算内示會は廢止せらる、是れあるも可、之れなくも可、政府は唯だ豫算の內容を豫め國民に公知せしむれば足る、其れには新聞紙あり、何ぞ別に内示會を要せんや、

一種の賄賂に非ずや

後藤男の九州四國を巡るや、到る處盛大なる歡迎あり、盛大なる饗應あり、其の縣市の費す所皆萬を以て數ふるに至る。

男の德望若し然らしめば、男や實に偉なりといふべし、然れども歡迎盛饗の目的、全く鐵道布設を希望するにあらば、是れ一種の賄賂也、政府の大官にして恬として之を受く、果して官紀を如何せんとする、且つ戍申詔書の大旨を奈何する、吾人は敢て襟を正して政府者の辯明を求めんと欲す。

耆宿の逝去

重野安繹、三浦安、原田一道、信夫恕軒の諸老相前後して逝く、老壯の交替は、人世の新陳代謝のみ、然かも耆宿は國の光輝也、吾人は情に於て哀然たるを禁ずる能はず。

公債の借換

政府の內示せる公債借換の經過なるもの左の如し、財政に留意するもの、先づ之に通じ置くを要す。

▲四分利內國債　公債借換の爲に本年二月並に三月の兩度に募集せる第一回及第二回四分利內國債の締切結果左の如し

	第一回	第二回
募集額	一〇〇、〇〇〇、〇〇〇圓	一〇〇、〇〇〇、〇〇〇圓
公債代用	六八、六八三、一〇〇	九三六、三五七、五五〇
現金應募	三一、三一六、〇〇〇	六、六四一、九五〇
手取額	九五、〇〇七、六八三	九五、〇〇二、三八〇

▲四分利外債及乘換額　本年五月大藏省令第二十二號を以て整理公債軍事公債、臺灣事業公債、帝國五分利公債等其合計一億九千萬圓の償還を布告せる際償還を受くるものに便宜を計り現金の代りに四分利公債の交附を望む者に對し百圓に付九十五圓の割合を以て四分利公債を交附したる結果九月迄の交附額は七千四百三十六萬三千五百五十圓に達したり尙ほ同月巴里及ひ倫敦に於て募集せる四分利外債の實收左の如し

巴里發行

發行額	四億五千萬法
實收額	一億五千九百三十四萬七千二百五十圓

倫敦發行

發行額	千百萬磅
裏書公債代用	四百七十九萬八千二百磅
現金拂込	六百二十萬一千八百磅
實收額	九千七百四十七萬五千圓

▲償還財源總額　右內外債募集金の外四十三年度一般會計繰入金及び四十二年度繰越金を加へ合計六億二萬四千九百三十三圓を財源として五億二千三百一萬五千七百六十圓の國債を償還したるが該財源の內譯を示せは左の如し

公債募集金	五一七、四七七、五三八圓
一般會計繰入金	六〇、八〇〇、〇〇〇
四十二年度繰越金	二一、七四七、三九五
合計	六〇〇、〇二四、九三三

▲償還公債　如上の財源を以て償還されたる國債は現金を以て償還されたるもの二億五千九十六萬六千七百六十圓並に拂込金に代用されたるもの及び四分利公債に乘換へたるもの二億七千二百四萬九千圓なるが其各種公債別の金額を示せは左の如し

	現金償還額
海軍公債	四、七八七、〇〇〇圓
整理公債	八〇、四二七、六五〇
軍事公債	五八、二三三、〇〇〇
五分利公債	六九、四〇九、一五〇

第二回國庫債券	三一、六一七、五二五
煙草專賣國庫債券	六、四〇〇、三五〇
臺灣事業公債	九二、〇八五
計	二五〇、九六六、七六〇

拂込代用及乘換額

海軍公債	三、五〇九、七〇〇
整理公債	八二、一二四、四〇〇
軍事公債	五五、一六五、二五〇
五分利	六八、〇九一、四〇〇
甲號五分利	三、二九六、六〇〇
乙號五分利	一、五八五、九〇〇
特別五分利	二〇、四七二、九〇〇
第一回國庫債券	八、〇二五
第二回同上	二四、七四一、七二五
第三回同上	一二、〇一一、二五〇
第四回同上	一〇〇
煙草專賣國庫債券	一、〇四一、一〇〇
臺灣事業公債	六五〇
計	二七二、〇四九、〇〇〇

▲國債現在額　種目及償還期限を擧ぐれば左の如し

種目	金額	償還期限
舊公債	二、六三三、四五四	九十四年
五分利	二、一八五、六五〇	九十三年
同	三〇、五九七、七〇〇	九十四年
同	三、一八一、一〇〇	九十五年
同	九、三三六、五〇〇	九十六年
同	一、五七六、一五〇	九十七年
甲號五分利	五三、四一三、八〇〇	九十五年
同	四一九、六〇八、四〇〇	九十六年
乙號五分利	二九、四一五、二五〇	四十六年
特別五分利	二八〇、一九〇、七五〇	六十八年
三回國庫債券	五九、〇四八、八二五	四十四年
煙草債券	五、一六〇、一五〇	四十四年
同上	一、六八〇、四〇〇	五十年
第一回四分利付	一七四、三六二、七五〇	百二年
舊總武鐵道社債	三〇〇、〇〇〇	四十六年
第一回四分利英貨公債	九七、六三〇、〇〇〇	八十六年
第二回同上	二四四、〇七三、〇四七	六十四年
第一回四分五厘英貨公債	二九二、八六九、四九八	五十八年
第二回同上	二九二、八八五、九〇〇	五十八年
五分利英貨公債	二二四、五四八、〇二四	八十年
第三回四分利英貨公債	一〇七、三九三、〇〇〇	百三年

豫算案綱要

政府より十二月十六日を以て公示したる明治四十四年度豫算案の大要次の如し、是れ亦讀者の精覧あらんことを望む

(明治四十四年度豫算は目下其の編成中に在るを以て今後計數に多少の異動あるを免れざるべし)

▲豫算編成方針

明治四十四年度豫算につきては前々年度以來の財政方針を繼承し財政の基礎を鞏固にすることを力むると同時に内外の情勢に鑑み世運の進歩國力の發展に伴ふべき必要の施設を實行するを期し左の方針を以て之を編成せり

一、一般會計に於ては公債を財源とせずして歳入歳出の均衡を保つこと

二、毎年度少くとも五千萬圓以上の公債を償還するの計畫を維持すること

三、國防の緩急に至らざるを期する爲我海軍の製艦及造兵方針をして最近列國に於て採用さるゝ方針に伴はしむること

四、根本的治水策を定むる爲設置したる臨時治水調査會の決議に依り山林河川其の他に必要なる施設を爲すこと但調査會は目下猶議事を結了せざるを以て成案を得るに及び相當の計畫を具し議會の協贊を求めんとす

五、明治四十三年度に於ける稀有の水害の後を善くし併せて國防上緊急の經畫を實行する以上は勢諸般の經費に節約を加へざるを得ず依て國運の發展上已むを得ざるものゝ外は新規の經畫は成るべく之を見合はすこと

▲總豫算の大綱

明治四十四年度總豫算の大體を擧ぐれば左の如し

歳入

經常部	四九二、一三八、〇〇〇圓
臨時部	四八、七九六、九七三
内 普通歳入	二七、〇六九、八二六
内 前年度剩餘金繰入	二一、七二七、一四七
計	五四〇、九三四、九七三

歳出

經常部	四〇七、一一三、二七四
臨時部	一三三、八二一、六九九
計	五四〇、九三四、九七三

▲歳入豫算前年度比較

明治四十四年歳入豫算の内譯及其の前年度に對する增減を示せば左の如し

明治四十四年度歳入豫算額及前年度豫算額比較表

科目	四十四年度豫算額	比較 ▲印減
經常部		
租税	三二四、〇九八、四二八	三、八七二、七一〇
地租	七五、〇七二、七六五	▲二、五〇七、七五四
所得税	三二、九六八、二七八	九九〇、六〇七
營業税	二四、一八四、七八三	▲一、一一八、七二四
相續税	一、八六二、九四七	三四二、四一一
通行税	三、一八四、四四〇	三三三、三七一
酒税	八八、七二七、三五〇	九四五、四九三
砂糖消費税	一四、七二七、二八三	▲五一五、九二八
織物税	一八、六一七、五六四	▲八七、九五一
關税	五〇、五一四、四六五	五、一〇三、一三八
醤油税其他	一四、二三八、五五三	三八八、〇四七
印紙收入	二五、〇二六、一〇〇	一、〇三一、三八〇
官業及官有財産收入	一二六、五〇五、九九一	三、三七七、〇二七
郵便電信及電話收入	四八、五八九、七二五	三、四三四、〇九七

森林收入	一〇、五四四、八〇七	▲一九八、二七六
專賣局益金	六一、三四六、四〇二	三四、九〇三
官有物貸下料其他	六、〇二五、〇五七	一〇六、三〇三
雜收入	二、九六〇、〇四五	▲六五八、一三二
預金利子繰入	七、八五一、〇四四	一、二二二
臺灣特別會計ゟ繰入	五、六九六、三四二	五一五、五二四
經常部合計	四九二、一三八、〇〇〇	八、一三九、七三七
臨時部		
官有物拂下代其他	八、四八四、〇二七	▲五三四、〇七三
港灣設備納付金	六〇〇、〇〇〇	〇
公債募集金	二、七六〇、〇〇〇	▲二八五、〇〇〇
森林資金繰入	二、七五五、七二八	▲二〇二、〇一四
陸軍營繕費補充資金繰入	三八三、九一八	二七三、九一八
軍艦水雷艇補充基金繰入	一二、〇〇〇、〇〇〇	一、三一〇、四一四
貨幣整理資金繰入	八六、一五三	二三、三二二
前年度繰入金	二一、七二七、一四七	七〇二、六五八
臨時部合計	四八、七九六、九七三	一、二八九、二二五
外朝鮮に屬する歲入	〇	▲二、七九七、八四七
總計	五四〇、九三四、九七三	六、六三一、一一二

備考　前表中朝鮮に屬する歲入とあるは前年度に於て一般會計に屬したる統監府所屬歲入にして明治四十四年度以降朝鮮總督府特別會計歲入に編入せらるべきものとす

▲各省所管別比較

明治四十四年度歲出豫算の各省所管別金額及其の前年度に對する增減を示せば左の如し

明治四十四年度歲出豫算額及前年度豫算額比較表

所管別	四十四年度豫算額	比較▲印減
經常部		
皇室費	四、五〇〇、〇〇〇	〇
外務省	四、二四九、〇二七	八、三八九
内務省	一一、八一四、七三三	三二六、七四四
大藏省	一八五、一六八、四九一	▲九、〇〇二、〇二四
陸軍省	七六、三七一、二三六	一四、六七四
海軍省	四〇、七四六、三三八	二、二七一、六二三
司法省	一二、〇一七、六一六	三三三、六二四
文部省	八、〇三二、一七〇	四六五、一五二
農商務省	七、三二三、八五三	六〇、五四七
遞信省	五六、八八九、八一〇	一、五〇二、九二三
經常部合計	四〇七、一一三、二四七	▲四、〇一八、三四八
臨時部		
外務省	二三五、〇〇〇	▲九二、〇〇〇
内務省	一一、九〇〇、八九二	一、五四〇、一八九
大藏省	二四、二二一、一四九	▲一二、二九二、〇八二
陸軍省	二二、〇二一、一三三	一〇、九四七、九九〇
海軍省	四五、四八七、二五五	八、二三九、八四八
司法省	七六一、八七六	二〇、〇九六
文部省	七一七、〇九二	▲五七二、八〇一
農商務省	七、六五五、三一二	一四二、〇二七
遞信省	二、八二一、九九〇	二、七一六、一九三
臨時部合計	一三三、八二一、六九九	一〇、六四九、四六〇

總計	五四〇、九三四、九七三　六、六三一、一一二

備考　明治四十三年度經常及臨時部並各省所管別豫算額は該年度決定金額に比して差違あるは明治四十四年度豫算との比較對照上彼是組替揭記したるに依る

▲臨時軍事費收支

明治四十四年度總豫算に計上すべき通常の歳入歳出の外臨時軍事費特別會計より繰越したる事業費にして明治四十四年度に於て支出すべき金額並に之に對する財源を併せて明治四十四年度に於ける收支の計算を示せば左の如し

種別	歳出	歳入 普通歳入	前年度剩餘金	計
經常部	四〇七、一一三、二七四	四九二、一三八、〇〇〇	〇	四九二、一三八、〇〇〇
臨時部	一三三、八二一、六九九	二七、〇六九、八二六	二一、七二七、一四七	四八、七九六、九七三
計	五四〇、九三四、九七三	五一九、二〇七、八二六	二一、七二七、一四七	五四〇、九三四、九七三
外 臨時軍事費繰越額	二、六五〇、〇〇〇	〇	二、六五〇、〇〇〇	二、六五〇、〇〇〇
合計	五四三、五八四、九七三	五一九、二〇七、八二六	二四、三七七、一四七	五四三、五八四、九七三

▲新規要求及增額

明治四十四年度歳出豫算中新規要求に係るもの及前年度にして增額を要するものに就き其の事項金額の重なるものを擧ぐれば左の如し

▲經常部

▲內務省所管

高等警察事務增加に伴ふ經費	一二六、五〇七
警察費連帶支辨金の增加	一五三、〇六六

▲大藏省所管

貴族院議員改選に伴ふ歳費の增加	三八、六六六
會計檢査院朝鮮及滿洲に關する檢査事務增加に伴ふ經費	二一、七七七
拓殖局設置に關する經費	八五、一九七
營業稅審査委員增加に伴ふ調査費	二二、四八〇
市町村交付金の增加	七〇、〇〇〇
織物及石油輸出交付金の增加	一〇四、〇〇四
軍艦水雷艇補充基金繰入增加	一、三一〇、四一四

▲陸軍省所管

軍備充實及二年現役に伴ふ經費の增加	八七、四六九
糧秣相場異動に依る經費の增加	一八一、四九三
馬政事業擴張等に關る經費の增加	九九、一六七

▲海軍省所管

新艦艇及戰利艦船に要する軍事費の增加	二、八五四、八〇五
定員補充に伴ふ經費の增加	三〇一、八三一

▲司法省所管

區裁判所四箇所事務開始に伴ふ經費	二六、四四三
在監人增加に伴ふ經費の增加	二九四、八六四

▲文部省所管

文藝及通俗教育奬勵に伴ふ經費	二〇、〇〇〇
東北帝國大學に於ける教官俸給月割差增授業開始に伴ふ經費	一一二、四四〇
九州帝國大學に於ける教官俸給月割差增及授業開始に伴ふ經費	二九八、七三一
諸學校に於ける教官俸給月割差增	二九、二一六
諸學校に於ける學級學科增加及授業開始に伴ふ經費	一五五、六四三
諸學校に於ける傭外國人旅費及增員等に伴ふ經費	三七、一九一

▲農商務省所管

農具改良試驗に伴ふ農事試驗場經費の增加	一六、三二六

原蠶種製造設置に伴ふ經費 七四、六一九
牛疫血清製造所設置に伴ふ經費 九〇、五九一
輸出羽二重檢査費補助 三〇、〇〇〇

▲遞信省所管

電話交換擴張に伴ふ維持費 七三三、〇四六
通信事業增進に伴ふ經費 一九七、九二九
振替貯金に依る市公金取扱費 四二、六六二
振替貯金に依る國債償金取扱費 六八、二五二
諸拂戻金の增加 六三六、五〇四
證票及式紙類費の增加 一二〇、五三七
爲替貯金受拂費の增加 七六、一九〇

▲臨時部

▲內務省所管

爆發物倉庫等新營費 二五〇、〇〇〇
關門海峽改良費の增加 五〇〇、〇〇〇
府縣會郡會議員選擧取締費 一〇〇、〇〇〇
ドレスデン萬國衛生博覽會費 三六、〇五四
出石神社造營費 三六、二二三

▲大藏省所管

罹災救助基金補助の增加 三三七、四七七

神戸税關防波堤築造費の增加 二〇〇、〇〇〇
議院建築準備費 四〇四、八〇〇
朝鮮總督府經費補充金 一二、三五〇、〇〇〇
關東都督府經費補充金增加 九九、三八四
樺太廳經費補充金增加 二五、九四三

▲陸軍省所管

軍隊官衙學校改築費 五二〇、〇〇〇
但し總額八十五萬圓にして明治四十五年度に亘る繼續費なり
軍用氣球研究費の增加 一九八、八九〇
無線電信研究費 七〇、〇〇〇
朝鮮派遣部隊費の增加 九八三、五四七
馬政事業設備費の增加 五二、一一七
臺灣蕃匪討伐行賞費 八九、〇〇〇

▲海軍省所管

高田大砲發射新設費の增加 八〇、七八五
鎭守府官舍新營費 九五、四二〇
軍備補充費追加年割額 一四、八六九、七二三
但し軍備補充費既定繼續費に對し總費額八千二百二十二萬三千百七十圓を追加し明治四十四年度以降六箇年度間に支出すべきものなり其の改定に係る支出年割額は左表の如し

區別	四十四年度以降の總額	四十四年度	四十五年度	四十六年度	四十七年度	四十八年度	四十九年度
改定額	二四八、六七三、五八一	四三、七一三、一九四	四八、八三二、一八一	四六、七六八、三三六	五一、六五三、八一五	四六、八八〇、五七七	一二、三三六、五一〇
既定額	一六六、四五〇、四一一	二八、八四三、四七一	二八、九〇一、三四七	二六、七三八、八九三	三〇、六一七、八一五	三八、五四四、六一四	一三、八一五、二七五
差引增加額	八二、二二三、一七〇	一四、八六九、七二三	一九、九三〇、八三四	二〇、〇二九、四四三	二一、〇三六、〇〇〇	八、三三五、九六三減	一、四七八、七六五

▲司法省所管

札幌地方裁判所廳舎及官舎建築費　六〇、〇〇〇

但し總額十萬圓にして明治四十五年度に亘る繼續費なり

▲文部省所管

臨時維新史料編纂局新設に伴ふ經費　五〇、七〇八

蠶糸專門學校創立費追加額　二〇、〇〇〇

但し既定繼續費總額に五萬圓を追加し明治四十五年度に亘り支出すべきものなり

▲農商務省所管

製鐵所第二期擴張費　一、七九九、九三三

但し總額千二百三十八萬九千九百二十九圓にして明治四十四年度以降四箇年度間の繼續費なり其の支出年割額は左の如し

總額	四十四年度	四十五年度	四十六年度	四十七年度
一二、三八九、九二九	一、七九九、九三三	三、三三二、二二六	四、四〇八、五六五	二、八五三、二二五

原蠶種製造所設置に伴ふ新營費　一八五、六九三

牛疫血清製造所設置に伴ふ新營費　五二、六七〇

遠洋漁業奬勵費の增加　四九、九五二

蠶糸改良奬勵費　八九、六八八

日本大博覽會費　四一一、八六九

但し既定總額に追加し明治四十四年度に於て支出すべきものなり

▲遞信省所管

北米航路補助の增加　一、〇二七、一九六

南米航路補助の增加　一二七、九三八

電話交換擴張費年割額の增加　二、〇〇〇、〇〇〇

但し既定年割額の增加五十萬圓の外明治四十五年度に屬する年割額の内百五十萬圓を繰上げ本年度年割額に追加するものなり

▲國債整理基金繰入

明治四十四年度に於て國債整理基金の歳出に充つべき金額は

一般會計繰入金　一四五、八七三、一二三

鐵道特別會計繰入金　三二、六八九、五〇五

小計　一七八、五六二、六二八

前年度に於ける償還借換に依りて生じたる剩餘金　七二、〇〇〇、〇〇〇

合計　二五〇、五六二、六二八

にして右の内公債の償還に充つべき金額は普通の繰入に係るもの丶内五千萬圓前記剩餘金にして本年度に於て償還資金に充つべき七千二百萬圓合計一億二千二百萬圓とす

▲帝國鐵道豫算

明治四十四年度に於ける帝國鐵道豫算の概數を示せば左の如し

總益金　四一、八〇〇、〇〇〇

内

公債其他の利子　三二、五〇〇、〇〇〇

差引純益金　九、三〇〇、〇〇〇

内

積立金　五〇〇、〇〇〇

再差引

建設及改良費の財源に充つべき分　八、八〇〇、〇〇〇

建設費既定年割額　二一、〇〇〇、〇〇〇

同上追加年割額　二、四〇〇、〇〇〇

但新線路の敷設及經便鐵道敷設等に要するものにして總額四千六百九十七萬圓明治四十四年度以降七箇年間の繼續費なり

小計	二三、四〇〇、〇〇〇
改良費既定年割額	二〇、九〇〇、〇〇〇
同上追加年割額	七、五〇〇、〇〇〇

但既成線路の改良及廣軌改築等に要するものにして總額二億七千四百五十七萬圓明治四十四年度以降十三箇年間の繼續費なり

小計	二八、四〇〇、〇〇〇
合計建設改良費改定割額	五一、八〇〇、〇〇〇
内前記益金を以て支辨すべき分	八、八〇〇、〇〇〇
差引	四三、〇〇〇、〇〇〇

は借入金其他一時融通金を以て之を支辨するの見込なり

右改良費追加額の内廣軌改築に要するものは新橋下關間に於ける工費總額二億三千萬圓にして明治五十六年度に於て完成するの豫定なり

▲特別會計豫算大綱

朝鮮總督府、臺灣總督府、關東都督府及樺太廳に屬する明治四十四年度豫算の大體を擧ぐれば左の如し

▲朝鮮總督府特別會計

明治四十四年度歳入歳出豫算額表

歳入	
經常部	二四、〇六七、五八三
臨時部	二四、六七四、一九九
内	
普通歳入	一二、三二四、一九九
補充金	一二、三五〇、〇〇〇
計	四八、七四一、七八二
歳出	
經常部	二七、八九一、四三七
臨時部	二〇、八五〇、三四九
計	四八、七四一、七八二

前記補充金を以て前年度一般會計豫算に計上したる歳入歳出にして本年度より本會計に移さるべき金額に比較對照するときは純粹の増加額は百三十六萬圓とす

歳出豫算中重なるもの左の如し

臨時土地調査費	一、七五七、二四六
補助費	一、四三六、八九六
治道費	二、三七二、六四四
海關工事費	二、〇二六、〇六二
鐵道建設及改良費	八、五〇〇、〇〇〇

▲臺灣總督府特別會計

明治四十四年度歳入出豫算額前年度對照表

區別	四十四年度	比較増
歳入		
經常部	三七、〇四〇、〇九〇	四、三一四、六六七
臨時部	六、六一一、五六一	六四七、二二一
計	四三、六五一、六五一	四、九六一、八八八
歳出		
經常部	二五、七二五、一五三	二、九四二、一八五
臨時部	一七、九二六、四九八	二、〇一九、七〇三
計	四三、六五一、六五一	四、九六一、八八八

歳入増加の重なるもの左の如し

砂糖消費税の増加	一、七六二、〇六一

酒稅の增加	二七七、八五一
所得稅	三六〇、七一八
樟腦收入の增加	六九三、四六四
鐵道收入の增加	九四七、九二二
電氣收入の增加	二五六、八三〇
歲入減少の重なるもの左の如し	
輸出稅廢止の爲減少	二八三、五八九
一時借入金の皆減	八〇〇、〇〇〇
歲出增加の重なるもの左の如し	
鐵道作業費の增加	七〇九、一四六
專賣品價及購買費の增加	九三二、二三二
電氣作業費の增加	二〇九、五二九
砂糖消費稅補塡繰入	五一五、九二八
總督府廳舍新營費(新繼續費)	四〇〇、〇〇〇
阿里山森林經營費年割額繰上の爲增	六五〇、〇〇〇
縱貫鐵道延長費(新斷續費)	四〇〇、〇〇〇
原料糖製補助の增加	二、一五二、五〇〇
移住民奬勵費の增加	三二〇、二四五
歲出減少の重なるもの左の如し	
原料消費補助の皆減	一、三五一、九八七

▲關東都督府特別會計

明治四十四年度歲入歲出豫算額對照表

區別	四十五年度	比較▲減印
歲入		
經常部	一、七一四、一八五	一七三、二三〇
臨時部	三、二七〇、七四〇	▲五六、二九二
普通歲入	二二二、五四〇	▲一九五、六七六
補充金	三、〇四七、六〇〇	九九、三八四
計	四、九八八、九二六	一一六、九三八
歲出		
經常部	三、七五三、〇〇七	一九五、九七四
臨時部	一、五三一、九一九	▲七九、〇三六
計	四、九八四、九二六	一一六、九三八

歲入增加の重なるもの左の如し	
郵便電信收入の增加	一四六、四二四
鹽稅の增加	八、四九六
歲出增加の重なるもの左の如し	
電氣作業所職員及醫院醫長增員等に關する經費	二九、四八六
警察力充實の爲職員等に關する經費	九八、一三四
旅順工科學堂經費等の增加	二二、九五五
旅順に海務局支局設置等に關する經費	三四、九五二
新營費の增加	一六三、〇一九
土地整理費	五五、〇〇〇
臨時安奉線警備費	八三、八一二
歲出減少の重なるもの左の如し	
電信電話營繕費の減少	九二、九九五
既定年割額繰延の爲大連下水工事費の減少	一〇〇、〇〇〇
既定年割額繰延の爲大連道路築造費の減少	一五〇、〇〇〇

▲樺太廳

明治四十四年度歲入歲出豫算額前年度對照表

區別	四十四年度	比較增
歳入		
經常部	一、一五一、九四七	三七、三六七
臨時部	九七三、六五七	一〇一、九四三
普通歳入	三八三、〇〇〇	七六、〇〇〇
補充金	五七〇、六五七	二五、九四三
計	二、一〇五、六〇四	一三九、三一〇
歳出		
經常部	一、〇一一、〇七二	四、二五一
臨時部	一、〇九四、五〇二	一三五、〇五九
計	二、一〇五、六〇四	一三九、三一〇

歳入增加の重なるもの左の如し

郵便電信收入の增加	三二、八二〇
鐵道收入の增加	三〇、〇〇〇

歳出增加の重なるもの左の如し

木材乾餾工場新營費	一二〇、〇〇〇
殖民費の增加	二〇、二二五
林產物製造試驗費の增加	三三、九九〇

▲歳計剰餘金

明治四十二年度の決算上生じたる歳計剰餘金は一億四千四百餘萬圓にして内同年度歳出豫算の繰越額に對する財源に充つべき六千二百餘萬圓を控除するときは八千二百餘萬圓の剰餘となるの計算なり右の内更に四十三年度豫算に編入したる金額、臨時軍事費繰越額にして四十三年度に於て使用すべき豫定額水害復舊工事費補助其他緊急已むを得ざる費途に充つべき金額等同年度内所要の財源に充つべきもの合計四千八百餘萬圓を差引くときは四十四年度以降に於て使用し得べき金額は三千三百餘萬圓なり右の剰餘金は豫算上の財源若は臨時軍事費繰越額の使用豫定額に對する所要財源として四十四年度以降四十七年度に亘り之を使用するの經畫とす其の明治四十四年度に於ける使用見込額は左の如し

豫算に編入すべき額	二一、七二七、〇〇〇
臨時軍事費繰越額使用高	二、六五〇、〇〇〇
合計	二四、三七七、〇〇〇

新刊批評

▲最近三十年外交史　有賀長雄著　早稲田大學出版部發行

上卷一千頁以上、下卷亦七百五十頁を超ゆる大著にして、著者が曩きに公けにせる「近事外交史」の續篇たり。伯林會議の結果たる三國同盟の結成より現在に至るまでの重要なる外交事件を精叙して、極めて明晰。紛糾錯雜極りなき列强の關係も此書の一讀によつて明瞭に了解せらるべし。何人も一讀すべき好著なり。(定價上卷三圓、下卷二圓五十錢)

▲極東近事外交史　巽來治郎著　早稲田大學出版部發行

日清戰爭の開始より現在に至るまでの極東の外交關係を詳說したるもの也。蓋し日清戰爭と共に極東の外交關係の主腦は我日本帝國に移り、而して世界の耳目も亦最も多く極東に注がるゝに至れり。今後我國運の隆盛をして益々隆ならしめんとすれば、我國民たる者深く自己の地位を研究し置かざるべからず。此書の繙讀此意味に於て最も必要なり。附錄として日露交涉往復公文、日露講和會議錄其他最近の極東外交記事の主要なるものを載せたるは便利也。(定價三圓)

▲育兒の灯火　眞下正太郎著　民友社發行

著者眞下醫學士は久しく大阪にあつて自ら小兒科の病院を經營する人にして、所說悉く實驗より來り、育兒についての參考となるべき節極めて多し。特に此書は他の同種類の書と違ひ、筆路暢達にして、一讀其意義の明斷なるは甚だ多とすべし。(定價三十錢)

▲レモンの花の咲く丘へ　國枝史郎著　東京堂發行

「死に行く人魚」、「その日の爲めに」の二脚本を收めたり。一種試作めいたる所に其長所と短所とあり。(定價四十錢)

▲青年感想錄　江部[illegible]著　森江書店發行

一種の自己告白的のものにして、比較的眞面目なるを多とすべし。(定價五十錢)

▲默想の天地　沼波瓊音著　東亞堂發行

小品文六七十篇を收めたるものにして、飄逸にして俳味を帶べる觀察及び筆致愛すべし。(定價四十八錢)

▲韓國の併合と國史　喜田貞吉述　三省堂發行

日本歷史地理學會の編纂にかゝるものにして、喜田文學博士の述ぶる所也。古來より存せる韓國と我國との關係、極めて明瞭に說述せらる。附するに妻木、大森二氏の「朝鮮沿革史略」、「明治日韓交涉史」等あり。(定價六十錢)

▲美術上の釋迦　堀謙德著　博文館發行

釋尊一代の事歷の印度及び東洋の美術に影響することの大なるは今更いふを俟たず。此篇美術上にあらはれたる釋尊を詳說して餘蘊なし。挿畫に珍らしきもの極めて多し。(定價一圓七十錢)

▲婦人問題　上杉愼吉著　三書樓發行

婦人問題は未だ我國に於て甚しく目に立たざるが如きも、而かも次第々々に其頭を擡げ來りて、やがて歐米のそれの如くに、國家の大問題と

ならんとするの趨勢あるは事實也。著者は種々の方面より婦人問題を研究し、殊に女子の男子に化することを深く警めたり。(定價一圓)

▲心懷語　　西川光二郎著　警醒社發行

社會主義の信者たりし著者が歡會の中にあつて、專ら精神的修養に思を潜め、先づ自己一心より改革し來るべきを感じたりとて、熱心に精神修養の急なるを說けり。眞面目なる著者也。(定價五十錢)

▲小說 枯木　　本間久著　東明堂發行

五百頁に近き長篇なるが、全體、德富蘆花氏の「寄生木」を眞似たる如き脊き振りなり。街氣もあり、商賣氣もあり、稚氣もあつて、藝術的に見て多くの缺點あるは爭ふべからざるも、一種の覇氣を以て大膽なる思想を敍せる處多少の見所なきにあらず。森鷗外、馬場孤蝶二氏の序文數文面白し。(定價一圓三十五錢)

▲三千里　　河東碧梧桐著　金尾文淵堂發行

總房から常陸、下野、岩代、羽前、それから陸前、陸中、陸奧は言はずもがな、北海道は根室の國迄行つたのだから通らずには居れぬ、裏を返して陸奧へ出て今度は西廻り、羽後、羽前から越後へ拔け佐渡へ行き又越後へ戻る、それて足跡約三千里。とは見出附けを早業に繰つて承知した。菊版七〇四頁の、旅中吟のお負けが外に六七頁、さらば手易く讀めぬ身の忙しさを思ふと、暢氣な此著者の生活が憎くなる。先づ序文を見ると「固と質素の裝釘を得て世に見えんとす、上梓蹉跌の間遂に如是の美裝を蒙すに至る、世事意の如くならざる概ね斯の如し」とあるので豪奢な人だと思つて、初めて表紙の包紙を剝ぐと、成る程總クロース製美本中央の金地に「三千里」と鳥の骨の走るのとが拔いてある、一寸首を捻つてハヽア此島は碧梧桐だから鳳凰てなと合點した。背を見ると模様化した富士と波とを天地として「三千里」が長くなつて居る。如何しても最初の二三頁は繰るものだ、又「鹿野山には車が通ふといふのを聞いて、登つて見る氣も起らず」といふ句を見た。大體の調子が分つたからして、身に近い者に同情するの道理、一足飛に自分の鄉國へと飛んだ、鼠關と書いて鼠が關と讀むなんて不思議がつて居る、陸奧、羽後、羽前と南下するに從つて不通の訛音が取れ、越後境へは入ると一變化して言葉が綺麗に分るといふ、如何やら鄙の眞中に居る自分の舌が急に開放された氣がして嬉しい、といふ樣な色々な感觸を抱かしめる樣な色々な觀察、それも矢張り自然の破壞を嫌ふウヲーヅヲールス張の頭が言ふのだから面白い。俳句も拾ひ讀みしたが矢張り身近い處を二三四五句、「鳥の跡と見えて大きな冬田かな」、「大根吊りて爐邊事無き山家かな」、「風呂欲しう思ひつゝ宿の火燵かな」、今頃の故園の風光がまざ／＼と見える、甚はしくはないが眼に着いて見ると惚れ／＼する。つい見ない佐渡の小木の景色迄見る氣になつた。「洞穴の入江になるや初氷」、當るか當らぬが知らぬが、大江丸の「水仙や門を出づれば江の月夜」のやうな字廻しをするんだと思つた。(定價金三圓、特價二圓五十錢)

▲婦人の修養　　鳩山春子著　博文館發行

著者を良人の選擧運動に加勢をする人だと先づ頭に描いてそれから見て行つた、果せる哉西洋流を土臺に於ての說法である、が和魂は何處迄も失ふまいとし、西洋の模範的上流社會の美風丈けを移植しやうと勉めて居る、どうせハイカラ風の浸入する今時、之を廣く讀ませたら、ハイカラは流行つてもハイカラの鉛毒は拔けるだらう、特にハイカラ化を喜ぶ今の女學生原に讀ませたい。(定價金一圓二十錢)

▲原人論講話　加藤咄堂述　丙午出版社發行

宗密禪師の原人論は儒佛道の三教を比較論究し、遂に佛教に落し込んで最優最勝としたもの、佛教徒間では誰知らぬ者もないから言ふは、寧ろ贅である。漢文和譯書出版流行の氣勢に促されてか、此書も亦原文を假名文にし、平明に講話がしてあるから、普及には大に力があろう。(正價六十錢)

▲偉人ローズヴエルト　吉川潤次郎編著　内外出版協會發行

此頃少し風向きは變つた樣だが、兎にも角にも偉人のローズヴエルトだ、その閲歴、性行等を是れ位な所で承知するもよからう。(定價金四十錢)

▲飛行器物語　柴田流星著　洛陽堂發行

昔は夢の樣に思はれた飛行器の話を小供の頭にも分らせ樣とて書いたものだといふ所が値打だ、夢の樣な挿畫はうす呆けて見える。(金廿八錢)

▲十日物語　小野和一譯　内外出版協會發行

ボッカチオといへばデカメロンだ、其飜譯だ、小供にも分る樣にと優しく書きこなしてある。(定價三十錢)



此廣告に依り御申込の方は中央公論による旨御附記を乞ふ

東京高等師範學校長 嘉納治五郎先生新著

製本既成

最新版

青年修養訓

布装釘全一冊

一圓八十錢

郵税 拾六錢

青年諸君の爲に眞の修養を説きたる嘉納先生畢生の大著

講道館柔道の創立者として全國に數十万の門下を有し崇高の人格一代に超越せる嘉納先生が我が帝國の青年に對して垂れられたる熱血の大教訓は是れなり＝直ちに一讀して此の眞の修養訓に接し此の偉大なる人格の面影に接せよ

東京神田表神保町 **同文館** 振替口座東京二三五

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

雄辯

四十四年新年号

毎月一日發行（新年號に限り金拾錢郵税貳錢）半年分壹圓拾錢 一年分二圓拾錢

▲孔子とソクラテス　文學博士　井上哲次郎
▲刑法の經世觀　法學博士　花井卓藏
▲積極的お伽噺　巖谷漣
▲維新改革と陽明學　代議士　小久保喜七
▲雄辯と社會教育　文學博士　三宅雄次郎
▲日本的喩譬　文學博士　芳賀矢一
▲光あれの一言　文學博士　姉崎正治
▲歐米雄辯の新傾向　代議士　板倉中
▲力　地方局長　床次竹次郎
▲達磨大師　宮本美哉
▲日本言語の將來　高等師範教授　岡倉由三郎
▲講演師小實　久留島武彦
▲西南役後の談論界　關根正直
▲青年に檄す　法學博士　青木徹二

▲修養と教育倫理　文學博士　村上專精

文學

▲老梅居俳談　內藤鳴雪
▲黃金の歌　小澤愛圀
▲漂泊者に復す　北城生
▲「自然と人生」の著者を訪ふ　倭男子

縱論橫議

▲漁業王縱橫談　貴族院議員　日高榮三郎
▲文壇より講談界へ　細川楓谷
▲七高出身辯士月旦　井澤衣水
▲食後演説　法學博士　和田垣恒三郎
▲演説の經驗　法學博士　寺尾亨
▲法科大學に於ける田尻博士

▲沖縄人物地理　碧梧生
▲雅典の古を憶ふ
▲言論禁壓時代の活歷史　伊藤痴遊
▲南米と英人犯人
▲一高辯論部活躍史
▲傍聽記

婦人雄辯家の名演説

▲女子の修養　棚橋絢子
▲日本婦人と交際　鳩山春子
▲家庭に就て　三輪田眞佐子
▲青年の思潮に就て　保科正一
▲青年辯士の觀たる大隈伯
附錄新講談、伊藤痴遊、典山、伯山、波瀾曲折、趣味横溢、讀過すれば無限の感興に打たる眞に講談界の新且つ粹なるもの也

丁酉倫理會 倫理講演集

一月一日發行　百號紀念第壹百壹號

半年金七拾貳錢（本號ニ限リ三五錢郵税二錢）

開會の辭　中島德藏
外國民に鑑みるべき諸點　文學博士　中島力造
倫理上の二三の問題　文學博士　吉田熊次
人道主義の眞義　文學士　吉田靜致
空虛なる修養論　バチエラー、オブアーツ　田中喜一
忠孝と人道　文學博士　元良勇次郎
二三の青年論　文學士　木山熊次郎
進歩と回顧　文學士　深作安文
修身といふ語に就て　文學博士　三宅雄次郎
過去七十年の追懷　法學博士 文學博士　加藤弘之
孔子に對する社會的信仰の矛盾　文學博士　村上專精

古風の宗教と現代の道德　文學博士　井上哲次郎
レキー、ブルールの非規範學的倫理學　文學博士　桑木嚴翼
個人主義と宗教主義　文學士　塚原政次
德育管見　文學士　溝淵進馬
學者と實際　小柳司氣太
一轉語　文學士　紀平正美
習慣は如何なる意味にて道德なるか　農學士　矢島錦藏
女子に對する倫理的要求　宮田脩
「孝道」に就て　文學士　澤柳政太郎
趣味的修養　文學士　常盤大定

發行所　東京京橋區銀座一丁目　大日本圖書株式會社　振替東京二一一九番

既刊 第一卷 創作の卷（浮雲 其面影 平凡）

定價二圓卅錢 郵稅 市內金四錢 地方金廿二錢

坪內雄藏 池邊吉太郎 內田貢 共纂

第二卷新刊 二葉亭全集

東京朝日新聞社發行

發賣元 東京日本橋區本町 博文館

定價 金二圓三十錢

郵稅 市內金四錢 地方金十六錢

ツルゲエネフの卷!!! 模範的飜譯!!!

露文學の精華!!! 新文藝の先驅!!!

我國に於ける**新文藝の創設者**にして**完成者**たる二葉亭が全集第二卷成る、本卷は戰に負けて卻つて日本を征服したりと謂はるゝ、露西亞文學の飜譯なり、本卷に於て如何に二葉亭が新文體新飜譯を創設し且つ共に之を完成したるか之に依て文壇は如何に**覺醒**せられ**刺激**せられたるかを知る可く、**最近思想界の進步**を謳歎する者本書を讀まば**二葉亭の識見と力量**とが一世に卓絶せるものたるに**驚殺**せらるべし

早稻田大學講義錄

新學年開始

各科 十八ヶ月 卒業

法律科講義
政治經濟科講義
文學科講義

見本つき 規則書 無代送呈

僅々十八ヶ月の短時日を以て能く深遠の專門學術を解説し平易簡明にして要領を逸せざる講義振りは實に本大學通信教授の特色とする處なり。各科共去十月第壹號を出し登載の講義今や漸く蔗境に進み最も就學に適當の時機なるを以て好學の士は此際速に申込れんことを希望す

早稻田中學講義◎早稻田商業講義◎高等國民教育（隨時入學を許し初號より送付す）（規則送呈）

東京牛込早稻田
振替口座一一二三番
電話番町三七四番

早稻田大學出版部

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

笹川臨風先生校 最新刊

訓註詳解 ポケット孫子呉子

天金上製美本。定價七十五錢 特價金六拾五錢 郵税六錢

◎支那に武經の七書がある、孫子と呉子とは其中で最も尊重せらる、もの彼の六韜三略の如き僞書とは趣を異にす、孫子十三篇呉子六篇は兵法を説ける書、けれ共其精神を處世に應用せんか、必ず成功を期すべし軍人は勿論激烈なる生存競爭場裡に活動せんとする者來りて處世と成功の秘訣を本書に求めよ

◎本書の特色、本文の外に○讀方○詳註○大意○とを附したれば初學者にも讀解せらる亦小本洋綴の美本携帯便也

笹川臨風先生校 好評四版

訓註 ポケット菜根譚

天金上製 定價金五拾錢 郵税六錢

本書は修養と處世の秘訣を説ける東洋唯一の聖書本書は論孟を裏面より説ける處世修養書として多大の高評を博し四版一萬部分將に盡きんとす乞ふ速に御購求あらん事を

發行所 東京市神田區錦町二丁目五番地 振替口座東京(三四〇九番) 二松堂書店 ◎賣捌全國各地有名書林

男爵後藤新平閣下題辭●森槐南先生校閲●井上靈山先生選註

最新刊

選註 李太白詩集

ポケット入 總クロース 上製三方金箔 定價七十五錢 特價金六拾五錢 郵税金四錢

天來の詩人として古今に超絶せる大詩人李太白詩集を一讀せよ特に本書は森槐南先生の嚴密なる校閲を經たり

本書の特色 一、假名交り總振假名文に譯し讀方を示し二、熟字成語故事等を略解し三、各篇の大意を説明し四、本文には略解を附し韻字平仄を區別す五、印刷鮮明装釘美麗紳士青年淑女机上及携帯の美本にして又旅行家の好伴侶なり。

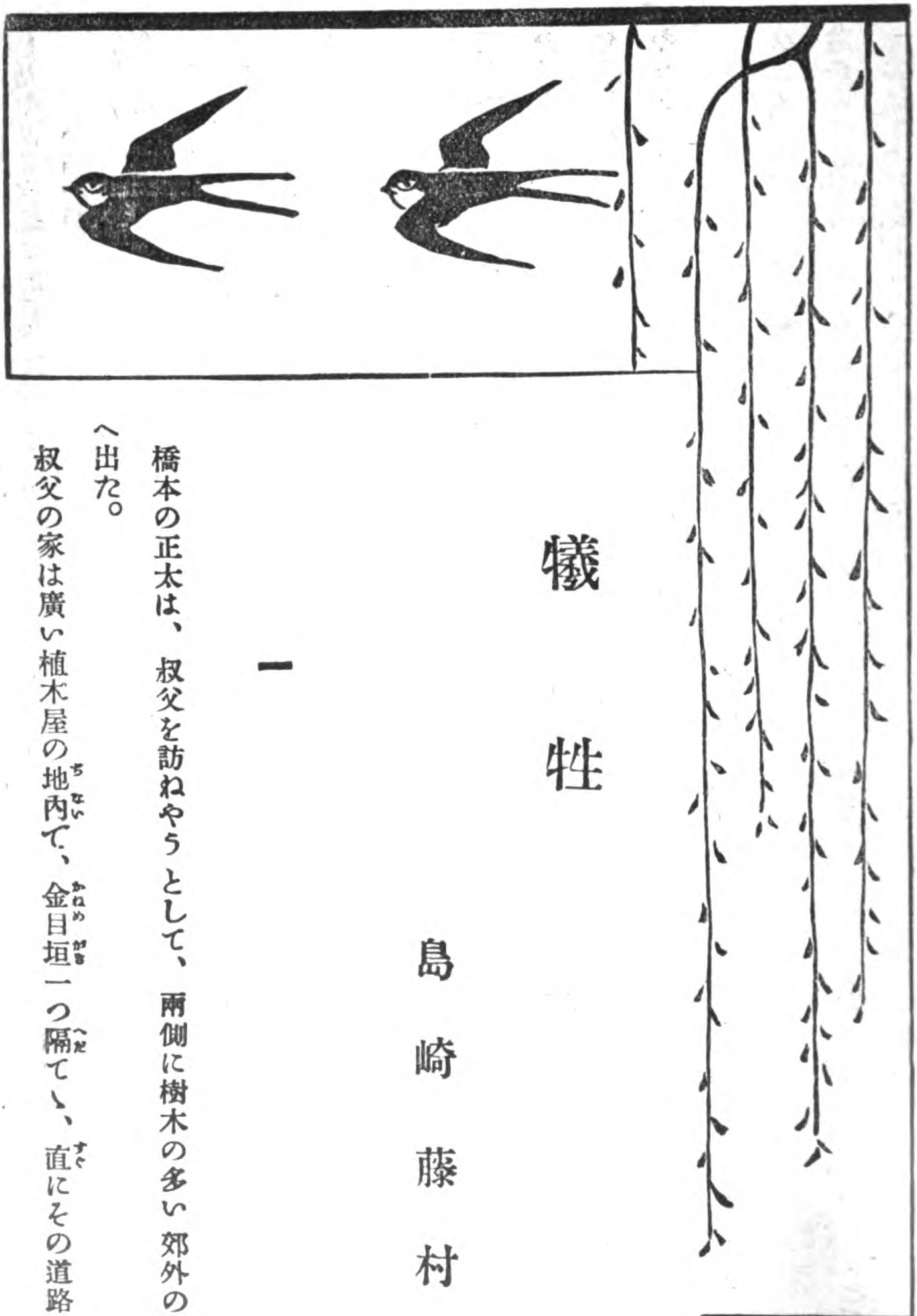
發行所

東京市神田區裏神保町二番地 振替口座東京一六一八番 崇文館書店

東京市神田區錦町二丁目五番地 振替口座東京三四〇九番 二松堂書店

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論新年號小說



犧牲

島崎藤村

一

橋本の正太は、叔父を訪ねやうとして、兩側に樹木の多い郊外の道路へ出た。

叔父の家は廣い植木屋の地内で、金目垣一つ隔てゝ、直にその道路へ接

したやうな位置にある。垣根の側には、細い乾いた溝がある。人通りの少い、眞空のやうに靜かな初夏の晝過て、荷車の音もしなかつた。垣根に近い窗のところからは、叔母のお雪が顔を出して、格子に取縋りながら屋外の方を眺めて居た。

正太は窗の下に立つた。丁度その家の前に、五歳ばかりに成る兒が餘念もなく遊んで居た。

『叔母さん、菊ちやんのお友達?』

心易い調子で、正太はそこに立つたまゝお雪に尋ねて見た。子供は、知らない大人に見られることを羞ぢるといふ風であつたが、馳出さうともしなかつた。

短い着物に細帶を卷付けた斯の娘の樣子は、同じ年頃のお菊のことを思出させた。お雪が夫と一緒に、三人の娘を引連れ、遠く山の上から都會の方へ移つた時は、新しい家の樂みを想像して來たものであつた、引越の混雜の後で、三番目のお繁——まだ誕生を濟ましたばかりのが亡くなつた。丁度それから一年過ぎた。復た二番目のお菊が亡くなつた。あのお菊が小さな下駄を穿いて、好きな唱歌を歌つて歩くやうな姿は、最早家の周圍に見られなかつた。

姉のお房とは違ひ、お菊の方は遊友達も少なかつた。『菊ちやん、お遊びなさいな』と言つて、よく誘ひに來たのは斯の近所の娘である。

道路には日があたつて居た。新緑の反射は人の頭腦の内部までも入つて來た。明るい光と、悲哀とて、お雪はすこし逆上るやうな眼付をした。

「まあ、正太さん、お上んなすつて下さい。」

斯う叔母に言はれて、正太は垣根越しに家の内を覗いて見た。

「叔父さんは？」

「一寸歩いて來るなんて、大屋さんの裏の方へ出て行きました。」

「ぢや、私も、お裏の方から廻つて參りませう。」

正太は其足で、植木屋の庭の方へ叔父を見つけに行くことにした。

斯の地内には、叔父が借りて住むと同じ型の平屋がまだ外にも二軒あつて、その板屋根が庭の樹木を隔てゝ、高い草葺の母屋と相對して居た。植木屋の人達は新茶を造るに忙しい時であつた。緣日向の花を仕立てる畠の盡きたところまで行くと、そこに木戸がある。その木戸の外に、茶畠、野菜畠などが續いて居る。畠の間の小徑のところで正太は叔父の三吉と一緒に成つた。

新開地らしい光景は二人の眼前に展けて居た。ところ〴〵の樹木の間には、新しい家屋が光つて見える。青々とした煙も立ち登りつゝある。

三吉は眺め入つて、

「どうです、正太さん、一年ばかりの間に、隨分この邊は變りましたらう。」

と弟か友達にでも話すやうな調子で言つて、茶畠の横手に養鷄所の出來たことなどまで正太に話し聞かせた。

何となく正太は元氣が無かつた。彼の上京は、叔父が長い仕事を持つて山を下りたよりも早かつた。一頃は本所邊に小さな家を借りて、細君の豐世と一緒に假の世帶を持つたが、間もなくそこも疊んで了ひ、細君は鄉里へ歸し、それから單獨に成つて事業の手蔓を探した。彼の氣質は普通の平坦な道を歩かせなかつた。乏しい旅費を懷にしながら、彼は遠く北海道から樺太まで渡り、空しくコルサコフを引揚げて來て、靑森の旅舍で酷く煩つたこともあつた。もとより資本あつての商法では無い。磐城炭の賣込を計劃したことも有つたし、南淸地方へ出掛けやうとして、會話の稽古までして見たことも有つた。未だ彼は是といふ事業に取付かなかつた。唯、焦心つた。

そればかりでは無い。叔父といふ叔父は、いづれも東京へ集つて來て居る。長いこと家に居なかつた實叔父は壯健で歸つて來て居る。森彥叔父は山林事件の始末をつけて、更に別方面へ動かうとして居る。三吉叔父も、漸く山から持つて來た仕事を纏めた。早く東京で家を持つやうに成らう、斯の考へは正太の胸の中を往來して居た。

動き光る若葉のかげで、三吉、正太の二人はしばらく時を移した。やがて庭の方へ引返して行つた。香の無い、葱を仕立てる場所にいつて、植木室の側を折れ曲ると、そこには盆栽棚が造り並べてある。

とは言へ誘惑するやうに美しい葵の花が盛んに咲亂れて居る。植木屋の娘達は、いづれも素足に尻端折で、威勢よく井戸の水を汲んで居るのもあれば、如露で花に灌いで居るのもあつた。三吉は自分の子供に逢つた。

「房ちやん。」

と正太も見つけて呼んだ。

お房は、耳のあたりへ垂下る厚い髪の毛を煩ささうにして、うつとりとした眼付で二人の方を見た。何處か氣分のすぐれない斯の子供の様子は、餘計にその容貌を娘らしく見せた。

「叔父さん、まだ房ちやんは全然快くなりませんかネ。」

「どうも、君、熱が出たり退いたりして困る。二人ばかり醫者にも診て貰ひましたがネ。大して惡くもなささうですが、快くも成らない――なんても醫者の言ふには腸から來て居る熱なんださうです。」

斯様な話をしながら、二人はお房を連れて、庭づたひ井戸のある方へ廻つた。

「でも、房ちんは餘程姉さんらしく成りましたネ。」

と正太は木犀の樹の側を通る時に言つた。

この木犀は可成の古い幹で、細長い枝が四方へ延びて居た。それを境に、疎な竹の垣を繞らして、三吉の家の庭が形ばかりに區別してある。

「お雪、房ちやんに薬を服ましたかい。」

と三吉は庭から尋ねて見た。正太も縁側のところへ腰掛けた。

『奈何いふものか、房ちやんは彼様な風なんですよ。』とお雪はそこへ來て、娘の方を眺めながら言つた。『すこし屋外へ遊びに出たかと思ふと、直に歸つて來て、ゴロ〳〵してます。今も、父さん達のところへ行つて見てゐらつしやいッて、私が無理に勸めて遣つたんですよ。』

長い勞作の後で、三吉も疲れて居た。不思議にも彼は休息することが出來なかつた。唯疲勞に抵抗するやうな眼付をしながら、甥と一緒に庭へ向いた部屋へ上つた。

『正太さん、大屋さんから新茶を貰ひました――一つ召上つて見て下さい。』

斯う言つてお雪が持運んで來た。三吉は、その若葉の香を嗅ぐやうなやつを、甥にも勸め、自分でも啜つて、仕事の上の話を始めた。彼の話はある露西亞人のことに移つて行つた。その人のことを書いた本の中に、細君が酸乳といふものを製へて、著作で勞れた夫に飲ませたといふところが有つた。それを言出した。

『彼様いふ強壯な體格を具へた異人ですらも左樣かナア、と思ひましたよ。なにしろ、僕なぞは隨分無理な道を通つて來ましたからネ。仕事が濟んで、いよ〳〵そこへ筆を投出した時は――その心地は、君、何とも言へませんてしたよ。部屋中でゴロ〳〵轉がつて歩きたいやうな氣がしました。』

正太は笑はずに居られなかつた。

三吉は言葉を繼いて、『自分の行けるところまで行つて見やう――それより外に僕は何事も考へて居なかつたんですネ。一方へ向いては艱難とも戰はねばならずサ。それに子供が多いと來てませう。ホラ、あのお繁の亡くなつた時には、山から書籍を詰めて持つて來た茶箱を削り直して貰つて、それを子供の棺にして、大屋さんと二人で寺まで持つて行きました。左樣いふ勢でしたサ。お繁が死んで呉れて、反つて有難かつたなんて、串談半分にも僕は其樣なことをお雪に話しましたよ……ところが君、今度は家のやつが鳥目なぞに成るサ……』

『左樣〳〵。』と正太も思出したやうに、『あの時はエラかつた。私も新宿まで鷄肉を買ひに行つたことが有りました。』

『そんな思をして骨を折つて、漸くまあ何か一つ爲た、と思つたら奈何でせう。復たお菊が亡くなつた。僕は君、悲しいなんていふところを通越して、呆氣に取られて了ひました――暴風にでも、自分の子供を浚つて持つて行かれたやうな――』

思はず三吉は斯樣なことを言出した。斯の郊外へ引移つてから、彼の家では初めての男の兒が生れて居た。種夫と言つた。その乳呑兒を年若な下婢に渡して置いて、やがてお雪も二人の話を聞きに來た。

『どんなにか叔母さんも御力落しでせう。』と正太はお雪の方へ向いて、慰め顔に、『鄕里の母からも、その事を手紙に書いて寄しました。』

「菊ちやんが死んぢやつたんでは、眞實にツマリません。」とお雪が答へる。

「此頃は君、大變な婦人が僕の家へ舞込んで來ました。」と三吉が言つて見た。「――切下げ髮にして、黒い袴を穿いてネ。突然入つて來たかと思ふと、說敎を始めました。恐しい權幕でお雪を責めて行きましたッけ。」

「大屋さんの御親類。」とお雪も引取つて、「その人が言ふには、なんでも私の信心が足りないんですッて――ですから私の家には、斯様に不幸ばかり續くんですッて――是邊は、貴方、それは信心深い處なんですよ。」斯う正太に話し聞かせた。

不安な眼付をしながら、三吉は家の內を眺め廻した。中の部屋の柱のところには、お房がリボンの箱などを取出して、遊びに紛れて居た。三吉は思付いたやうに、お房の方へ立つて行つた。一寸、子供の額へ手を宛てゝ見て、復た正太の前に戻つた。

其時、表の格子戸の外へ來て、何かゴト〳〵言はせて居るものが有つた。

「菊ちやんのお友達が來た。」

と言つて、お雪は玄關の方へ行つて見た。しばらく彼女は上り端の障子のところから離れなかつた。

「オイ、菓子でも呉れて遣りナ。」

と夫に言はれて、お雪は中の部屋にある佛壇の扉を開けた。そして、新しい位牌に供へてあつた物を取出した。近所の子供が禮を言つて、馳出して行つた後でも、まだお雪は耳を澄まして、小さな下駄の

音に聞入つた。

女學生風の袴を着けた娘がそこへ歸つて來た。お延と言つて、郷里から修行に出て來た森彦の總領――三吉から言へば二番目の兄の娘である。この娘は叔父の家から電車で學校へ通つて居た。

「兄さん、被入しやい。」

とお延は正太に挨拶した。從兄妹同志の間ではあるが日頃正太のことを「兄さん、兄さん」と呼んで居た。

毎日のやうにお雪は子供の墓の方へ出掛けるので――尤も、寺も近かつたから――其日もお延を連れて行くことにした。後に殘つた三吉と正太とは、互に足を投出したり、寢轉んだりして話した。

其時まで、正太の父の達雄のことに就いて、何事も話さなかつた。遽かに、彼は坐り直した。

「まだ叔父さんにも御話しませんでしたが、漸く吾家の阿父の行衞も分りました。」

斯樣なことを言出した。久しく居所さへも不明であつた達雄のことを聞いて、三吉も身を起した。

「先日、Uさんが神戸の方から出て來まして、私に逢ひたいといふことですから――」と言つて、正太は聲を低くして、「其時Uさんの話には、阿父も彼方で教員してるさうです。まあ食ふだけのことには困らん……それにしても、彼樣に家を滅茶々々にして出て行つた位ですから、もうすこし阿父も何か

爲るかと思ひましたよ。」

「あの若い藝者は奈何しましたらう――達雄さんが身受をして連れて行つたといふ少婦が有るぢやありませんか。」

「あんなものは、最早疾に奈何か成つて了ひましたあね。」

「左樣かナア。」

「て、叔父さん、Uさんが言ふには、考へて見れば橋本さんも御氣の毒ですし、彼樣して唯孤獨で置いても奈何かと思ふからして、せめて家族の人と手紙の遣取位はさせて進げたいものですツて。」

「では、何かネ、君は父親さんと通信を始める積りかネ。」と三吉が尋ねた。

「否。」正太の眼は輝いた。「勿論――私が書くべき場合でもなし、阿父にしたところが書けもしなからうと思ひます。そりやあもう、阿父が店のものに對しては、面向の出來ないやうなことをして行きましたからネ。唯、母が可哀さうです……それを思ふと、母だけには內證でも通信をさせて遣りたい。Uさんが間に立つて呉れるとも言ひますから。」

斯ういふ甥の話は、三吉の心を木曾川の音のする方へ連れて行つた。舊い橋本の家は、曾遊の時のまゝて、未だ彼の眼にあつた。

「變れば變るものさネ。君の家の姉さんのことも、豊世さんのことも、君のことも――何事も達雄さんは知るまいが。ホラ、僕が君の家へ遊びに行つた時分は、達雄さんも非常に勤勉な人て、君のことな

ぞを酷く心配して居たものですがナア。あの廣い表座敷で、君と僕と、よく種々な話をしましたッけ。あの時分、君が言つたことを、僕はまだ覺えて居ますよ。』

『あの時分は、全然私は夢中でした。』と正太は打消すやうに笑つて、『しかし、叔父さん私の家を御覧なさい――不思議なことには、代々若い時に家を飛出して居ますよ。第一、祖父さんが左樣ですし――阿父が左樣です――』

『へえ、君の父親さんの若い時も、矢張許諾を得ないで修業に飛出した方かねえ。』

『私だつても左樣でせう――放縱な血が流れて居るんですネ。』

と正太は言つて見たが、祖父の變死、父の行衛などに想ひ到つた時は、妙に笑へなかつた。

やがて庭にある木犀の若葉が輝き初めた。お雪は姪と連立つて、急いで歸つて來た。彼女の袂の中には、娘の好きさうなものが入れてあつた。買物のついでに、ある雜貨店から求めて來た毛絲だ。それをお房に呉れた。

『今し方まで菊ちやんのお墓に居たものですから、斯樣に遲くなりました――延ちやんと二人でさん〴〵泣いて來ました。』

斯うお雪は夫に言つて、いそ〳〵と臺所の方へ行つて働いた。

正太が斯の郊外へ訪ねて來る度に、いつも叔父は仕事々々でいそがしがつて居て、其日のやうにユックリ相手に成つたことはめづらしかつた。夕飯の仕度が出來るまで、二人は表の方の小さな部屋へ行つ

て見た。畠から鍬を舁いて來た農夫、町から戻つて來た植木屋の職人——左樣いふ人達は、いづれも一日の勞働を終つて窗の外を通過ぎた。

三吉は窗のところに立つて、ションボリと往來の方を眺めながら、

「どうかすると、斯ういふ夕方には寂しくて堪えられないやうなことが有るネ——それが、君、何の理由も無しに。」

「私の今日の境涯では猶更左樣です——しかし、叔父さん、左樣いふ感じのする時が、一番心は軟かですネ。」

斯う正太が答へた。次第に暮れかゝつて來た。その部屋の隅には、薄暗い壁の上に、別に小窓が切つてあつて、そこから空氣を導くやうになつて居た。青白い、疲れた光線は、人知れずその小障子のところへ映つて居た。正太はそれを夢のやうに眺めた。

夕飯はお雪の手づくりのもので、客と主人とだけ先に濟ましました。未だ正太は言ひたいことがあつて、それを言ひ得ないで居るといふ風であつたが、到頭三吉に向つて斯う切出した。

「實は——今日は叔父さんに御願ひが有つて參りました。」

他事でも無かつた。すこし金を用立てゝ呉れろといふので有つた。是迄もよく叔父のところへ、五圓貸せ、十圓貸せ、と言つて來て、樺太行の旅費まで心配させたものであつた。

「其樣に君は困るんですか。」と三吉は正太の顏を見た。「郷里の方からでも、すこし兵糧を取寄せたら

可いぢや有りませんか。」

「そこです。」と正太は切ないといふ眼付をして、「成るべく郷里へは言つて遣りたくない……彼様して、店は店て、若い者が堅めて居て呉れるんですからネ。」

正太の萎れた様子を見ると、何とかして三吉の方では斯の甥の銷沈した意氣を引立たせたく思つた。彼はいくらかを正太の前に置いた。それが奈何いふ遣ひ道の金であるとも、深く發つて聞かなかつた。やがて正太は自分の下宿を指して歸つて行つた。後で、お雪は臺所の方を濟まして出て來て、夫と一緒に釣洋燈の前に立つた。

「正太さんは、未だ、何事も爲すつてゐらッしやらないんでせうか。」

「どうも思はしい仕事が無さそうだ。石炭をやつて見たいとか、何とか、來る度に話が變つてる。何卒して早く手足を延ばすやうにして遣りたいものだネ——あの人も、橋本の若旦那として置けば、立派なものだがナア。」

斯ういふ言葉を交換して置いて、夫婦は同じやうにお房の様子を見に行つた。

お房の發熱は幾日となく續いた。庭に向いた部屋へ子供の寢床を敷いて、その枕頭へお雪は藥の罎を運んだ。鞠だの、キシヤゴだの、毛絲の巾着だの、それから娘の好きな人形なぞも、運んで行つた。お

房は靜止して居なかつた。臥たり起きたりした。
ある日、三吉は町から買物をして、子供の方へ戻つて來た。父の歸りと聞いて、お房は寢衣のまゝ、床の上に起直つた。そして、一家の周圍に元氣よく遊んで居る近所の娘達を羨むやうな樣子して、子供らしい眼付で父の方を見た。
『房ちやん、御土産が有るぜ。』
と三吉は美しい色のリボンをそこへ取出した。彼は、食のすゝまない子供の爲にと思つて、ミルク、フッドなども買求めて來た。
『へえ、斯樣な好いのを父さんに買つて頂いたの。』
とお雪もそこへ來て言つて、そのリボンを子供に結んで見せた。
『房ちやんは何か食べたかネ。』と三吉は妻に尋ねた。
『お晝飯に、お粥をホンのぽつちり――牛乳は厭だつて飮みませんし――眞實に、何物も食べたがらないのが一番心配です。』
『ねえ、房ちやん、御醫者樣の言ふことを聞いて、早く快く成らうねえ。左樣すると、父さんが房ちやんに好く似合ふやうな袴を買つて呉れるよ。』
斯う父に言はれて、お房は唯默頭いた。やがて復た横に成つた。
『あゝ、父さんも疲れた。』と三吉は子供の側へ身體を投出すやうにした。菊ちやんが居なくなつて、

急に家の内が寂しく成つたネ。ホラ、父さんが仕事をしてる時、机の前に二人並べて置いて、「父さんが好きか、母さんが好きか」と聞くと、房ちやんは直に「父さん」と言ふし——菊ちやんの方は暫時考へて居て、「父さんと母さんと兩方」だトサーあれて、菊ちやんも、ナカ〳〵外交家だつたネ。」

「何方が外交家だか知れやしない。」とお雪は輕く笑つた。

病兒を慰めやうとして、三吉は種々なことを持出した。お雪が極く幼少い時分に南部地方の乳母から習つたとかて、山に居る頃はお房もよく歌つた兎の歌のことや、それからあの山の上の家て、居睡してはよく叱られた下婢が蛙の話をしたことなぞを言出した。七年の長い田舍生活の間、あの石垣の多い傾斜の方て、毎年のやうに旅の思をさせた蛙の聲は、まだ三吉の耳にあつた。それを子供に眞似て聞かせた。

「ヒヨイ〳〵〳〵〳〵——グツ〳〵——グツ〳〵——」

「いやあな父さん。」

とお房は寢ながら父の方を見て言つた。自然と出て來た微笑は僅かに其口唇に上つた。

「房ちやん、母さんが好い物を造へて來ましたよ——すこし飮んて見てお呉れな。」

とお雪は夫が買つて來たミルク、フツドを茶椀に溶かして、匙を添えて持つて來た。子供は香ばしそうな飮料を一寸味つたばかりて、餘は口を着けやうともしなかつた。其晩から、お房は一層激しい發熱の狀態に陷つた。何となく斯の兒の身體には異狀が起つて來た。

「眞實に、串談ぢや無いぜ。」

と三吉は物に襲はれるやうな眼付をして、いかにしてもお房ばかりは救ひたいといふことを妻に話した。不思議な恐怖は三吉の身體を通過ぎた。お雪も碌に眠られなかつた。

翌々日、お房は病院の方へ送られることに成つた。病み震へて居る娘を抱起すやうにして、母は汚れた寢衣を脱がせた。そして、山を下りる時に着せて連れて來たヨソイキの着物の筒袖へ、お房の手を通させた。

「まあ、斯様に熱いんですよ。」

とお雪が言ふので、三吉はコハ〴〵子供に觸つて見た。お房の身體は火のやうに熱かつた。

「病院へ行つて御醫者様に診て頂くんだよ—シッカリしておいでよ。」と三吉は娘を勵ました。

「母さん……前髪をとつて頂戴な。」

熱があつても、お房は斯様なことを願つて、リボンで髮を束ねて貰つた。

頼んで置いた車が來た。先づお雪が乘つた。娘は、父に抱かれながら門の外へ出て、母の手に渡された。下婢は乳呑兒の種夫を連れて、これも車で其後に隨つた。

「延、叔父さんも是から行つて見て來るからネ。お前に留守居を頼むよ。」

斯う三吉は姪に言ひ置いて、電車で病院の方へ廻ることにした。慌しさうに彼は家を出て行つた。

留守には、親類の人達、近く郊外に住む友人などが、かはる〴〵見舞に來た。「延ちやん、お淋しいでせうねえ」と庭傳ひに來て言つて、娘を慰める小學校の女教師もあつた。子供の病が重いと聞いて、お雪は言ふに及ばず、三吉まで病院を離れないやうに成つてからは、二番目の兄の森彦が泊りに來た。森彦は夕方に來て、朝に自分の旅舍へ歸つた。

相變らず家の內はシンカンとして居た。道路を隔てゝ、向側の農家の方で鳴く鷄の聲は、午後の空氣に響き渡つた。强い、充實した肥つた體軀に羽織袴を着け、紳士風の帽子を冠つた人が、門の前に立つた。この人が森彦だ――お延の父だ。其日は、お房が入院してから一週間餘に成るので、森彦も病院へ見舞に寄つて、例刻よりは早く自分の娘の方へ來た。

「阿父さん。」

とお延は出て迎へた。

郷里を出て長いこと旅舍生活をする森彦の身には、斯うして娘と一緒に成るのがめづらしくも有つた。傍へ呼んで、病院の方の噂などをする娘の話振を聞いて見た。田舍から來てまだ間も無いお延が、都會の娘のやうに話せないのも無理はない、と思つた。

「奈何だね、お前の頭腦の具合は――此頃もこゝの叔父さんが、どうも延は具合が惡いやうだから、暫時學校を休ませて見るなんて言つた――其樣な勇氣の無いこつちや、ダチカン。」

思はず森彦は郷里の方の言葉を出した。そして、舊家の家長らしい威嚴を帶びた調子で、博愛、忍耐、節儉などの人としての美德であることを語り聞かせた。久しく森彦の傍に居なかつたお延は、何となく父を憚るといふ風で、唯默つて聞いて居た。

「や、菓子を呉れるのを忘れた。」

と森彦は思付いたやうに笑つて、袂の内から紙の包を取出した。やがて、家の内を眺め廻しながら、

『どうもこゝの家は空氣の流通が好くない。此頃から俺は左樣思つて居た。それに、こゝの叔父さんのやうに彼樣煙草をポカ／＼燻したんぢや……俺なぞは、毎晩休む時に、旅舍の二階を一度明けて、すつかり惡い空氣を追出してから寢る。すこしでも煙草の煙が籠つて居やうものなら、もう俺は寢られんよ。」

斯うお延に話した。彼は娘から小刀を借りて、部屋々々の障子の上の部分をすこしづゝ切り透した。

「延――それぢや俺はこれで歸るがねえ。」

「あれ、阿父さんは最早御歸りに成るかなし。」

「今日は叔父さんも一寸歸つて來るさうだし――左樣すれば俺は居なくても濟む。丁度好い都合だつた。これからもう一軒寄つて行くところが有る、復た泊りに來ます。」

家の方を案じて、三吉は夕方に病院から戻つた。留守中、訪ねて來て呉れた人達のことを姪から聞取つた。

「只今。」

と三吉は緣側のところへ出て呼んだ。

「オヤ、小泉さん、御歸りで御座いましたか。」

庭を隔てゝ對ひ合つて居る裏の家からは、女教師の答へる聲が聞えた。

女教師は自分の家の格子戸をガタ〳〵言はせて出た。井戸の側から、竹の垣を廻つて、庭傳ひに三吉の居る方へやつて來た。中學へ通ふ位の子息のある年配で、ハッキリ〳〵と丁寧に物なぞも言ふ人である。

「房子さんは奈何でゐらッしやいますか。先日一寸御見舞に伺ひました時も、大層御惡いやうな御樣子でしたが——眞實に、私は御氣の毒で、房子さんの苦しむところを見て居られませんでしたよ。」

斯う女教師は庭に立つて、何處か國訛のある調子で言つた。其時三吉は、簡單にお房の病氣の經過を話して、到底助かる見込は無いらしいと歎息した。お延も緣側に出て、二人の話に耳を傾けた。

「もし萬一のことでも有りさうでしたら、病院から電報を打つ……醫者が左樣言つて呉れるものですから、私もよく賴んで置いて、一寸用達にやつて參りました。」と三吉は附添した。

「まあ、貴方のところでは、奈何して斯樣に御子さん達が……必と御越に成る方角でも惡かつたんで

せうッて、大屋さんの祖母さんが左様申しますんですよ。其様なことも御座いますまいけれど……でも、僅か一年ばかりの間に、皆さんが皆さん――奈何考へましても、私などには解りません。』と言つて、女教師は思ひやるやうな眼付をして、『あのまあ房子さんが、病院中へ響けるやうな聲を御出しなすつて、『母さん――母さん――』と呼んでゐらッしやいましたが、母さんの身に成つたら奈様で御座いませう……左様申して、御噂をして居りますんですよ。』

『一週間、彼様して呼び續けに呼んで居ました――最早あの聲も弱つて來ました。』と三吉は答へた。

女教師が歸つて行く頃は、植木屋の草屋根と暗い松の葉との間を通して、遠く黄に輝く空が映つた。三吉は庭に出た。子供のことを案じながら、あちこちと歩いて見た。

夕飯の後、三吉は姪に向つて、

『延。叔父さんは斯の一週間ばかり碌に眠らないんだからネ……今夜は叔父さんを休ませてお呉れ。お前も、頭腦の具合が惡いやうなら、早く御休み。』

斯う言つて置いて、其晩は早く寢床に就いた。

何時電報が掛つて來るか知れないといふ心配は、容易に三吉を眠らせなかつた。身體に附いて離れないやうな病院特別な匂ひが、ブーンと彼の鼻の先へ香つて來た。その匂ひは、何時の間にか、彼の心をお房の方へ連れて行いた。電燈がある。寢臺がある。子供の枕頭へは黑い布を掛けて、光の刺激を避けるやうにしてある。その側には、妻が居る。附添の女が居る。種夫や下婢も居る。白い制服を着た看護婦は

病室を出たり入つたりして居る。未だお房は、子供ながらに出せるだけの精力を出して、小さな頭腦の內部が破壞れ盡すまでは休めないかのやうに、叫んで居る——思ひ疲れて居るうちに、三吉は深いところへ陷入るやうに眠つた。

翌日は、午前に三吉が留守居をして、午後からお延が留守居をした。

「叔母さん達のやうに、彼樣して子供の側に附いて居られると可いけれど——叔父さんは、お前、お金の心配もしなけりや成らん。」

斯樣なことを言つて出て行つたかと思ふと、やがて三吉は用達から戻つて來て、復た部屋に倒れた。何時の間にか、彼は死んだ人のやうに成つた。

「母さん——」

斯ういふ呼聲に氣が付いて、三吉が我に返つた頃は、遲かつた、彼は夕飯後、しばらく姪と病院の方の噂をして、其晩も早く寢床に入つたが、自分で何時間ほど眠つたかといふことは知らなつた。次の部屋には、姪がよく寢入つて居る。と身體を動かさずに居ると、可恐しい子供の呼聲が耳の底の方で聞える。

「母さん、母さん、母さん——母さんちやん——ちやん——ちやん——ちやん」宛然、氣が狂つたやうな聲だ……それは三吉の耳について了つて、何處に居ても頭腦へ響けるやうに聞えた。

夢のやうに、門を叩く音がした。

「小泉さん、電報?」

むつくと三吉は跳起きた。表の戸を開けて、受取つて見ると、病院から打つて寄したもので、「ミヤクハゲシ、スグコイ」とある。お延を起す爲に、三吉は姪の寢て居る方へ行つた。斯の娘は一度「ハイ」と返事をして、復た寢て了つた。

「オイ、オイ、病院から電報が來たよ。」

「あれ、眞實かなし。」とお延は田舍訛で言つて、床の上に起直つた。「私は夢でも見たかと思つた。」

「叔父さんは直に仕度をして出掛る。氣の毒だが、お前、車屋まで行つて來てお呉れ。」

と叔父に言はれて、お延は眼を擦り〳〵出て行つた。

三吉が家の外に出て、車を待つ頃は、まだ電車は有るらしかつた。稻荷祭の晩で、新宿の方の空は明るい。遠く犬の吠える聲も聞える。そのうちに車が來た。三吉は新宿まで乘つて、それから電車で行くことにした。

「延、お前は獨りで大丈夫かネ。」

と三吉は留守を頼んで置いて出掛けた。お延は戸を閉めて入つた。冷い寢床へ潜り込んでからも、種〳〵なことを小さな胸に想像して見た時は、この娘もぶる〳〵震へた。叔父が新宿あたりへ行き着いたかと思はれる頃には、ポツ〳〵板屋根の上へ雨の來る音がした。

復た家の内は寂寞に返つた。

車が門の前で停つた。正太はそれから飛降りて、閉めてあつた扉を押した。「延ちやん、皆な歸つて來ましたよ」正太が入口の格子戸を開けて呼んだ。それを聞きつけて、お延は周章てゝ出た。丁度森彦も來合せて居て、そこへ顔を顯はした。

「到頭房もいけなかつたかい。」

「えゝ、今朝……拂曉に息を引取つたさうです……皆な、今、そこへ來ます。」

森彦と正太とは、斯う言合つて、互に顔を見合せた。

間もなく三臺の車が停つた。お雪は乳呑兒を抱いて二週間目で自分の家へ歸つて來た。下婢も荷物と一緒に車を降りた。つゞいて、三吉が一番年長の兄の娘にあたるお俊も、降りた。

三吉の車は一番後に成つた。日の映つた往來には、お房の遊友達が立留つて、さゝやき合つたり、眺めたりして居た。黑い幌を掛けて靜かに引いて來た車は、その娘達の見て居る前で停つた。

「叔父さん、手傳ひませうか。」

と正太が車の側へ寄つた。

お房は茶色の肩掛に包まれたまゝ、父の手に抱かれて來た。グタリとした子供の死體を、三吉は車から抱下して、門の内へ運んだ。

佛壇のある中の部屋の隅には、人々が集つて、お房の爲に床を用意した。そこへ冷くなつた子供を寢

かした。顔は白い布で掩ふた。

「ホウ、斯うして見ると、思ひの外大きなものだ——奈何だネ、膝は曲げて遣らなくても好からうか。」

と森彦が注意した。

「子供のことですから、このまゝで棺に納まりませう。」と正太は眺めた。

「でも、すこし曲げて置いた方が好いかも知れません。」

斯う三吉は言つて見て、娘の膝を立てるやうにさせた。氷のやうなお房の足は最早自由に成らなかつた。それを無理に折曲げた。お俊やお延は、水だの花だのを枕頭へ運んだ。丁度、お雪が二番目の妹のお愛も、學校の寄宿舍から訪ねて來た。斯の娘は姉の傍へ寄つて、一緒に成つて泣いた。

午後には、裏の女教師が勝手口から上つて、子供の死顏を見に來た。

「眞實に、何とも申上げやうが御座いません……小泉さんは、まだそれでも男だから宜う御座んすがこちらの叔母さんが可哀さうです。」と女教師は言つた。

お房が病んだ熱は、腸から來たもので無くて、實際腦膜炎の爲であつた。それをお雪は女教師に話し聞かせた。白癡兒として生き殘るよりは、あるひは斯の方が勝かも知れない、と人々は言合つた。

黄色く日中に燃る蠟燭の火を眺めながら、三吉は窗に近い壁のところに倚凭つて居た。

『叔父さん、お疲れでせう。』と正太は三吉の前に立つた。

「なにしろ、君、初の一週間は助けたい〳〵で夜も碌に眠らないでせう。後の一週間は、子供の側

に居るのもこれぎりか、なんと思つて復た起きてる……終には、半分眠りながら看護をして居ましたよ。すこし身體を横にしやうものなら、直にもう死んだやうに成つて了つて……」

「私なぞも、どうかすると豊世に子供でも有つたら、と左様思ふことも有りますが、しかし叔父さんや叔母さんの苦むところを見て居ますと、無い方が好いかとも思ひますネ。」

「正太さん、煙草を持ちませんか。有るなら一本呉れ給へな。」

正太は袂を探つた。三吉は甥が呉れた巻煙草に火を點けて、それをウマさうに燻して見た。葬式の準備やら、弔辭を言ひに來る人が有るやらで、家の内は混雜した。三吉は器械のやうに起つたり坐つたりした。

葬式の日は、親類一同、小さな棺の周圍に集つた。三吉が往時書生をして居た家の直樹も來た。斯の子息は疾に中學を卒業して、最早少壯な會社員であつた。

お俊も來た。

「叔父さん、今日は吾家の阿父さんも伺ふ筈なんですが……伺ひませんからッて、私が名代に參りました。」とお俊は三吉に向つて、父の實が謹愼中の身の上であることを、それとなく言つた。

其日は、お愛も長い紫の袴を着けて來た。斯うして東京に居る近い親類を見渡したところ、實を除いての年長者は、さしあたり森彦である。森彦は、若い人達の發達に驚くといふ眼付をして、今では學校の高等科に居るお俊や、優美な服裝をしたお愛なぞに、自分の娘を見比べた。

正太は花を買ひ集めて來た。眠るやうなお房の顔の周圍はその花で飾られた。「お雪、房ちやんの翫具は一緒に入れて遣らうぢやないか。」と三吉が言へば、「左樣です、有ると反つて思出して不可、」と正太も言つて、毬だの巾着だのを棺の隅々へ入れた。

「餘程毛絲が氣に入つたものと見えて、眼が見えなく成つても、未だ毛絲のことを言つて居ました。」とお雪は、病院に居る間、子供に買つて呉れた物を取出した。

「それも入れて遣れ。」

一切が葬られた。やがてお房は二人の妹の墓の方へ送られた。お雪は門の外へ出て、小さな棺の分らなくなる迄も見送つた。『最早お房は居ない。』斯う思つて、若葉の延びた金目垣の側に立つた時は、母らしい涙が流れて來た。お雪は家の内へ入つて、泣いた。

二

山から持つて來た三吉の仕事は、意外な反響を世間に傳へた。彼の家では、急に客が増えた。訪ねて來る友達も多かつた。しかし、主人は居るか居ないか分らないほどヒッソリとして、どうかすると表の門まで閉めたまゝにして置くことも有つた。

三吉は最早、子供なぞは奈何でも可いと言ふことの出來ない人であつた。多くの困難を排しても進ま

うとした努力が、奈何して斯樣な悲哀の種に成るだらう、と彼の眼が言ふやうに見えた。「彼處に子供が三人居るんだ。」――斯の思想に導かれて、幾度か彼の足は小さな墓の方へ向いた。家から墓地へ通ふ平坦な道路の兩側には、すでに新綠も深かつた。到る處の郊外の日あたりに、彼は自分の心によく似た憂鬱な色を見つけた。しかし彼は、寺の周圍を彷徨つて來るだけて、三つ並んだ小さな墓を見るに堪えなかつた。それを無理にも行かうとすれば、頭腦がクワッと逆上せて、急に倒れかゝりそうな激しい眩暈を感じた。いつても寺の前まで行きかけては、途中から引返した。

「父さんは薄情だ。子供の墓へ御參りもしないて……」

とお雪はよくそれを言つた。

寄ると觸ると、家ては子供の話が出た。何時の間にか三吉の心も、家のものゝ話の方へ行つた。

お雪は姪をつかまへて、夫の傍で種夫に乳を呑ませながら、

「繁ちやんの亡くなつた時は、まだ房ちやんは何事も知りませんてしたよ。ても、菊ちやんの時には最早よく解つて居ましたッけ――あの時は皆な一緒に泣きましたもの。」

「なアし。」とお延も思出したやうに、「あれを思ふと、房ちやんが眼に見えるやうだ。」

「眞實に、繁ちやんの時は皆な夢中てしたよ――私が、「御覽なさいな、繁ちやんはノヽサンに成つたんぢや有りませんか、」と言へば、房ちやんと菊ちやんとも平氣な顏して、「死んぢやつたのよ、死んぢやつたのよ、」と言ひ乍ら、棺の周圍を踊つて歩きましたよ。そして、死んだ子供の側へ行つて、噴飯すん

てすもの。」

「まあ」

「しかし、二人とも達者で居る時分には、よく繁ちやんの御墓へ連れて行つて、桑の實を摘つて遣りましたツけ。繁ちやんの桑の實だからツて敎えて置いたもんですから、行くと――繁ちやん桑の實頂戴ツて斷るんですよ。左樣しちやあ、二人て頂くんです……あの御墓の後方にある桑の樹は、背が高いてせう。だもんですから、母さん摘つて下さいツて言つちやあ……」

「オイ、何か他の話にしやうぢやないか。」

と三吉が遮つた。子供の話が出ると、必と終には三吉が斯う言出した。

「種ちやん。」お延はアヤすやうに呼んだ。

「斯の兒は又、奈何して斯樣に弱いんでせう。」とお雪は種夫の顏を熟視りながら言つた。

蹂躙られるやうな眼付をして、三吉も種夫の方を見た。其時、夫婦は顏を見合せた。「ひよツとかすると、斯の兒も?」斯の無言の恐怖が互の胸に傳はつた。三人の娘達を見た目て弱い種夫を眺めると、十分な發育さへも氣遣はれた。

急に日が強く映つて來た。すこし濕つた庭土は、熱い、黃ばんだ色を帶びた。木犀の葉影もハツキリと地にあつた。三吉は帽子を手にして、そこいらを散步して來ると言つて、出て行つた。

「左樣言へば、繁ちやんの肉體は最早腐つて了つたんてせうねえ。」

とお雪は姪に言つて、歎息した。彼女は乳呑兒を抱きながら緣側のところへ出て眺めた。日光は輝いたり、薄れたりするやうな日であつた。お延は庭へ下りた。菫の唱歌を歌ひ出した。それはお房やお菊が未だピン〳〵して居る時分に、二人して家の周圍をよく歌つて歩いたものである。お雪は、死んだ娘の聲を探すやうな眼付して、一緒に低い聲で歌つて見た。勝手口の方でも調子を合せる聲が起つた。

夕方に三吉はボンヤリ歸つて來た。

『何だか俺は氣でも狂ひそうに成つて來た。一寸磯邊まで行つて來る。』

斯う家のものに話した。其晩、急に彼は旅行を思ひ立つた。そして、そこ〳〵に仕度を始めた。山にある友人の牧野からは休みに來い〳〵と言つて寄すが、其時は唯一人で、世間を忘れるやうなところへ行きたかつた。翌朝早く、彼は磯邊の溫泉宿を指して發つて行つた。

「あれ、叔父さんは最早歸つて御出たさうな。」

とお延は入口の庭に立つて言つた。

お雪が生家の方で老祖母の死去したといふ報知は、旅にある三吉を驚かした。二三日しか彼は磯邊に逗留しなかつた。電報を受取ると直ぐ急いで家の方へ引返して來た。

「種ちやん、父さんの御歸りだよ。」とお雪も乳呑兒を抱きながら、夫を迎へた。「よく、斯様に早く歸

られましたネ。皆な貴方のことを心配しましたよ。』

『道理で、森彦さんからも見舞の電報を寄した。どうも變だと思つた――俺は又、お前の方を案じて居た。』

ホッと溜息を吐いて三吉は老祖母の話に移つた。

この老祖母の死は、今更のやうに名倉の大きな家族のことを思はせた。別に竈を持つた孫娘だけでも二人ある。まだ修業中の孫から、多勢の曾孫を加へたら、餘程の人數に成る。お雪ばかりは、その中でも、遠く嫁いて來た方であるが、斯の葬式は是非とも見送りたかつた。三吉は又、種夫に下婢を附けて一緒に遣るつもりて歸つて來た。

『さあ、今度はお前が出掛ける番だ。』と三吉が言つた。『でも、俺の仕事が濟んだ後で可かつた……買ふ物があつたら買つたら可からう。何か土産も用意して行かんけりや成るまい。』

『土産なんか要りません。一々持つて行つた日にやあ大變です。』

お雪は妹だの、姪だのを數へて見た。

久し振で生家へ歸る妻の爲にと思つて、三吉は名倉の娘達の許へ何か荷物に成らない物を見立てやうとした。旅費を用意したり、買物したりして、夫が町から戻つて來る頃は、妻は旅仕度に忙しかつた。

あわたゞしい中にも、種々なことがお雪の胸の中を往來した。長い年月の間、夫と艱難を共にした後て、彼女は自分の生家を見に行く人てある。今迄殆んど出なかつた家を出、遠く夫を離れて、兩親や姉

妹やそれから友達などゝ一緒に成りに行く人である。光る帆、動搖する波、鷗の鳴聲……可懐しいものは故郷の海ばかりでは無かつた。曾て、彼女が心を許した勉――その人を自分の妹の夫としても見に行く人である。

「叔母さん、御郷里へ御歸り？……御取込のところですネ。」

斯う言つて、翌朝正太が訪ねて來た頃は、手荷物だの、子供の着物だのが、部屋中ごちやく散亂してあつた。

「正太さん、御免なさいまし。」とお雪は帯を締めながら挨拶した。

「どれ、子供をこゝへ連れて來て見ナ。」

と三吉に言はれて、下婢はそこに寢かしてあつた種夫を抱いて來た。

「餘程氣をつけて連れて行かないと、不可ぜ。」と三吉は子供の顔を眺める。

「よく彼樣して温順しく寢て居たものだ。」と正太が言つた。

「また、君、毎日浣腸してますよ。左樣しなけりや通じが無い……玩具でも宛行つて置かうものなら、半日でも默つて寢て居ます。房ちやん達から見ると、ずつと斯の兒は弱い。」

「これで御郷里の方へでも連れていらしッたら、また壯健に成るかも知れません。」

「まあ、一夏も向に居て來るんです。」

「眞實に叔母さんも御苦勞樣だ――女の旅は容易ぢや有りませんネ。」

お雪は二人の話を聞きながら、白足袋を穿いた。「私が留守に成つたら、父さんも困るでせうから、お俊ちやんにでも來て居て頂くつもりです。」と彼女は言つた。

そのうちに仕度が出來た。お雪は夫や正太と一緒に旅立の茶を飲んだ。

「種ちやんにも、一ぱい飲まして。」

とお雪は懐をひろげて、暗い色の乳首を子供の口へ宛行つた。お延は車宿を指して走つて行つた。

甥に留守を頼んで置いて、三吉は新宿の停車場まで妻子を送りに行つた。歸つて見ると、正太は用事ありげに叔父を待受けて居た。

「正太さん、君はまだ朝飯前ぢやなかつたんですか。僕は言ふのを忘れた。」

「いゝえ。早く濟まして來ました。」

「めづらしいネ。」

「私のやうな寢坊ですけれど、めづらしく早く起きました。下宿の膳に對つて、つく〴〵今朝は考へました……なにしろ一年の餘にも成るのに、未だ斯うしてブラ〳〵して居るですからネ……」

正太は激昂するやうに笑つた。暗い前途にいくらかの明りを見つけたと言出した。其時彼は叔父の思惑を憚るといふ風であつたが、やゝ躊躇した後で、自分の行くべき道は兜町の方角より外に無い――尤

も、これは再三再四熟考した上のことで、いよ／＼相場師として立たうと決心した、と言出した。

何か冒險談でも聞くやうな眼付をして、しばらく三吉は正太の話に耳を傾けて居たが、やがて甥の顏を眺めて、

「しかし君、――實さんにせよ、森彦さんにせよ、皆な儲けやうといふ人達でせう。左樣いふ人達が揃つて居ても、容易に儲からない世の中ぢや有りませんか。兜町へ入つたからッて、必ず儲かるとは限りませんぜ。」

「實叔父さん達と、私とは、時代が違ひます。」と正太は力を入れた。

「まあ僕のやうな門外漢から見ると、商賣なり何なりに重きを置いてサ、それから儲けて出るといふのが、實際の順序かと思ふネ。名倉の阿爺を見給へ。あの人は事業をした。そして、儲けた。どうも君等のは儲けることばかり先に考へて掛つてるやうだ……だから相場なんて方に思想が向いて行くんぢや有りませんか。」

「そこです。私は相場を事業として行ります。一寸手を出して見て、直ぐまた止めて了ふなんて、そんな行き方をする位なら、初から私は關係しません……先づ店員にでも成つて、それから出發するんです……私は兜町に骨を埋める覺悟です……」

「それほどの決心があるなら、君の思ふやうに行つて見るサ。僕は君、何でも行りたか行れといふ流儀だ。」

「左様叔父さんに言つて頂くと、私も難有い――森彦叔父さんなぞは何と言ふか知らないが……」

森彦の方へ行けば森彦のやうに考へ、三吉の許へ來れば三吉のやうに考へるのが、正太の癖であつた。丁度、斯の植木屋の地内に住む女教師の夫といふは、兜町方面に明るい人である。で、正太は話を進めて叔父からその人に口を利いて貰ふやうに斯う頼んだ。

何となく不安な空氣を殘して置いて、甥は歸つて行つた。「正太さんも本氣で行る積りかナア、」と三吉は言つて見て、兎に角甥のために、頼めるだけのことは頼まうと思つた。其日の午後、三吉は庭傳ひに女教師の家の横を廻つて、澤山盆栽鉢の置並べてあるところへ出た。植木屋の庭の一部は、やがて女教師の家の庭であつた。子息の中學生は三脚椅子に腰掛けて、何かしきりと寫生して居た。

女教師の旦那といふは、官吏生活もしたことの有るらしい人で、今では兜町に隱れて、手堅くある店を勤めて居た。三吉は一ぱい物の散亂してある縁側のところへ行つて、斯の阿爺さんとも言ひたい年配の人の前に立つた。

「ア、左様ですか。宜しい。承知しました。」と女教師の旦那は、心易い調子で、三吉から種々聞取つた後で言つた。「橋本さんなら、私も御見掛申して知つて居ます。御年齢は何歳位かナ。」

「私より三つ年少です。」

「むゝ、未だ御若い。これから働き盛りといふところだ。御氣質は奈様な方ですか――そこも伺つて置きたい。」

「左様ですナア。彼様して今では浪人して居ますが、一體華美なことの好きな方です。」

「それでなくッちや不可——相場師にでも成らうといふ者は、人間が派手でなくちや駄目です。では、私の許まで簡單な履歴書をよこして下さい。宜しい。一つ心當りを問合はせて見ませう。」

女教師の旦那は引受けて呉れた。

甥のことを頼んで置いて、自分の家へ引返してから、三吉は不取敢正太へ宛て、書いた。其時は姪のお延と二人ぎりであつた。

「叔母さん達も、最早餘程行つたわなアし。」とお延は、叔父の傍へ來て、旅の人達の噂をした。

「斯様な機會でもなければ、叔母さんだつて置いて行かれるもんぢやない——今度出掛けたのは、叔母さんの爲にも好い。」

斯う三吉は姪に言ひ聞かせた。彼は、自分でも、何卒して子を失つた悲哀を忘れたいと思つた。

諸方の學校が夏休に成る頃、お俊は叔父の家を指して急いで來た。妹のお鶴も姉に隨いて來た。叔父が家の向側には、農家の垣根のところに、高く枝を垂れた百日紅の樹があつた。熱い、紅い、寂しい花は往來の方へ向つて咲いて居た。

お俊は妹と一緒に格子戸を開けて入つた。

「あら、お俊姉さま——」

とお延は飛立つやうに喜んで迎へた。お俊姉妹と聞いて、三吉も奥の方から出て來た。

「叔父さん。もつと早く御手傳ひに伺ふ筈でしたが、つい學校の方がいそがしかつたもんですから——」

とお俊が言つた。『延ちやん一人て、さぞ御困りでしたらう。』

「眞實に、鶴ちやんもよく來て下すつた。」とお延は嬉しさうに。

「今日は一緒に連れて參りました、學校が御休だもんですから。」

「へえ、鶴ちやんの方は未だ有るのかい。」と三吉が聞いた。

「この娘の學校は御休が短いんです……あの、吾家の阿父さんからも叔父さんに宜敷……」

「お俊姉さまが來て下すつたんで、眞實に私は嬉しい。」とお延はそれを繰返し言つた。

長い長い留守居の後て、お俊姉妹は漸く父の實と一緒に成れたのである。斯の二人の娘は叔父達の力と、母お倉の遣繰とて、僅かに保護されて來たやうなものであつた。三吉がはじめて家を持つ時分は、まだお俊は小學校を卒業したばかりの年頃てあつた。それが斯うして手傳ひなぞに來るやうに成つた。

お俊は幾年振かて叔父の側に一夏を送りに來た。

「鶴ちやん、お裏の方行つて見ていらつしやい。」とお俊が言つた。

「鶴ちやんも大きく成つたネ。」

「彼様に着物が短く成つちやつて——もうズン〳〵成長るんですもの。」

お鶴はキマリ悪さうにして、笑ひながら庭の方へ下りて行つた。

「俊、お前のとこの阿父さんは何してるかい。」

「まだ何事もして居ません……でも、朝なぞは、それは早いんですよ。今迄家のものにサン／＼苦勞させたから、今度は乃公が勤めるんだなんて、阿父さんが暗いうちから起きてお釜の下を焚付けて下さるんです……習慣に成つちやつて、奈何しても寢て居られないんですツて……阿母さんが起出す時分には、御味噌汁までちやんと出來てます……」

「それを思ふと、氣の毒でもあるナ。」

「阿母さん一人の時分には、家の内だつて左樣關はなかつたんですけれど、阿父さんが歸つていらしツたら、何時の間にか綺麗に片付いちまいました——妙なものねえ。」

庭の方で笑ひ叫ぶ聲がした。お鶴は滑つて轉んだ。お延は駈出して行つた。お俊も笑ひながら、妹の着物に附いた泥を落してやりに行つた。

其晩、三吉の家では、めづらしく賑かな唱歌が起つた。娘達は樂しい夏の夜を送る爲に集つた。暗い庭の方へ向いた部屋には、叔父が冷しい夜風の吹入るところを選んで、獨り横に成つて居た。叔父は別に燈火も要らないと言ふので、三人の姪の居るところだけ明るい。一つにして隅の方に置いた洋燈の光は、お鶴が白い單衣だの、お俊が薄紅い帶だのに映つた。

「鶴ちやん、叔父さんに遊戲をしてお見せなさいよ。」とお俊がすゝめた。

「何にしませう……」とお鶴は考へて「もし〳〵龜よにしませうか。」

「浦島が好いわ。」

舊い小泉の家――その頽廢と零落との中から、若草のやうに成長した娘達は、叔父に聞かせやうとして一緒に唱歌を歌ひ出した。お鶴は編み下げた髮のリボンを直して、短い着物の皺を延しながら起立つた。姉や從姉妹が歌ふ種々な唱歌につれて、斯の娘は部屋の内を踊つて遊んだ。

三吉は縁側の方から眺めながら、

「ウマい、ウマい――何か、御褒美を出さんけりや成るまいかナ。」

「鶴ちやん、もう澤山よ。」

と姉に言はれても、妹は遊戲に夢中に成つた。一つや二つては聞入れなかつた。

一晩泊つてお鶴は歸つて行つた。翌日から勝手の方では、若々しい笑聲が絶えなかつた。四五日降つたり晴れたりした後で、烈しい朝日が射して來た。暑く成らないうちに、と思つて、お俊は井戸端へ盥を持出した。お延も手桶を提げて、竹の垣を廻つた。長い袖をまくつて、洗濯物を始めたお俊の側にはお延が立つて井戸の水を汲んだ。

「あゝ、今日は朝から身體が蒟蒻のやうに成つちやつた。午蒡のやうにピンとして歩けん――」

斯様なことをお延が言つて、年長の從姉妹を笑はせた。お俊は釣瓶の水を分けて貰つて復たジャブ〳〵洗つた。

庭には物を乾す餘地が可成廣くあつた。やがてお俊は洗濯した着物を長い竿に通して、それを高く揚げた。

「うれしい!」

思はず彼女は叫んだ。お延は立つて眺めて居た。

「學校の先生が、夏休の間に考へていらッしやいといふ問題を、ひよいと思出してよ。」

斯うお俊が話し聞かせて、お延と一緒に勝手口から上つた。二人は意味もなく起つて來る微笑を交換した。互に、濡れた、あらはな手を拭いた。

空は青い海のやうに光つた。イヤといふほど照りつけて來た日光は、白い干物に反射して、家の内に滿ち溢れた。午後から、娘達は思ひ〳〵の場所を選んで足を投出したり、柱に倚凭つたりした。三吉は、南の窓に近く、ハンモックを釣つた。そこへ蒸されるやうな體軀を萎せた。熱い地の息と、冷しい風とが妙に混り合つて、窓を通して入つて來る。單調な蟬の歌は何時の間にか彼の耳を疲れさせた。

憂鬱な眼付をして、三吉が晝寢から覺めた時は、虻にでも刺されたらしい疼痛を感じた。お俊は髪に塗る油を持つて來て、それを叔父に勸めた。

「延ちやん――まあ、來て御覧なさいよ。」とお俊が笑ひながら呼んだ。「三吉叔父さんは斯様に白髪が

生えてよ。』

お延は勝手の方から手を振つてやつて來た。

『オイ、オイ。』と三吉は自分の子供にても戯れるやうに言つた。『左樣お前達のやうに馬鹿にしちや困るぜ……これても叔父さんは金鵄勳章の積りだ。』

『あんな負惜みを言つて。』とお延は譯も無しに笑つた。

『ねえ、延ちやん、有れば仕方が無いわ。』と言つてお俊は叔父の傍へ寄つて、『叔父さん、ジッとしてゐらッしやい――拔いて進げませうネ。前の方はそんなても無いけれど、鬢のところなぞは、一ぱい……こりや大變だ……容易に取盡せやしないわ。』

お俊は叔父の髮に觸れて、一本々々擇り分けた。凋落を思はせるやうな、白い、光つたやつが、どうかすると黑い毛と一緒に成つて拔けて來た。

『叔父さん、奈何して斯樣に髮がこわれるんてせう。』

勝手の方から來たお俊は、叔父の傍へ寄つて、親しげな調子て言つた。斯の姪は三吉を賴りにするといふ風て、子が親に言ふやうなことまて話して聞かせやうとした。

『どうして夏は斯樣に――』

と復たお俊は言つて、うしろむきに身を斜にして見せた。彼女は、乾きくづれた束髪の根を掴んで、それを叔父に動かして見せたりなぞした。

庭の洗濯物も乾いた。二人の姪は屋外に出て着物や襦袢を取込みながら、互に唱歌を歌つた。斯の半分夢中て合唱して居るやうな、何となく生氣のある、浮々とした聲は、叔父の心を誘つた。三吉は縁側のところに立つて、乾いた着物を疊んで居る娘達の無心な動作を眺めた。そして、お雪や正太の細君なぞに比べると、もつとずつと嫩い芽が、最早彼の周圍に頭を持ち上げて來たことを、めづらしく思つた。

蘇生るやうな空氣が軒へ通つて來た。夕方から三吉は姪を集めて、遠く生家の方に居るお雪の噂を始めた。表の方の農家ても往來へ涼臺を持出して、夏の夜風を樂しむらしかつた。ジャン拳て負けて氷を買ひに行つたお延は、やがて戻つて來た。お俊はコップだの、砂糖の壺だのを運んだ。

「皆なに御馳走するかナ。」

と三吉は、赤い葡萄酒の殘りを搜出して、それを碎いた氷にそゝいだ。

お俊の娘らしい話は、手紙のことに移つて行つた。切手を故意に倒まに貼るのは敵意をあらはすとか、すこし横に貼るのは戀を意味するとか、そんなことを言出す。敵意のあるものなら、手紙を遣取するのも少し變てはないか、斯う叔父が混返したのが始まりて、お俊は負けずに言ひ爭つた。

「叔父さんなんか、左様いふことはよく知つてゐらッしやるくせに。」

と輕く笑つて、それからお俊は彼女が學校生活を叔父に語り始めた。三吉は時々、手にしたコップを夜の燈火に透かして見ながら、『左樣かナア』といふ眼付をして、耳を傾けて居た。

『私は涅槃といふ言葉が大好よ。』とお俊は冷さうに氷を嚙んで言つた。

『あら、いやだ。』とお延はコップの中を掻廻して、『それぢや、お俊姉さまのことを、これから涅槃と……』

『涅槃ッて、何だか音からして好いわ。』

斯樣なことからお俊の話は解けて、よく學校の裏手にある墓地へ遊びに行くことを言出した。そこの古い石に腰掛け、落葉の燒けるにほひを嗅ぎながら、讀書するのが彼女の樂みであると言出した。

『學校の先生が――小泉さん、貴方は誰にも惡まれないが、そのかはり人に愛される性質で反つて不可……貴方は餘程シッカリして居ないといけません、その爲に苦勞することが有るからッて……』

斯う言ひかけて、お俊は癖のやうに着物の襟を掻合せて、

『叔父さんやなんかのことは、自分の身に近い人ですから解りませんがネ……私の知つてる人で、一人も心から敬服するといふ人は無いのよ、あの人はエライ人だとか、何だとか言はれる人でも、私は直にその人の裏面を見ちやつてよ――妙に、私には解るの――解るやうに成つて來るの。』

お俊は叔父と從姉妹の顏を見比べた。

『私は二十五に成つたら、叔父さんに自分の通過して來たことを話しませう。よく小說にいろ〳〵な

ことが書いてあるけれど、自分の一生を考へると、彼様なことは何でも無いわ。私の遭遇つて來たことは、小説よりも、もつと〳〵種々なことが有る。」

「そんなら、今こゝで承りませう。」と三吉は半分串談のやうに。

「いゝえ。」

「二十五に成つて話すも、今話すも、同じことぢやないか。」

「もつと心が動かないやうに成つたら、其時は話します……今はまだ、心が動いてゝ駄目よ。」

しばらくお俊の話は途切れた。暗い、靜かな往來の方では、農家の人達が團扇をバタ〳〵言はせる音がした。

「しかし、叔父さんが私を御覽なすッたら、さぞ馬鹿なことを言つてると御思ひなさるでせうねえ。」

「どういたして。」

「必と、左樣よ。」

「しかし。」と三吉は姪の方を眺めながら、『お前が其樣なオシヤベリをする人だとは、今迄思はなかつた——今夜、初めて知つた。」

「私はオシヤベリよ——ねえ、延ちやん。」と言つて、お俊はすこし羞ぢらつた顔を袖で掩ふた。

兩國の花火のあるといふ前の日は、森彦からも葉書が來て、お俊やお延は川開に行くことを樂みに暮した。

翌日の新聞は、隅田川の滿潮と、川開の延期とを傳へた。水嵩が增して危いといふ記事は、折角翹望けた娘達をガッカリさせた。左樣でなくても、朝から冷しい夏の雨が降つて、出掛けられそうな空模樣には見えなかつた。

「延は?」と三吉がお俊に聞いた。

「裏の叔母さんのとこてせう。」

女教師の通ふ小學校も休に成つてからは、「叔母さん、叔母さん」と言つて、毎日のやうにお延は遊びに行つた。

庭の草木も濡れて復活つた。毎日々々の暑て、柔軟い鳳仙花なぞは竹の垣のもとに長い葉を垂れて、紅く咲いた花も死んだやうに成つて居たが、これも雨が來て力を得た。三吉は緣側に出て、ションボリと立つて居た。

「叔父さん――何故私が墓場が好きてすか、それを御話しませうか。」

斯うお俊が言出した。三吉は部屋へ戻つて、心地の好い雨を眺めながら、姪の話を聞いた。

お俊の言はうとすることは、彼女の若い、悲しい生涯を思はせるやうなものてあつた。十六の年に親しい學友に死別れて、それから墓畔のさまよひを樂むやうになつたことや、ある時は是世をあまり淺猿

しく思つて、死といふことまで考へたが、母と妹のある爲に思ひ直したこと、自分は苦勞といふものに逢ひに是世へ生れて來たのであらう、といふやうなことなぞが、斯の娘の口からきれ〴〵に出て來た。

「私は、奈樣なことがあつても、自分の性質だけは曲げたくないと思ひますわ……でも、ヒネクレて了やしないか、とそればかり心配して居るんですけれど……」

と言つて、やゝしばらく沈思した後で、

「しかし、私が今迄遭遇つて來たことの中で、唯一つだけ叔父さんに話しませうか。」

斯樣ことを言出した。

お俊は、附添して、母より外に斯の事件を知るものがないと言つた。その口振で、三吉には、親戚の間に隱れた男女の關係といふことだけ讀めた。誰が斯の娘に言ひ寄らうとしたか、そんな心當りは少しも無かつた。

「大抵叔父さんには解りましたらうネ。」

「解らない。」三吉は首を振つた。「何か又、お前が誤解したんだらう——雲を烟と間違へたんぢやないか。」

お俊の眼からは涙が流れて來た。彼女は手で顏を掩ふて、自分の生涯を思ひ出しては半ば啜泣くといふ風であつた。一寸緣側へ出て見て、復た叔父の方へ來た。

「叔父さんは……正太兄さんを奈何いふ人だとお思ひなすつて……兄さんは叔父さんが信じてゐらッ

しやるやうな人てせうか。」

三吉は姪の顔を視熟つた。「——お前の言ふのは正太さんのことかい。」

「私が二十五に成つたら、叔父さんに御話しませうつて言ひましたらう。それよ。その一つよ。豊世姉さんが斯様な話を御聞きなすつたら、奈様な顔を成さるてせう……可厭だ、可厭だ……私は一生かゝて憎んでも足りない……」

「あゝ、なんだか變な氣分に成つて來た。何だつて、其様な可厭な話をするんだ。」

「だつて、叔父さんが聲つて聞くんですもの。」

三吉は「左樣かナア」といふ眼付をして、默つて了つた。

「ね、もつと他の好い話をしませう。」

とお俊は微笑んで見せて、窓のある部屋の方へ立つて行つた。そこから手紙を持つて來た。

「多分叔父さんは斯の手紙を書いた人を御存じてせう。」

姪が出して來て見せたものは、手紙と言つても、純白な紙の片にペンて細く書いた僅かな奥床しい文句てあつた。「君のやうに香の高い人に遭遇つたことは無い、これから君のことを白い百合の花と言はう、」唯それだけの意味が認めてある。サツパリしたものだ。別に名前も書いて無いが、直樹の手だ。

「今迄も兄さんてしたから、だから眞實の兄さんになつて頂いたの——それておしまひ。」とお俊は言葉を添えた。

斯の「それておしまひ」が三吉を笑はせた。

正太でも、直樹でも娘達は同じやうに「兄さんと」呼んで居た。一方は從兄弟。一方は三吉が恩人の子息といふだけで、親戚同様にして居たが、血統の關係は無かつた。區別する爲に正太兄さんとか、直樹兄さんとか言つた。三吉も、其時に成つて、いろ〳〵知らなかつたことを知つた。

三

實――お俊の父は、三吉とお雪とが夫婦に成つてから、始めて弟の家に來て見た。舊い小泉を相續した斯の一番年長の兄が、暗い悲酸な月日を送つたのも、久しいものである。彼が境涯の變り果てたことは、同じ地方の親しい『旦那衆』を見ても知れる。一緒に種々な事業を經營した直樹の父は、彼の留守中に亡くなつた。意氣相投じた達雄は、最早拓落失路の人と成つた。

とは言へ、留守中彼の妻子が心配したほど、實は衰へて見えなかつた。彼は兄弟中で一番背の高い人で、體格の強壯なことは父の忠寛に似て居た。小泉の家に傳はつて、遠い祖先の慾望を見せるやうな、特色のある大きな鼻の形は、彼の容貌にもよく表れて居た。顔の色などはまだ艶々として居た。

斯の兄が三吉の部屋へ通つた。丁度、娘達は家に居なかつた。三吉は長火鉢の置いてあるところへ行

つて、自分で茶を入れた。それを兄の前へ持つて來た。

一生の身の蹉跌から、實は弟達に逢ふことを遠慮するやうな人である。未だ森彦には一度も逢はずに居る。三吉に逢ふのは漸く二度目である。

「俊は？」と實が自分の娘のことを聞いた。

「一寸新宿まで——延と二人で買物に行きました。」

「御留守居がウマク出來るかナ。」

「えゝ、好く遣つて呉れます。今日は二人に、浴衣を一枚ツヽ、奢つてやることにしました。」

「それは大悦びだらう。お前のとこでも、子が幾人も死んで、隨分不幸つゞきだつたナ。しかし世の中のことは、何でも深く考へては不可。淡泊に限る。乃公はその主義サ——家内のことでも——子供のことでも——自分のことでも。」

斯樣な調子で、あだかも繁華な街衢を歩く人が、右に往き、左に往きして、他を避けやうとするやうに、實は成るべく弟に觸るまい〱として居た。彼は弟の手を執つて過去の辛酸を語らうともしなければ、留守中何程の迷惑を掛けたらうと、深くその事を詫びるでもなかつた。唯、舊家の家長が目下の者に對するやうな風で、冷飯の三吉と向ひ合つて居た。

金の話は餘計に兄の矜持を傷けた。病身な宗藏——森彦の直ぐ下の弟で、三吉などが『宗さん、宗さん』と言つて居る兄——斯の人は今だに他所へ預けられて居て、實が世話すべき家族の一人ではあるが、

その方へも三吉には金を出させて居た。種々餘分な工面もさせた上に、復た兄は金策を命じに來た。
『實はNさんのところから、四十圓ばかり借りた。いづれ三吉の方で返しますから、と言つて、時に借りて來た。これは是非お前に造つて貰はにや成らん。』
當惑顏な弟が何か言はうとしたのを實は遮つた。彼は細く書いた物を取出した。これだけの家具を四十圓で引取ると思つて呉れ、と言出した。それには、簞笥、膳、敷物、卷煙草入、其他德利、盃洗などとしてあつた。
「賴む」
と兄は無理にも承諾させて、そこ／＼に弟の家を出た。
『留守中は御苦勞だつたとか、何とか……それでも一言ぐらゐ挨拶が有りさうなものだナア。』
斯う三吉は、獨語のやうに言つて、嘆息した。尤も、兄が言へないことは、三吉も承知して居た。それが言へないばかりに、斯うしてお俊を手傳ひに寄してある、とも思つて見た。
お俊はお延と一緒に、風呂敷包を小脇に擁へながら歸つた。包の中には、ある呉服屋から求めて來た反物が有つた。
「叔父さんに買つて頂いたのを、お目に懸けませう。」

と娘達は言ひ合つて、流行の浴衣地を叔父の前に置いた。目うつりのする中から、思ひ〳〵に見立てゝ來た涼しさうな中形を、叔父に褒めて貰ふ積りであつた。

「何だつて、斯樣な華美なものを買つて來るんだね。」

と叔父は氣に入らなかつた。

「豊世姉さんだつて隨分華美なものを着るわねえ。」

斯うお俊が從姉妹に言つた。三吉はそれを聞いて、何故小泉の家が今日のやうに貧乏に成つたらうとか、何故娘達がそれを思はないだらうとか、何故舊い足袋を穿いて居ても流行を競ふやうな量見に成るだらうとか、種々なヤカマしいことを言出した。

「でも、斯ういふもので無ければ、私に似合はないですもの。」

とお俊は萎れた。

やがて三吉は機嫌を直して、お俊の父が金策の爲に訪ねて來たことを話し聞かせた。其時お俊は自分の家の方の噂をした。丁度彼女が歸つて行つた日は、公賣處分の當日であつたこと、ある知人に頼んで必要な家具を買戻して貰つたこと――執達吏――高利貸――古道具屋――其他生活のみじめさを思はせるやうな言葉が、斯の娘の口から出た。

三吉は家の內をあちこちと歩いた。最後の波に洗はれて行く小泉の家が彼の眼に浮んだ。破產又た破產。幾度も同じ事を繰返して、其度に實の集めた道具は言ふに及ばず、母が丹精して田舍て織つた形

見の衣類まで、次第に人手に渡つて了つた。實の家では、長い差押の仕末をつけた上で、もつと屋賃の廉いところへ引移る都合である。

話が兩親のことに移ると、お俊は眼の緣を紅くした。彼女は涙なしに語れなかつた。

「――母親さんには、どうしても詫びることが出來ない。母親さん、御免なさいよ」と口にはあつても……首は下げても……どうしても言葉には出て來ない。」

斯樣なことまで叔父に打開けて、濟まないとは思ひつゝ、耳を塞いで、試驗の仕度したことなどをも語つた。話せば話すほど、お俊は涙が流れて來た。そして、娘らしい、涙に濡れた眼で、數奇な運命を訴へるやうに、叔父の顔を見た。

其晩、遲くなつて、お俊は獨りで屋外へ出で行つた。

「叔父さん、お俊姉さまは？」とお延が聞いた。

「葉書でも出しに行つたんだらう。」

と三吉が答へて居ると、お俊はブラリと戻つて來て、表の戸を閉めて入つた。

「お俊姉さまは屋外で泣いてた。」

「あら、泣きやしないわ。」

「叔父さんは？」

「今迄縁側に腰掛けてゐらしッてよ。」

斯う娘達は言ひ合つて、洋燈のもとで針仕事をひろげて居た。翌る晩のことである。

お俊はお延の着物を縫つて居た。お延は又、時々從姉妹の方を眺めて、自分の着物がいくらかづゝ形を成して行くことを嘻しさうにして居た。來る花火の晩には、斯の新しい浴衣を着て、涼しい大川の方へ行つて遊ばう、其時は一緒に森彦の旅舍へ寄らう、それから直樹の家を訪ねやう――それからそれへと、娘達は樂みにして話した。

曇つた空ながら、月の光は地に滿ちて居た。三吉は養鷄所の横手から、雜木林の間を通つて、ずつと岡の下の方までも歩きに行つて來た。明るいやうで暗い樹木の影は、郊外の道路にもあつた。植木屋の庭にもあつた。自分の家の縁側の外にもあつた。歸つて來て、復た眺めて居ると、姪達はそろ〳〵寢る仕度を始めた。

『叔父さん、お先へお休み。』

と言ひに來て、二人とも蚊帳の内へ入つた。叔父は獨りで起きて居た。

樂しい夜の空氣はすべての物を包んだ。何もかも沈まり返つて居た。樹木ですら葉を垂れて眠るやうに見えた。妙に、彼は眠られなかつた。一旦蚊帳の内へ入つて見たが、復た這出した。夜中過と思はれる頃まで、一枚ばかり開けた戸に倚凭つて居た。

短い夏の夜が明けると、最早立秋といふ日が來た。生家に居るお雪からは手紙で、酷しい暑さの見舞を書いて寄した。別に二人の姪へ宛てゝ、留守中のことは呉々も宜敷頼む、と認めてあつた。

其日、お俊はすこし心地が惡いと言つて、風通しの好い處へ横に成つた。物も敷かずに枕をして、心臓のあたりを氷で冷した。お延は、これも鉢巻して、頭痛を苦にして居た。

三吉は子供でも可傷るやうに、

「叔父さんは、病人が有ると心配で仕様が無い。」

「御免なさいよ。」

とお俊は半ば身を起して、詫びるやうに言つた。

死んだ子供の墓の方へは、未だ三吉は行く氣に成らないやうな心の狀態にあつた。時々彼は空な懷をひろげて、斯の世に居ない自分の娘を捜した。ある時は、親まで一緒に奈何か成つて了ふやうな氣がして居た。彼の虛しい手の中には、何物も抱締めて見るやうなものが無かつた。

朝に晩に傍へ來る娘達が、もし自分の眞實の子供でゝもあつたら……斯の考へはすこし彼を呆れさせた。死んだお房のかはりに抱くとしては、お俊なぞは大き過ぎたからである。

近所の人達は屋外へ出た。互に家の周圍へ水を撒いた。叔父が洗足で庭へ下りた頃は、お俊も氣分が好く成つたと言つて、臺所の方へ行つて働いた。夕飯過に、三吉は町から大きな水瓜を買つて戻つて來た。思ひの外お俊も元氣なので、叔父は安心して、勉めて呉れる娘達を慰めやうとした。燈火を遠くし

た縁側のところには、お俊やお延が團扇を持つて來て、叔父と一緒に水瓜を食ひ乍ら、涼んだ。

女教師の家へも水瓜を分けて持つて行つたお延は、やがて庭傳ひに歸つて來た。

『裏の叔父さんがなし、面白いことを言つたデ――「あゝ、あゝ、峯公（女教師の子息）も獨りて富士登山が出來るやうに成つたか、して見ると私が年の寄るのも……」奈何だとか、斯樣だとか――笑つて了つたに。』

お延の無邪氣な調子を聞くと、お俊は笑はずに居られなかつた。

何時の間にか、月の光が、庭先まで射し込んで來て居た。お延は早く休みたいと言つて、獨りて蚊帳の內へ入つた。夜の景色が好さそうなので、三吉は前の晩と同じやうに歩きに出た。お俊も叔父に隨いて行つた。

朝の膳の用意が出來た。お延は臺所から熱いうつしたての飯櫃を運んだ。お俊は自分の手て鹽漬にした茄子を切つて、それを各自の小皿につけて持つて來た。

三吉は直ぐ箸を執らなかつた。例になく、彼は自分で自分を責めるやうなことを言出した。『實に、自分は馬鹿らしい性質だ。』とか、何だとか、種々なことを言つた。

『これから叔父さんも、もつと奈樣かいふ人間に成ります。』

斯う三吉はすこし改まつた調子で言つて、二人の姪の前に頭を下げた。

お俊やお延は笑つた。そして、叔父の方へ向いて、意味もなく御辭儀をした。

漸く三吉は箸を執り上げた。ウマさうな味噌汁の香を嗅いだ。其朝は、よく可笑しな顔付をして姪達を笑はせる平素の叔父とは別の人のやうに成つた。死んだ子供等のことを思へば、斯うして飯を食ふのも難有いことの——實の家族が今日あるは、主に森彦の力である、お俊などはそれを忘れては成らないことの——朝飯の濟んだ後に成つても、まだ叔父は娘達に説き聞かせた。

斯ういふ尤もらしいことを言つて居る中にも、三吉が狼狽てた容子は隱せなかつた。彼は窓の方へ行つて、往來に遊んで居る子供等の友達、餌を獵り歩く農家の鷄などを眺めながら、前の晩のことを思つて見た。草木も青白く煙るやうな夜であつた。お俊を連れて、養鷄所の横手から彼の好きな雑木林の道へ出た。月光を浴びながら、それを樂んで歩いて居ると、何處で鳴くともなく幽かな蟲の歌が聞えた。その道は、お房やお菊が生きて居る時分に、よく随いて來て、一緒に花を摘つたり、手を引いたりして歩いたところである。不思議な力は、不圖、姪の手を執らせた。それを彼は奈何することも出來なかつた。『斯様な風にして歩いちや可笑しいだらうか、』と彼が串談のやうに言ふと、お俊は何處までも賴りにするといふ風で、『叔父さんのことですもの、』と平素の調子で答へた。斯の『斯様な風にして歩いちや可笑しいだらうか。』が、彼を呆れさせた。

『馬鹿！』

三吉は窓のところに立つて、自分で自分の爲たことを恥ぢたり怒つたりした。

お俊やお延は中の部屋に机を持出した。『お雪叔母さん』のところへ手紙を書くと言つて、互に紙を展げた。別に、お俊は男や女の友達へ宛てゝ送るつもりで、自分で書いた繪葉書を取出した。それをお延に見せた。

お延はその繪葉書を机の上に並べて見て、

「お俊姉さま、私にも一枚書いてお呉んなんしよや。」

と從姉妹の技術を羨むやうに言つた。

お俊に繪畫を學ぶことを勸めたのは、もと三吉の發議であつた。彼女の母親は、貧しい中にも娘の行末を樂みにして、畫の先生へ通ふことを廢めさせなかつた。幾年か彼女は花鳥の模倣を習つた。三吉の家に來てから、叔父は種々な繪畫の話をして聞かせて、直接に自然を見ることを教へやうとした。次第に叔父は左樣いふ話をしなく成つた。

庭の垣根のところには、鳳仙花が長く咲いて居た。やがてお俊はそれを折取つて來た。萎れた花の形は、美しい模樣のやうに葉書の裏へ寫された。その色彩がお延の眼を喜ばせた。

「叔父さん、見ちや厭よ。」

とお俊は、傍へ來た叔父の方を見て、自分の書いた繪葉書を兩手で掩ふた。

學校の友達の噂から、復たお俊の話は引出されて行つた。彼女は日頃崇拜する教師のことを叔父に話

し聞かせた。學校の先生に言はせると、是世には十の理想がある、それを合せると一つの大きな理想に成る——七つまでは彼女も考へたが、後の三つはどうしても未だ思ひ付かない、この夏休はそれで頭腦を惱して居る。斯樣なことを言出した。お俊は附添して、丁度先生は「吾家の祖父さん」のやうな人だと言つた。先生と忠寛とは大分違ふやうだ、と三吉が相手に成つたのが始まりで、お俊は負けずに言ひ爭つた。

「へえ、お前達はそんな夢を見てるのかい。」

と叔父は言はうとしたが、それを口には出さなかつた。彼は幅の廣い肩を動つて、默つて自分の部屋の方へ行つて了つた。

夜が來た。

屋外は晝間のやうに明るい。燐のやうな光に誘はれて、復た三吉は雜木林の方まで歩きに行きたく成つた。お俊は叔父に連れられて行つた。

やがて、三吉達が散歩から戻つて來た頃は、最早遲かつた。表の農家では戸を閉めて了つた。往來には、大きな犬が幾つも寢そべつて頭を持上げたり、耳を立てたりして居た。中には月あかりの中を馳出して行くのもあつた。三吉は姪を庇護ふやうにして、その側を盜むやうに通つた。表の門から入つて、

金目垣と窓との狹い間を庭の方へ拔けると、裏の女教師の家でも寢た。三吉の家の方へ向いた暗い窓は、眼のやうに閉ぢられて居た。

深い靜かな晩だ。射し入る月の光は、縁側のところへ腰掛けた三吉の膝を照らした。お俊は、從姉妹の側へ寢に行つたが、眼が冴えて了つて眠られないと言つて、白い寢衣のまゝで復た叔父の側へ來た。

急に犬の群が竹の垣を潜つて、庭の中へ突進して來た。互に噛合つたり、尻尾を振つたりして、植木の周圍を馳けずり廻つて戯れた。ふと、往來の方で仲間の吠える聲が起つた。それを聞いて、一匹の犬が馳出して行つた。他の犬も後を追つて、復た一緒に馳出して行つた。互に鳴き合ふ聲が夜更けた空に聞えた。

『眞實に――寢て了ふのは惜いやうな晩ねえ。』

と言つて、考へ沈んだ姪の側には、叔父が腰掛けて、犬の鳴聲を聞いて居た。叔父は犬のやうに震へた。

『まだ叔父さんは起きてゐらしッて?』とそのうちにお俊が尋ねた。

『アヽ叔父さんに關はずサッサと休んでお呉れ。』

と言はれて、お俊は從姉妹の方へ行つた。三吉は獨りで自分の身體の戰慄を見て居た。

翌朝になると、復た三吉は同じやうなことを二人の姪の前で言つた。『叔父さんが心を入替えます、』とか、『俺も斯樣な人間では無かつた積りだ、』とか、言つた。

『奈何したと言ふんだ――一體、俺は奈何したと言ふんだ。』

と彼は自分で自分に言つて見て、前の晩もお俊と一緒に歩いたことを悔ゐた。容易に三吉が精神の動搖は靜まらなかつた。彼は井戸端へ出て、冷い水の中へ手足を突浸したり、乾いた髪を濕したりして來た。

『オイ、叔父さんの背中を眼が覺めるほど打つて見てお呉れ。』

斯う言つたので、娘達は笑ひながら叔父の背後へ廻つた。

『奈何に強くても宜う御座んすか。』とお俊が聞いた。

『可いとも。お前達の力なら……背中の骨が折れても關はない。』

『後で怒られても困る。』とお延は笑つた。

叔父は娘達に吩咐けて、思ふさま身體を打たせた。

日延に成つた兩國の川開があるといふ日に當つた。お俊やお延は、森彥の旅舍へも寄ると言つて、午後の三時頃から出掛る仕度をした。そこへお俊の母お倉が訪ねて來た。お倉は、夫が賴んで置いた金を受取りに來たのであつた。

『母親さん、御免なさいよ――着物を着ちまひますから。』

とお俊は母に挨拶した。お延も從姉妹の側で新しい浴衣に着更へた。

お倉は三吉の前に坐つて、娘の方を眺めながら、

『三吉叔父さんに好いのを買つて頂いたネ。叔母さんの御留守居がよく出來るか知らん、左樣言つて

毎日來て噂をしてる……學校の御休の間に、叔父さんの側に居て、種々教えて頂くが好い……」

三吉は嫂と姪の顏を見比べた。

『眞實に、御役にも立ちますまい。默つて見て居ないで、ズン〳〵世話を燒いて下さい。』

『母親さん、鶴ちやんは奈何して居て？』とお俊が立つて身仕度をしながら尋ねた。

『アヽ、鶴ちやんも毎日勉强してる。』

斯うお倉は答へながら、娘の方へ行つて、帶を締る手傳ひをしたり、臺所の方まで見廻りに行つたりした。

『叔父さん、リボンを見てお呉んなんしよ。』とお延が三吉の傍へ來た。

『私のも、似合ひまして？』とお俊も來て、うしろむきに身を斜にして見せた。

三吉は約束の金を嫂の前に置いた。お倉はそれを受取つて、帶の間へ仕舞ひながら、宗藏の世話料をも頼むといふことや、正太がちよい〳〵遊ぶといふことや、それから自分の夫が今度こそは好く行つて貰はなければ成らないといふことなどを話し込んだ。

娘達は最早花火の音が聞えるといふ眼付をした。そこまでお倉を送つて行かう、と催促した。

『母親さんは煙草を忘れて來た。一寸叔父さんに一服頂いて。』

お倉は弟が出した卷煙草に火を點けて、橋本の姉も奈何して居るかとか、大番頭の嘉助も死んだそうだとか、豊世を早く呼寄せるやうにしなければ、正太の爲にも成らないとか、それからそれへと

話した。

「母親さん、早く行きませうよ。」とお俊はジレッタさうに。

「アヽ、今行く。」と言つて、お倉は弟の方を見て、「今度といふ今度は、それでも吾夫も懲りましたよ。私がツケ〳〵言ふもんですからネ、「お前はイケナい奴に成つた、今迄はもつと優しい奴だと思つて居た」なんて、吾夫が左様言つて笑ふんですよ‥‥でも、貴方、今迄のやうな大きな量見で居られると、失敗するのは眼に見えて居ます。何の位私達が苦勞をしたか分りませんからネ——眞實に、三吉さんなぞは堅くて好い。」

三吉は額へ手を當てた。

間もなくお倉は、種々と娘の世話を燒きながら、連立つて出て行つた。

兩國橋邊の混雜を思はせるやうな夕方が來た。三吉は燈火も點けずに、薄暗い部屋の内に震へながら坐つて居た。何となく可恐しいところへ引摺込まれて行くやうな、自分の位置を考へた。今のうちに踏留まらなければ成らない、と思つた。しばらく忘れて居た妻のことも彼の胸に浮んだ。次第に家の内は暗く成つた。遠く花火の上る音がした。

「殘暑きびしく候ところ、御地皆々さまには御機嫌よく御暮し遊ばされ候由、目出度ぞんじあげまゐ

らせ候。ばゞ死去の節は、早速雪子御遣はし下され、ありがたく存じ候。御蔭さまにて法事も無事に相濟み、その節は多勢の客などいたし申し候。それもこれも亡き親の御蔭と存じまゐらせ候。さて雪子あまり長く引留め申し、おん許樣には何角御不自由のことゝ御察し申しあげ候。俊子樣、延子樣にも御苦勞相掛け、まことに御氣の毒とは存じ候へども、何分にも斯のお暑さ、それに種夫さん同道とありては歸りの旅も案じられ候につき、今すこし冷しく相成り候まで當地に逗留いたさせたく、私より御願ひ申上げまゐらせ候。何卒〱惡しからず御思召下されたく候――」

三吉が名倉の母から手紙を受取つた頃は、何となく空氣も濕つて秋めいて來た。お俊は叔父の側へ來て、餘計に狎々しい言葉を掛けた。

「叔父さん、今何事も用が有りませんが、肩が凝るなら、按摩さんでもして進げませうか。」

「澤山。」

「すこし白髪を取つて進げませうネ。」

「澤山。」

「叔父さんは今日は奈樣かなすつて?」

「奈樣もしない――叔父さんを關はずに置いてお呉れ――お前達はお前達の爲ることを爲てお呉れ――
――。」

例になく厭ひ避けるやうな調子で言つて、叔父が机に對つて居たので、お俊はまた何か機嫌を損ねた

かと思つた。手持不沙汰に、勝手の方へ引返して行つた。

『お俊姉様——兄様が御出たぞなし。』

とお延が呼んだ。

直樹が來た。相變らず溫厚で、勤勉なのは、斯の少壯な會社員だ。シッカリとした老祖母が附いて居るだけに、親讓りの夏羽織などを着て、一寸訪ねて來るにも服裝を崩さなかつた。三吉のことを『兄さん、兄さん』と呼んで居る斯の青年には、人懷こいところが有つた。直樹は年寄にも子供にも好かれた。叔父は娘達を直樹と遊ばせやうとして居た。斯うして郊外に住む三吉は、自分で直樹の相手に成つて、斯の弟のやうに思ふ青年の口から、下町の變遷を聞かうと思ふばかりでは無かつた。彼は二人の姪を直樹の傍へ呼んだ。黑い土藏の反射、紺の暖簾の香——左様いふものゝ漂ふ町々の空氣が奈何に改まりつゝあるか、高い甍を並べた商家の繁昌が奈何に昔の夢と變りつゝあるか、曾て三吉が直樹の家に書生をして居る時分には、名高い大店の御隱居と唄はれて、一代の榮華を極め盡したやうな婦人も、奈何に寄る年波と共に、下町の空氣の中へ沈みつゝあるか——斯ういふ話を娘達にも聞かせた。

『俊、大屋さんの庭の方へ、直樹さんを御案內したら可からう。』

と叔父に言はれて、お俊は花の絕えない盆栽棚の方へ、植木好な直樹を誘つた。お延も一緒に隨いて行つた。

若々しい笑聲が庭の樹木の間から起つた。三吉は緣側に出て聞いた。無垢な心で直樹や娘達の遊んで

居る方を、樂しさうに眺めた。彼は、自分の羞恥と悲哀とを忘れやうとして居た。

やがて娘達は、庭の鳳仙花を摘つて、縁側のところへ戻つて來た。白いハンケチをひろげて、花や葉の液を染めて遊んだ。鳳仙花は水分が多くて成功しなかつた。直樹は軒の釣葱の葉を摘つて與へた。お俊は鋏の尻でトン／＼叩いた。お延の新しいハンケチの上には、葱の葉の形が鮮明に印された。

暮れてから直樹は歸つて行つた。三吉は二人の姪に吩咐けて、新宿近くまで送らせた。

『俊は？』

ある日の夕方、三吉は臺所の方へ行つて尋ねた。お延は茄子の皮を剝いて居た。

『姉樣かなし、未だ歸つて來ないぞなし。』とお延は流許に腰掛けながら答へた。

一寸お俊は自分の家まで行つて來ると言つて、出た。歸りが遲かつた。

『何とかお前に言つたかい。』と叔父が心配さうに聞いた。

お延は首を振つて、復た庖丁を執り上げた。茄子の皮は俎板の上へ落ちた。

待つても／＼お俊は歸らなかつた。夕飯が濟んで、燈火が點いても歸らなかつた。八時、九時に成つても、未だ歸らなかつた。

『必と今夜は泊つて來る積りだ。』

と言つて見て、三吉は表の門を閉めに行つた。掛金だけは掛けずに置いた。十時過ぎまで待つた。到頭お俊は歸らなかつた。

次第に三吉は恐怖を抱くやうに成つた。いつもお俊が風呂敷包の置いてあるところへ行つて見ると、着物だの、書籍だのは、其儘に成つて居るらしい。三吉はすこし安心した。自分の部屋へ戻つた。

「俊は最早歸つて來ないんぢやないか。」

夜が更けるに隨つて、斯様なことまで考へるやうに成つた。

壁には、お房の引延した寫眞が額にして掛けてある。洋燈の光がその玻璃に映つた。三吉は火の影を熟と視つめて、何をお俊が母親に語りつゝあるか、と想像して見た。近づいて見れば、叔父の三吉も、從兄弟の正太と左様大した變りが無い‥‥低い鋭い聲で、斯う語り聞かせて居るだらうか。それは唯考へて見たばかりでも、暗い、悲しい、遣瀨ない心を三吉に起させた。

「俊はまた、何を間違へたんだ。俺は其様な積りぢや無いんだ。」

臆病な三吉は、斯うすべてを串談のやうにして、笑はうと試みた。「叔父さん、叔父さん」頼みにして來て、足の裏を踏んで呉れるとか、耳の垢を取つて呉れるとか、その心易だてを彼は奈何することも出來なかつたのである。彼は、自分も亦た恥づべき人間の一人であることを、つく／＼知つた。「結婚しない前は、俺も斯様なことは無かつた。」斯う嘆息して、三吉は寢床に就いた。

翌朝、お俊は歸つて來た。彼女は別に變つた樣子も見えなかつた。

「奈何したい。」

と叔父はお延の居るところで聞いた。彼は心の中で、よく歸つて來て呉れたと思つた。

「なんだか急に父親さんや母親さんの顏が見たく成つたもんですから……突然に家へ歸つたら、皆な驚いちやつて……」

斯う答へるお俊の手を、お延は娘らしく握つた。お俊は皆なに心配させて氣の毒だつたといふ眼付をした。

漸く三吉も力を得た。日頃義理ある叔父と思へばこそ、斯うして働きに來て呉れる、とお俊の心をあはれにも思つた。

其日から、三吉は成るべく姪を避けやうとした。避けやうとすればするほど、餘計に巻込まれ、蹂躙られて行くやうな氣もした。彼は最早、苦痛なしに姪の眼を見ることが出來なかつた。どうかすると、若い女の髮が蒸されるとも、身體が燃えるともつかないやうな、今迄氣のつかなかつた、極く々々幽かな臭氣が、彼の鼻の先へ匂いて來る。それを嗅ぐと、我知らず罪もないものゝ方へ引寄せられるやうな心地がした。斯の勢で押進んで行つたら、自分は畢竟奈何なる……と彼は思つて見た。

「俺は、もう逃げるより他に仕方が無い。」

到頭、三吉は斯様な狂人じみた聲を出すやうに成つた。

二人の前垂を持つた商人らしい男が、威勢よく格子戸を開けて入つて來た。一人は正太だ。今一人は正太が連れて來た榊といふ客だ。

「今日は。」

と正太はお俊やお延に挨拶して置いて、連と一緒に叔父の部屋へ通つた。

お俊は茶戸棚の前に居た。客の方へ煙草盆を運んで行つた從姉妹は、やがて彼女の側へ來た。

「延ちやん、貴方持つて行つて下さいな——私が入れますからネ。」

と言つて、お俊は茶を入れた。

客の榊といふは、三島の方にある大きな醤油屋の若主人であつた。不圖したことから三吉は懇意に成つて、斯の人の家へ行つて泊つたことも有つた。十年も前の話。榊なら、それから忘れずに居る舊い相識の間柄である。唯、正太と一緒に來たのが、不思議に三吉は思へた。そればかりではない、醤油藏の白壁が幾つも並んで日に光る程の大きな家の若主人が、東京に出て假に水菓子屋を始めて居るとは。加に、若い細君が水菓子を賣ると聞いた時は、榊が戯れて言ふとしか三吉には思はれなかつた。

「現に、私が買ひに行きました。」と正太が言出した。「私もネ、しばらく氣分が惡くて、伏枕つて居ましたから、何か水氣のある物を食べたいと思つて買はせに遣るうちに……どうも話の様子では、普通の水菓子を賣る家の内儀さんでは無い。聞いて見ると、御名前が榊さんだ。小泉の叔父の話に、よく榊さ

んといふことを聞くが……もしや……と思つて、私が自分で買ひに行つて見ました。果して叔父さんの御馴染の方だ。それから最早斯様に御懇意にするやうに成つちやつたんです。』

『橋本君とはスッカリお話が合つて了つて。』と言つて、榊は精悍な眼付をして、『先生――何處で奈何いふ人に逢ふか、全く解りませんネ。』

『榊君、先生だけは止して呉れ給へ。』と三吉は笑出した。

榊の『先生』は口癖である。『ねえ、君』といふとすこしも變つて聞えなかつた。

正太は時々お俊の方をも見た。『叔父さん、種々御心配下さいましたが、裏の叔父さんから頼んで頂いた方はウマく行きませんでした。そのかはり、他の店に口がありさうです。實は榊君も私と同じやうに兜町を狙つて居るんです。』

其日の正太は元氣で、夏羽織なぞも新しい瀟洒としたものを着て居た。『今にウンと一つ働いて見せるぞ、』と彼の男らしい、どこか苦味を帯びた眼付が言つた。彼は勃々とした心を制えかねるといふ風に見えた。

話の最中、三吉は斯の甥の顔を眺めて居ると、

『あれ、兄さんがいけません。』

と鋭く呼ぶ姪の聲を耳の底の方で聞くやうな氣がした。

『丁度こゝに同じやうな人間が二人揃つたといふものです。』と榊は三吉と正太の顔を見比べた。『左様

言つちや失敬ですが、橋本君だつても……御國の方で大きくやつてゐらしツたんでせう……僕も、まあ、言つて見れば、似たやうな境遇なんです。」

正太は良家に育つた人らしい手で、膝の前垂を直して見た。

「ねえ、橋本君、左樣ぢや有りませんか。」と榊は言葉を繼いで、「これから二人で、手を携へて大に行らうぢや有りませんか。僕もネ、今の水菓子屋なぞはホンの腰掛ですから、あの店は疊みます。いづれ家内は郷里の方へ歸します。」

「多分、榊君の方が、私よりは先にある店へ入ることに成りませう。」と正太は叔父に話し聞かせた。

三島にある城のやうな家、三吉が寢た二階、入つた風呂、上つて見た土藏、それから醤油を釀す大きな桶が幾つも並んで居た深い倉――左樣いふものは奈何成つたか。榊はそれを語らうともしなかつた。唯、前途を語つた。やがて、若々しい、爽快な笑聲を殘して、正太と一緒に席を立つた。

玄關のところで、正太はお俊から帽子を受取りながら、

「延ちやん、頭腦の具合は？」

「えゝ、もうスッカリ癒つた。」とお延は無邪氣に笑つた。

「お醫者樣が病氣でも何でも無いッて、左樣仰つたら、延ちやんは藥を服むのもキマリが惡く成つたなんて、」とお俊は笑つて、正太の方を見ずに、お延の方を見た。

「靜かな田舍から、斯ういふ、刺激の多い都會へ出て來るとネ。」と正太も庭へ下りてから言つた。

叔父、甥、姪などの交換した笑聲は、客の耳にも睦まじさうに聞えた。お延は自分が笑はれたと思つたかして、袖で顔を隠した。お俊は着物の襟を堅く掻合せて居た。

郊外の道路には百日紅の花が落ちた。一夏の間、熱い寂しい思をさせた花が、表の農家の前には、すこし色の褪めたまゝで未だ咲いて居た。實が住む町のあたりは祭の日に當つたので、お俊はお延を連れて、泊りがけに行く仕度をした。

「叔父さん、晩召上る物は用意して置きましたから。」とお俊が言つた。

「よし、よし、二人とも早くおいで。叔父さんが御留守居する——俺は獨りでノンキにやる。」

斯う答へて、三吉はいくらかの小使を娘達に與れた。

二人の姪は明日の七夕にあたることなどを言合つて、互に祭の樂しさを想像しながら、出て行つた。娘達を送出して置いて、三吉はぴッたり表の門を閉めた。掛金も掛けて了つた。

窓のところへ行くと、例の紅い花が日に萎れて見える。そのうちに三吉は窓の戸も閉めて了つた。家の内は、寺院にでも居るやうにシンカンとして來た。

「これで、まあ、漸く清々した。」

と手を揉みながら言つて見て、三吉は庭に向いた部屋の方へ行つた。

九月の近づいたことを思はせるやうな午後の光線は、壁に掛かつた子供の額を寂しさうに見せた。そこには未だお房が居る。白い蒲團を掛けた病院の寢臺の上に横に成つて、大きな眼て父の方を見て居る。三吉はその額の前に立つた。光線の反射の具合て、玻璃を通して見える子供の寫眞の上には、三吉自身が薄く重なり合つて映つた。彼は自分て自分の悄然とした姿を見た。

三吉は獨りて部屋の內を歩いた。靜かに過去つたことを胸に浮べた。この一夏の留守居は、夫と妻の繋がれて居る意味をつくづく思はせた。彼は、結婚してからの自分が結婚しない前の自分て無いに、呆れた。由緒のある大きな寺院へ行くと、案內の小坊主が古い壁に掛つた繪の前へ參詣人を連れて行つて、僧侶の一生を說明して聞かせるやうに、丁度三吉が肉體から起つて來る苦痛は、種々な記憶の前へ彼の心を連れて行つて見せた。そして、家を持つた年には斯ういふことが有つた、三年目は彼樣いふことが有つた、と平素忘れて居たやうなことを心の底の方て私語いて聞かせた。それは殊勝氣な僧侶の一代記のやうなものては無かつた。どれもこれも女のついた心の繪だ。隱したいと思ふ記憶ばかりだ。三吉は、深く、深く、自分に呆れた。

遠く雷の音がした。夏の名殘の雨が來るらしかつた。

「只今。」

お雪は種夫を抱きながら、車から下りた。下婢も下りた。

「叔父さん、叔母さんが御歸りですよ。」

と二人の姪は、叔父を呼ぶやら、叔母の方へ行くやらして、門の外まで出て迎へた二つの車に分けて載せてある手荷物は、娘達が手傳つて、門の內へ運んだ。

「どうも長々難有御座いました。」

と娘達に禮を言ひながら、お雪は入口のところで車代を拂つて、久し振で夫や姪の顏を見た。

「種ちやんもお腹が空いたでせう。」

とお雪が懷をひろげた。三吉は子供のウマさうに乳を呑む音を聞きながら、「あゝ、好いところへお雪が歸つて來て呉れた、」といふ眼付をした。

娘達は茶を入れて持つて來た。お雪は乾いた咽喉を濕して、旅の話を始めた。やがて、汽船宿の扱ひ札などを貼付けた手荷物が取出された。

「父さん、濟みませんが、この鞄を解いて見て下さいな。お俊ちやん達に進げる物がこの中に入つて居る筈です――生家の父親さんは斯樣に堅く荷造りをして呉れて。」

斯うお雪が言つた。

幾年振かで生家の方へ行つたお雪は、多くの親戚から送られた種々な土產物を持つて歸つて來た。これは名倉の姉から、これは㋤の姉から、これは∧ナの妹から、とそこへ取出した。㋤は彼女が二番目の姉

の家で、今は妹のお福の家である。『名倉母より』とした土産がお俊やお延の前にも置かれた。斯の荷物のゴチャ〳〵した中で、お雪は往復の旅を混合ぜて夫に話した。

『私が生家へ着きますとネ、しばらく父親さんは二階から下りて來ませんでしたよ。そのうちに下りて來て、臺所へ行つて顔を洗つて、それから挨拶しました。父親さんは私の顔を見ると、碌に物も言へませんでした……』

『餘程嬉しかつたと見えるネ。』

『よく斯樣に早く仕度して來て呉れたツて、後で左樣言つて喜びました。私が行くまで、老祖母さんの葬式も出さずに有りましたツけ。』

お雪の話は歸路のことに移つて行つた。出發の日は、姉妹から親戚の子供達まで多勢波止場に集つて別離を惜んだこと、妹のお福などは船まで見送つて來て、漕ぎ別れて行く艀の方からハンケチを振つたことなぞを話した。お雪は又、やゝ躊躇した後で、歸路の船旅を妹の夫と共にしたことを話した。

『へえ、勉さんが一緒に來て呉れたネ。』と三吉が言つた。

『商法の方の用事があるからツて、今が途中まで送つて來ました。』

お雪が勉のことを話す場合には、『福ちやんの旦那さん』とか、『今』とか言つた。悲しい運命は、彼女が最も近い身内のものに斯の人を結び付けた。成るべく彼女は舊いことを葬らうとして居た。唯、親戚として話さうとして居た。勉とお福との結婚に就いては、それを妹の幸福と信じ、又勉の幸福とも思つ

て、お雪は進んで骨を折つた程であつた。今と成つて見ると、お雪は夫に對して不思議な位置に立つたのである。

それを三吉も察しないでは無かつた。彼の方でも、唯、親戚として話さうとして居た。

旅の荷物の中からは、お雪が母に造つて貰つた夏衣の類が出て來た。ある懇意な家から餞別に送られたといふ圓みのある包も出て來た。

まだ客のやうな顔をして、かしこまつて居た下婢は、その包を眺めて、

「今さんがそれを間違へて、「何だ、是は、水瓜なら食へ、」なんて仰有つて、船の中で解いて見ましたツけ……」

「青い花瓶……」

とお雪は笑つた。

勉には、三吉は直接に逢つて居た。以前彼が名倉の家を訪ねた時に、既に名のり合つて若々しい、才氣のある、心の好さそうな商人を知つた。彼は心に勉の人柄を尊敬して居た。

「どれ、御線香を一つ上げて。」

とお雪は佛壇の方へ行つて、久し振で小さな位牌の前に立つた。土産の菓子や果物などを供へて置いて、復た姪の傍へ來た。

「眞實にお俊ちやんも、御迷惑でしたらうねえ――さぞ、東京はお暑かつたでせうねえ――。」

「えゝ、今年の暑さは別でしたよ。」

「彼地もお暑かつたんですよ。」

斯様な言葉を親しげに交換しながら、お雪は家の内を可懐しさうに眺め廻した。彼女は、左の手の藥指に、細い、新しい指輪なども嵌めて居た。

そのうちにお雪は旅で汚れた白足袋を脱いだ。彼女は最早臺所の方へ見廻りに行つて、自分が主に成つて働き始めた。

お俊が叔父や叔母に禮を述べて、自分の家をさして歸つて行つたのは、それから二三日過ぎてのことであつた。「すつかり私は叔父さんの裏面を見ちやつてよ――三吉叔父さんといふ人はよく解つてよ、」斯う骨を刺るやうな姪の眼の光を、三吉は忘れることが出來なかつた。それを思ふ度に、人知れず彼は冷い汗を流した。彼は、最早以前のやうに、苦痛なしに自分を考へられない人であつた。同時に、他をも考へられなく成つて來た。家の生活で結び付けられた人々の、微妙な、陰影の多い、言ふに言はれぬ深い關係――左樣いふものが重苦しく彼の胸を壓して來た――叔父姪、從兄妹同志、義理ある姉と弟、義理ある兄と妹……

四

三吉が家の横手にある養鷄所の側から、雜木林の間を通り拔けたところに、草地がある、緩漫な傾斜は淺い谷の方へ落ちて、草地を岡の上のやうに見せて居る。雜木林から續いた細道は、コンモリとした杉の木立の邊で盡きて、そこから坂に成つた郊外の裏道が左右に連なつて居る。馬に乘つた人などが其の道を通りつゝある。

武藏野の名殘を思はせるやうな、斯の靜かな郊外の眺望の中にも、よく見れば驚くべき變化が起つて居た。植木畠、野菜畠などはドシ〳〵潰されて了つた。土は掘返された。新しい家屋が増えるばかりだ。

三吉は斯の草地へ來て眺めた。日のあたつた草の中では蟋蟀が鳴いて居た。山から下りて來たばかりの頃には、お菊はまだ地方に居る積りで、「房ちやん、御城趾へ花摘りに行きませう」などゝ言つて、姉妹で手を引き合ひながら、父と一緒に遊びに來たのも、斯の邊だ。お繁は死に、お菊は死に、お房は死んだ。三吉は、何の爲に妻子を連れて斯の郊外へ引移つて來たか、それを思はずに居られなかつた。つく〳〵彼は努力の爲すなきを感じた。事業の空しきを感じた。

遠い空に綿のやうな雲が浮んだ。友人の牧野が住む山の方は定めし秋らしく成つたらうと思はせた。三吉は眺め佇立んで子を失つた悲哀を忘れる爲に、更に長い仕事を始めやうと思ひ立つた。

新宿の方角からは、電車の響が唸るやうに傳はつて來る。丁度、彼が寂しい田舍に居た頃、山の上を通る汽車の音を聞いたやうに、耳を欹立てる町の電車の響を聞いた。山から外郊へ、郊外から町へ、何

となく彼の心は響のする方へ動いた。それに、子供等の遊友達を見ると、思出すことばかり多くて、斯の静かな土地を離れたく成つた。彼は町の方へ家を移さうと考へた。そのゴチャ〳〵した響の中で、心を紛したり、新規な仕事の準備に取掛つたりしやうと考へた。

家を指して、雑木林の間を引返して行くと、門の内に家の圖を引いて居る人がある。矢張り斯の郊外に住む風景畫家だ。お雪は入口のところに居て、何の窓が何の方角にあるなどゝ話し聞かせて居た。

風景畫家は洋服の袖隱から磁石を取出した。引いた圖の方角をよく照らし合せて見て、ある家相を研究する人のことを三吉に話した。あまり子が死んで不思議だ、家相といふことも聞いて見給へ、これから家を移すにしても方角の詮議もして見るが可い、斯う言つて、猶この家の圖は自分の方から送つて置く、と親切な口調で話して行つた。

「彼様いふ新しい畫を描く人でも、方角なぞを氣にするかナア。」

と三吉は言つて見たが、しかし家の圖までも引いて行つて呉れる風景畫家の志を難有く思つた。

お雪は夫の方を見て、

「貴方のやうに關はなくても困る。人の言ふことも聞くもんですよ。山を發つ時にも、日取が惡いから、一日延ばせといふものを無理に發つたりなんかして、だから彼様な不幸が有るなんて、後で近所の人に言はれたりする……それは左様と、何だか私は斯の家に居るのが厭に成つた。」

斯う言ふ妻の爲にも、三吉は家を移さうと決心した。

信心深い植木屋の人達は又、早く三吉の去ることを望んだ。何か、彼が禍を背負つて、折角新築した家へケチを付けにても來たやうに思つて居た。それを聞くにつけても、三吉は早く去りたかつた。

外濠線の電車は濠に向つた方から九月の日をうけつゝあつた。客の中には立つて窓の板戸を閉める人もあつた。その反對の側に腰掛けた三吉は、丁度家を探し歩いた歸りがけて、用達の都合で斯の電車に乘合はせた。彼は森彦の旅舍へも寄る積りてあつた。

昇降する客に混つて、二人の紳士がある停留場から乘つた。

「小泉君。」

とその紳士の一人が聲を掛けた。三吉は幾年振かて、思ひがけなく大島先生に逢つた。

割合に込んだ日て、大島先生は空いたところへ行つて腰掛けた。三吉と反對の側に乘つたが、連があるのと、客を隔てたのとて、互に言葉も替さなかつた。二人は默つて乘つた。

大島先生は、一夏三吉が苦しんだ熱い思を、幾夏も經驗したやうな人てあつた。細君に死別れてから、先生は悲しい噂ばかり世に傳へられるやうに成つた。改革者のやうな熱烈な口調て、かつて先生が慷慨したり痛嘆したりした聲は、皆な逆に先生の方へ戻つて行つた。正義、愛、美しい思想――左様いふ先生の考へたことや、言つたことは、殘らず葬られた。正義も夢、愛も夢、美しい思想も夢の如くてあつ

た。唯、先生には變節の名のみが殘つた。昔親切によく世話をして遣つた多くの後輩の前にも、先生は默つて首を垂れて、『鞭撻』と言はないばかりの眼付をする人に成つた。舊い友達は大抵先生を捨てた。先生も舊い友達を捨てた。

以前に比べると、大島先生はずつと肥つた。服裝なども立派に成つた。しかし以前の貧乏な時代よりは、今日の方が幸福であるとは、先生の可傷しい眼付が言はなかつた。

斯の縁故の深い、舊時戀しい人の前に、三吉は考へ沈んで、頭腦の痛くなるやうな電車の響を聞いて居た。先生の書いたもので思出す深夜の犬の鳴聲――斯樣な突然に起つて來る記憶が、懷舊の情に混つて、先生のことゝもつかず、自分のことゝもつかず、丁度電車の窓から見える人家の窓や柳の葉のやうに、三吉の胸に映つたり消えたりした。

そのうちに、三吉は大島先生の側へ行つて腰掛けることが出來た。先生は重い體軀を三吉の方へ向けて、手を執らないばかりの可懷しさうな姿勢を示したが、昔のやうには語らうとして語られなかつた。

『オヽ、八重洲橋に來た。』

と先生はあわたゞしく起上つて、窓から外の方の市街を見た。

『もう御降りに成るんですか。』と三吉も起上つた。

『小泉君、こゝで失敬します。』

といふ言葉を殘して置いて、大島先生は電車から降りた。

『吾儕に媒酌人をして呉れた先生だつたけナア。』

斯う思つて、三吉が窓につかまり乍ら見送つた時は、酒の香にすべての悲哀を忘れやうとするやうな寂しい、孤獨な人が連の紳士と一緒に並木の道を歩いて居た。電車は通り過ぎた。

「小泉さんはおいでゝすか。」

三吉は森彦の旅舍へ行つて訪ねた。そこでは內儀さんが變つて、女中をして居た婦人が丸髷に結つて顏を出した。

電話口に居た森彦は、弟の三吉と聞いて、二階へ案內させた。部屋にはお俊も來合せて居た。森彦は電話の用を濟まして、別の樓梯から上つて來た。

三吉はお俊と不思議な顏を合せた。殊に嚴格な兄の前では、いかにも姪の女らしい大目に見て置くと言つて居るやうな樣子がツラかつた。彼は、夏中手傳ひに來て居て貰つた時のやうな、親しい、樂々とした氣分で、斯の娘と對ひ合ふことが出來なかつた。何となく堅くなつた。

「森彦叔父さん、私は學校の歸りですから。」とお俊が催促するやうに言つた。

「左樣かい。ぢや着物は宜しく賴みます。母親さんに左樣言つて、可いやうに仕立てゝ貰つてお呉れ。」

旅舍生活する森彦は着物の始末をお俊の家へ頼んだ。お俊は長い袴の紐を結び直して、二人の叔父に別れて行つた。

漸く三吉は平常の調子に返つて、一日家を探し歩いたことを兄に話した。直樹が家の附近は、三吉も少年時代から青年時代へかけての記憶のあるところて、同じ町中を擇ぶとすれば、成るべく親戚や知人にも近く住みたい。それには、舊時直樹の家に出入した人の世話て、一軒二階建の家を見つけて來た。斯樣な話をした。

『時に、延もお愛ちやんの學校へ通はせることにしました。』と三吉が言つた。『その方が彼娘の爲めにも好さそうてす。』

森彦は自分の娘が兄の娘に負けるやうては口惜しいといふ眼付をした。

『まあ、學校の方のことは、お前に任せる‥‥俺の積りては、延に語學をウンと遣らせて、外交官の細君に向くやうな娘を造りたいと思つて居た。行く々々は洋行てもさせたい位の意氣込だつた‥‥』

『娘の性質にもありますサ。』

『俺の娘なら、もうすこし勇氣が有りさうなものだ。存外ヤカなもんだ。』

と森彦は田舍訛を交へて、自分が子が自分の自由に成らないに、歎息した。

『實さんの家ても越すさうぢや有りませんか。』

『左樣ださうな。どうも兄貴にも困りものだよ。一應俺に相談すれば彼樣な眞似はさせやしなかつた。

その爲に俺の仕事まで、何程迷惑を蒙つたか知れない。彼樣いふ兄貴の弟だ——直ぐそれを他に言はれる。實に、油斷も間隙もあつたもんぢや無い。奈何だ、そのうちに一度兄貴の家へ集まるまいか。どうしても東京に置いちや不可……大連の方にでも追つて遣らにや不可……今度行つたら、俺がギュウといふ目に逢はせて吳れる。」

小泉の家の名譽と、實の一生とを思ふのあまり、森彥は高い調子に成つて行つた。斯の兄は、充實した身體の置場所に困るといふ風で、思はず言葉に力を入れた。その飛沫が正太にまで及んで行つた。兜町で儲けやうなどゝは、生意氣な、といふ語氣で話した。正太は幼少の頃、斯の兄の手許へ預けられたことが有るので、どうかすると森彥の方ではまだ子供のやうに思つた。

部屋の障子の開いたところから、靑桐の葉が見える。一寸三吉は廊下へ出て、町々の家根を眺めた。

「お前が探して來た家は、二階があると言つたネ。二階も好いが、子供にはアブナイぞ。橋本の仙(正太の妹)なぞは幼少い時分に樓梯から落ちて、それで彼樣な風に成つた——夫婦は二階に寢て居て知らなかつたといふ話だ——」

「でも、お仙さんは、房ちやんと同じ病氣をしたと云ふぢや有りませんか。」

「何でも俺は左樣いふ話を聞いた。」

三吉は森彥の前へ戾つて、眼に見えない二階の方を見るやうに、しばらく兄の顏を見た。

間もなく三吉は斯の二階を下りた。旅舍を出てから「よく森彥さんは、彼樣して長く獨りで居られる

ナア、」と思つて見た。電車で新宿まで乘つて、それから樹木の間を歩いて行くと、諸方の屋根から夕餐の烟の登るのが見えた。三吉は家の話を持つて、妻子の待つて居る方をさして急いだ。

家具といふ家具は動き始めた。寢る道具から物を食ふ道具まで互に重なり合つて、門の前にある荷車の上に積まれた。

「種ちやん、彼方のお家の方へ行くんですよ。」

とお雪は下婢の背中に居る子供に頭巾を冠せて置いて、庭傳ひに女教師の家や植木屋へ別れを告げに行つた。斯うして、思出の多い家を出て、お雪は夫より一足先に娘達の墳墓の地を離れた。

町中にある家へ、彼女が子供や下婢と一緒に着いた時は、お延が皆なを待受けて居た。そこは、往時女髪結で直樹の家へ出入して、直樹の母親の髮を結つたといふ老婆が見つけて呉れた家であつた。その老婆の娘で、直樹の父親の着物などを疊んだことのある人が、今では最早十五六に成る娘から「母親さん」と言はれる程の時代である。極く近く住むところから、その人達が土瓶や湯沸を提げて見舞に來て呉れた。お雪は手拭を冠つたり脱つたりした。

静かな郊外に住慣れたお雪の耳には、種々な物賣の聲が賑かに聞えて來た。勇ましい鰯賣の呼聲、豆腐屋の喇叭、歯入屋の鼓、其他郊外で聞かれなかつたやうなものが、家の前を通る。表を往つたり來た

りする他の主婦て、彼女のやうに束髪にした女は、殆んど無いと言つても可い。斯の都會の流行に後れまいとする人々の髪の形が、先づ彼女を驚かした。

實の家からは、例の簞笥や膳箱などを送り届けて來た。いづれも東京へ出て來てからの實の生活の名殘だ。大事に保存された古い器物ばかりだ。お雪はそれを受取つて、自分の家の飾りとするのも氣の毒に思つた。

夫は荷物と一緒に着いた。

『斯ういふところて、田舍風の生活をして見るのも面白いぢやないか。』

と三吉はお雪に言つた。お雪はよく働いた。夕方迄には、大抵に家の内が片付いた。荷車に積んて來たゴチヤ〳〵した家具は何處へ納まるともなく納まつた。改まつた疊の上て、お雪は皆なと一緒に、樂しさうに夕飯の膳に就いた。

暮れてから、かはる〴〵汗を流しに行つた女達は、あまり風呂場が明る過ぎてキマリが惡い位だつた、と言つて歸つて來た。下婢は眼を圓くして飛んて來て、『この邊ては、荒物屋の内儀さんまて三味線を引いて居ます、』とお雪に話した。長唄や常盤津が普通の家庭にまて入つて居ることは、田舍育ちの下婢にめづらしく思はれたのてある。

『延ちやん、一寸そこまて見に行つて來ませう。』

とお雪は姪を誘つた。

郊外の夜に比べると、數へきれないほどの町々の灯がお雪の眼にあつた。紅——青——黄——と一口に言つて了ふことの出來ない、强い弱い種々な灯の色が、そこにも、こゝにも、都會の夜を照らして居た。お雪と姪とは、互に明るく映る顔を見合せた。二人は手を引き合つて歩いた。戻りがけに、町中を流れる暗い靜かな水を見た。お雪は直樹の家に近く引移つて來たことを思つた。

三吉は最早響の中に居た。朝の騷々しさが納まつた頃は、電車の唸りだの、河蒸汽の笛だのが、特別に二階の部屋へ響いて來た。

『叔父さん、障子張りてすか。』

と言ひながら、正太が樓梯を上つて來た。正太は榊と相前後して、兜町の方へ通ふことに成つた。

『相場師が今頃訪ねて來ても好いのかね。』と三吉は笑つて、張つた障子を壁に立掛けた。

『いえ、私はまだ店へ入つたばかりて、お客さまの形です。今ネ、一寸場を覗いて、それから廻つて來ました。』

正太は叔父の側で一服やつて、袂から細い打紐を取出した。叔父の家にある額の釣紐にもと思つて、途中から買求めて來たのである。彼は斯ういふことに好く氣がついた。

壁には田舍屋敷の庭の畫が掛けてあつた。正太はその釣紐を取替えて、結び方も面白く掛直して見た。

その畫は、郊外に住む風景畫家の筆で、三吉に取つては忘れ難い山の生活の紀念であつた。

三吉は額を眺めて、舊いことまでも思出したやうに、

「Sさんも奈何して居るかナア。」

と風景畫家の噂をした。正太はずつと以前、染物織物などに志して、その爲に繪畫を修めやうとしたことが有る位で、風景畫家の仕事にも興味を持つて居た。

「Sさんには、此節は稀にしか逢はない。」と三吉は嘆息して、「何となく友達の遠く成つたのは、悲しいやうなものだネ。」

「オヤ、叔父さんは彼樣して近く住んでゐらしッたぢや有りませんか。」

「それがサ……斯の畫をSさんが僕に描いて呉れた時分は、お互に山の上に居て、他に話相手も少いしネ、毎日のやうによく往來しましたッけ。僕が田圃側などに轉がつて居ると、向の谷の方から三脚を持つた人がニコ〳〵して歸つて來る――途次二人で畫や風景の話などをして、それから僕がSさんの家へ寄ると、寫生を出して見せて呉れる、どうかすると夜遲くまでも話し込む――その家の庭先が斯の畫す。あの時分は實に樂しかつた……二度と彼樣いふ話は出來なく成つて了つた……」

「友達は多く左樣成りますネ。」

「何故そんな風に成つて來たか――それが僕によく解らなかつたんです。Sさんとは何事も君、お互に感情を害したやうなことが無いんだからネ。不思議でせう。實は、此頃、ある友達の許へ寄つたところ

が、「小泉君――Sさんが君のことをモルモットだと言つて居ましたぜ、」斯う言ひますから、「モルモットとは何だい、」と僕が聞いたら、大學の試驗室へ行くと醫者が注射をして、種々な試驗をするでせう。友達がモルモットて、僕が醫者だそうだ――Sさんも種々な名をつけるよ、比喩がウマいんだからネ。」

正太は噴飯した。

「まあ、聞給へ。考へて見ると、成程Sさんの言ふことが眞實だ。知らず〳〵僕はその醫者に成つて居たんだネ。傍に立つて、知らう〳〵として、觀て居られて見給へ――好い心地はしないや。何となくSさんが遠く成つたのは、始めて僕に解つて來た……」

復た正太は笑つた。

「しかし、正太さん、僕は唯――偶然に――そんな醫者に成つた譯ても無いんてす。よく物を觀やう、もう一度この世の中を見直さう、それて僕は自分を改革しやうと掛つたんてす。研究、研究てネ。これがそも〳〵他を苦しめたり、自分ても苦しんだりする原因なんてす……しかし、君、人間は一度可恐しい目に逢着して見給へ、いろ〳〵なことを考へるやうに成るよ……子供が死んてから、僕は研究なんてことにも左樣重きを置かなく成つた……」

明るい二階て、日あたりを描いた額の書の上に、日があたつた。春蠶の濟んだ後て、刈取られた桑畠に新芽の出たさま、林檎の影が庭にあるさまなど、玻璃越しに光つた。お雪は階下から上つて來た。

「父さん、障子が張れましたネ。」

「その額を御覽。正太さんが彼樣いふ風に掛けて下すつた。」
「眞實に、正太さんは斯ういふことが御上手なんですねえ。」
とお雪は額の前に立つて、それから緣側のところへ出て見た。
「叔母さん、御覽なさい。」
と正太も立つて行つて、何となく江戶の殘つた、古風な町々に續く家の屋根、狹い往來を通る人々の風俗などを、叔母に指して見せた。

鹽瀨といふが正太の通ふ仲買店であつた。その店に緣故の深い人の世話て、叔父の三吉にも身元保證の判を捺かせ、當分は見習かた〳〵外廻りの方をやつて居た。正太に比べると、榊の方は店も大きく、世話する人も好く、兎に角客分として扱はれた。二人ともまだ馴染が少なかつた。正太は店の大將にすらよく知られて居なかつた。毎日のやうに彼は下宿から通つた。

秋の蜻蛉が盛んに町の空を飛んだ。鹽瀨の店では一日の玉高の計算を終つた。後場は疾うに散けた。幹部を始め、其他の店員はいづれも歸りを急ぎつゝあつた。電話口へ馳付けるもの、飮仲間を誘ふもの、いろ〳〵あつた。正太は鹽瀨の暖簾を潛り抜けて、榊の待つて居る店の方へ行つた。

二人は三吉の家をさして出掛けた。大きな建築物のせゝこましく並んだ町を折れ曲つて、電車を待つ

ところへ歩いて行つた。株の高低に激しく神經を刺激された人達が、二人の前を右に往き、左に往きした。電車て川の岸まて乘つて、それから復た二人はぶら〳〵歩いた。

途中て、榊は立留つて、

「成金が通るネ――護謨輪かなんかて。」

と言つて見て、情婦の懷へと急ぎつゝあるやうな、意氣揚々とした車上の人を見送つた。榊も正太も無言の侮辱を感じた。榊は齷齪と働いて得た報酬を一夕の歡樂に擲たうと思つた。

橋を渡ると、靑い香も失せたやうな柳の葉が、石垣のところから垂下つて居る。細長い條を通して、逆に溢れ込む活々とした潮が見える。その邊まて行くと、三吉の家は近かつた。

「榊君――小泉の叔父の近所にネ、そも〳〵洋食屋を始めたといふ家が有る。建物なぞは、古い、小さなものサ。面白いと思ふことは、僕の阿爺が昔流行つた獵虎の帽子を冠つて、酒を飲みに來た頃から、その家は有るんだトサ。そこへ叔父を誘つて行かうぢやないか……一夕昔を忍ばうぢやないか。」

「そんなケチ臭いことを言ふナ。そりや、今日の吾儕の境涯ては、一月の月給が一晩も騷げば消えて了ふサ。それが、君、何だ。一攫千金を夢みる株屋ぢやないか――今夜は僕が奢る。」

二人は歩きながら笑つた。

父の夢は子の胸に復活つた。『金釵』とか、『香影』とか、左様いふ漢詩に殘つた趣のある言葉が正太の胸を往來した。名高い歌妓が黒繻子の襟を掛けて、素足て客を歡待したといふ父の若い時代を可懷し

く思つた。しばらく彼は、樺太で難義したことや、青森の旅舍で煩つたことを忘れた。舊い屋根船の趣味などを想像して歩いた。

「お揃ひですか。」

と三吉は机を離れて、客を二階の部屋へ迎へた。

兜町の方へ通ふやうに成つてから、榊は始めて三吉と顏を合せた。榊も、正太も、まだ何となく舊家の主人公らしかつた。言葉遣ひなぞも、妙に丁寧に成つたり、書生流儀に成つたりした。

「叔母さん、おめづらしう御座いますネ。」

と正太は茶を持つて上つて來た叔母の髮に目をつけた。お雪は束髮を止して、下町風の丸髷にして居た。

お雪が下りて行つた後で、榊は三吉と正太の顏を見比べて、

「ねえ、橋本君、先づ吾儕の商賣は、女で言ふと丁度藝者のやうなものだネ。御客大明神と崇め奉つて、ペコ〱御辭儀をして、それでまあ玉を付けて貰ふんだ。そこへ行くと、先生は詩人とか何とか言つて、乙に構へても居られる……大した相違のものだネ。」

三吉は「復た始まつた」といふ眼付をした。

「先生でなくても、君でも可いや——ねえ、小泉君、僕が斯樣な商賈を始めたと言つたら、君なぞは奈何思ふか知らないが——」

「叔父さんなぞは何とも思つてやしません。」と正太が言つた。

「榊が居ると思はないで、こゝに幇間が一人居ると思つて呉れ給へ——ねえ、橋本君、まあお耳に其樣なもんぢやないか。」と言つて、榊は急に正太の方へ向いて、「奈何だい、君、今日の相場は。僕は最早傍觀して居られなく成つた。他の儲けるところを、君、默つて觀て居られるもんか。」

「ドシンと來たねえ。」

「奈何だい、君、二人で大に行らうぢやないか。」

笛、太鼓の囃子の音が起つた。芝居の廣告の幟が幾つとなく揃つて、二階の欄の外を通り過ぎた。話も通じないほどの騷ぎで、狹い往來からは口上言ひの聲が高く響き渡つた。階下では、種夫を背負つた人が、見せに出るらしかつた。親戚の娘達の賑かな笑聲も聞えた。

やがて、榊は三吉の方を見て、

「小泉君の前ですが、君は僕の家内にも逢つて、覺えて居られるでせう。家内は今、郷里に居ます。時々家のことを書いた長い手紙を寄越します。それを讀むと、僕は涙が流れて、夜も碌に眠られないことがあります……眠らずに考へます……しかし四日も經つと、復た僕は忘れて了ふ……極く正直な話が、左樣なんです。なにしろ僕なぞは、三十萬の借財を親から讓られて、それを自分の代に六十萬に増しま

した……』

正太も首を振つて、感慨に堪えないといふ眼付をした。思ひついたやうに、懐中時計を取出して見て、

『叔父さん、今晩は榊が夕飯を差上げるさうです。何卒御交際下さいまし。』

と言つて御辭儀をしたので、榊も話を一ト切にした。

其時親類の娘達がドヤ〳〵樓梯を上つて來た。

『兄さん、左樣なら。』とお愛が手をついて挨拶した。

『お愛ちやん、學校の方の屆は?』と三吉が聞いた。

『今、姉さんに書いて頂きました。』

『叔父さん、私も失禮します。』とお俊はすこし改まつた調子で言つて、正太や榊にも御辭儀をした。

『左樣なら。』とお鶴も姉の後に居て言つた。

斯の娘達を送りながら、三吉は客と一緒に階下へ降りた。彼は正太に向つて、今度引移つた實の家の方へ、お延を預ける都合に成つたことなぞを話した。

階下の部屋は一時混雜した。親類の娘達の中でも、お愛の優美な服裝が殊に目立つた。お俊は自分の筆で書いた秋草模樣の帶を〆て居た。彼女は長いこと使ひ慣れた箪笥が、叔父の家の方に來て居るのを見て、ナサケナイといふ眼付をした。順に娘達はお雪に挨拶して出た。つゞいて、三吉も出た。門の前

には正太や榊が待つて居た。未だ日の暮れないうちから、軒燈を點ける人が往來を馳け歩いた。町はチラ／＼光つて來た。

水は障子の外を緩く流れて居た。榊、正太の二人は電燈の飾りつけてある部屋へ三吉を案内した。叔父の家へ寄る前に、正太が橋の畔で見た青い潮は、耳に近くヒタ／＼と囁語くやうに聞えて來た。

榊は障子を明け拂つて、

『橋本君、斯ういふところへ來て樂めるといふのも、矢張……』

『金！　金！』

と正太は榊が皆な言はないうちに、言つた。榊は正太の肩をつかまへて、二度も三度も搖つた。『然り、然り。』といふ意味を通はせたのである。

三吉が立つて水を眺めて居るうちに、女中が膳を運んで來た。一番いける口の榊は、種々な意味で祝盃を擧げ始めた。

『姉さんにも一つ進げませう。』と榊は女中へ盃を差した。『奈何です、僕等はこれで何商賣と見えます？』

女中は盃を置いて、客の樣子を見比べた。

「私は何と見えますか？」と正太が返事を待兼ねるやうに言つた。

「さあ、御見受申したところ……袋物でも御商ひに成りませうか。」

「オヤ〳〵、未だ素人としか見られないか。」と正太は頭を掻いた。

榊も吹飯した。「姉さん、この二人は株屋に成りたてなんです。まだ成りたてのホヤ〳〵なんです。」

「あれ、兜町の方でゐらッしやいましたか。あちらの方は、よく姐さん方が大騒ぎを成さいます。」

斯う女中は愛想よく答へたが、よくある客の戲れといふ風に取つたらしかつた。女中は半信半疑の眼付をして意味もなく、輕く笑つた。

知らない顔の客のことて、口を掛ければ直ぐに飛んで來るやうな、中年増の妓が傍へ來て、先づ酒の興を助けた。庭を隔てゝ明るく映る障子の方では、放肆な笑聲が起る。盛んな三味線の音は水に響いて樂しさうに聞える。全盛を極める人があるらしい。何時の間にか、榊や正太は腰の低い「幇間」て無かつた。意氣昂然とした客てあつた。

「向ふの座敷ぢや、大にモテるネ。」

と榊は正太に言つた。こゝにも二人は言ふに言はれぬ侮辱を感じた。それに、扱ひかねて居る女中の樣子と、馴染の無い客に對する妓の冷淡とが、何となく二人の矜持を傷けた。殊に、榊は不愉快な眼付をして、樂しい酒の香を嗅いだ。

「貴方、一つ頂かして下さいな。」

とその中年增が、自信の無い眼付をして、盃を所望した。世に後れても、それを知らずに居るやうな人て、座敷を締める力も無かつた。

そのうちに、今一人若い妓が輿を助けに來た。歌が始まつた。

『姐さん、一つ二上りを行かう。』

と言つて、正太は父によく似た淸しい、錆の加はつた聲で歌ひ出した。

『好い聲だねえ。橋本君の唄は始めてだ。』と榊が言つた。

『叔父さんの前で、私が歌つたのも今夜始めてゞすね。』と正太は三吉の方を見て微笑んだ。

『小泉君の醉つたところを見たことが無い――一つ醉はせなけりや不可。』と榊が盃を差した。

『すこし御醉ひなさいよ。貴方。』と中年增の妓が銚子を持添えて勸めた。

三吉は酒が發したと見えて、顏を紅くして居た。それて居ながら、妙に醒めて居た。彼は醉はうとして、いくら盃を重ねて見ても、どうしても醉へなかつた。唯、夕飯の馳走にても成るやうに、心易い人達を相手にして、談したり笑つたりした。

『是方は召上らないのねえ。』

と若い妓が中年增に言つた。

夜が更けるにつれて、座敷は崩れるばかりてあつた。『何か伺ひませう』とか、『心意氣をお聞かせなさいな』とか、中年增は客に對つて、ノベツに催促した。若い方の妓は、懷中から小さな鏡を取出して、

客の見て用る前て顏中拭き廻した。

榊は大分醉つた。若い方が御辭儀をして歸りかける頃は、榊は見るもの聞くもの面白くないといふ風て、面のあたりその妓を罵つた。そして、貰つて歸つて行つた後て、腐つた肉にとまる蠅のやうに言つて笑つた。折角樂みに來ても、樂めないて居るやうな客の前には、中年增の女が手持無沙汰に銚子を振つて見て、恐れたり震へたりした。

酒も冷く成つた。

ボーンといふ音が夜の水に響いて聞えた。聲色を船て流して來た。榊は正太の膝を枕にして、互に手を執りながら、訴へるやうな男や女の作り聲を聞いた。三吉も橫に成つた。

三人が斯の部屋を離れた頃は、遲かつた。屋外へ出て、正太は獨語のやうに、遣瀨ない心を自分て言ひ慰めた。

『今に、ウンと一つ遊んて見せるぞ。』

『小泉君、君は歸るのかい……野暮臭い人間だナア。』

と榊は正太の手を引いて、三吉に別れて行つた。

三吉は森彥から手紙を受取つた。森彥の書くことは、いつも簡短てある。兄弟て實の家へ集まらう、

實が今後の方針に就いて斷然たる決心を促さう、と要領だけを世慣れた調子て認めて、猶、物のキマリをつけなければ、安心が出來ないかのやうに書いて寄した。

弟達は兄を思ふばかりて無かつた。度々の兄の失敗に懲りて、自分等をも護らなければ成らなかつた。て、雨降揚句の日に、三吉も兄の家を指して出掛けた。

沼のやうに濕氣の多い町。沈滯した生活。溝は深く、道路は惡く、往來の人は泥をこねて歩いた。それを通り越したところに、引込んだ閑靜な町がある。門構への家が續いて居る。その一つに實の家族が住んて居た。

「三吉叔父さんが被入しつた。」

とお俊が待受顏に出て迎へた。お延も顏を出した。

「森彦さんは?」

「先刻から來て待つてゐらしッてよ。」

とお俊は玄關のところで挨拶した。彼女は大略その日の相談を想像して、心配らしい樣子をして居た。

「鶴ちやん、御友達の許へ遊びに行つてらッしやい。」とお俊は獨りで氣を揉んだ。

「左樣だ、鶴ちやんは遊びに行くが可い。」

とお倉も姉娘の後に附いて言つた。「斯ういふ時には、延ちやんも氣を利かして、避けて呉れゝば可いに。」とお俊はそれを眼て言はせたが、お延には奈何して可いか解らなかつた。斯の娘は、三吉叔父の方

から移つて間もないことで、唯ごく〳〵して居た。
實は部屋を片付けたり、茶の用意をしたりして、三吉の來るのを待つて居た。三人の兄弟は雜談を開く前に、集つて茶を噉んだ。其時實は起つて行つて、戸棚の中から古い箱を取出した。塵埃を拂つて、それを弟の前に置いた。
『是は三吉の方へ遣つて置かう。』
と保管を托するやうに言つた。父の遺筆である。忠寬を紀念するものは次第に散つて了つた。この古い箱一つ殘つた。
『どれ、話すことは早く話して了はう。』と森彥が言出した。
お俊は最早氣が氣でなかつた。母は、と見ると、障子のところに身を寄せて、聞耳を立てゝ居る。從姉妹は長火鉢の側に俯向いて居る。彼女は父や叔父達の集つた部屋の隅へ行つて、自分の机に身をもたせ掛けた。後日のために、よく話を聞いて置かうと思つた。
『そんなトロクサいことぢや、ダチカン。』と森彥が言つた。『滿洲行と定めたら、直ぐに出掛ける位の勇氣が無けりや。』
『俺も身體は强壯だしナ。』と實はそれを受けて、『家の仕末さへつけば、明日にも出掛けたいと思つて居る。』
『後は奈何にでも成るサ。私も居れば、三吉も居る……』

「むう――引受けて呉れるか――難有い。それをお前達が承知して呉れさへすれば、俺は安心して發てる。」

斯ういふ大人同志の無造作な話は、お俊を驚かした。彼女は父の方を見た。父は細かく書いた勘定書を出して叔父達に示した。多年の間森彥の胸にあつたことは、一時に口を衝いて出て來た。斯の叔父は「兄さん」といふ言葉を用ひて居なかつた。「お前が」とか「お前は」とか言つた。そして、聲を低くして、父の顏色が變るほど今日迄の行爲を責めた。

お俊は奈何成つて行くことかと思つた。勘忍強い父は默つて森彥叔父の鞭撻を受けた。斯の叔父の癖て、言葉に力が入り過ぎるほど入つた。それを聞いて居ると、お俊は反つて不幸な父を憐んだ。

「俊、先刻の物をこゝへ出せや。」

と父に言はれて、お俊はホッと息を吐いた。彼女は母を助けて、用意したものを奥の部屋の方へ運んだ。

「さあ、何物もないが、晝飯をやつとくれ。」と實は家長らしい調子に返つた。

三人の兄弟は一緒に食卓に就いた。口に出さない迄も、實にはそれが別離の食事である。箸を執つてから、森彥も惡い顏は見せなかつた。

「むゝ、是はナカ〳〵甘い。」と森彥は吸物の出來を賞めて、氣忙しなく吸つた。

「さ、何卒おかへなすつて下さい。」と、舊い小泉の家風を思はせるやうに、お倉は款待した。

皆な笑ひながら食つた。

間もなく森彦、三吉の二人は兄の家を出た。半町ばかり泥濘の中を歩いて行つたところで、森彦は弟を顧みて、

「あの位、俺が言つたら、兄貴もすこしはコタヘたらう。」

と言つて見たが、其時は二人とも笑へなかつた。實の家族と、病身な宗藏とは、復た二人の肩に掛つて居た。

「鶴ちやん。」

とお俊は、叔父達の行つた後で、探して歩いた。

「父さんが明日御出發なさるといふのに……何處へ遊びに行つてるんだらうねえ……」

と彼女は身を震はせながら言つて見た。一軒心當りの家へ寄つて、そこで妹が友達と遊んで歸つたことを聞いた。急いで自分の家の方へ引返して行つた。

斯樣に急に父の滿洲行が來やうとは、お俊も思ひがけなかつた。家のものに左樣委しいことも聞かせず、快活らしく笑つて、最早旅仕度にいそがしい父――狼狽して居る母――未だ無邪氣な妹――お俊は涙なしに斯の家の内の光景を見ることが出來なかつた。

長い悲惨な留守居の後で、漸く父と一緒に成れたのは、實に昨日のことのやうに娘の心に思はれて居た。復た別れる日が來た。父を逐ふものは叔父達だ。頼りの無い家のもの丶手から、父を奪ふものも、叔父達だ。斯の考へは、お俊の小さな胸に制へ難い口惜しさを起させた。可厭しい親戚の前に頭を下げて、母子の生命を托さなければ成らないか、と思ふ心は、一家の零落を哀しむ心に混つて、涙を流させた。

叔父達に反抗する心が起つた。彼女は餘程自分でシッカリしなければ成らないと思つた。弱い、年をとつた母のことを考へると、泣いてばかり居る場合では無いとも思つた。其晩は母と二人で遲くまで起きて、不幸な父の爲に旅の衣服などを調へた。

「母親さん、すこし寢ませう――どうせ眠られもしますまいけれど。」

と言つて、お俊は父の側に寢た。

紅い、寂しい百日紅の花は、未だお俊の眼にあつた。彼女は暗い部屋の内に居ても、一夏を叔父の傍で送つたあの郊外の家を見ることが出來た。斯樣に早く父に別れるとしたら、何故父の傍に居なかつたらう、何故叔父を遠くから眺めて置かなかつたらう。皆な、世話に成つた義理で――

「可厭だ――可厭だ――」

斯う寢床の中で繰返して、それから復た種々な他の考へに移つて行つた。父も碌に眠られなかつた。何度も寢返を打つた。

未だ夜の明けない中に、實は寢床を離れた。つゞけてお倉やお俊が起きた。

「母親さん、鷄が鳴いてるわねえ。」

と娘は母に言ひながら、寢衣を着更へたり、帶を〆たりした。

赤い釣洋燈の光はションボリと家の内を照らして居た。臺所の方では火が燃えた。やがてお倉は焚落しを十能に取つて、長火鉢の方へ運んだ。そのうちにお延やお鶴も起きて來た。

小泉の家では、先代から佛を祭らなかつた。『御靈樣』と稱へて、神棚だけ飾つてあつた。そこへ實は拜みに行つた。父忠寛は未だその榊の影に居て、子の遠い旅立を送るかのやうにも見える。實は柏手を打つて、先祖の靈に別離を告げた。

お倉やお俊は主人の膳を長火鉢の側に用意した。暗い涙は母子の頰を傳ひつゝあつた。實は一同を集めて、一緒に別離の茶を飲んだ。

復た鷄が鳴いた。夜も白々明け放れるらしかつた。

「皆な、屋外へ出ちや不可よ……家に居なくちや不可よ……」

と實は、屋外まで見送らうとする家のものを制して置いて、獨りで門を出た。强い身體と勇氣とは猶賴めるとしても、彼は年五十を超えて居た。懷中には、神戸の方に居るといふ達雄の宿まで辿りつくだけの旅費しか無かつた。滿洲の野は遠い。生きて還ることは、あるひは期し難かつた。斯うして雄々しい志を抱いて、彼は妻子の住む町を離れて行つた。道路は未だ薄暗かつた。

五

お雪は張物板を抱いて屋並に續いた門の外へ出た。三吉は家に居なかつた。町中に射す十月下旬の日をうけて、門前に立掛けて置いた張物板はよく乾いた。襷掛て、お雪がそれを取込まうとして居ると、めづらしい女の客が訪ねて來た。

「まあ、豊世さん――」

お雪は襷を釋した。張物もそこ〳〵にして、正太の細君を迎へた。

「叔母さん、眞實にお久し振ですねえ。」

と豊世は入口の庭で言つて、絹の着物の音をさせながら上つた。

久し振の上京で、豊世は叔母の顔を見ると、何から言出して可いか解らなかつた。坐蒲團を敷いて坐る前に、お房やお菊の弔みだの、郷里に居る姑からの言傳だの、夫が來てよく世話に成る禮だのを述べた。

「叔母さん、私もこれから相場師の内儀さんなんですよ。」

と軽く笑つて、豊世は自分で自分の境涯の變遷に驚くといふ風であつた。

「種ちやん、御辭儀は？」とお雪は眼を圓くして來た子供に言つた。

「種ちやんも大きく御成なさいましたねえ。」

「豐世叔母さんだよ、お前。」

「種ちやん、一寸來て御覧なさい。叔母さんを覺えて居ますか。好い物を進げますよ。」

種夫は人見知りをして、母の背後に隱れた。

「種ちやん幾歳に成るの?」と豐世が聞いた。

「最早、貴方、三つに成りますよ。」

「早いもんですねえ。自分達の年をとるのは解りませんが、子供を見ると左樣思ひますわ。」

其時、壁によせて寢かしてあつた乳呑兒が泣出した。お雪は抱いて來て、豐世に見せた。

「これが今度お出來なすつた赤さん?」と豐世が言つた。「先には女の御兒さんばかりでしたが、今度は又、男の御兒さんばかし……でも、叔母さんは斯樣にお出來なさるから宜う御座んすわ。」

「幾ちやん。」とお雪は顧みて呼んだ。

お幾はお雪が末の妹で、お延と同じ學校に入つて居た。丁度、寄宿舍から遊びに來た日で、客の爲に茶を入れて出した。

「先によくお目に掛つた方は?」

「愛ちやんですか。あの人は卒業して國へ歸りました。今に、お嫁さんに成る位です。」

「左樣ですかねえ。お俊ちやんなぞが最早立派なお嫁さんですものねえ。」

しばらく靜かな山の中に居て單調な生活に飽いて來た豐世には、見るもの聞くものが新しかつた。正太も既に一戸を構へた。川を隔てゝ、三吉とは左程遠くないところに住んで居た。豐世は多くの希望を抱いて、姑の傍を離れて來たのである。

其日、豐世はあまり長くも話さなかつた。鹽瀨の大將の細君といふ人にも逢つて來たことや、森彦叔父の旅舍へも顏を出したことなぞを言つた。これから一寸買物して歸つて、早く自分の思ふやうに新しい家を整へたいとも言つた。

「叔母さん、奈樣に私は是方へ來るのが樂みだか知れませんでしたよ。お近う御座いますから、復たこれから度々寄せて頂きます。」

斯う豐世は優しく言つて、心忙はしさうに歸つて行つた。お雪は張物板を取込みに出た。

暗くなつてから、三吉は歸つて來た。彼は新規な長い仕事に取掛つた頃であつた。遊び疲れて早く寢た子供の顏を覗きに行つて、それから洋服を脱ぎ始めた。お雪は夫の上衣なぞを受取りながら、

「先刻、豐世さんが被入ッしやいましたよ。橋本の姉さんから小鳥を頂きました。」

「へえ、そいつは珍しい物を貰つたネ。豐世さん、豐世さんッて、よくお前は噂をして居たつけが。奈何だね、あの人の話は。」

「私なぞは……彼様いふ人の傍へは寄れない。」

「よく交際つて見なけりや解らないサ。なにしろ親類が川の周圍へ集つて來たのは面白いよ。」

三吉は白シャツまで脱いだ。そこへ正太がブラリと入つて來た。芝居の噂や長唄の會の話なぞをした後て、

「叔父さん、私は未だ御飯前なんです。」

斯様なことを言出した。その邊へ案内して、初冬らしい夜を語りたいといふのであつた。

「オイ、お雪、今の洋服を出して呉れ。正太さんが飯を食ひに行くと言ふから、俺も一緒に話しに行つて來る。」

「男の方といふものは、氣樂なものですねえ。」

お雪は笑つた。三吉は一旦脱いだ白シャツに復た手を通して、服も着けた。正太は紺色の長い絹を襟巻がはりにして、雪踏の音などをさせながら、叔父と一緒に門を出た。

「何となく君は兜町の方の人らしく成つたネ。時に、正太さん、君は何處へ連れて行く積りかい。」

「叔父さん、今夜は私に任せて下さい。種々御世話にも成りましたから、今夜は私に奢らせて下さい。」

斯う二人は話しながら歩いた。

町々の灯は歡樂の世界へと正太の心を誘ふやうに見えた。昂つたとか、降つたとか言つて、賣つたり

買つたりする取引場の喧囂――浮沈する人々の變遷――狂人のやうな眼――激しく罵る聲――左樣いふ混雜の中で、正太は毎日のやうに刺激を受けた。彼は家にジッとして居られなかつた。夜の火をめがけて羽蟲が飛ぶやうに、自然と彼の足は他の遊びに行く方へ向いて居た。電車で、ある停留場まで乘つて、正太は更に車を二臺命じた。車は大きな橋を渡つて、また小さな橋を渡つた。

風は無いが、冷える晩であつた。三吉は正太に案内されて、廣い靜かな座敷へ來て居た。水に臨んだ方は硝子戸と雨戸が二重に閉めてあつて、それが内の障子の嵌硝子から寒さうに透けて見えた。

女中が火を運んで來た。洋服で震へて來た三吉は、大きな食卓の側に火鉢を擁えて、先づ凍えた身體を溫めた。

正太は料理を通して置いて、

『それからねえ、姉さん、小金さんに一つ掛けて下さい。』

『小金さんは今、彼方の御座敷です。』

『「先程は電話で失禮、」――左樣仰つて下されば解ります。』

それを聞いて、女中は出て行つた。

『叔父さん、斯うして名刺を一枚出しさへすれば、何處へ行つても通ります――鹽瀨の店は今兜町で

も賢ッ子なんですからネ。』と正太は、紙入から自分の名刺を取出して、食卓の上に置いて見せた。

正太の話は兜町の生活に移つて行つた。漸く鹽瀨の大將に知られて重なる店員の一人と成つたこと、その爲には隨分働きもしたもので、他の嫌がる帳簿は二晩も寢ずに整理したことを叔父に話した。彼は又、相場師生活の一例として、仕立てたばかりの春衣が仕附絲のまゝ、年の暮に七つ屋の藏へ行くことなぞを話した。

『左樣言へば、今は實に可恐しい時代ですネ。』と正太は思出したやうに、『此頃、私がお俊ちやんの家へ寄つて、「鶴ちやん、お前さんは大きく成つたら奈樣なところへお嫁に行くネ」と聞きましたら――あんな子供がですよ――軍人さんはお金が無いし、お醫者さんはお金が有つても忙しいし、美い着物が着られてお金があるから大きな呉服屋さんへお嫁に行きたいんですト――それを聞いた時は、私はゾーとしましたネ。可恐しい虚榮心だ。』

斯樣な話をして居るうちに、料理が食卓の上に並んだ。小金が來た。小金は三吉に挨拶して、馴々しく正太の傍へ寄つた。親孝行なとても言ひそうな、溫順しい、盛りの年頃の妓だ。

『橋本さん、老松姐さんもこゝへ呼びませう――今、御座敷へ來てますから。』

と言つて、小金は重い贅澤な着物の音をさせながら出て行つた。

土地に居着のものは、昔の深川藝者の面影がある。それを正太は叔父に見て貰ひたかつた。斯ういふところへ來て、彼は江戸の香を嗅ぎ、殘つた音曲を耳にし、通人の遺風を樂しまうとして居た。

小金、老松、それから今一人の年増が一緒に興を添えに來た。老松は未だ何處かに色香の名殘をとゞめたやうな老妓で、白い、細い、指輪を嵌めた手で、酒を勸めた。

『老松さん、今夜は斯ういふ客を連れて來ました。』と正太が言つた。『御馳走に、何か面白い歌を聞かせて進げて下さい。』

老松は三吉の方を見て、神經質な額と眼とで一寸挨拶した。

『どうです、この二人は――何方がこれで年長と見えます。』と復た正太が言つた。

『老松姐さん、私は是方の方がお若いと思ふわ。』と小金が三吉を指して見せた。

『私も左樣思ふ。』と老松は三吉と正太とを見比べた。

『ホラ――ネ。皆な左樣言ふ。』と正太は笑つて、『これは私の叔父さんですよ。』

『是方が橋本さんの叔父さん？』老松は手を打つて笑つた。

『叔父さんは好かつた。』と小金と老松の間に居る年増も噴飯した。

『眞實の叔父さんだよ。』と正太は遮つて見たが、しかし餘儀なく笑つた。

『叔父さん！　叔父さん！』

老松や小金はわざとらしく言つた。皆な三吉の方へ向いて、一つづゝ御辭儀した。そして、クス〱笑つた。三吉も笑はずに居られなかつた。

『私の方が、これで叔父さんよりは老けてると見える。』と正太が言つた。

小金は肥つた手を振つて、『そんな嘘を吐かなくつても宜う御座んすよ。眞實に、橋本さんは擔ぐのがウマいよ。』
『叔父さん、へえ、御酌。』と老松は調子を持ち添えて、戯れるやうに言つた。
『私にも一つ頂かせて下さいな。』と年増は寒さうにガタ〳〵震へた。
電燈は花のやうに皆なの顔に映つた。長い夜の時は靜かに移り過ぎた。硝子戸の外にある石垣の下の方では、音のしない川が流れて行くらしかつた。老松は好い聲で、浮々とさせるやうな小唄を歌つた。正太の所望で、三人の妓は三味線の調子を合せて、古雅なメリヤス物を彈いた。正太は、酒はあまり遣らない方であるが、面長な澁味のある顔をすこし染めて、しみ〳〵とした醉心地に成つた。
『貴方。何かお遣り遊ばせな。』と老松が三吉の傍に居て言つた。
『私ですか。』と三吉は笑つて、『私は唯、斯うして拜見して居るのが樂みなんです。』
老松は冷やかに笑つた。
『叔父さん、貴方の前ですが……こゝに居る金ちやんはネ、ずつと以前にある友達が私に紹介して呉れた人なんです……私は未だ浪人して居ましたらう、あの時分この下の川を蒸氣で通る度に、是方の方を睨んでは、早く兜町の人に成れたら、左樣思ひ〳〵しましたよ……』
『ヨウ〳〵。』といふ聲が酒を飲む妓達の間に起つた。
『橋本さん。』と老松は手を揉んで、酒が身體にシミルといふ容子をした。『貴方——早く關けて下さい

よ。』

次第に周圍はヒッソリとして來た。正太は歸ることを忘れた人のやうであつた。叔父が煙草を燻して居る前で、正太は長く小金の耳を借りた。

『私には踊れないんですもの。』と小金は、終に、他に聞えるやうに言つた。

醉に乗じた老松の端唄が口唇を衝いて出た。紅白粉に浮身を窶すもの、早い凋落を傷むといふ風で、『若い時は最早行つて了つた、』と嘆息するやうに口ずさんだ。食卓の上には、妓の爲に取寄せた皿もあつた。年增は殘つた蒲鉾だのキントンだのを引寄せて、默つて食つた。

やがて十二時近かつた。三吉は醉つた甥が風邪を引かないやうにと女中によく頼んで置いて、獨りで家までの車を命じた。女中や三人の妓は玄關まで見送りに出た。三吉が車に乘つた時は、未だ女達の笑聲が絶えなかつた。

『叔父さん！　叔父さん！』

すこし話したいことが有る。斯ういふ森彥の葉書を受取つて、三吉は兄の旅舍を訪ねた。二階の部屋から見える青桐の葉はすつかり落ちて居た。

『來たか。』

森彦の挨拶はそれほど簡短なものであつた。

短く白髪を刈込んだ一人の客が、森彦と相對に碁盤を控いて、煙管を咬えて居た。斯の人は森彦の親友で、實や直樹の父親なぞと事業を共にしたことも有る。

「三吉。今一勝負濟ますから、待てや、黑を渡すか、白を受取るかといふ天下分目のところだ。」

「失禮します。」

斯う兄と客とは三吉に言つて、復た碁盤を眺めた。兩方で打つ碁石は、二人の長い交際と、近づきつゝある老年とを思はせるやうに、ポツリ／＼と間を置いては沈んだ音がした。

一石終つた。客は歸つて行つた。森彦は弟の方へ肥つた體軀を向けた。

「葉書の用は他でも無いがネ、どうも近頃正太のやつが遊び出したさうだテ。碌に儲けもしないうちから、最早彼の野郎遊びなぞを始めてケツカル。」

斯う森彦が言出したので、思はず三吉の方は微笑んだ。

「實は、二三日前に豐世がやつて來てネ、「困つたものだ」と言ふから俺がよく聞いて見た。なんでも小金といふ藝者が有つて、その女に正太が熱く成つてるさうだ。豐世の言ふところも無理が無いテ。彼女が顯瀬の大將に逢つた時に、「橋本さんも少し氣を付けて貰はないと――」といふ心配らしい話が有つたトサ。折角あそこまで漕ぎ着けたものだ。今信用を落しちやツマラン。叔父さんからでも注意して貰ひたい」斯う彼女が言ふサ。」

「その女なら、私も此頃正太さんと一緒に一度逢ひました……あれを豊世さんが心配してるんですか。そんな危げのある女でも無さそうですがナア。私の見たところでは、お目出度いやうな人でしたよ。」

「復た阿爺の轍を履みはしないか、それを豊世は恐れてる。」

「しかし、兜町の連中などは酒席が交際場裏だと言ふ位です。鹽瀬の大將だつても妾が幾人もあると言ふ話です。部下のものが飲みに行く位のことは何とも思つてやしないんでせう。大將が其様なことを言ひそうも無い……豊世さんの方で心配し過ぎるんぢや有りませんか。」

「俺は、まあ、何方だか知らないが――」

「其様なことは放擲して置いたら可いでせう。左樣ホジクらないで……私に言はせると、何故そんなに遊ぶと責めるよりか、何故もつと儲けないと責めた方が可い。」

森彦は長火鉢の上で手を揉んだ。

「どうも彼は質がワルイテ。すこしばかり儲けた錢で、女に貢ぐ位が彼の身上サ。斯う見るのに、時々彼が口を開いて、極く安ッぽい笑ひ方をする……あんな笑ひ方をする人間は直ぐ他に腹の底を見透されて了ふ……そこへ行くと、橋本の姉さんなり、豊世なりだ、餘程彼よりは上手だ。吾儕の親類の中で、彼の細君が一番エライと俺は思つてる。細君に心配されるやうな人間は高が知れてるサ。」

「ですけれど――私は、貴方が言ふほど正太さんを安くも見て居ないし、貴方が買つてる程には、橋本の姉さんや豊世さんを見ても居ません。丁度姉さんや豊世さんは貴方が思ふやうな人達です。しかし、

彼の人達は自分で自分を買過ぎてやしませんかネ。」

「左様サ。自分で高く買被つてるやうなところは有るナ。」

兄は弟の顔をよく見た。

「女の方の病氣さへなければ、橋本父子に言ふことは無い——それが彼の人達の根本の思想です。だから、彼樣して女の關係ばかり苦にしてる。まだ他に心配して可いことが有りやしませんか。生活といふものを眞面目に思つて居ない、その點から言へば、彼の人達だつてもつと考へなけりや不可と思ひます……達雄さんが女に弱くて、それで家を捨てるやうに成いた——左樣一圖に彼の人達は思ひ込んで了ふから困る。」

兄は、弟が來て、一體誰に意見を始めたのか、といふ眼付をした。

「しかし、」と三吉はすこし萎れて、「正太さんも、仕事をするといふ質の人では無いかも知れませんナア。」

「彼が相場で儲けたら、俺は御目に懸りたいよ。」

「ホラ、去年の夏、近松の研究が有りましたあネ。丁度盆の芝居でしたサ。あの時は、正太さんも行き、彼も延も行きました。博多小女郎浪枕。私はあの芝居を見物して歸つて來て、復た淨瑠璃本を開けて見ました。宗七といふ男が出て來ます。優美慇懃な彼の時代の浪華趣味を解するやうな人なんです。それで居て、猛烈な感情家でサ。長崎までも行つて商賣をしやうといふ冒險な氣風を帶びた男です。物

に溺れるなんてことも、極端まで行くんてせうネ……何處か斯う正太さんは彼の宗七に似たやうな人てす。正太さんを見る度に、私はよく左樣思ひ〳〵します――」

「彼の阿爺が宗七だ――彼は宗七第二世だ。」

兄弟は笑出した。

「それは左樣と、俺の方でも呼び寄せて、彼によく言つて置く。細君を心配させるやうなことぢや不可からネ。お前からも何とか言つて遣つて吳れ。」と森彥が言つた。

「去年の夏以來、私は意見をする權利が無いとつく〴〵思つて來ました。」と三吉は意味の通じないやうなことを言つて、笑つて、「兎に角、謹み給へ位のことは言つて置きませう。」

遠く滿洲の方へ行つた實の噂、お俊の緣談などをして、弟は歸つた。

正太は兜町の方に居た。塩瀨の店では、皆な一日の仕事に倦んだ頃であつた。テエブルの周圍に腰掛けるやら、金庫の前に集るやらして、芝居見物の話、引幕の相談などに疲勞を忘れて居た。煙草のけふりは白い渦を卷いて、奧の方まで入つて行つた。

土藏の前には明るい部屋が有つた。正太は前に机を控えて、幹部の人達と茶を喫んで居た。小僧が郵便を持つて來た。正太宛だ。三吉から出した手紙だ。家の方へ送らずに、店へ宛てゝ寄すとは。不思議

に思ひながら、開けて見ると、内には手紙も無くて、水天宮の護符が一枚入れてあつた。

正太はその意味を讀んだ。思はず拳を堅めてペン軸を飛上るほど机をクラはせた。

「橋本君、そりや何だネ。」と幹部の一人が聞いた。

「斯ういふ譯サ。」正太は下口唇を嚙みながら笑つた。「昨日一人の叔父が電話で出て來いといふから、僕が店から歸りがけに寄つたサ。すると、例の一件ネ。あの話が出て、可恐しい御目玉を頂戴した。この叔父の方からも、いづれ何か小言が出る。それを僕は豫期して居た。果して斯樣なものを送つて寄した。」

「何の洒落だい。」

「こりや、君、僕に……水除にしろといふ謎だネ。」

「意見の仕方にもいろ〳〵有るナア。」

幹部の人達は皆な笑つた。

其日、正太は種々な感慨に耽つた。不取敢叔父へ宛てゝ、自分も亦た男である、素志を貫かずには置かない、といふ意味を葉書に認めた。仕事をそこゝゝにして、横手の格子口から鹽瀬の店を出た。細い路次の角のところに、牛乳を溫めて賣る屋臺があつた。正太はそれを一合ばかり飲んで、電車で三吉の家の方へ向つた。

叔父の顏が見たくて、寄ると、丁度長火鉢の周圍に皆な集つて居た。正太は叔父の家で、自分の妻と

も落合つた。

「正太さん、妙なものが行きましたらう。」

と三吉は豐世やお雪の居るところで言つて、笑つて、他の話に移らうとした。豐世は叔父と相對の席を夫に讓つた。自分の敷いて居た座蒲團を裏返しにして、夫に勸めた。

「叔父さん、確かに拜見しました。」と正太が言つた。「私から御返事を出しましたが、それは未だ屆きますまい。」

豐世は夫の方を見たり、叔父や叔母の方を見たりして、「私は先刻から來て座り込んで居ます……ねえ、叔母さん……何か私が言ふと、宅は直ぐ「三吉叔火さんの許へ行つて聞いて御覽」なんて……」

斯樣な話を、豐世も諄くはしなかつた。彼女は夫から卷煙草を貰つて、一緒に睦まじさうに吸つた。

「バア。」

三吉は傍へ來た種夫の方へ向いて、可笑な顏をして見せた。

「叔母さん、私も子供でも有つたら……よく左樣思ひますわ。」と豐世が言つた。

「豐世さんの許でも、御一人位御出來に成つても……」とお雪は茶を入れて欵待しながら。

「御座いますまいよ。」豐世は萎れた。

「醫者に診て貰つたら奈何です。」と言つて、三吉は種夫を膝の上に乘せた。

「宅では、私が惡いから、それで子供が無いなんて申しますけれど……何方が惡いか知れやしませ

ん。」

「俺は子供が無い方が好い。」と正太は何か思出したやうに。

「あんな負惜みを言つて。」

と豊世が笑つたので、お雪も一緒に成つて笑つた。

豊世は一歩先へ歸つた。正太は叔父に随いて二階の樓梯を上つた。甥と對ひ向つて話して居るうちに、三吉の胸にはお俊のことが浮んだり失くなつたりした。

正太は三吉から受取つた手紙の禮を言つた後で、

「豊世なぞは解らないから困ります。そりや藝者にもいろ〳〵あります。ミズの階級も有ります。しかし、叔父さん、土地で指でも折られる位のものは、左様素人が思ふやうなものぢや有りません。彼の社會は彼の社會で、一種の心意氣といふものが有ります。それが無ければ、誰が……教育あり品性ある妻を置いて……」

「いゝえ、僕はネ、君が下宿時代のことを忘れさへしなけりや――」

「難有う御座います。あの御守は紙入の中に入れて、斯うしてちやんと持つてます。今日は大に考へました。」

斯う言つて、正太は激昂した眼付をした。彼は、眞面目で居るのか、不眞面目で居るのか、自分ながら解らないやうに思つた。「兎に角肉的なと言つたら、私は素人の女の方が何の位肉的だか知れないと

思ひます……」斯様なことまで叔父に話して、微笑んで見せた。
「正太さん、何故君は其様に皆なから心配されるのかね。」
「どうも……叔父さんに左様聞かれても困ります。」
「世の中には、君、随分仕たいことを仕て居ながら、左様心配されない人もありますぜ。君のやうにヤイヽヽ言はれなくても可さそうなものだ……何となく君は危いやうな感じを起させる人なんだネ。」
「それです。鹽瀨の店のものも左様言ひます――何處か不安なところが有ると見える――こりや大に省みなけりや不可ぞ。」
其時、お雪が階下から上つて來て聲を掛けた。
「父さん、今子が見えました。」
親戚の客があると聞いて、正太は叔父と一緒に二階を下りた。
「正太さん、この方がお福さんの旦那さんです。」
商用の爲に一寸上京した勉を、三吉は甥に紹介した。勉は名倉の母からの屆け物と言つて、鯣、數の子、鰹節などの包をお雪の方へ出した。

大掃除の日は、塵埃を山のやうに積んだ荷馬車が三吉の家の前を通り過ぎた。疊を叩く音がそこにも

こゝにした。長い袖の着物を着て往來を步くやうな人達まで、手拭を冠つて、煤と埃の中に寒い一日を送つた。巡査は家々の入口に檢查濟の札を貼付けて行つた。

早く暮れた。お雪は汚れた上掩を脫いて、子供や下婢と一緒に湯へ行つた。改まつたやうな心地のする疊の上で、三吉はめづらしく鄕里から出て來た橋本の番頭を迎へた。

「今御新造さん(豐世)が買物に行くと言つて、そこまで送つて來て吳れました。久し振で東京へ出たら、サッパリ樣子が解りません。」

斯う番頭が言つて、橋本の家風を思はせるやうな、行儀の好い、前垂を掛けた膝を長火鉢の方へ進めた。

番頭は幸作と言つた。大番頭の嘉助が存命の頃は、手代としてその下に働いて居たが、今は斯の人が藥方を預つて、一切のことを切盛して居る。舊い橋本の家は斯の若い番頭の力で主に支へられて來たやうなもので有つた。幸作は正太よりも年少であつた。

黑光りのした大黑柱なぞを見慣れた眼で、幸作は煤掃した後の狹細しい町家の內部を眺め廻した。大旦那の噂を始めた。鄕里の方に留守居するお種――正太の母、三吉の姉――の話もそれに連れて出た。

「どうも大御新造(お種)の樣子を見るに、大旦那でも歸つて來て吳れたら、それはかり思つておいでなさる。もうすこし安心させるやうな工風は無いものでせうか。」

世辭も飾りも無い調子て、幸作は主人のことを案じ顏に言つた。姉の消息は三吉も聞きたいと思つて

居た。
「姉さんは、君、未だ其樣な風ですかネ。」
「近頃は復た寢たり起きたりして――」
「困るねえ。」
「私ゃ實に弱つて了ひました。今更、大旦那を呼ぶ譯にもいかず――」
「達雄さんが歸ると言つて見たところで、誰も承知するものは無いでせう。僕も實は氣の毒な人だと思つて居ます……ねえ、君、實際氣の毒な……と言つて、今こゝで君等が生優しい心を出して見給へ、達雄さんの爲にも成りませんやね。」
「私も、まあ左樣思つて居ます。」
「よく〳〵達雄さんも窮つて――病氣にでも成るとかサ――左樣いふ場合は格別ですが、下手なことは見合せた方が可いネ。」
「大御新造が彼樣いふ方ですから、私も間に入つて、奈何したものかと思ひまして――」
「斯う藥の手傳ひでもして、子のことを考へて行くやうな、沈着いた心には成れないものですかねえ。その方が可いがナア。」
「左樣いふ氣分に成つて呉れると難有いんですけれど。」
「姉さんに左樣言つて呉れ給へ――もし達雄さんが窮つて來たら、「窮るなら散々御窮りなさい……よ

く御考へなさい……是處は貴方の家ぢや有りません」ッて。もし眞實に達雄さんの眼が覺めて、「乃公はワルかつた、」と言つて詫びて來る日が有りましたら、其時は主人公の席を設けて、そこで始めて旦那を迎へたら可いてせうッて——」

幸作は深い溜息を吐いた。

「實に妙なものです。こゝは私も一つ踏張らんけりや不可、と思つて、大新造の前では強いことを言つて居ますが……時々私は夢を見ます。大旦那が大黒柱に倚凭つて、私のことを「幸作！」と呼んで居るやうな——彼樣なヒドイ目に逢ひながら、私はよく左樣いふ夢を見ます。すると、眼が覺めた後で、私は奈何な無理なことでも聞かなければ成らないやうな氣がします……」

斯う話して居るところへ、お雪が湯から歸つて來た。三吉は妻の方を見て、

「オイ、幸作さんから橋本の藥を頂いたぜ。」

「毎度子供の持藥に頂かせて居ります。」

とお雪は湯上りのすこし逆上せたやうな眼付をして、禮を言つた。

幸作の話は若旦那のことに移つた。小金の噂が出た。彼は正太の身の上をも深く案じ顏に見えた。

「實は御新造さんから手紙が來て、相談したいことが有ると言ふもんですから、それで私も名古屋の方から廻つて來ました。」

「へえ、その爲に君は出て來たんてすか。そんなに大騷ぎしなくても可いことでせう。豐世さんもあ

んまり氣を揉み過ぎる。」

「何ですか心配なやうな手紙でしたから、大御新造には內證で。」

「左樣突つ突き散らかすと、反つていけませんよ。」

其晩、幸作は若旦那の家の方へ寢に行つた。

復たポカ〳〵する季節が來た。三吉が家から二つばかり横町を隔てた河岸のところには、黃ばんだ柳の花が垂下つた。石垣の下は、荷舟などの淀泊する河口で、濁つた黑ずんだ水が電車の通る橋の下の方から春らしい欠伸をしながら流れて來た。

斯の季節から、お菊やお房の死んだ時分へかけて、毎年のやうに三吉は頭腦が病めた。子を失ふまでは、彼も斯樣な傷みを知らなかつたのである。半ば病人のやうな眼付をして、彼は柳並木の下を往つたり來たりした。白壁にあたる溫暖い日は彼の眼に映つた。その焦々と萌え立つやうな光の中には、折角彼の始めた長い仕事が思はしく果取らないといふモドカシさが有つた。稼ぎに追はれる世帶持の悲しさが有つた。石垣に近く漕いで通る船は丁度彼の心のやうに動搖した。

三吉は土藏の間にある細い小路の一つを元來た方へ引返して行つた。彼は斯ういふ小路だけを通り拔けて家まで戻ることが出來た。

お俊の母親が彼を待受けて居た。

『姉さんが先刻から被入つて、貴方を待つてますよ。』

とお雪は長火鉢の傍で言つた。煙草を吸付けて、それを嫂にすゝめて居た。

金の話は兎角親類を氣まづくさせた。それに仕事の屈託で、髮も刈らず髭も剃らず、寢起のやうに憂鬱な三吉の顏を見ると、お倉は言はうと思ふことを言ひ兼ねた。不幸な嫂の話は廻りくどかつた。

『畢竟、先方の家では宗さんの世話が出來ないと言ふんですか。』

斯う言つて三吉は遮つた。

『いえ、左樣いふ譯ぢや無いんですよ。』とお倉は寂しさうに微笑みながら、『先方だつても彼の通り遊んで居るもんですから、世話をしたいは山々なんです。なにしろ手の要る病人ですからねえ。それに物價はお高く成るばかりですし……』

復た々々お倉の話は横道の方へ外れさうなので、三吉の方では結末を急がうとした。

『あれだけ有つたら、いきさうなものですがナア。』

『そこですよ。もう二圓ばかりも月々増して頂かなければ、御世話が出來かねるといふんです。』

『姉さん、奈何です。』と三吉は串談のやうに、『貴方の方で宗さんを引取つては。私の方から每月の分を進げるとしたら、その方が反つて經濟ぢや有りませんか。』

『眞平。』とお倉は痩細つた身體を震はせた。『宗さんと一緒に住むのは、死んでも御免だ。』

傍に聞いて居るお雪も微笑んだ。

病身な宗藏は、實の家族から、「最早お目出度く成りさうなもの」と言はれるほど厄介に思はれながら、未だ生きて居た。實の出發後は、三吉が斯の病人の世話料を引受けて、月々お俊の家へ渡して居た。奈何に三吉の方て頭腦の具合の惡い時ても、要るだけのものは要つた。無慈悲な困窮は迫るやうに實の家族の足を運ばせた。

「折角、姉さんに來て頂いたんてすけれど、今日は困りましたナア。」

と三吉は額に手を宛てた。兎に角、增額を承諾した。金は次の日お俊に取りに來るやうにと願つた。

お俊が緣談も出た。

「御蔭樣て、結納も交換しました。これて、まあ私もすこし安心しました。」

とお倉はお雪の方を見て言つた。

斯の緣談が纒まるにつけても、お俊の親に成るものは森彥と三吉より他に無かつた。森彥の發議て、二人はお俊の爲めに互に金を出し合つて、一通りの結婚の準備をさせることにした。

「姉さん、まあ御話しなすつて下さい。私は多忙しい時てすから、一寸失禮します。」

斯う言ひ置いて、三吉は二階の部屋へ上つて行つた。

仕事は碌に手につかなかつた。三吉が步きに行つて來た方から射し込む日は、部屋の障子に映つた。河岸の白壁のところに見て來た光は、自分の部屋の黄ばんだ壁にもあつた。それを眺めて居ると、仕事、

仕事と言つて、彼がアクセクして居ることは、唯身内の者の爲に苦勞して居るに過ぎないかとも思はせた。

「一寸俺は用達に行つて來る。着物を出して呉んナ。」

三吉は二階から下りて來て、身仕度を始めた。お倉は未だ話し込んで居た。お雪は白足袋の洗濯したのを幾足か取出して見て、

「一二度外へ行つて來ると、もう其は穿かないんですから、幾足あつたつて堪りませんよ。」

斯樣なことを言つて笑ひ乍ら、中でも好ささうなのを擇つて夫に渡した。三吉は無雜作に綴合せた糸を切つて、縮んだ足袋を無理に自分の足に塡めた。

「姉さん、」と三吉はコハゼを掛けながら、「滿洲の方から御便は有りますか。」

「えゝ、無事で働いて居りますさうです――皆さんにも宜敷申上げるやうにッて、先頃も手紙が參りました。」

「ウマくやつて呉れると可う御座んすがナア。」

「さあ、私も左樣思つて居ます。」

「まだ家の方へ仕送りをするといふところ迄いきませんかネ。」

「どうして……ても、まあ彼方に親切な方が有りまして、よく見て下さるさうです。」

頼り無いお倉は『親切』などといふ言葉に力を入れ〳〵した。娘を殘して置いて、三吉は家を出た。

森彦は旅舍の方に居た。丁度弟が訪ねて行つた時は、電話口から二階の部屋へ戻つたところで、一寸手紙を書くからと言ひながら、机に對つていそがしさうに筆を走らせた。軈てその手紙を讀返して見て、封をして、三吉の方へ向くと同時に手を鳴らした。

「これは急ぎの手紙ですから、直に出して下さい。」

と森彦は女中に言附けて置いて、それから弟の顏を眺めた。

「今日はすこし御願が有つてやつて來ました。」

斯ういふ三吉の意味を、森彦は直に讀むやうな人であつた。「まあ、待てよ。」と起上つて、戸棚の中から新しい菓子の入つた鑵を取出した。

「貴方の方で宗さんの分を立替べて置いて頂きたいもんですがナア。」と三吉は切出した。

「ホヽ、お前の方でも左樣か。」と森彦は苦笑して、「俺は又、お前の方で出來るだらうと思つて、未だお俊の家へは送れないで居るところだ――困る時には一緒だナア。」

二人の話は宗藏や實の家族の噂に移つて行つた。

「眞實に、宗藏の奴は困り者だよ。人間だから彼樣して生きて居られるんだ。これがもし獸で御覽、彼樣な奴は疾に食はれて了つてるんだ。」

「生きたくないと思つたつて、生きるだけは生きなけりや成りません……宗さんのも苦しい生活ですネ。」

「いえ、第一、彼奴の心得方が間違つてるサ。廢人なら廢人らしく神妙にして、皆なの言ふことに從はんけりや成らん。どうかすると、彼奴は逆捩を食はせる奴だ……だから世話の仕手も無いやうなことに成つて了ふ。」

「一體、吾儕が斯うして――殆んど一生掛つて――身内のものを助けて居るのは、それが果して好い事か惡い事か、私には解らなく成つて來ました。貴方なぞは奈何思ひますネ。」

森彦は默つて弟の言ふことを聞いて居た。

「吾儕が兄弟の爲に計つたことは、皆な初めに思つたこととは違つて來ました。俊を學校へ入れたのは、彼女に獨立の出來る道を立てゝやつて、母親さんを養はせる積りだつたんでせう。ところが、彼女は學校の敎師なぞには向かない娘に育つて了ひました。姉さんだつても左樣でせう、弱い〳〵て、可傷られるうちに、今では最早眞實に弱い人です。吾儕は長い間掛つて、兄弟に倚慿ることを敎えたやうなものぢや有りませんか……名倉の阿爺なぞに言はせると、吾儕が兄弟を助けるのは間違つてる。借金しても人を助けるなんて、其樣な法は無いといふんです。」

「むゝ、それも一理ある。」と森彦は快活な聲で笑出した。「確かに、阿爺さんのは強い心から來て居る。それが阿爺さんをして名倉の家を興させた所以でもある。確かに、それは一つの見方に相違ない。が、

俺は俺て又別の見方をして居る。斯うして十年も旅舍に寢轉んで、何事を爲てるんだか解らない人だと世間から思はれても、別に俺は世間の人に迷惑を掛けた覺は無し、兄貴のところなぞから鐚一文でも貰つて出たものでは無いが、それでも彼樣して俊の家を助けて居る――俺は俺の爲ることを爲てる積りだ。」

「これがネ、一月や二月なら何でもないんですが、長い年月の間となると、隨分苦しい時が有りますネ。」

「いや、どうして、ナカ〳〵苦しい時があるよ。」

兄の笑聲に力を得て、三吉は他に工面する積りで起上つた。何のかんのと言つて見たところで、弱い人達が生きて居る以上は、どうしてもそれを助けない譯にいかなかつた。「食はせて呉れゝば食ふし、食はせて呉れなければ其迄。」と言つたやうな、宗藏の横に成つた病軀には實に強い力が有つた。

「左樣かい。折角來たのに御氣の毒でした。」

と森彥は弟を見送りに出て言つた。

お俊は三吉叔父の家をさして急いで來た。未來の夫としてお俊が擇んだ人は、丁度彼女と同じやうな舊家に生れた壯年であつた。ふとしたことから、彼女はその爽快で沈着な人となりを知るやうに成つた

のである。斯の縁談が、結納を交換すまでに運ぶには、彼女は一通りならぬ苦心を重ねた。隨分長い間かゝつた。一旦談が絶えた。復た結ばれた。其間には、叔父達は早くキマリを付けさせやうとばかりして、彼女の心を思はないやうなことが多かつた。『奈何ても叔父さん達の宜しいやうに、』斯う餘儀なく言ひ放つた場合にも、心には斯の縁談の結ばれることを願つたのであつた。

三吉叔父の矛盾した行爲には、彼女を呆れさせることが有る。叔父は一度、ある演壇へ彼の短い體軀を運んだ。その時はお延も一緒で、婦人席に居て傍聽した。叔父が『女も眼を開いて男を見なければ不可』と言つたことは、未だ忘られずにある。その叔父が姪の眼を開くことは奈何でも可いやうな仕向が多かつた。叔父は自分に都合の好いやうな無理な注文ばかりした。

小泉の家の零落――それがお俊には唯悲しかつた。それを思ふと、涙が流れた。

叔母のお雪は門のところに居た。種夫を背中に乘せて樂隊の通るのを見せて居た。

『種ちやん、おんぶて好う御座んすね。』

斯う言つて、お俊は叔母と一緒に家の内へ入つた。

三吉は二階で仕事を急いで居た。お俊が樓梯を上つて、挨拶に行くと、急に叔父は嚴格に成つた。

『叔父さん、昨日は母親さんが上りまして――』

とお俊は手を突いて言つた。

『オヽ、お前が來るだらうと思つて、待つて居た。まあ、是方へお入り。』

お俊の前に堅く成つて座つて居る三吉は、樂しい一夏を郊外で一緒に送つた頃の叔父とは別の人のやうで有つた。よく可笑な顔付をして、鼻の先へ皺を寄せたり、口唇を歪めたりして、まるで古い能の面にでも有りさうなトボケた人相をして見せて、お俊やお延を笑はせたやうな、そんな忸々しさは見られなかつた。

三吉は自分でもそれに氣がついて居た。お俊と相對に成ると、我知らず道德家めいた口調に成ることを、深く羞ぢて居た。そして、言ふことが何となく虛僞らしく自分の耳にも響くことを、心苦しく思つて居た。不思議にも、彼はそれを奈何することも出來なかつた……お俊の結婚に就いても、もつとユックリした氣分で、斯うしたら可からうとか、彼樣したら可からうとか、種々話してやりたいと心に思つて居た。妙に口へ出て來なかつた……唯……『叔母さんの留守に、叔父さんは私の手を握りました――』と人に言はれさうな氣がして、お俊の顔を見ると何事も言へなかつた。奈何な爲になることを言つても、爲ても、皆なその一點に打消されて了ふやうな氣もした。三吉は心配して作つて置いた約束の金を取出した。苦しむ獸のやうな眼付をして、それを姪の前に置いた。

『何故、叔父さんは斯うだらう……』

とお俊は自分で自分に言つて見て、宗藏の世話料を受取つた。

長くも居られないやうな氣がして、お俊は一寸禮を述べて、やがて階下へ下りた。

お雪の居る部屋には、仕事が一ぱいにひろげてあつた。叔母は長火鉢のところで茶を入れて、キヌカ

ツギなぞを取出しながら、姪と一緒に上野や向島の噂をした。

「父さん、御茶が入りました。」

とお雪は樓梯の下から聲を掛けたので、三吉も下りて來た。三人一緒に成つてからは、三吉も機嫌を直した。叔母や姪は睦ましさうに笑つた。

何處までもお俊は氣をタシカに持つて、言ふことだけは叔父に言つて置かうといふ風で、

「叔父さん――昨日母親さんに御話が有つたさうですが、宗藏叔父さんと一緒に成ることは御斷り申します。」

と跼りがけに、口惜しさうに言つた。

三吉は苦笑した。腹の中で、「なにも俺は、無理に一緒に成れと言つたんぢや無いんだ――串談半分に、一寸そんなことを言つて見たんだ――お前達は左樣釋つて了ふから困る、」斯うも思つたが、あまりお俊にキッパリ出られたので、それを言ふ氣に成らなかつた。

姪が跼つて行つた後で、三吉は深い溜息を吐いた。

「何故、俊は彼樣だらう。」

とお雪に言つて見た。叔父の心は姪に解らず、姪の心は叔父に解らなかつた。

不意な出來事が實の留守宅に起つた。お鶴を病院へ入れなければ成らない。斯の報知を持つて、お延は三吉の家へ飛んで來た。不圖した災難が因で、お鶴は發熱するやうに成つたのであつた。

間もなくお鶴は病院の方へ運ばれた。一週間ばかり煩つた後で、腦膜炎で亡くなつた。

河岸の柳の花も落ち始める頃、三吉は不幸な娘の爲に通夜をする積りで、お俊の家をさして出來けた。お雪も、子供を下婢に托して置いて、夫よりは一歩先に出た。

親戚は實の留守宅へ集つて來た。森彥、正太夫婦を始め、お俊が父方の遠い親戚とか、母方の緣者とか、左樣いふ人達まで吊みを言ひ入れに來た。混雜したところへ、丁度三吉も春先の泥をこねてやつて來た。「鶴ちやんも、可哀さうなことをしましたね。」斯ういふ言葉が其處にも是處にも交換された。

臺所の方には女達が働いて居た。豊世の他に、襷掛けの細君が腰を曲めて、しきりと何か洗つて居た。その細君が三吉の方へ向いた。お雪であつた。

「こゝの家は神葬祭だネ。禰宜樣を頼まんけりや成るまい。」と森彥はお倉の方を見て言つた。

「宗さんの舊い歌仲間で、神主をしてる人があります。」とお倉が答へた。「母親さんの生きてる時分には、よくその人を頼んで來て貰ひました。」

「よし。では、正太は氣の毒だが、その禰宜樣のところへ行つて來て呉れや。」

「正太さん、僕も一緒に行きませう。」

と三吉は甥の側へ寄つた。

遠い神主の寓居の方から、三吉、正太の二人が歸つて來た頃は、近い親戚のものだけ殘つた。お倉は取るものも手に着かないといふ風で、唯もう狼狽して居た。お俊は一人で氣を揉んだ。會計も娘が預つた。

「お雪。」と三吉が聲を掛けた。「お前は今日は御免蒙つたら可からう。」

「叔母さん、何卒御歸りなすつて下さい。」とお俊が言つた。

奥に机を控えて居た森彦は振向いた。「左樣だ。子持は歸るが可い。俺も斯の葉書を書いたら、今日は歸る……通知は成るべく多く出した方が可いぞ……俊、もつと葉書を出すところはないか。郷里の方からもウント香典を寄して貰はんけりや成らん。」

死んだ娘の棺を側に置いて、皆な笑つた。

暮れてから、通夜をする爲に殘つた人達が一つところへ集つた。豊世は正太の傍へ行つて、並んで睦ましさうに座つた。

「世間の評判では、僕は細君に尻に敷かれてるさうだ。」

斯う正太は當てつけがましいことを言つて、三吉やお倉の方を見ながら笑つた。豊世は俯向いて、萎れた。

お倉は娘の棺の方へ燈明の油を見に行つた。復た皆なの方へ戻つて來て。

「正太さんの所でも御越しに成つたさうですネ。」

「えゝ、」と正太は受けて、「叔母さんも御淋しく成りましたらうから、ちと御話に被入つて下さい。今度は三吉叔父さんと同じ川の並びへ移りました。」

「三吉叔父さんは一度被入つて下さいました。」と豊世がお倉に言つた。

「今度の家は好いよ。」と三吉は正太を見て、「第一、川の眺望が好い。」

「延ちやんも姉さんと一緒に遊びにお出。」と正太は娘達の方を振向いた。

土器の燈明は、小泉を繼がせる筈のお鶴の爲に、最後の一點の火のやうに燃つた。お倉は、斯の名殘の住居て、郷里の方にある家の舊い話を始めた。弟、娘、甥、姪などの視線は、過去つた記憶を生命として居るやうな不幸な婦の方へ集つた。

お倉はよく覺えて居た。家を堅くしたと言はれる祖父が先代から身上を受取る時には、錢箱に百文と、米藏に二俵の貯へしか無かつた。味噌藏も空てあつた。これて奈何して遣つて行かれると祖父祖母が顔を見合せた時に、折よく大名が通りかゝつて、一夜に大勢の客をして、それから復た取り付いた。斯樣な話から始めて、街道一と唄はれた美しい人が家に生れたこと、その女の面影をお倉もいくらか記憶して居ることなぞを語り聞かせた。

「へえ、叔母さんは眞實に覺えが好い。」と正太も昔懐しい眼付をした。

お倉の話は父忠寛の晩年に移つて行つた。狂死する前の忠寛は、眼に見えない敵の爲に悩まされた。よく敵が責めて來ると言ひ／＼した。それを燒拂はうとして、ある日寺院の障子に火を放つた。親孝行

と言はれた實も、そこで據なく觀念した。村の衆とも相談の上、父の前に御辭儀をして、『子が親を縛るといふことは無い筈ですが、御病氣ですから許して下さい』と言つて、後ろ手にくゝし上げた。それから忠寛は木小屋に假に造つた座敷牢へ運ばれた。そこは裏の米倉の隣りて、大きな竹籔を後にして、前手には池があつた。日頃一村の父のやうに思はれた忠寛のことて、先生の看護と言つて、村の人々はかはるぐ徹夜て勤めに來た。附添に居た母の座敷は、別に疊を敷いて設けた。そこから飲食する物を運んだ。どうかすると、父は格子のところから母を呼んだ。『ちよつと是處へ來さつせ、』と油斷させて置いて、母の手のちぎれる程引いた。薄暗い座敷牢の中て、忠寛の仕事は空想の戰を紙の上に描くことて有つた。さもなければ、何か書いて見ることとてあつた。忠寛は最後まて國風の歌に心を寄せて居た。ある時、正成の故事に倣つて、嚢合戰を計畫した。それを格子のところて實行した。母も、親戚も、村の人も散々な足利勢てあつた……

皆な笑ひ出した。

『私は阿爺さんの亡くなる時分のことをよく知りません。御陰て今夜は種々なことを知りました。』と三吉は嫂に言つた。『あれて、阿爺さんは、平素は奈樣人てしたかネ。』

『平素てすか。癇さへ起らなければ、それは優しい人てしたよ。宗さんが、貴方、子供の時分と來たら、ワヤク(いたずら)なもんて、よく阿爺さんにお灸をすえられました……阿爺さんはもう手がブルブル震へちまつて、「これ、誰か來て、早く留めさつせれ」なんて……それほど氣の優しい、目下のものに

も親切な人てしたよ。」

「種々なことを聞いて見たいナア、彼様いふ氣性の阿爺さんてすから、女のことなぞはサッパリして居ましたらうネ。」

「えゝ、えゝ、サッパリ……でも、癇の起つた時なぞは、どうかするとお絹が母親さんや私達の方へ逃げて來ましたよ……お絹といふ下婢が家に居ましたあね。」

「へえ、阿爺さんのやうな人でも其樣なことが有りましたねえ。」

三吉は正太と顔を見合せた。誰かクス〳〵笑つた。

其晩は、三吉、正太夫婦なぞが起きて居て、疲れた親子を横に成らせた。お倉は、遠い旅にある夫、他へ嫁く約束の娘、と順に考へて、寢ても寢られないといふ風であつた。心細さうに、お俊の方へ身體を持たせ掛けた。

「鶴ちやんが死んで了へば、私はもう誰にも掛るものが無い――眞實に、一人ぼッち。」

「母親さん、そんなことを言ふもんぢや無くつてよ。」

「ヤア、ヤア――どうも御苦勞樣でした。」

お鶴の葬式が濟んだ後て、三吉は正太を自分の家へ誘つて來た。一緒に二階の部屋へ上つた。

お雪は夫の好きな茶を入れて持つて來た。障子を開けひろげて、三吉は正太と相對に座つた。

『叔母さん、すこし吾家も片付きました、ちと何卒被入つて下さい。經子屋を頼みまして、二階から階下まですつかり壁を張らせました。』

『正太さんの今度の御家は大層見晴しが好いさうですネ。』

『えゝ、まあ川はよく見えます。そのかはり蛞蝓の多いところで、是には懲さました。剝つた所が銀色をして光つて居ます。なんでも彼の邊から御宅あたりへ掛けて、蛞蝓が名物ですトサ……叔父さんも何卒復たお近いうちに……御宅から吾家までは、七八町位のものですから、運動かたがた歩いて被入しやるには丁度好う御座んす。』

夕日は部屋の内に滿ちて來た。河岸の方から町中へ射し込む光線は、屋根と屋根の間を折れ曲つて、ある製造場の高い硝子を燃えるやうに見せた。お雪は縁側へ出て町の空を眺めたが、やがて子供の泣聲を聞いて、階下へ下りて行つた。

『正太さん、女達の間に一つ問題が持上つて居ます。兄貴の家も妙なことに成りましたらう。娘があつても、後を繼がせるものが無い。俊が嫁に行つて了へば、もうそれッきりといふことに成つて來た。鶴に養子をする――そのつもりで兄貴も出て行つたんです。鶴が居なく成つた。俊は奈何したものか。私なら親の方に殘るといふ說と、私はお嫁に行つても差支ないと思ふといふ說と、女達の間の問題に成つているです。』

「私は婚約を破るといふことは、不賛成です。結納ても交換してなければ格別、交換してある以上は、無論これは夫婦にすべきものと思ひます。」

「僕も、まあ左様思ふがネ。」

「叔父さん、お俊ちやんの方が先へお嫁に行つたと思つて御覧なさい。後て鶴ちやんが死んだとしませう、奈何することも出來ないぢや有りませんか。」

「當人同志の意志を重んじなけりや成らんネ。俊もウマクやつて呉れると可いがナ。これて、君、俊が嫁に行き、鶴が死に……てせう。これから兄貴が奈何盛返すか知らんが——長い歴史のある小泉の家は、先づ事實に於いて、滅びたといふものだネ。」

しばらく二人は、夕日を眺めて、默つて相對して居た。

「正太さん、君なり、僕なり、俊なりは……言はゞ、まあ舊い家から出た芽のやうなものさネ。皆な芽だ。お互に思ひ〳〵の新しい家を作つて行くんだネ。」

「どうかすると、橋本の家は私て終に成るかも知れないぞ。」

正太は考深い眼付をした。

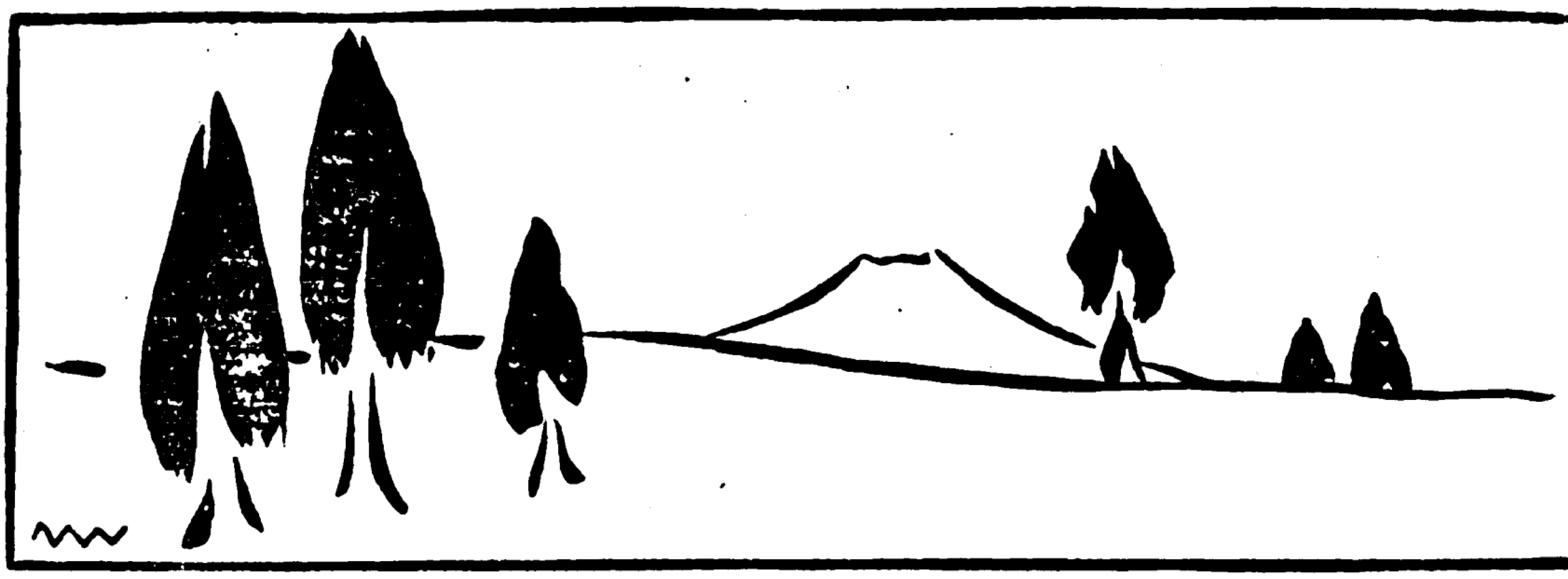
「舊い人は駄目だなんて、言つたつて……新しい時代の人だつて、頼甲斐があるとは言はれないネ。」

「ナカ〳〵。」

其時、種夫が一生懸命に楼梯につかまつてノコ〳〵階下から上つて來た。ヒヨッコリ頭を出したので、

三吉は子供の方へ起つて行つた。
『オイ、お雪、危いねえ。』と三吉は階下へ聞えるやうに怒鳴つた。
『種ちやんはもう、ずん〳〵獨りで上るんですもの。』とお雪は階下から答へた。
『なんだか危くつて仕様がない。早く來て、逑れておいで。』
『種ちやんいらッしやい。』
『ア、到頭上つて來ちやつた。』
と正太も種夫の方を見て笑つた。
そのうちに暮れかゝつて來た。町々の屋根は次第に黃昏時の空氣の中へ沈んで行つた。製造場の硝子戶には、未だ僅かに深い反射の色が殘つた。下婢は階下から洋燈を持つて上つて來た。三吉はマッチを摺つた。二階には燈火が點いた。正太はそれを眺めて、自分の家の方でも最早燈火が點たかと思つた。

（をはり）



鐘の音

上司小剣

一

梅ヶ枝の手水鉢と云ふものを見やうとして、二人は稍暫らく四天王寺の東門の彫刻を仰いだ。

「何でもあの中に手水鉢の形が彫り込んであると云ふことや」

「あれぢやないんですか、手水鉢のやうに見えるぢやありませんか」

風雨に曝されて古い色はしてゐながらも、時代の新らしいのが一目に分る、拙ない彫刻を仰ぎつゝ、二人は幾度か門の軒下の敷石の上を歩き廻はつた。

「あれやらう、あれにしとけ……違ふてゝも可いがな」

「さうですね、梅ヶ枝の手水鉢なんて何うでもいゝんですから」

大阪に住む叔父と、東京から來た甥とは、東門を入つて荒陵山の境内を踏んだ。日和つゞきの乾いた砂の上には黄色い落葉が蒔繪のやうに散らばつて見えた。

澱んだやうな、冷たい空氣に、顏を撫でられてゐると云つた感じが、甥には珍らしかつた。鼻汁を垂れ首を曲げて眠つてゐる子を負つた子守りが、金堂の方から下りて來てヂロヂロと二人の姿を見ながら行き過ぎた。

二人は五重の塔の側へ行つて、これも古びたばかりで時代の新らしい粗末な高い建築を仰ぎつゝ、叔父が先づ砂塵に汚れた緣側を拂つて腰を下すと、甥も其の通りにして叔父と並んだ。叔父は毛繻子裏の重さうな二重廻しを撥ねて、腰から煙草入れを拔き取り、燐寸を擦つて、ヂヴヂウと掃除のわるい音をさせながら、灰の口へ入るまで煙りを吸つた。

「ほんとにお羊さんは何うしたんでせうね」

甥は斯う云つて叔父の顏を見た。叔父は默つて、先刻の子守りの後姿の太子堂の方へ消えて行くのをヂッと見詰めてゐた。

「この二十三日に居所が分らんと、急には知れんなア。五六年も經つと分るかも知れんが、まア私が死んでから消息があるらしい、この世ではもう見られん」

沈默の後に、叔父は斯う云つて煙管を納めた。

「矢張り淘宮術でそんなことが分るのですか」

「さうや、確かなことは云へんが、まアそこらやらう……大勢の子やよつて一人ぐらゐ居んやうになつても構はん」

叔父は寂しい微笑を浮べて、金堂の方を見かへつた。

「十五にもなつてゐるんですから、さう無暗に攫はれるやうなこともないでせうし………何うしたんでせうかね」

「私は構はんが、家内が狂氣のやうになつて泣くので、手の盡せるだけは盡してやらうと思ふて、入費も隨分かけたが分らんなア……彼女は生れた時から身體が弱うて、始終醫者にかけたし、里にも預けたし、この三四年前までは學校へ行く途中で大便を漏して着物を汚したこともあつて、他の子供より餘計手がかゝつたのに、またこんな騒動を起すと云ふて、家内は愚痴ばかり溢しよる」

「女ですもの、無理はありません」

甥はこんなことを云つてみるより外に仕様もなかつた。

「近眼の上に智慧も足らんし、淘宮て見ると、人の家内になつても度々死別れたり生別れをしたりする生れやから、裁縫ても十分仕込んで置いて、我等が死んでから姉や弟の厄介にならんやうにな……女一人前のことは出來いでも、一人で喰うにだけは困らんやうにしといてやらうと思ふてたのや………今度のことて惡い男に引ッかゝつて、玩弄品になつた上外國にても賣られ、支那や印度や南アメリカあ

たりまで流れ廻はつて、黴毒か何かて悲慘な死樣をしよるやらう」

「眞逆そんなことはないてせう」

小石を三つ四つ拾つて、二間ほど先きに落ちてゐるまだ眞靑な蜜柑の皮を狙つて投げながら、甥は蓄音機から出るやうな聲て云つた。

「さうなつた方が厄介拂ひや、無事て居ると何れ姉弟や親類に迷惑をかけるに決つてるさかいなア」

「うふゝゝ、馬鹿なことを云つちや可けません」と、甥は苦笑ひをして見せて、一寸橫を向いて欠伸を嚙み締めた。

「けどもまた詰らん男に引ツかゝり、ドッサリ子を產んてから男に棄てられ、子を抱いて泣く〳〵歸つて來よると、私の身上てはなほのこと困る………知れんのなら知れんてよいが、何やら心にかゝつて、斯うして出て居ても氣が急くのや」

叔父は、ツイト立ち上つて五重の塔の側を離れた。甥は其の後から叔父の影を踏んて歩いた。

二

寂しい境内も、引導鐘の堂にだけは三四人の氣色がして、讀經の聲がしめやかに響いた。叔父と甥との足は操り絲に引かれてゐるやうな風て、引導鐘の方角に向つて行く。鴉の群が啼聲を立てつゝ、一心寺の方から舍利寺の方へ四天王寺の上を橫切つた。

「もう日が暮れるんかなア」

叔父は斯う云つて空を眺めたが、西にはまだ太陽が勢ひのない赤い色を、建てつゞく家根瓦のほとりに見せてゐた。

何處かの汽笛が高く、長く尾を曳いて鳴つた。

引導鐘の堂には、黒い法衣の僧と、紋付の羽織の男と、縞の羽織の女と、友禪の被布を着た子供とが、皆背中を見せて佛像に向つてゐた。

黒ずんで木目の骨立つた柱には、『皇太子黄色調』の六字が三字づゝ二行に並べて書いた札が掲つて、全體が鐘樓に造くられた建物の一方を刳り拔いたと見える入口から直ぐ疊を敷いて、其處に背中ばかりを見せた四人が坐つてゐる。

正面には、蠟燭の蠟が流れシンが立つて、今にも燃え盡きさうな灯が弱くチラ／＼と搖いてゐる。金色の薄暗い厨子の中には、直立した佛像の二つの眼が鋭く光つて見えた。

太い鐘の緒は、樓の上から長く垂れ下つて、僧の鼻先きにあたるあたりは、手垢に黒い氣味の惡い艶を見せてゐる。

赤や青や紫や黄や、縮緬のや毛繻のや、塵埃に古びて色合ひも地質も分らぬやうになつたのや、さまざまの涎掛けが、鐘の緒の上の方に幾つも／＼結び付けられて、愛兒を亡ふた親の悲哀をさながらに語つてゐるやうである。昨日あたり納めたらしい、燃え立つやうな緋綸子に白羽二重の縁と紐とが眞新らしいのが一つ、際立つて眼についた。

「子供も死ぬなら、涎掛けをかける時分に死んて呉れた方が良えな」

叔父は數ある涎掛けを、一つ〳〵見やりながら云つた。

横の方には、一つ身や三つ身や、友染や縞物や、小ひさい着物がこれも塵埃だらけになつて懸けられ、其の下には、人形や馬の首やデン〳〵太鼓やが、矢張り埃を被ぶつて置かれてあつた。

背後向きの僧の讀經が急に緩かな調子になつたと思ふと、三人の參詣人は汚ない疊に顏を摺り付ける程に平伏して、暫くは頭を上げなかつた。

カーン……モモモモモ……

讀經を終つた僧が、徐ろに鐘の緒を引くと、結び付けた涎掛けが一時に動いて、鐘は餘音を樓に籠らせつゝ悲しく鳴つた。

カーン……モモモモモ……

二度目が鳴つた時に、三人の參詣人は漸く頭を上げて、元の通り正面に向つて掌を合はした。友染の被布を着た女の兒は一寸背後を向いて、自分たちを見る人を見返へした。色の黒い、圓い眼のギョロリとした厭やな兒であつた。

カーン……モモモモモ……

三度目の鐘が鳴つた。

「あれが黄色調と云ふ鳴り方なんてせうか……」

『さうかなア、鐘にも何々調と云ふ音の色別けがあるのか知らん。ツイゾ聞いたこともないが』

二人は耳を濟まして、鐘の餘音を味ふとした。

鐘はもうそれ切り鳴らなかつた。

僧は身體をクルリと向け變へて、營養の惡さうな、物欲しさうな、ドス黒い三十恰好の顏を此方に見せた。漸く合掌を解いた參詣人と僧との間に挨拶があつて、僧の額の大きな黒子が眼についた。

縞の羽織の女は傍の風呂敷包を披いて、赤い着物や青い手遊品や、白い暖かさうな毛織の垂れ帽子やを出したが、またそれを元の通りに包んで、サメ〴〵と泣き伏した。友染の被布を着た兒は喫驚したやうな顏をしてそれを見詰めた。

女に代つて風呂敷包みを披き、中の品物を一つ二つと數へて恭しく僧の前に置いた男の手は慄へて、眼には涙があつた。友染の被布を着た兒は詰らなさうに小ひさな咳を一つした。

正面の蠟燭の灯は疾くに消えて、並べた供物の色もハッキリとは分らぬ。僧は今受取つた小ひさな記念物を碌に見ないで、羅宇に紙を卷いた煙管で煙草を始めた。

三人の參詣人がまた僧にお辭儀をして堂を出た時、叔父と甥とは參詣人の行く反對の方向に堂の前を去つた。叔父は三度ほども振り返つて、友染の被布の小ひさい姿を眞中にして歩いてゐる紋付と縞との後付きを見た。

死んだ兒の着物や、帽子や、涎掛けや、迷子札の付いた巾着や、手遊品や、そんなものを持つて、黄

色調の鐘の下に納めに來る、人の親の心持ち！　それを心の裡で批評しながら、甥は叔父に並んで歩いた。

襟に寒い夕べの風に吹かれて、木の葉が雨のやうに散つた。

三

境内の片隅の小料理屋を兼ねた茶店へ入つて、叔父と甥とは赤前垂れの女に喰べるものを命じた。一間張りのところ〲剝げかゝつた食卓を置いた奥の四疊半は、もう薄暗くなりかゝつてゐた。

『姐はん、此處は電氣がないのかいな』

赤い毛布の上に二重廻はしのまゝて突ッ立つた叔父は斯う云つて、顳顬に八角の膏藥を貼つてゐる白粉の顔を見つめた。

『紐ランプだすか……おまへんのや』

女は濟ました顔をして、瀬戸物の小ひさな火鉢に細い堅炭をつぎ足し、

『夜分は致しまへんもんてすよつて………』と、獨りて思ひ出し笑ひをしてゐる。

『紐ランプがなけりや、普通のランプても可え、持つて來とくれ』

『へい、畏こまりました。へゝゝゝゝ』と女は笑ひつゞけて立つて行つた。

『厭やなヤツてすな。何を笑つてるんてせう』

『十錢や、坊ンさん相手の………』

叔父も甥も突ッ立つたなりにこんなことを云つてゐると、女は紙の笠を付けた掃除のわるい三分ジンの臺ランプを、矢張り笑ひながら持つて來た。

二人は足て更紗の坐蒲團の敷き工合ひを直して、ドッカと腰を下した。

「お羊も何うせあんなことてもしよるのやらう」

叔父は女の帶の結び樣を見送りつゝ斯う云つて、忘れ物を思ひ出したやうに、腰の煙草入れを探つた。

「何處か心當りはないんてすか、お羊さんの平生心易くしてゐた家とか、交情のいゝ友達とか……

……」

煙草を吸はぬ甥は、火箸て炭火を弄つて、叔父の煙を眺めた。

「それやテ…………」

叔父は溜息とゝもに暫らく考へて、

「恥を云はにや、理が分らんが……」と聲を呑み〳〵語り出した。

* * * * *

「…………其の健吉と云ふのが惡い奴て、横濱て何をしてよつたのか分らんが、家の店へ訪ねて來た時は、貝ボタンを買ひ集めに來たちうて、ボタンを十貫目も持ち込んて來よつたのや……私は前から嫌ひな奴て、其の上十年も會はんのやが、父方と母方の違ひだけて矢張り甥やから、お前の來た時のやうに隱居へ案内して、久し振りのことやよつて私も機嫌よう一盃出したのや……

……酒も飯も濟んでから、買ひ集めた貝ボタンを選り分けると云ふて、隠居の奧座敷へいろ〳〵のボタンを一面に擴げ、大きいのや小ひさいのや、青いのや白いのや、一々別にしてよつたので、私も手傳ふて夜の八時ごろまでボタンを弄つてたのや……

……夜行の汽車で來たので、疲勞れたちうて、ボタンを片付けよつたよつて、隠居の婆アさんに床を取らして、奧へ寢さして置いて、私は店へ去んだんやが、翌る朝の九時ごろに隠居へ行て見ると、健吉めも居よらん、婆アさんに聞くと斯うやが……

前の晩に私が店へ去んでから、疲勞れたと云ふて眠つてよつた健吉がむく〳〵起き出し、お羊を連れて道頓堀から千日前を歩き廻はり、觀せ物を見せたり、鮓やゼンザイを食べさしたりして、夜半の十二時過ぎ、一時ごろに隠居へ戻つて來て、觀て來たものや、喰べて來たものゝ話をして、二時半ごろまで二人でフザケてよつたさうやが、其の容子が何うも怪しい…………そして健吉は朝起きると、飯も喰はずに出て行た……

私は婆アさんからこの話を聞くと、直ぐお羊を二階へ連れて上つて、欺すやうにして問ひ詰めたのや。さうすると何うや、リボンを一つ買うて貰うて芝居裏の曖昧屋へ連れ込まれてよるやないか………

……健吉はそれから一寸も姿を見せよらなんだが、置いときよつた貝ボタンの袋が邪魔になつて仕様がないので、二階へ抛り上げとくと、何時の間にかあれへん。婆アさんもお羊も知らんと云ふのやが……

……………それから一月ほどして、お羊が夕方に風呂へ行たなり、歸つて來よらんやないか……

こんなことになるのも、あの婆アさんが惡いのや………あの婆アさんは私の伯母になつてるのやが若い時三四度も嫁入りしたけど、皆尻が落ち付かいて歸つて來て、仕舞ひには田舍の小料理屋廻はりの女中になり、勝手に嫁に行たり戻つたり、色男を幾人も持つて飛び歩き、日本國中大概なところは知つてるのやもの。あの通り口恰好て見え透いたやうなお追從を云ふし、あれて何時の間にやら、智慧の足らんお羊を蔭から煽動てたものと見える……忌々しうて仕樣がないが、實の伯母てあつて見れば、あの年になつたものを追ひ出す譯にも行かんし、困つたものや……

……若い時は二度ない、面白いことは出來る時にして置かにや損や――これがあの婆アさんの口癖てなア、店の女中等にもそんなことを云ふてたのを私が叱つたことが幾度あるか知れん。お羊の阿呆が始終そんなことを聽いて、フト其の氣になつたのやなア……

……店の女中が、婆アさんにお羊の家出した見舞ひを云ふて、嘸御心配でござりませう、と慰めたら、婆アさん、親指をニユッと出して、これや〱、何が心配なことあるものか、お樂み筋や〱と云ふたさうて、女中が、まだ子供てすものそんなことはありますまい、と云ふと、婆アさんは笑ふて、お前はあかん、お前には話も出來んちうたさうや……現在の大伯母やないか、他人が色男を拵へて家出したと云ふても、さうやないと取り繕はんならんところやらう………

……店の女中等に知れると、取締の爲めにも惡いので、お羊のことは家のものだけて秘密にしてる

たのに、婆アさんが喋舌つて仕舞ふたので、家内も婆アさんにはホト〳〵困つてるが、私へ義理を立てゝ矢張り姑のやうに待遇らうてるので、私も實に苛うてな……お羊のことては私も壽命を十年は縮めた…………

……お前が東京へ歸つてから、若し途中てゝもお羊を見たら、取り押へて電報を打つてお呉れ……彼女は近眼やから、取り押へるのに都合が好い。えへゝゝゝ。

*　*　*　*　*　*

叔父は、顳顬に八角の膏藥を貼つた女が物を運んて來る度に言葉を切つて、これだけのことを一本の燗德利の空になるまてに話し終つて苦笑をしたが、折柄代りの燗德利を持つて來た女を見ると、急に馴々しさうにして、

「姐さん一盃注いて貰はふか」と盃を出した。

「恐れ入りました……お邪魔やらうと思ふて遠慮しとりましたのてす」

女は叔父に寄り添ふやうにベタリと坐つて酌をした。甥　厭やな顔をして障子の硝子越しに外を見たが、外はもう暗かつた。

「御飯を持つてまゐりまへうか」と女は甥に云つたが、甥は何とも答へなかつた。

「追ひ立てるやうなことを云はいでもよいやないか、さう嫌はいでも別に惡いことはしやへんかな」

戲談を云つてはゐるけれど、叔父は醉ふた風もなく、沈んだ狀が少しも拔けてはゐない。

「そんなことおますもんか、何うぞ御ゆッくり……夜分は致しませんのやけど」

女は、はしやいだ調子で云つて、朋輩に呼ばれて行つた。

二人が爪楊枝を咬へてランプの暗い家を出た時は、全く日が暮れて、風がざわ〳〵と、空には星が飛びさうであつた。

闇にも頸筋の白い、學寮の若僧らしい人が、肘を張り帯に兩手を挾んで、境内をぶら〳〵してゐるのに行き逢つた。何處からともなく詩吟が聞える。

「……坊主騙して還俗さして……」

こんな聲が低く詩吟の後に聞えた。

「お羊も何うせあんなことでもしよるのやらう」

叔父は、顳顬に八角の膏藥を貼つた女のことから、家出をした娘の上を想ふ風で、またこんなことを云つた。

手水鉢で手を滌ぐ代りに、これを兩手で廻はして置けば可いと云ふ轆轤に似た木輪の柱に篏め込んである西門の潜り戸から、二人は土の柔かい大通りへ出た。

「來る時も此門から入ると近かつたんですね」と甥が云ふと、

「東から入つて西へ出るのが順や……西から入ると緣起が惡い」と叔父は答へたので、甥は微笑まずにゐられなかつた。

電車道の工事て、土を堀り返へした側に、夥しく荷を積んだ牛車が、車輪を土に喰はれて動かずにゐる。

「押してやらうか」と叔父と甥とは力を合はして、後から押したけれど、車は動きさうになかつた。

大聲に怒鳴りつゝ牛を鞭つてゐた牛方は、困つた樣子をして手鼻汁をかんだ。

四天王寺の境内からは、ゴーンと鐘が鳴り響いた。

それは黄色調の鐘でなかつた。

（完）



蛇

鷗外

明け易い夏の夜に、なんだつてこんなさう〴〵しい家に泊り合はせたことかと思つて、己はうるさく頰のあたりに飛んで來る蚊を逐ひながら、二間（けん）の緣側から、せせこましく石を据ゑて、いろ〳〵な木を植ゑ込んである奧の小庭を、ぼんやり眺めてゐる。

座布團の傍に蚊遣の土器が置いてあつて、靑い烟が器に穿つてある穴から、絕えず立ち昇つて、風のない緣側で渦卷いて、身のまはりを繞つてゐるのに、蚊がうるさく顏へ來る。夕飯の饌に附けてあつた、厭な酒を二三杯飮んだので、息が酒の香がするからだらうかと思ふ。飮まなければ好かつたに、咽が乾いてゐたもんだから、つひ飮んだのを後悔する。

ここまで案内をせられたとき、通つた間數を見ても、由緒のありげな、その割に人けの少い、大きな家の幾間かを隔てて、女ののべつにしやべつてゐる聲が、少しもと切れずに聞えてゐるのである。恐ろしく早言で、詞は聞き取れない。土地の訛りの、にいと云ふ互還波が、珠數の數取りの珠のやうに、單調にしやべつてゐる詞の間々に、はつきりと聞える。東京で、ねえと云ふところである。ここは信州の山の中の或る驛である。

暫く耳を澄まして聞いてゐたが、相手の詞が少しも聞えない。女は一人でしやべつてゐるらしい。挨拶に出た爺いさんが、「病人がありまして、おやかましうございませう」と、あやまるやうに云つたが、まさか病人があんなにしやべり續けはすまい。

もしや狂人ではあるまいか。

詞は分からないが、音調で察して見れば、何事をか相手に哀願してゐるやうである。

遠いところでぽん／＼時計が鳴る。懷中時計を出して見れば、十時である。

月が小庭にさしてゐる。薄濁りのしたやうな、青白い月の光である。きのふ峠で逢つた雨は、日中の照りに乾いて、けふは道が好かつたに、小庭の苔はまだ濡れてゐる。「こちらが少しはお涼しうございませう」と云つて爺いさんに連れて來られた黄昏に、大きな蝦蟇が一疋いつまでも動かずに、そり／＼口をぱくりと開けて、己の厭がる蚊を食つてゐたのを思ひ出して、手水鉢の向うを見たが、もうそこにはなんにもゐなかつた。

此縁側の附いてゐる八疊の間には、黒塗の太い床縁のある床の間があつて、黒ずんだ文人畫の山水が掛つてゐる。向うに締め切つてある襖には、杜少陵の詩が骨々しい大字で書いてある。何か物音がするやうに思つて、襖の方を見ると、丁度竹の筒を臺にした、薄暗いランプの附いてゐる向うの處で、「和氣日融々」と書いてある襖が開いて、古帷子に袴を穿いた、さつきの爺いさんが出て來た。

「あちらへお床を延べました。いつでもお休みになりますなら。」

「さうさね。まだ寐られさうにないよ。お前詞が土地の人と違ふぢやないか。」

「へえ。若い時東京に奉公をいたしてをりましたから、いくらか違ひますのでございませう」と云つて、禿げた頭を掻いてゐる。

次第に家の内がしんとして來るので、例の女の聲が前よりもはつきり聞える。己は覺えず耳を傾けると、爺いさんがその樣子を見て、かう云つた。

「どうも誠に相濟みません。さぞおやかましうございませう。」

爺いさんのかう云ふ樣子が、只一通りの挨拶でなく、心から恐れ入つてゐるらしいので、己は却て氣の毒に思つた。併しそれと同時に、聞けば聞く程怪しい物の言ひ振りなので、indiscret なやうだとは知りながら、どうした女だか聞いて見ようと決心した。

さうとは知らない爺いさんは、右の手尖だけを疊に衝いて、腰を浮かせた。そして己の顔を見て云つた。

「もう何も御用は。」

「さう。別になんにもないのだが、お前の方で忙しくないなら、少し聞いて見たいことがある。」

「いえ。どういたしまして。どうぞなんなりとお仰やつて下さいまするやうに。」腰は又落ち着けられた。

「どうだい。ここいらでは夏でもそんなに遲くまで起きてはゐないのだらうが、かうしてお前を引き留めて、話をしてゐても好いかい。」

「へえ。こちらなぞでは、宿屋と違ひまして、割合ひに早く休みまするが、わたくしはどうせ今夜も通夜をいたしまするのでございます。」

「通夜するといふのかね。それでは近い頃不幸か何かあつたのだね。」

「へえ。主人の母親が亡くなりましてから、明日で二七日になりますのでございます。」

「ふん。さつき聞けば病人があるさうだし、それに忌中では、さぞ宿なんぞを引き受けて、迷惑な事だらうね。實に氣の毒な事をした。併しもう御厄介になり序でだから爲方がない。緣側は少しは涼しいから、まあ、ちつとこちらへ來て話したら好いだらう。」

「難有うございます。いえ。縣廳からお宿を仰附けられましたのは、此上もない名譽な事でございます。かういふところへお留め申しまして、さぞ御迷惑でございませうが、當家ではこれもお上へ對しまして、報恩の一つでございまするから。」

爺いさんはかう云ひながら、蚊遣の煙の斷え〴〵になつたのを見て、袋戸棚から蚊遣香を出して取り

換へて、その儘そこに据わつた。そして己が問ふ儘にぽつ〳〵こんな事を話した。

* * * * * * * * *

この積積といふ家は、素と縣で三軒と云はれた豪家の一つである。

亡くなつた先代の主人は多額納税者で、貴族院議員になるところであつたが、病氣を申し立てて早く隱居してしまつた。佐久間象山先生を崇拜して、省諐錄を死ぬるまで傍に置いてゐた。爺いさんは、「なんとかいふ、歌を四角な字ばかりで書いてある本」だと云つた。

それでゐて佛法の信者であつた。なんでもこれからの人は西洋の事を知らなくては行けない。併し耶蘇敎になつてはならない。耶蘇敎の本を讀んで見たが、皆淺はかなもので、佛敎の足元にも寄り附けないと云つてゐた。それで自分なぞにも、不斷佛敎の難有い事を話して聞せた。それは別にむづかしい事ではない。只四恩といふものを忘れずにゐれば、それで好いと云ふ事であつたと、爺いさんは云つた。なる程さつきも、國家の義務だとてもいふやうなところを「報恩」だと云つたつけと、己は思ひ合せた。

先代の妻は實に優しい女で、夫の言ふことに何一つ負いた事がない。そして自分を始め、下々のものをいたはつて使つてくれた。あすで二七日になるといふのは、この女の事である。八十歲の長壽をして、こなひだ死ぬるまで、毎日十人宛の乞食に二十五錢宛施すことになつてゐたので、近年は郡役所で貧窮のものを調べて、代り〳〵貰ひに來させることになつてゐた。若い奉公人の中には、「御隱居樣のお客樣」と云つて、陰で笑ふものがあつたが、貰ひに來るものの感情を害するやうな事をしたものはない。

此夫婦の間にどうしたわけか子がないので、ひどく歎いてゐると、明治の初年に奥さんが四十になつて姙娠した。夫婦は大層喜んだが、長野から請待した産科のお醫者が、これまで四十の初産は手掛けたことがないと云つて、眉を蹙めたさうである。

それでも無事に今の主人は生れた。小學校といふものが始めて出來た頃に、好く物が出來るといふので、縣廳までも知られてゐた。その頃自分は商人にならうと思つて、主人の取引をしてゐる、日本橋の問屋へ奉公に出た。小僧の時から奉公したのでなくては使はないといふのを、主人の保證で番頭の見習をさせて貰つた。

西南の戰爭の時、問屋が糧秣品を納めて、大分の利益を見てから、四五年立つた時であつた。いつか故參になつた自分は、女房を持たせて、暖簾を分けて貰ふことになつてゐると、先代の穗積の主人が卒中して、六十五歲で頓死した。聞き取りにくい詞で、「跡の事は淸吉に賴め」と云つたのが、御隱居さんにやつと分かつたといふことである。

自分は取るものも取りあへず、此土地へ歸つて來た。御隱居は五十を越してゐるのに、今の主人はやつと長野の中學校に這入つたばかりである。それからといふものは、穗積家一切の事を引き受けて、とう〳〵一生獨身で暮したのである。

好い子だと評判せられてゐた今の主人は、段々大きくなるに連れて、少し弱々しい靑年になつた。學校の成績は相變らず好い。是非學士にすると云つてゐた、先代の遺志を紹いて、御隱居が世話をしてゐ

られた。先代の心安くした住職のゐる或る寺に泊つて、中學に通つてゐる主人の、暑中休暇や暮の休暇に歸つて來るのを、御隱居は樂みにしてゐるのであつた。

その頃から今の主人はどうも體が惡い。少し無理な勉强をすると、眩暈がして卒倒する。講堂で卒倒して、同級のものに送られて寺へ歸ることなぞがあつた。

それでも中學は相應に卒業したが、東京へ出て、高等學校の試驗を受けることになつてから、度々落第して、次第に神經質になつた。無理な事をさせてはならないといふので、傍から勸めて早稻田に入れることにした。それからは諦めて餘り勉强をしない。

そのうち適齡になつたので、一年志願兵の試驗を受けたが、體格ではねられた。丁度日清戰爭のある年に、早稻田の方が卒業になつて歸つた。

もう一人前の男になられたからと思つて、これまで形式的に御隱居に伺つてゐた穗積家の經營の事を、そろ〱相談し掛けて見ても、「淸吉、お前に任せるから、これまで通りに遣つてくれ」と云つて顧みようともしない。そんなら何か熱心にしてゐる事があるかと思つて、氣を附けて見ても、分からない。もう六十を越してゐた御隱居には優しくして、一家の事は自分に任せてゐるので、至極結構な御主人ではあるが、どうも張合のないやうな氣がして來た。

尤も不思議に思つたのは、東京から歸つた翌年、二十四歳で今の奥さんを迎へた時の事である。身代は穗積家より小さくても、同郡で舊家として知られてゐる家の娘に、これも東京に出て、高等女學校を

卒業して歸つてゐるのがあつた。いつか越後の人が此娘を見て、自分の國は女の美しい國だが、お豐さんのやうに美しいのは、見たことがないと云つたさうである。お豐さんの小さいとき、祭禮やなんぞて、穗積の今の主人と落ち合ふことがあると、穗積の千足さんとお豐さんとは好い夫婦だと、人が好く揶揄つたもので、兩家でなんの話もないのに、お豐さんが東京へ稽古に行けば、あれは千足さんの處に嫁入をするとき、負けてはならぬから行くのだなどといふ噂さへあつた。それが十八になつて、穗積の息子と前後して都から歸つたのである。そこで二人の結婚は殆ど周圍から餘儀なくせられたやうな有樣であつた。今の主人は此相談を母にせられたとき、どうでも好いと云つた。母の方では、東京のやうな風儀の好くない土地にゐて、女の事に就いて何事もなかつた倅の、遠慮深い口から、どうでも好いといふのは、喜んで迎へる氣になつてゐるのだと思つて、直ぐに話を運ばせた。先方では待つてゐたらしかつた。殊に娘さん自身が待つてゐたらしいといふことさへ、媒の口から穗積家へ傳へられた。見合ひの濟んだ頃には、珍らしい良縁だと、長野の新聞にまで出て、穗積の親類は勿論、知らぬ人まで讃めて、羨んで、妬んで、騷いでゐる中に、只清吉爺いさん一人は、若い主人の素振が腑に落ちないやうに思つた。それは自分に問屋の主人が女房を持たせると始て云つた時の事に思ひ較べて見たからである。自分は其時もう三十五になつてゐた。それまで死に身になつて稼いだので、女と聞いて胸の躁く時は徒らに過ぎ去つて、心が落ち着いてゐた。それでも只女房を持たせられると聞いたばかりて、どこの誰といふ當てもないのに、二三日の間はそは／＼して物が手に附かなかつた。主人のどうでも好いと云ふのが、隱居の思

ふやうに、遠慮しての口上なら好いが、どうも素振までがどうでも好ささうに見える。稼業の事もどうでも好い。女房の事もどうでも好い。そんな筈はないがと、自分丈は思つたのである。

婚禮は首尾好く濟んだ。その翌朝の事である。朝飯の膳が並んだ。これまでは御隱居と若い主人とが上に据わる。自分は末座に連つて食べることになつてゐた。これは先代の主人が亡くなつた年からの爲來りである。御遺言もあり、並の奉公人でないからといふので、御隱居がかう極めたのである。後家の身の上ではあるが、もう六十になつてゐるから、遠慮はいるまいといふことであつた。親類には口のやかましい人もあつたが、かういふ事に非難も出なかつた。その朝は主人が眞中にゐて、兩側に御隱居と嫁さんとが据わつた。美しい嫁を取つたのが嬉しいと見えて、御隱居が樂しげに主人に話し掛ける。主人が返事をする。嫁さんは下を向いて聞いてゐたが、ろくに物を食べずに、誰よりも先きに默つて席を立つてしまつた。自分は向ひて見てゐたが、多分極まりが惡いので立つたのであらうと思つた。御隱居も主人もさう思つたことであらう。

併し午も晩も同じやうに、嫁さん丈早く席を起つた。その次の日からは、用事にかこつけて、嫁さんは遲れて食べに出る。主人がなぜかと思つて問ふと、どうもお母あ樣のお話が嫌ひでならないと云ふ。これは穗積家に限つてある事で、食事の時は何か近郷であつた嘉言善行といふやうな事を話すことになつてゐる。先代の主人のした流義が殘つてゐるのである。丁度新聞紙の三面記事の反面のやうな話である。若しこれといふ出來事がないと、誰でも前日あたりに本か何かで讀んだとか、人に聞いたとかいふ

話をする。その爲めに人の話を聞くにても、本を讀むにても、食事の時の話の種子になるやうな事柄に耳を留めて聞く、目を留めて見るといふことになつてゐるのである。

主人も不思議に思つた。善行嘉言なんぞといふものは、人によつては聞いて面白くないといふこともあらう。併し別に聞くに堪へないといふわけのものではない。うるさくても辛抱してゐられない筈はない。なぜだらうと云ふので、嫁さんに問うて見た。さうすると、あんな僞善の話は厭だと云つたさうである。

その事を聞いてから、御隱居は詞少なに、遠慮勝ちになつた。話されないとなると話して見たいやうに感ずるのが、人情の常である。それを我慢する。我慢するのが癖になつて、外の話のしたいのをも我慢する。

穗積家は沈默の家になつた。

* * * * * * * *

ここまで話を聞いた時、さつき淸吉爺いさんの出て來た「和氣日融々」と書いてある襖が、又すうと開いた。

見れば薩摩飛白に黑絽の羽織を着流した、四十恰好の品の好い男が出た。神經の興奮してゐるらしい聲で、かう云つた。

「わたくしは當家の主人で、穗積千足と申すものです。先生がお泊り下さいましたに、御挨拶にも出ず

にゐて、突然お席に參つたのてすから、定めて變な奴だと思召すてせうが、全く二週間程前から氣分が優れませんて、休んてゐました。縣廳からの指圖て、郡役所から通知のありました時も、忌中てはあるし、お斷り申さうかとも考へましたが、近來不爲合せな事が續きまして、この老人が大層心寂しく存じてゐる樣子てして、名高い學者の方に泊つてお貰ひ申したら、何か心得になるやうな事が伺はれるかも知れないと申すのてす。それて御迷惑かとは存じながら、お宿をお引受け申しました。先刻から淸吉が色々お話をいたした樣子てすが、わたくし共一家は實に悲慘な境遇に陷つてゐるのてす。わたくしは今少し前に、お次まて參つてゐました。敎育を受けたものが、立聞きをしては惡いといふこと位は、わたくしも知つてゐます。併しお迎ひにも出ず、御挨拶にも出ずにゐて、突然伺ふのが、餘り不躾な樣てすから、躊躇してゐたのてす。淸吉ぢぢいの申す通り、わたくしは小さい時から母に苦勞を掛けてゐながら、母を寂しい家て死なせてしまひました。それは物質的な奉養は出來る丈盡した積りです。併し母は晩年になつて、わたくし共夫婦の爲めに、恐ろしく寂しい生活をしたのです。そんなら妻を離別したら好かつたらうと、人は云ふてせうが、それがさう容易く行くものてはありません。どう云ふわけか長い間子がなくてゐる妻てすから、それを離別する程容易な事はない樣てす。併し民法もある世の中てすね。妻にこれと云つて廉立つた惡いことはありません。母に優しくない。それだと云つて、別に手荒い事もしない。よしやわたくしが離別しようとしたつて、妻は勿論同意しません。妻の積りては、かうして一日一日と過すうちに、いつかは樂しい生活に入る時が來るだらうと思つてゐたのてす。妻がさう云ふ感

て、合意が成り立たないのに、わたくしがどうしようと申したつて、里方の親類が承知しません。何をわたくしは理由にしませう。話をたんとしない。それが何の理由になりませう。無論法廷で爭ふ理由なんぞにはなりません。その上世間體といふものもあります。穗積といふ家は、信州では多少人も知つてゐる舊家です。その內輪を新聞に書かれたくはありません。さういふ次第で、とう／＼十四五年といふものが立つてしまつたのです。淸吉ぢいなんぞは、こんな律義な男で、それに非常に耐忍力が强いのですから、默つて內の事をしてゐてくれましたが、腹の中ではわたくしを意氣地がないやうに思つたり、妻に惑溺してゐるやうに思つたりしてゐるやうです。わたくしは決して惑溺なぞはしてゐません。只薄志弱行だと云はれれば、それ丈はいたし方がありません。それにはわたくしに極まつた人生觀が無いのが原因になつてゐます。わたくしは病身で大學には這入ることが出來ませんでしたが、色々な學科を修めました。何かわたくしの生活の基礎になるやうな思想があつて、それを貫く爲めには、いかなるものをも犧牲にするといふ氣になられたならば、これまでにどうにか解決が附いたのでせう。世間の毀譽褒貶は顧みない。人が死んでも好い。自分が死んでも好いと云ふ事なら、解決が附いたのでせう。それが無いので、今にぐづ／＼してゐるのです。そして母はとう／＼亡くなつてしまふ。妻もあんな風に氣が狂つてしまふ。わたくしもどうなるか知れません。」

主人の血走つた目は、ぢいつと己の顏に注がれてゐる。己はぞつとした。淸吉爺いさんは腕組をして俯向いてゐる。十一時の時計が鳴つた。

「そんなら、さつき迄聲のしてゐたのが奥さんですね」と、己は問うた。

「さうです。いつでも十一時前まではあの通りです。幻覺か何かがある樣子であんな工合にしやべり續けてゐて、草臥れ切るまでは寢ないのです。」

「なる程。清吉さんの話では、奥さんが嘉言善行といふやうな話が嫌ひだと云つたのが、内輪の面白くなくなる初めだといふことでしたが、一體どういふわけだつたのですか。」

「實に馬鹿げ切つてゐるのです。妻の考では人間に眞の善人といふものは無い。若し有るとしても、廣い國に一人あるとか、千百年の間に一人出るとかいふもので、實際附き合つてゐる人の中には、そんなものの有りやうがない。善い事をしたり言つたりするといふのは、爲めにする所があるので、自分を利するのである。卑劣である。これに反して、惡い事は誰もしたい。併しそれを吹聽するには及ばないから、默つてゐる方が好い。よし又言ふとしても、惡い事の方なら、正直に言ふのであるから、虛僞でもなければ、卑劣でもないと云ふのです。わたくしは妻が優しい顏をして、美しい聲でそんな事を言ふのですから、馬鹿らしくもあり、不思議にも思つてゐました。そのうちに妙な事があつたのです。去年でしたか、東京にゐた頃、學校で心安くした友人が溫泉へ來たといふので、わたくしの所へ寄りました。その男がかう云ふ事を言つたのです。妻を持つて子供が澤山出來た。ところが、其妻が authority といふものを一切認めぬ奴で、言ふ事を少しも聞かない。それでは親に濟むまいとか、お上に濟むまいとか、神樣に濟むまいとか、佛に濟むまいとか、天帝に濟むまいとか云はうとしても、どれも此女に掴まへさ

せる力草にはならない。どうも今の女學校を出た女は、皆無政府主義者や社會主義者を見たやうな思想を持つてゐるやうだと、さう云ふのです。其時はわたくしもこの男は隨分思ひ切つた事を云ふと思つて聞いてゐましたが、好く考へて見ると、わたくしの妻などもオオソリチイは認めません。事によると、今の女は丸て動物のやうに、生存競爭の爲めには、あらゆるものと戰ふやうになつてゐるのではないてせうか。一體どうしてこんな風になつて來たのでせう。」

「打遣つて置けば、さうなるのです。赤ん坊は生れながらの egoiste ですからね。」

「併しどうして男とは違ふのでせう。」

「それはなんと云つても、男の方は理性が勝つてゐるのでせう。君はさつき人生觀を持つてゐないと云はれたが、持つてゐないと云つても、社會に立つての利害關係は知つてゐる。利己主義ばかりで推して行けば、自分の立場がなくなるといふことは知つてゐる。Dogma は承認しない。勿れ勿れの教には服せない。併し利害の打算上から、むちやな事はしない。女だつて理性の勝つてゐる女は同じ事てせう。只そんな女は少いのです。人間は利害關係丈でも本當に分かつてゐれば、むちやな事は出來ない。基督の山の說教なんぞを高尙なやうに云ふが、あれも利害に愬へてゐるのですからねえ。」

「なる程さうです。赤ん坊は赤い物に目を刺戟せられれば、火をでも攫む。それと同じやうに、女は我慾を張り通して、自分が破滅するのですね。」

「まあ、そんな物でせう。だから、赤ん坊を泣かせて、火を攫ませないやうにする。赤ん坊を大人と一

しよには扱はない。無政府主義者でも、社會主義者でも、下の下までの人間を理性のある人間と同一に扱はうとしてゐるから間違つてゐるのです。一般選擧權の問題てからがさうてす。多數政治なんといふものも、將來これに代るべき、何等かの好い方法が立てば、棄てられてしまうかも知れません。詰まり égalité といふ思想が根本から間違つてゐるのですね。女だつて遠くが見えない爲めに、自分の破滅を招くやうな事をすれば、暴力て留めなくてはならないてせう。」

「先生はさうお思ひてすか。獨逸ては小學校の教師に鞭て生徒を打つことが許してある。それから夫たるものは妻を打つても好いことになつてゐるとか聞きましたが、先生のお考では、あれも差支がないのてせうか。」

己は覺えず微笑んだ。「わたしなんぞもそれ程まで踏み込んだ考を持つてゐるわけてはありませんよ。先頃もフランスて誰やらが、英國の笞刑が好結果を奏してゐると新聞に書いた。すると、Bernard Shaw がわざ／＼反駁書を出しました。兎に角打つなんといふことは非常手段てすから、教師だから打つても好い、夫だから打つても好いといふやうに、法則にして置くのは不都合てせう。」

「なる程さうてせう。兎に角わたくしも或る場合には打つても好いといふ位な、堅固な意志を持つてゐましたら、可哀相に妻をあんな物にはしませんてしたらう。ああ。亡くなつた母も氣の毒てすが、妻も實に氣の毒てす。」

主人はぢつと考へ込んでゐる。

己は問うた。「一體氣の變になられたのは、どう云ふ動機からですか。」

腕組みをしてゐた清吉爺いさんが、手をほぐして膝を進めた。「實に申し上げにくい事でございますが、先生が理學博士で入らつしやると承りまして、お泊りを願ふことが出來ましたら、それを伺つて見たいと存じてをりましたのでございます。初七日の晩でございました。奥さんが線香を上げに、佛壇を覗かれますと、大きな蛇のとぐろを卷いてゐましたのが、鎌首を上げて、ぢつと奥さんのお顏を見たさうでございます。きやつと云つて倒れておしまひになりましたが、それから只今のやうにおなりになりました。わたくし共も驚きまして、若い者の中に好く蛇抔をいぢるものがございますので、摑まへさせまして、野原へ棄てに遣りました。主人は新しい學問もいたしてゐるものでございますから、なに、蛇といふものは氣壓なんぞを鋭敏に感ずるものだから、暴風雨の前なんぞには、馴れた棲家を出て、人家に這入り込むことがあるさうだ。佛壇にゐたのは、全く偶然だと申してをりました。ところが、翌朝になつて佛壇を見ますると、蛇はちやんと歸つてゐるのでございます。わたくしも此度は前より一層驚きました。なんでもこんな事を下々に聞かせてはならない。昨日奥さんの御病氣になられたのでからが、御隱居樣を疎々しくなされた罰だなんぞと呼び合つてゐるらしい。こんな事を知つたら、なんといふか分からないと存じますから、それからはお佛間には人を入れないやうにいたしてをります。實はこれにをられまする主人には、直ぐに相談いたしましたが、なに、あんなきたないものをいぢらなくともの事だ、いつか逃げてしまふだらうと申して取り合ひません。迷信とか申すものかと存じますので、誠に恥ぢ入

りまする次第でございまするが、先生がお出でになりましたら、伺つて見たいと存じまして。」

主人は苦々しさうな顔をして、默つてゐる。

「今でもゐるのか」と、己は爺いさんに問うた。

「はい。ぢつといたしてをります。」

「さうか」と云つて、己は話をする間飲んでゐた葉卷を棄てて立つた。「一寸わたしに見せて貰ひませう。」

爺いさんは先きに立つて案内する。佛間に入つて見れば、二間幅の立派な佛壇に、蠟燭が何本も立てて、大きい銅の香爐に綫香が焚いてある。眞中にある白い位牌が新佛のであらう。香爐の向うを覗いて見ると、果して蛇がゐる。

大きな青大將である。ひどく榮養が好いと見えて、肥滿してゐる。尾はづん切つたやうなのが、とぐろを卷いてゐる體の前の方へ五寸ばかり出てゐる。

己は佛壇の天井を仰いて見た。幅の廣い、立派な檜の板で張つてあるのが、いつか反り返つた儘に古びて、眞黑になつてゐる。

爺いさんは据わつて、口の内に佛名を唱へてゐる。主人は somnambule のやうな歩き付きをして、跡から附いて來たのが、己の背後にぼんやり立つてゐる。

己は爺いさんを顧みて云つた。「近い處に米の這入つた藏があるだらうね。」

「はい。直き一間先きに、戸前の廊下に續いてゐる藏がございますに

「そこから出て來たのだ。動物は習慣に支配せられ易いもので、一度止まつた處には又止まる。外へ棄てても、元の栖家に歸る。何も不思議な事はないのですよ。兎に角此蛇はわたしが貰つて行かう。」

爺いさんは目を圓くした。「さやうなら、若い者を呼びまして。」

「いや。若い者なんぞに二度とは見せないといふ、お前さんの注意は至極好い。蛇位はわたしだつて摑まへる。毒のある蛇だと棒が一本いる。それで頭を押へて、頂まで棒を轉がして行つて、頭の直ぐ根の處を摑むのです。これは俗に云ふ靑大將だ。棒なんぞはいらない。わたしの荷物の置いてある處に、さのふ岩魚を入れて貰つた畚があります。あれを御苦勞ながら持て來て下さい。」

爺いさんは直ぐに畚を持て來た。

己は蛇の尾をしつかり攫んで、ずるずると引き出して、ちゆうに吊るした。蛇は頭を持ち上げて、自分の體を繩を綯つたやうに卷いたが、手までは屆かない。己は蛇を畚に入れて蓋をした。

丁度時計が十二時を打つた。

*　　*　　*　　*　　*　　*　　*　　*

翌朝立つ前に、己は主人の妻をどんな醫者が見てゐるかと思つて問うて見ると、長野から呼んだのも、精神病專門の人ではないと云つた。己はこれ程の大家の事であるから、是非東京から專門家を呼んで見せるが好いと勸告して置いた。

（完）

ある夜

徳田秋聲

ある曇つた靜な日の夕方、逸三は氣疎いやうな顏をして、ぶらりと外から歸つて來た。午前から坐つてゐた机の前にも飽いて、何と云ふことなし丁度其處らを一巡して來たところであつた。

逸三は出がけに衣兜を搜ると、少しばかりの匿し錢も殘つてゐたので、それで何處か賑やかな人寄場へ入つて行かうかとも思つて、途中町なかで空いた自働電話を見つけて、京橋の方の會社へ勤めてゐる某友人を誘はうとしたが、今日は時間の都合が惡いから可けないと云ふ某氏の返辭なので、彼はすご〳〵其處を出て、暫らく騒々しい往來の眞中に立つて、獨て何處へ行かうかと考へてゐた。が、何處と云つて面白さうな

處も思附かなかつた。一年の餘も足踏をしない河岸の方の遊び場所も行く氣がしてゐなかつたし、今開いてゐる某の劇場へ入つて、半日の餘も暗默て引幕と睨めッこをしてゐるのも充らないと思つた。彼には行けば何時でも面白く時間を過せると決つた親しい友達もなかつた。

何處かへ行かう、しかし何處へも行きたくないと云ふやうな心持て、逸三は須田町の邊まで出て行つた。そして沈んだ町の雜踏の底を歩いてゐた。

逸三はやがて、麴町の方にゐる、昔し能く一緒に酒を飲んだり、食物屋を獵つたりしたことのある古い友達のことを憶出して、そこを訪ねてみた。その狹い玄關口に埃まぶれの靴の紐を釋いた時分には、もう可也疲れてゐた。砂て心持の惡い唇も乾き切つてゐた。

友達の家を出たのは、五時過てあつたが、侑められた麥酒の氣も醒めて了つて、頭がけそりとしてゐた。久しく逢はない二人の間には、生活の交渉も絕えてゐたので、新しい話題と云つては何もなかつた。濟んでしまつた事ばかりが言出されて、互に年とつたことが顧みられた。鉛筆や繪具函の散らばつた友達の廣い机のうへには、相變らず藥の袋や瓶が置かれてあつた。始終疲れたやうに首の垂れた老母が、脊の丸くなつた體に茶道具を運んて來て、茶を入れながら、此頃乳の療治をした嫁さんの話をしてゐる傍へ、去年の夏の產れた二番目の女の子が這ひ寄つて來て、骨張つた祖母の肩へ掴まり立ちをしながら、何やら聲を出して笑出した。蒼い顏をして奥に寢てゐる其の病人の顏も、襖の蔭から見られた。

家へ歸ると、芝の知合の細君が來てゐた。玄關の上り框に靴を脱いでゐるところへ、妻が出て來て、「貴方おすみさんが來てゐるんですよ」と言はれた時、逸三の胸は輕い驚に波立つたが、「さう」と云つてつか〳〵と茶の室へ通つた。

おすみさんは手に煙管を持つて長火鉢の前に坐つてゐた。色の淺黒い、痩ぎすの小軀の女で、少い時分から親の膝下を離れて、苦勞をして來たことが、其の目の色にも現はれてゐた。髮を引詰めた束髮の額も狹く、鼻も細そりして、纖細い手も小い方であつた。子供を負つて來たと見えて、格子縞の銘仙の不斷羽織などを着込んでゐた。

「しばらく……」と言つて、挨拶をする逸三の調子は何となく沈んでゐたが、それを受けるおすみさんの顏も冴えなかつた。

逸三は夏の初に、おすみさんと其連合に、可也な額の金の厄介になりつ放して、それ限り今日まで顏出しも出來ずにゐた事が、胸にあつた。逸三が其事で、其家を訪ねて行つた時、連合は留守であつたが、店の直ぐ上になつてゐる和洋折衷の部屋で、話を切出してみると、おすみさんは直に快く承諾してくれた。

「澤山いるんですか。少しばかりならば私が持つてゐますけれど……」と、おすみさんは嫣然ともしないで、氣のない莨の喫ひ方をしながら訊いた。

下の店の方からは始終電話の鈴が聞えてた。窓帷には三時頃の日が明く差して、靜かな廣い通の向側に、西洋家具をぎつしり積込んだ古道具屋などが見えた。走つて行く自働車の影なども、時々窓帷の端

間から眺められた。

「この家は、此處が私達の住居だものですから、子供が危くて爲樣がないの」と、おすみさんは今茲四つになる男の子が、窓の鐵の手擦に乘りかゝつたり、段梯子際へ驅出して行つたりするのを、ひや〱しながら眺めてゐた。それでも大きな聲を出すやうなことはなかつた。

手廣で靜かな赤坂の家から、近頃急に此處の店を讓受けて引越して來るやうになつた時の事情や、店の買値、家の經濟事情などを話しながら、「でも恁してゐれば、毎日幾許かづゝ入つて行きますから、安心ですよ。その代り隨分忙しいんですの。朝も今迄のやうに寢坊なぞしてゐられませんの。」

また金の談に戻つて來た。

「私の手元にあるだけで足りなければ、貯金を下すんですけれど……。」

「さうですね。實は少し餘計欲しいと思ふんですがね。」

「郵便局の貯金は直ぐ下してくれないでせうね」と、おすみさんは思案深い目色をして考込んでゐたが、するうち奧へ入つて、押入の手箪笥のなかゝら、幾枚かの札と貯金の通帳とを持つて來た。

膝の上に擴げられた通帳には可也な金額の書込のあることが、逸三にも露はに窺はれた。

「今日でなくちや不可いんですか」と、おすみさんは淋しいやうな顏をして訊いた。內密で要求額の幾分を假したものか、良人に訊いてから全額を渡したものかと、それを思案してゐるらしくも思へた。

「孰にしても、一度お目にかゝりませう。」逸三は言出した。

そして有るだけ其日に持つて歸つて、明朝また殘額を主人の手から受取つた。

それからもう五月にも六月にもなつた。逸三は時々その事を憶出して、重い荷を背負つてゐるやうな氣がしたが、矢張其日々々に追はれ勝であつた。

「どうも、あの事も大變長うなりまして」と、逸三は傍に胡座をかきながら、重苦しい調子で事情を話して分疏をした。

「いゝえ」と、おすみさんは浮々しない代りに、何事も隔意を持たないと云つたやうな調子で言出した。「今日私が森元さんの處へ行くと云つたら、良人ては行くのは好くなからうと言つて止めたくらゐなんですよ。催促と思はれても惡いからつて……。」

逸三は極り惡さうに默つてゐた。

「家ぢや今あの金が要ると云ふ譯ぢやないんですから。」

「それは如何せ然てせうけれど、「でも餘り長くなりますからね」と、妻は笑ひながら言つた。

火鉢の側には、子供への土産物が置いてあつた。「猿のお假面に、硝子箱入の綺麗なお手玉、茶棚の上には水菓子もあつた。逸三は其お手玉を手に取上げて、中から出して弄りはじめた。

おすみさんの子供の正雄が、同じ自分の面を被りながら、緣側でお神樂の眞似をしてゐた。逸三の子供も一緒に機嫌よく遊んでゐた。衆は其方を眺めて、暫らく笑ひ興じてゐた。

「何ていふ剽輕な兒でせう」と、妻は八ッ月ばかりの腹をして、時々披ける胸を氣にして、襟を掻合せながら言つた。

「今に御父さんのやうな道樂ものになるでせう。」

子供はどん〳〵其處らを驅廻つた。

裏口から持込まれた一皿の壽司が、そこへ運ばれた時分には、菓子鉢のなかゝ大分荒れてゐた。子供が寄つて來て、一樣に口を動かしてゐる間に、女同士色々の話が取交された。子供の風評、おすみさんと同棲してゐる良人の女の話、始めたばかりの店の樣子――おすみさんは其樣事を洗ひ浚ひ打明話をした。然云ふ秘密話を爲合ふやうな知合が、この女には東京に幾ど無つた。

逸三の妻のお產の事が話題に上つた。

「貴女のとこでも、また次が出來ますよ」と、妻はその時言出した。

おすみさんには一人も子がなかつた。自分を母親と呼ばして親身の子のやうに可愛がつてゐる正雄も、二ッになる其次の子も、二人ともおすみさんの姪に當る同棲の女の腹から生れた子であつた。他に良人の××が、餘所から引取つて、稚い時分から育てゝゐる今茲十三になる一人の男の子もあつた。

根が素人ではなかつたおすみさんが、××と一緒になつて世帯を持つてから間もなく、其姪が田舍から出て來て、そこから學校へ通ふことになつた。するうち春の或暖い晩、おすみさんが女中と貰子とをつれて、近所の緣日に買物に出かけて行つた時から、その姪の擧止に何處か今迄のやうな落着がなくな

づた。が、おすみさんが二人の間を感づいたのは、姪が月のものを見なくなつて大分經つてからであつた。おすみさんが其赤子を負つたり、襁褓の世話をしたりしてゐる間に、姪の心持は段々變つて行つた。そして三年目に、また次の子が産れた。

小供を抱いて寢てゐたおすみさんは、夜中に電燈の明い寢室で、能く淋しい部屋のなかを見廻したことがあつた。

「そんなに産れて堪るもんですか。もう好い加減に如何かするでせうよ。」おすみさんは傷に觸られてもしたやうに厭な顏をした。そして元氣よく壽司を頬張つて、汚れた手を突出す子供の顏を眺めた。

「母ちやんもお食べよ」と、子供は手を拭いてもらひながら、甘へるやうに痩せたおすみさんの體に品垂れかゝつた。

おすみさんは笑ひたいやうな泣きたいやうな顏をした。そのうちに腹の脹れた子供は、また起上つて部屋中を騷ぎ出した。おすみさんは、細い指に海苔捲を一つ摘んで食べながら、また女同志で世帶向の話をしはじめた。二人は久しい間の知合であつた。おすみさんが、まだ××の家へ入らずに、外に居る時分に、逸三の細君が世話になつてゐた近所の叔母の家と往來をしてゐた。其頃から二人は壽司を摘み合ふやうな間柄であつた。

「貴女も近頃滅切世帶じみて來ましたわ」と、細君はおすみさんの横顏を眺めながら言出した。

「えゝもうお婆さんですもの」と、おすみさんは、にやりともしないで言つた。

「私から見ると、母の方が何の位丈夫だか知れませんよ。家へ來てからも、能く小マメに働きますの。」おすみさんの母親は、此頃田舍の家を疊んで、その金を持つて娘の傍へ來てゐた。おすみさんは田舍ではもう殆ど親類が絶えてゐた。

電燈がつく時分に、一同は紛擾する茶の間から座敷の方へ移つて、そこで鷄などを煮ながら賑やかに晩飯を食べた。母親達は名々の子供の世話をしながら、始終何か辯り續けてゐた。

洋服も脱かずに坐り限にしてゐた逸三も、奥て着替をして來ると、兵兒帶をぐる／＼捲着けながら、側へ來て坐つた。子供達は、色々のものを詰込んでゐたので、直に倦んだやうな顔をして、厭々さうに食物を突つき散してゐた。

「今日はこんな事してもゐられなかつたの」と、おすみさんは子供のエップルにかゝつた飯粒や白瀧を拾いながら思出したやうに言出した。

「歸りに中洲の方へ寄らうと思ひまして――姉ちやんが待つてゐるてせうね」と、子供に言かけた。

「中洲は何てす。」

「いゝえね、姪が此頃中洲の方にゐますもんてすからね。」

「それぢや愈よ別れたんてすか。」

「いゝえ、まだなか／＼然うは行かないの。いづれは何か商賣でもさせる心算てせうけれどね……中洲

の方は眞の留守居なんてすよ。――其家と云ふのが待合なんてす。此頃警察の方が喧ましいもんてすから、賣物に出たんださうてすけれど、藝者をかけるのに、彼處から一々葭町まて呼びに行つてゐたのぢや大變てせう。てすから商賣をするには電話も布かなけアならず、屏風の一つも買込まなけアならないから、安く賣つて了はうと云ふんてすけれど、當節の事てすからなか〳〵買手がつきさうてもないの。」

「それぢやお篠さんに遣したら可いぢやありませんか。」

「如何して、あの人に其樣な事が出來るものてすか。」

「それぢや貴方がやれば可いぢやありませんか。」

「うゝん」と、おすみさんは頭を掉つた。そんなことをして、自分から家を出るやうな眞似は出來ないと思つた。

「そこへ××さんが、往々見舞ふんだ」と、逸三は笑つた。おすみさんも淋しい笑方をした。

「如何云ふ家だか、私まだ一度も行つて見ないんてすよ。」

「幾何ぐらゐするもんてせう」と、妻が呟いた。

「初めは八百圓と云ふ言直だつたんてすがね、段々下つて、此頃ぢや六百圓なら手放して了いたいと云ふんてすけれどね。」

「それて不殺附いて。」

「まア、あれても初められないこともないの。だけど電話がなくちや、迚も駄目てせうね。」

「お篠さんは其處に一人居るんですか。」妻が訊いた。

「えゝあの人平氣なもんですよ。」

「それは可笑い。」

「御用心なさいよ。」

「うゝん、良人は此頃餘り出ないの」と、おすみさんは自信あるらしく言つた。「今迄のやうに外に仕事がないもの。」

「すッかり溜込んだんですね。」

「如何して‥‥彼店を讓受ける時なども、借金したくらゐですよ。」

焚きつけてあつた風呂が沸いたので、おすみさんが勸められて眞先に子供を連れて臺所の方から湯殿へ出て行つた。

「さう〳〵風呂を如何も有難う」と、妻はおすみさんの家から、袴へたばかりて、夏の末に讓受けた風呂桶の禮を述べた。

「いゝえ、どうせ今の家は狹くて置場がないんですもの。角風呂で木口も好いし、沸きも速いから、古道具屋へやるのも惜しいと思つて‥‥。」

二人が立つた後で、妻は其處らを取片けはじめた。もう布團に突伏して、眠入つてゐる子供を、奧の寐間へ運びなどした。逸三は湯に入る氣もしなかつた。そして赤い目眩しい電氣に背いて、そこに横に

なつてゐた。部屋はシンとして、籠つた空氣に、隅の方におかれたおすみさんの持物から、香水が心持匂つてゐた。

湯から抱出して來た子供は、直におすみさんの膝の上で眠つた。

逸三は今朝讀んだ新聞を、また隅の方から引張出して、無意識に目を通してゐた。そして續きものを讀みかけたり、演藝記事を捜したりしたが、目新しい報知もなかつた。明日はあの隱し錢を如何して使はうかなどとも考へた。

夜が更けて、表も裏も閑寂して來た。湯殿でばちや〳〵誰かゞ湯を使つてゐる音が、折々靜に聞えて來た。

妻は一旦寢入つてまた目を覺しかけた小い方の子供に添乳をして、漸と寢しつけると、萎頓した顏をして、部屋へ戻つて來た。

「此頃はお乳が呑めないので、胃腸を惡くして氣が變になつてるんですよ」と、妻は其處に坐込んで、蒼い顏を顰めた。多少水氣もあるやうであつた。

「乳房に觸られると、體中慄然して了ひますよ。」

「出來てしまへば、また違つて來ますよ。今度は男ですか女ですか。」

「さあ孰が可いてせう。」妻は笑出した。もうお產の近づいて來たことが考へられた。今年は何處でもお產並の惡いことも氣にかゝつてゐた。近所でも、產後病院へ擔ぎ込まれたり、長く床に就いたりした人が二三人あつた。

「一人引取つてくれる處はありませんかね。」逸三は傍から口を利いた。
「遣れるもんですか。」
「三人枕を並べて寢てゐる處へ、又一人頭數が殖えるのかと思ふと、慄然とする。」
「四人や五人何でせう。人の子を育てるものさへあるぢやありませんかよ。」
「譯なく大きくなるもんですね」と、妻は卓子の端の方で、色鉛筆を使つて書に描耽つてゐる上の子の横顏を眺めた。
「この子などの大きくなつたことを思ふと、可笑いくらゐですよ。もう子供の大きくなつて行くのを、待つより外ないんですからね。」
「お篠さんに肖てゐるね」と、逸三はおすみさんの膝に突伏してゐる正雄の顏を見ながら呟いた。
「今に大きくなると、必然考へるよ。自分の顏を見ない譯に行かないのだからね。」
おすみさんは、俛いて子供を眺めた。
「今度は子供の寄合をするやうな時が來なければ可いがね。」
「でも其位ついてゐればね。」
「篠は、此子を些とも可愛がりませんよ。」おすみさんも言足した。
しんみりした話が長く續いた。とろ〳〵した電氣の光が、一層明るさを增して、眞向に坐つてゐるおすみさんの、話し疲れたやうな顏が、目眩しさうに見えた。妻も纎毛立つたやうな、血の氣の渴いた唇に吸馴れぬ莨などを喫して、ウツとりしてゐた。

「お母アさん――」と、子供は描憊びれて、母親の膝にだらりと凭れかゝつて來た。目がしば〱してゐた。
奥てまた末の子の咽れたやうな、氣むづかしさうな啼聲が聞えた。
「さア歸りませう。」
おすみさんは膝から重たい子供の大きい頭を持上げて、臆劫さうに膝を坐り直した。
「まア可いぢやありませんかね。そこまで送りますよ。」妻はまた莨を喫ひつけて渡した。
おすみさんは頓て紙入や莨入を帶の間へ仕舞込んで、それから負ひ紐を取出した。妻は起上つて、子供を狹い背へ載せかけた。
「何だか躊躇けさうですね」と、妻は重たげに子供を揺りあげるおすみさんの弱々した様子を見ながら笑つた。
「いゝえ大丈夫。此頃は恁うして何處へでも行きますよ。」おすみさんは紐を結びながら言つた。
「よく其でもね。湯島にゐる時分は、お互にこんな子持にならうとは思はなかつた。」
おすみさんは子供を負つたまゝまた坐つた。
「そのうち皆で花でも引かうぢやありませんか。」
「花ももう駄目。お互に慾が出ちや、引いたつて面白くも何ともない。」
おすみさんは、皆に送られて薄暗い玄關の方へ出て行つた。
「おすみさんも何だか始終考へてるやうですね。」

妻は格子戸を締めて、座敷へ戻つて來ると、落着のない顔て、白けたやうな四下を見廻した。

「あの人も矢張行く處がないんてせうね。」

「もう何時だらう。」逸三も襖蔭に突立つてゐながら訊いた。

「もう十時過てすよ。」妻は茶の間の柱時計を透し見ながら言つた。

「もう湯に入るのも厭になつた。」

後の通りを遠くから希しく「號外々々」と怒鳴りあるく聲が續いて二人も聞えた。騷々しい鈴の音も夜の空氣に高く鳴響いた。

號外賣の呼聲と鈴の聲は少時すると此方の通へも近いて來た。其處此處て、戸を開けて出て呼ぶ氣勢もした。家々の私語も聞えるやうてあつた。

鈴の音がぐわら〳〵と門の前まで來たとき、逸三も急いて錢を掴んて玄關口へ飛出して見た。或陰謀事件のそれらしくも思へた。

急いて電燈の下て擴げられた號外には、何事もなかつた。四號活字て「芝浦埋立……」「十五銀行…」「南極探檢……」と然うした見出が三つばかり目についただけてあつた。「角筈の小火」と云ふ小さい見出もあつた。裏に何やらの廣告も摺込んてあつた。

「何んだ。」逸三は苦笑を洩した。

號外賣の聲が消えて了ふと、夜はまた舊の靜さに復つた。



狂言

森田草平

一

「明朝」と書出した朝の字を眞黒に塗り潰して、稱吉は一字々々考へては一行書いた。それから後は物に追はれる樣に、レッタア、ペーパの上に微かな音を立てながら、夢中でペンを走らせた。

「明後十二月十一日の拂曉を期して、僕は自殺する。

何もこんな事を他人に吹聽する必要はない。默つて死ねば可いのだ、白堊で黒板に書いた文字を拂拭し去つたやうに、何一つ痕跡らしいものも殘さずに。が、唯君にだけは――去年僕が始めて自殺を企てゝしくじつた、其始終を知つて居て吳れる君にだけは――自分の手で

自分の死を報知する義務がある樣に思ふ。何か云つて置いて死なゝければ成らぬ樣に思ふ。それに海山距てた今は、二たび君の手を煩はすことも無からうと思ふから。

併し僕は何を書かうと思つたのだらう。何だか下らない事を云ひ相て成らぬ。それてなくとも何か大變に間違つたことを書き相な氣がして成らぬ。が、可い、それも構はない。僕は最う二度と此手紙を繰返して見やうとは思はぬ。縱しや何んな事が書いてあらうとも、僕はそれを訂正しやうとも思はぬ。

左樣だ、君に云ひたいと思つたのは、此事だけは吳れ〴〵も君に承知して貰ひたいと思つたのは、自殺と云ふことが、僕に取つては決して異常な決心でも何でもない、極めて平凡な出來事に過ぎないと云ふことだ。誰でも僕の樣な境遇に立つたものは必ず自殺するだらうとは思はぬ。併し僕の樣な境遇に陷つたものが自殺するのは不思議でも何でも無いとは云へるだらう。

昨年の夏高等學校の入學試驗が濟んだ二日目に、僕は一人床の中に寢て居ながら多量の血を吐いた。あの夜は僕の一生を通じて最も悲慘な一夜であつた。それから秋へかけてぶら〳〵病を養ひながら、漸次自殺の決心を堅めて來たことは逐一君の知つて居ることだから、此處に繰近す必要はない。春に成つて、君は滿洲に去つた。一人都に取殘された僕は又餘儀なく敎科書を取上げて二たび入學試驗の準備に取かゝつた。一度落第した入學試驗に――破れて蜂の巣の樣に成つた胸を抱いて。當時僕には死期を眼前に控へながら、生先の長い人々と同じ樣に、同じ樣な笑顏をして、同じ事を遣つて行

くと云ふことが痛快にも、悲壯の樣にも思はれたのだ。試驗の結果が分つた時には、如何しやうかと思つたが、矢張入學の手續を濟ました。それからも、毎日如何しやうかと思ひながら、矢張學校へも通つて來た。何時迄こんな生活をつゞけやうぞ。

堪へられない、此上長くは堪へられない。朝起きて着物を着替へると云ふことが、それから家内の者と一緒に膳に向ふと云ふことが、僕には最う堪へられない努力に成つた。迚も他人には想像の出來ない人間以上の努力を要するやうに成つた。夕暮れ、一人鏡の前に坐つて、肺病患者に特有な彈力のない皮膚の色と、ぼやけた樣な薄い髮の毛とに見入つた時は、思はず心臟の邊りへ手を遣つて見ることがある。斯んな時の斯んな寂しさを誰が頒つて呉れやうぞ。僕一人だ。他人は生きて榮えて行く。僕は死んで行く。死ぬ者は一人だ。

今から思へば、僕が他人と同じ樣に學校へ通つて、他人と同じ樣にして來たのは、只此寂しさを紛らす手段に過ぎなかつた。自分で自分を欺いて眼前に迫つた「死」を忘れやうとしたに外ならぬ。「死」を忘れる爲めには、夜が明けたら、先づ他人と顏を合せて「お早やう」と言はなければ成らぬ。朝飯が濟んだら、何か知ら手近な仕事を爲しなければ成らぬ。街の上に人の足音が聞えなければ成らぬ。車の輪が廻らなければ成らぬ。つまり自分と自分の周圍とが平生の通り日々の行事を繰回さなければならぬ。此のデーリイ・ライフの煩はしさ——其中に人間は生きて居ると云ふ心元なさを忘れて居るのだ。生きやうと思へば、努めてそれに倣はなければ成らぬ。最早僕はそんな無用の努力に堪へられる

身ではない。

去年の秋のあの日の年回もだん〳〵近づいた。

僕は最早「死」を避けてはならぬ、面の當り「死」を見なければ成らぬ。

併し僕は今何を云つたらう。僕の云ひたいことは未だ外に有つた樣な氣がする。併し構はない、〳〵。

ぢや、左樣なら。君が此手紙を受取る頃は、僕は最う此世に居ないものと思つて呉れたまへ。

十二月九日

稱吉

磯村兄

稱吉はペン軸を下に置くと、直ぐに摺んで封筒の中へ入れて、堅く封をしたが、其儘宛名を書かずに、少時凝乎とそれを見詰めて居た。

障子の日影は向ふの屋根に遮ぎられて、全く消え失せた。部屋の中が急にうそ寒く見える。

手早く上書をして、稱吉は手紙を掴むだまゝ立上つた。

二

江戸川縁の角の荒物屋の店に立つて、稱吉は切手を求めやうとした。白髮まじりの小さな髷をちよこ

なんと頭に載せた婆さんが、緣鼻に腰を掛けて、店先へ出してある火鉢に兩手を翳しながら、此家の爺さん婆さんを相手に何やら頻に饒舌つて居たが、稱吉が這入つて來たのを見ると、急に足を引込ませて座を讓つた。

「何を差上げませうか」と、眼の緣の爛れた此家の婆さんが稱吉の顏を見上げて云つた。

「切手を一枚。」

婆さんは直ぐに立つて、戸棚の曳出しから切手を出しに行つた。

其間爺さんは眞綿の襟卷の中へ首をすつ込めながら髷の婆さんへ話をしかけた。

「それだつて貴方、幾歲にお成んなすつたい。」

「最う駄目々々、私なんざア眞實に駄目ですよ、まつたく。今年が恰度本卦回りてさ。」

「だつて未だ貴女がたはお若い」と、家の婆さんは切手を稱吉に渡しながら引取つて、「手前どもぢや二人ながら最う徐々七十の聲を聞くのですからね。」

「はゝゝゝ」と、爺さんは何が可笑しいのか妙にかすれた笑ひ方をして、「最う直きお迎へが來ますわい、最う直きぢやぞい。」

「眞實に可厭だねえ。私や其事を思ふと身震ひが出るよ。あれが可厭さ、あの死骸に湯灌をする時がさ。今に自分達ゃあんなに成るのかと思ふと――私やア寧そ始めから棺桶の中へ這入つて居やうか知ら。」

斯う云つて、白髮まじりの髷の婆さんは黒く染めた齒を剝き出して、げた／＼と笑つて居たが、後の

二人が一緒になつて笑はぬのを見ると、急に笑ひ止んだ。
稱吉は何とも云へぬ心持に成つて、荒物屋の軒を離れた。そして角の郵便函に手紙を抛り込んだまゝ、川添ひの柳の樹の下を歩いて行つた。三人の年寄、あの老婆の笑ひ聲、始めから棺桶の中へ這入つて居やうかと云つた、あの老婆――彼等も「死」を怖れて居るのだ「死」の恐怖に襲はれて居るのだ。長い一生を經て來ながら、あの歳に成つて、未だ「死」の前に戰かねば成らぬ。生れた時から警告された死の前に――これが人間の本性であらうか。人間ほど憫れなものはない。
稱吉は電信柱の蔭に立停つてそつと振回つた。ぴゆうと土埃の渦巻を立てゝ、風が地を匍つて行く後から、荒物屋の店先には「絲じん」と赤い蠟燭を繪に畫いた行燈の火影が薄明く見えた。
俯向いたまゝ、稱吉は又ふら〳〵と歩き出した。此の川添ひに何處迄も歩いて行きたかつた。

三

宵から吹き荒んだ風がはたと止んだ。
萬木一時に鳴りをしづめて、底の知れぬ沈默が四邊を取卷く。雨戸と壁とで仕切られた、此の小さな部屋の外側は、全世界が――廊下つゞきの母屋まで――跡方もなく消失せたやうにも思はれた。
赤くどんよりした臺洋燈の火影に照されて、木彫の樣に瘠せた稱吉の横顔が泛出して見えた。火桶の灰は白く冷えて仕舞つたらしい。

今宵稱吉は眠らうとは思はなかつた。如何云ふものか江戸川縁で逢つた老婆のことが氣に成つて、あの笑ひ聲が耳について離れぬ。死の恐怖――それも靈のおのゝきではない、肉體のそれである。老婆は死後のことを怖れて居るのではない、「死」其者を怖れて居るのである。死を怖れて生きて居るのは――「死」の犧牲である、生れながらにして「死」の犧牲である。併し「死」の犧牲に生れて來たものは、あの老婆だけぢやない。俺も左樣だ、俺も其一人だ。あの老婆の云つた言葉が斯んなに氣にかゝると云ふのも、何か知ら相通ずるものがあるからだらう。俺が死ぬのは――矢張「死」が怖ろしさに死ぬのだ。死ぬのが怖ろしさに死ぬ――俺は見苦しい死方をしや爲んだらうか。

稱吉の眼には血まみれに成つてのた打ち廻つて居る自分の姿が見えた。何か物を云ひたいと思つても、口の中が苦く、痲醉劑でも呑んだ後の樣に聲が出ぬ。

母屋の柱時計が懶げな音を立てゝ一つ打つた。稱吉は始めて此部屋の外にも人間の世界が存在することを意識したやうに胸を撫で下した。急に思索の緣が途切れたためか、今迄何を考へて居たか一寸想ひ出せない。宵からさま〳〵な事を考へた。考へた、〳〵。一生の間かゝつて考へ切れなかつたことを一時に解決をつけて仕舞ふ樣な意氣込みで考へた。自分では嚴格に論理の筋道を辿つて來たつもりだけれども、實際は同じ印象の周圍をぐる〳〵廻つて居たやうにも思はれる。

何を思ひ出したのか、稱吉は俄に立上つて押入の中から小形の手文庫を取出した。手文庫は錠を下したまゝ鍵を捨てゝ仕舞つたので、むりやりに葢を捩ぢ開けた。上側には子供の時分から書き散らした反

古が一杯詰めてあつたが、そんな物には眼も呉れず、底の方から一通の封書を取出した。封筒の上には何年何月何日と云ふ日附の外何も書いてない。
一年前に書いた遺書である。
稱吉はそれを机の上に置いたまゝ、少時日附の文字に見入つて居たが、やがて氣を變へたらしく、わなゝく手に封を切つて讀み下した。
石油が乏しいのか、だん〳〵火影が弱く成つて來たので、稱吉は思ひ切つて洋燈の心をぐいと上げた。
斯んな物が手文庫の底に其儘在つたと云ふことが、夢の樣であつた、讀まぬ前から惡い夢でも見て居るやうに思はれた。何うも自分が書いた物のやうな氣がせぬ。稱吉は幾度か途中迄讀んで、凝乎と考へ込んだ。そして又最初から讀み返した。何だか顏も知らぬ名も知らぬ他人が書いた物を讀むやうである。何處の誰とも知らぬ人から、自分だけに讀ませるとて、死ぬ前に自分の許へ送つて來たものを讀む樣である。
稱吉は二たび洋燈の心を掻き上げた。
それから又遺書を取上げて、極めて徐々と卷返したが、
「自分で自分が不幸だと云ふ感じを抱くのは、滑稽ぢやないか」と呟いた。そして卷いた紙を封筒に納めて握つたまゝ、又身動きもしなく成つた。

此時不圖頭の背後でかさ〳〵と云ふ音が聞えた――聞える樣に思つた。振向くと、恰度自分の頭と水平に成つた壁の上に、背の眞黒な大蜘蛛が一疋足を止めて、凝乎と此方を睨めて居る樣に見えた。稱吉は思はず後ろへ退つた。洋燈の弱い火光が辛とゞく壁の上に、圓らな二つの眼が吸ひ取るやうに自分の眼を見返したまゝ、何時迄も物を言はぬ。頑固に默つて物を言はぬ。

消え〳〵に成つた洋燈の火影が急にぱつとしたかと思ふと、又見る〳〵黑く消えて行く。それに伴れて蜘蛛の形がだん〳〵大きく成つた。そして徐々と壁の隅の方へ匐つて行つた。

火は熄えた。蜘蛛も何時しか其醜い姿を隱した。

稱吉はほつと吐息をついた。其儘息を殺して坐つて居たが、又ふら〳〵と立上つて部屋の中をぐる〳〵廻り出した。やがて立つたまゝ柱に凭れて、懷から一挺の拳銃を取出した。少時闇に透してそれを見詰めて居たが、引金に指を掛けたまゝ、靜に銃口を額に當てがつた。又それを眼の前へ持つて來て、暗闇の中を流れる光に透して見た。

夜が白々と明け離れた時、稱吉は柱の根に蹲つたまゝ、眞蒼な顏をして、眼だけぱち〳〵と開いて居た。

四

日當りの好い縁側へ出て含嗽をしながら、稱吉は目眩し相に湯屋の高い煙突からのぼる薄白い煙を見

上げた。

「日の光を見るのも今日一日だ」と、自分と自分に誓ふやうに呟いたが、斯んな幽鬱な言葉が泛んでも案外平氣なのに自分ながら驚かされた。「わはゝゝ」と笑ひたい樣な心持もした。

何時になく家内の者と一緒に朝飯の膳にも就いた。歳の行かぬ弟や妹が多いから、膳の上は可成賑やかであつた。今朝は何か嬉しいことがあると見えて、滅多に笑つたことの無い母親も子供と一所に成つて笑ひさゞめいた。朝飯が濟んでからも、下の妹は母親の膝に取着いて、甘えて、鼻を鳴して居た。

「煩さいねえ、些と彼方へ行つてお遊びなさいな」と云ひながらも、母親は自分迄が子供と一所にはしやいで居るのを詫びでもする樣に、我兒に氣を兼ねて、そつと稱吉の方を竊み見るのであつた。

稱吉は窓の閾に肘を掛けながらにやり／＼皆の者の樣子を眺めて居た。努めて皆の者と同じく娛し相に見せやうとしたが、左樣すればする程自分一人が懸離れて、何一つ共通の興味も利害も持つて居らぬ傍觀者だなと思はせられた。

「ぢや此方へ被入しやい、着せて上げますから」と、母親は稍突慳貪に云ひながら下の娘の手を執つて立上つた。立ちがけに、又ちらと我兒の顏を見て不審相にしたが、何事も押しては聞き得ない性質だから、其儘行き過ぎやうとした。

「私一寸これから出て來ますから――」と、稱吉は背後から喚んだ。

「え、何處へ。」

「一寸高松さんまて」と、稱吉は掛かりつけの醫者の名を云つた。
「左樣、行つてらしやい。」
母親の聲は次の間て聞えた。
「何故彼の女に逢ひに行く。」
稱吉は街の上に出てから自分と自分に訊ねて見た。直ぐ「外に逢ふものが無いからだ」と無造作に片附けたが、何となく物足らぬ心持がした。
二人の中にこれだけの因緣はあつた。
俊子とは十一の歳から十四迄、四年の間一つ家に棲んだ。女は三つ上だから、十四か十七迄稱吉の家に預けられて居たのだ。十七の暮に國許へ引取られて、明けの春十八て他へ緣附いた。それが一年餘りて不緣に成つて、二たび東京へ出て、今の所へ嫁附く迄半年許りの間又稱吉の家て厄介に成つて居た。其時は二人ながら歳も取つて居るし、女の方は氣立も以前とはがらりと變つて居たから、此前の樣な後先見ずの所業は無しに濟んだ。勿論水の泡見たやうなものながら、それでも二人の外に知る者はなかつた。二人の中の秘密てあつた。今ても何うかして二人だけ對座する場合など、男は只わく／＼として、今にも女の方から何とか言出されはしまひかと恐れた。少くとも二人對座しながら、知らぬ顏をして、平然と他所事を云ひ合つて歸つて來るのが、如何にも不自然に思はれた。併し女は飽迄平氣てあつた。相手がそんな事を考へて居やうとも知らぬか何ぞの樣に、平氣て寒暑の挨拶を繰回した。こんな譯て、

今日迄何事もなく濟んで來た。
斯んなのが女と云ふものだらうとは、初心な稱吉にも考へられないではなかつた。が、それぢや餘り自分迄が呆氣ない。何でも可い、最一度物が云はせたい、あの口を開かせて見たい。其上で若し自分の考へて居る通りてあつたら――兎に角自分の一生に自分と共通の或物を抱いて居るものは彼の女の外にない――未練ながら死ぬ前に最後の別れが告げたい、口づから自分の決心が知らせたい。
此外に、今日一日に迫つた今日、爲べきことも爲たいこともない。
稱吉の足は眞直ぐに江戸川縁から濠端へ出て、市ヶ谷見附の方へ向つた。俊子の家は土手に添うた二階家であつた。此處迄來てから急に心がぐらついて、足を弛めながら門前を通り過ぎて仕舞つた。又引回して來て、土手に寄つて立つたまゝ、雨戸の閉つた二階を眺めて居たが、やがて思ひ切つたらしく潜りを開けて這入つた。格子戸の鈴が鳴つてから久らく應へがない。最一度呼んで見やうかと思つた時、奥から女の足音が聞えた。
「まア」と、俊子は寢ぼけた黄八丈の羽織を被つたまゝ、自分て玄關へ出て來たが、何氣なく、「さ、何卒お上り下さいまし。」
稱吉は默つて其言葉に從つた。
前に立つて座敷へ請じてからも、俊子は自分て座蒲團を出したり、火を入れたりした。其間稱吉はまじ〱と座敷の中を見廻して居た。家内中出拂つたかと思はれる程、森閑として、物音一つ聞えない。

「何卒御ゆつくり被遊して——生憎、何て失禮致しますけれど、坂田も直き歸つて參りますてせうから。」

「えゝ」と、稱吉は只それだけ云つた。そして相手の不得要領な顏を見守つた。元とは愛も薄く成つた。雀斑も目に立ち出した。併しこんな表情の乏しい、特徴のない顏が又と外にあらうか。此女は年々其顏の特徴を失つて行く。

「隨分久しく被入して下さいませんてしたわねえ。阿母さまも御機嫌宜しう御座いますか。愛子さんは何をして被居しやいますの。一遍御一緒に伴れて來て下さいますと可いのにねえ。」

俊子は吸子に鐵瓶の湯を注しながら、ぼつり／＼斯んな事を云つた。

「内の者もてすが、貴方も一度宅へ被入しやいませんか。」

「えゝ私？」と、俊子は寂し相な口元をして笑つたが、「一度伺はなけりや成らんのてすが、御存じの通り不人なものてすから——」

稱吉はつく／＼女の容子を眺めて居たが、「貴方も——貴方も瘠せて居ますね。」

「左樣てせうか」と、俊子は兩の掌て頬を撫てながら差俯向いた。

此時不意に稱吉の胸に女を憎むこゝろが起つた。二人の良人を持つて、三人の男に接した女——それて居ながら、其心に何一つ痕跡らしいものも殘さないて、今日の事より外には屈托することのない女。世間を僞はる許りてなく、自分自身をさへ僞はる——僞はり果せる女。稱吉は氷の樣な冷たい皮肉を浴

せかけて、女の面の皮を剝いて遣りたいとも思つた。一たび口の先へ出たら取返しのつかないやうな罵詈雑言を眞向から浴せて遣りたいとも思つた。

併し——俺は何爲に來たのだ、此女から何を求めに來たのだ。矢張一人だ、俺は一人だ。

二人は憮然として相對した。何方からもしばらく何とも言ひ出さなかつた。

やゝ有つて、俊子は顔を上げたが、相手の容子を見て急に狼狽へたやうに、「如何なさいまして、え、如何か爲さいまして? 何處かお加減が惡いのぢや有りませんか。」

稱吉は返辭をしなかつた。斯んな事に、斯んな心持に成らうと思つて、態々此處へ逢ひに來たのぢやなかつた。そんな積りぢやなかつた。今は自分でも如何して可いか分らなく成つた。俊子も默つて手を控へた。

「ぢや、今日は何うもお邪魔をしました。」

稱吉は終に斯う言ひ出した。

「まア何て御座いますつて? 折角希に被入して下さいましたものを——それに坂田も最う直き歸るでせうに。」

「私と坂田さんとを突合せて見て居るのが、貴方は面白いんですか」と、殆ど口の端まで泛んだ。が、併し女だ、〳〵。僅に自分で自分を欺いて生きて行かれる。それが女に與へられた最後の武器ぢやないか。

「えゝ、又其内參りますから」と、稱吉は優しく言つて立上つた。「何卒お歸りに成つたら宜しく。」

「左樣ですか、眞實に何て御座いますねえ。それぢや又何卒お近いうちに。」

斯う言ひ〳〵俊子も思ひ切りわるく立上つた。稱吉の後に跟いて送つて出ながら、何とはなしに男が可憫相に思はれた。勿論男が如何いふ積りて居るか、それは能く解らぬ。併し男が可哀相だと云ふことは最う疑ふ餘地がなかつた。

稱吉は前に立つて足早に玄關へ出た。俊子が自分も庭へ下りて格子戸を開けながら、「何卒皆さんに宜しく」と云ふのを背後に聞き流して表へ出たが、何と思つたか又つか〳〵と戻つて來た。

恰度俊子は庭下駄を脫いて上框へ足を掛けやうとした所てあつたが、足音を聽き附けると、又二三歩出迎へるやうにして、

「何てしたの、え、何て御座いますの。」

稱吉は物を言ふなと許り手を揮つた。眼の色を變へて突立つた限り、凝乎と穴の開く程女の顏を見詰めて居た。俊子は格子に手を掛けたまゝわな〳〵と戰えて居た。

「ぢや、左樣なら」と言ふが否や、男は門前へ驅出して居た。

土手について五六間驅出してから、稱吉は急に足を留めた。自分の今行つたことが如何にもお芝居めいて、何處かユーモラスな所があるやうに思はれた。何うも左樣思はれた。

俺は何と思つて此處へ來たのだらう。

稱吉は足摺をして、地面に頭を打附けたい樣な心持がした。

五

お綱は女中と一所に子供達を先へ寐させて置いて、一人茶の間に今日の新聞を讀みながら我兒の歸りを待つて居たが、勝手の方でガタリと戸が開く音を聞き附けて、

「誰だえ」と聲を掛けた。

「稱樣で御座いますよ」と、女中部屋から洋燈を持つて出て來た婢が代つて返辭をした。ザアと馬穴に水道の水を注ぐ音が聞えた。

お綱は眼鏡を外して片膝立てたが、又思ひ返した樣に坐り直した。

やがて稱吉は濡足の裾をつまんだまゝ、障子を開けて、茶の間へ這入つて來た。

「お歸りなさい、今日は晩く成りましたねえ」と、お綱は火鉢の前の座を讓つたが、急に眼を瞠つて、

「まア大變だ、如何してお出てだえ。」

實際稱吉の着物はところ〴〵泥に塗みれて、袖には綻裂さへあつた。今朝出た時とは見違へる程面變りがして居る。

稱吉は母親の言葉が耳へ入つたか入らないのか、茫然突立つて四邊を見廻したが、其儘のそ〳〵と自分の居間へ這入つた。

「一體何うしたと云ふのだらう」と、お綱は氣遣ひ相に見送つたが、直ぐに後から跟いて容子を見に入つた。

稱吉は何事もなく机の前に坐つて居た。

お綱は側から机の上の洋燈の灯を大きく出して遣りながら、「決して小言を云ふんぢや有りませんが、身體を大切にしてお呉れてないと——お前さんは家の大切の人ですからねえ。」

斯う云ひ〳〵其處にとつてある寐床の裾へ手を入れて、「さ・按火に搔卷が掛けてあるから、早くお着替えなさいな。」

「左樣しませう」と、稱吉は始めて口を開いたが、凝乎と考へ込んで、何時迄待つても動かうともしなかつた。

お綱は手持不沙汰に片隅へ蹲がんだまゝ、矢張氣がゝり相に我兒の樣子を見守つて居た。

やゝ程經つてから稱吉は不圖顏を上げたが、お綱の姿を見て、「阿母さん、其んな所に何を爲ておいてです。早くお臥みなさいな。」

「えゝ、臥まして貰ひますがねえ。お前さんも最うお臥みなさらんか。」

「直き寢ますよ」と言つた切り、稱吉は又考へ込んだ。

少時して又、「阿母さん」と喚んだ。

「えゝ。」

稱吉は何とも言はなかつた。
「直き行きますよ」と、お綱は言譯らしく云つた。
「阿母さん」と、稱吉は向き直つて、「貴方はそんなに、そんなに迄私のことを心配して居るんですか。」
我兒の見幕が變つて居るので、お綱は稍返辭に踏めらつたが、
「眞實に心配して居るんですよ。幾人子供はあつても、一番倚頼みに思ふのは矢張お前さんですからねえ。」
稱吉は氣不味い顏をした。
「未だそんな事を思つて居るんですか、阿母さんは。私は病人ぢや有りませんか。」
「左樣お言ひだけれど、これが癒らないと極つた譯ぢやなし――。」
「そ、そんな事を未だ」と、稱吉は急き込んで云つた。「駄目々々、私は最う覺悟して居るんだ。阿母さんも覺悟して下さい。」
お綱は默つて俯向いた。
稱吉は悄げにそれを見遣りながら、「最う半歳だ、私の生命も長くて最う半歳だ。高松さんが云つたのです――醫者が云つたのです。」
「あの方が――まア其んな事を。」
「學校を止めろと注告された時に、私ははつと思つて氣がついた。それから無理に訊いたのです。」

「だつて、醫者の云ふことだつて當てにはならない。」

「そりや左樣てさ。併し阿父さんも同じ肺病て死んだ。阿父さんの弟妹も皆肺病て死んだ。私も肺病て死ぬんだ。次の妹も其次の妹も段々殘らず死んで仕舞ふんだ。」

「何を云ふんてす、お前さんは」と、お綱は眼に袖を當てた。

「一人後へ殘つて、それを見て居なけりや成らぬ阿母さんは氣の毒なものさ。それは氣の毒だが仕方がない。ね、死ぬ身に成つて下さい、私は死刑の宣告を受けて居るのてす、一日々々の刑の執行を待つて居るのてす。來る日も〳〵、今日か明日かと思ひながら生きて居る——斯んな苦しいことはない。愈々其日が來ても是程苦しいことは無いてせう。其日よりも、其日を待つて居る間が堪へられない。」

斯う云ひ〳〵稱吉は凶惡な微笑を泛べた。

「阿母さん」と、一段聲を低くして、「半歳後て死ぬのも、今死ぬのも變らない。え、阿母さんは如何思ふ。」

返辭を待つ積りか、少時言葉を途切らしたが、「私は貴方に云ひたいことがある。何んな事ても聞いて呉れますか。」

「えゝ聞きますとも」と、お綱は顏に袖を當てたまゝ云つた。

「乾度てすか、えゝ。それぢや云ひますが、私は今夜——夜明を俟つて、自殺して果てる覺悟てす。」

お綱は顏を上げたが、只だ默つて我兒の顏を見返して居た。

「分りませんか、私は今夜自殺して死ぬのてす」と、稱吉は二たび繰回した。

「何故々々、何故そんな事を云ふのだえ。」

「何故でもない、只それだけです。堪忍して下さい。それも昨日や今日思ひ附いたのではない。一年も前から考へて來たのです、一年も前から用意して來たのです。」

「お前さんはまア」と、お絅は聲を上げて寄添はうとしたが、稱吉の手がギラリと光つたので、思はず默つて仕舞つた。

「聲を立てるな。聲を立てるなら、只今此引金を引くばかりですよ。」

稱吉は右の手に拳銃を握つて、左の手で大波の樣にあえぐ胸を抑へたまゝ突立つて居た。お絅は泣音を嚙みしめて其處へ倒れた。

稱吉は又そろ〳〵と坐りながら、「斯んな事を……阿母さんに云ふのは無理だと思つてる。併し――私は最う堪らない。誰にも知らせず、此儘一人でこつそり死んで行くのが如何にも堪らない。誰か一人は私の死ぬ前に私の死ぬことを知つて居て貰ひたい。それが阿母さん、私は貴方より外に、そんな事の云へるものは誰一人無いのですよ。ね、分りましたか、可憫相だと思つて下さい。」

「思ふ位ぢやない、代れるものなら代つて上げたい位に思つて居るのですよ。だから決して死んぢや不可ません、死んぢや不可ません。」

お絅は淚一杯に溜めた眼を上げたが、不圖稱吉の手にある拳銃を見附けて、

「そんな物危ない」と云ひさま、其手に取縋つた。「お離しなさい、そんな物危ないからお離しなさい。」

「何を爲るのです」と、稱吉は手荒く突き除けやうとしたが、お綱は女の力に懸命に爭つた。

「離しなさい、離してお仕舞ひ。」

「何です、何事が始まつたのです。」何時の間にか、黒い外套を着た男が次の間の閾の上に立つて居た。

「坂田さんか、早くこれを、〳〵」と、お綱は喘ぐやうに云つて、顎で稱吉の手の拳銃を指した。

どさ〳〵と云ふ音がした。

早くも拳銃は坂田の手に取上げられた。

「一體如何したと云ふんです」と、坂田は手に持つた拳銃を檢めながら云つた。

「何でも有りません、〳〵」と、お綱は未だ稱吉の腰に取附いたまゝ云つた。

「何です、これは。彈丸が込めてないぢや有りませんか。」

「えツ」と、お綱よりも稱吉の方が驚いて聲を上げた。突然、坂田の手から拳銃を奪つて、自分で檢めて見たが、矢張何も込めてなかつた。

稱吉はそれを握り詰めたまゝ、壁際によろけて坐つた。額からはじと〳〵と汗油が流れた。

お綱は二人の顔を見較べたまゝ物が言へない。

「はゝゝゝ」と、坂田は笑ひ出した。「狂言でせう、え。阿母さん、何も心配することは有りませんぜ。」

稱吉は思はず其顔を見返したが、直ぐ又頭垂れた。何か言譯がしたい、此場の言譯がしたい。併し他人は說伏せても、自分に對しては、何うも言譯が出來ないやうな心持がした。(おはり)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

見よ!! **新春劈頭第一書** 出づ!!

上司小劍作
(正宗得三郎畫)

木像

定價金壹圓
(郵税金八錢)
菊判紙數三百七頁

木像は吾人是を呼むで一性格の發露と言はん勁烈犀利加ふるに一種の情調を帶ぶる筆力は著者の眼底に映ぜし木像を抉出して一微點を殘すなし、此くして個性の最もよく表現されしものを木像の一篇とす

田山花袋先生作
(和田英作先生畫)

緣

定價金壹圓五十錢
(郵税金十二錢)
菊判箱入美製紙數五百七十頁

再版日ならず盡きんとす!

「緣」は著者が半生の心血を傾到せし一代の大作なり、先生を知る者も知らざる者も讀まざる可らざる小說は「緣」なり、文明に呪はれし新時代の男女は奈何に悶へしかを知らむと欲するものは「緣」を見よ!「緣」は新人の奮鬪と血淚とより成る「緣」は總ての意味より尊重す可き新日本の大作なり。

一刻を爭つて求めよ!

文學博士
久米邦武氏著

裏面より見たる日本歷史

(近刊)

久米先生は斷々乎として所信を枉げざる頑健なる先生なり先生の手に依つて日本歷史の內面を解剖さる、見ざる已に奇なり一讀せむか奇警にして肯綮を得たる他に見ざるの日本歷史

東京市日本橋區馬喰町三丁目 **今古堂書店** 電話浪花四六五九 振替東京四九〇七

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

中央公論第廿五年總目錄

自四十三年一月
至同　十二月

社論

公論

說苑

小説

詞藻

評論

雜俎

新刊紹介數十件

第廿五年第一號より第十二號まで第二號（發賣禁止號）を除くの外、悉く取揃へ高需に應ずることを得べし、其内特價號左の如し、但殘部僅少のもの少なからず

一新年號　金四十錢　郵稅三錢
一春秋大附錄號　各金四十錢　郵稅二錢五厘
一第三、七、八號　各金二十二錢　郵稅二錢
一第十二號　金三十錢　郵稅二錢五厘

關東大賣捌所

東京神田表神保町	東京堂
仝　神田裏神保町	上田屋
仝　京橋尾張町	東海堂
仝　京橋元數寄屋町	北隆館
仝　本鄕本富士町	盛春堂
仝　京橋西紺屋町	良明堂
仝　日本橋本石町	至誠堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町	盛文館
仝　京町堀	太華堂
京都佛光寺	東枝書肆

●本號特價金四拾五錢 郵稅金三錢五厘

○[illegible]冊定價 郵稅拾〻錢（但清國を除く）
郵稅[illegible]厘（海外

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓七拾貳錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓參拾四錢
以上郵稅共		

▲但し特價號は規定以外に代金を申受くべし▼

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本鄕西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし
一弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料壹錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし
一郵券代用は必ず壹割增に送らるべし
一前金切の節は帶封に朱書いたすべし次の前金を送られざれば其號限にて發送を止むべし
一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十三年十二月廿五日印刷納本
明治四十四年一月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　大野耕一

發行所　東京市本鄕區駒込西片町十番地　反省社
振替口座東京三十四番　電話下谷九一九　電信略號ハンセイ

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

恭しく新年を賀しこゝに

金千五百圓の賞金を提供す

本年四月の大賣出しに用ゆべき廣告畫の圖案を懸賞募集す。圖案の樣式は隨意とし、日本畫と油繪と水彩畫とを問はず、直に印刷に付し得る樣充分なる彩色を施したるものにして美人を主題とし、其構圖、色彩、意匠すべて人目を惹き易きものを歡迎す。

懸賞圖案の締切は二月廿日迄とし、當店に於て之を審査し、一等金千圓、二等以下五百圓（合計金千五百圓）の賞金を呈す。尚詳細は當店圖案部に問合されたし。

東京駿河町

三越呉服店